

奇譚クラフ

1953 10



新時代の風俗雑誌

奇譚クラフ

定価 百円

地方書店 五



豪華な責めの色刷画帖が極めて
安価に皆様のお手元へ届きます



画帖
時代物責繪巻

従来本誌に寄せられました多数愛読者の要望をとりいれまして時代物の責の画家として定評のある三条春彦氏に委嘱いたしました。ここに八枚の極彩色の責繪巻の完成を見ました。何れも同好者の垂涎おくたわざる傑作揃いであります。広く本誌読者の愛好の方々へ頒布いたします故何卒一本を御求め下さるよう、お待ちいたします。

凄艶！

○装釘

縦六寸横八寸五分

横トチ豪華美本

極彩色美術オフセット
多色印刷特アト使用
繪の大きさB6版
画帖の大きさB5版

内容

- 三條春彦・画
- 各葉説明文句入り○
 - 絶対市販は致しません○
 - 一、山法師と静御前
 - 二、女スリと岡引き
 - 三、淀吉と千姫
 - 四、犬公方と侍女
 - 五、八百屋お七の最後
 - 六、新撰組と芸妓
 - 七、十郎左エ門と腰元
 - 八、小紫と悪旗本連

五百部限定版・限定番号入

特價 三百円

(送料五十円)

・構成・
美濃村 晃

・撮映・
塚本 鉄三

縛しめ

縛られた女の集大成

縛られた女の中、優美さと緊縛感の秀れた代表的な箇所目をあざむく十六態

特アトに美術コロタイプ印刷を施した十六葉を貼付した豪華なアルバム

痺れるような妖しい雰囲気は、素晴らしい戸嚮を呼んでまたくうちに限定部数を突破してしまいました。其の為、切以後の御申込に對しましては取敢えず一部御返金致して居りましたが、遂に読者の要望もだし難くやむを得ず若干部数増刷しました。此の機会を逃さず今直ぐお申込下さい。

総て新に特写したもののばかりですから、従来の写真と絶対に重複することはありません。

全部未発表の特寫！

(縛られた女ばかりの十六態)

内容

エビ責	足枷
高手小手	鞭打ち
芋虫	蠟燭責
くさり	滑車吊
床の置物	観念
紅と白	荒縄
目の絞	犠牲台
雁字搦目	猿轡

各葉解説文句付

○増刷分、
・頒価一部 五百円・

(送料荷造費 六十円)
○絶対市販は致しません

○申込所 大阪府堺区管内菅原通り四丁
曙書房代理部 振替大阪三四九五六番

美

し

き

●縛られた女体美の寫眞分譲●

大好評！ 他に類例のない本誌独特の全部未発表の
素晴らしい写真集成る。

女体緊縛美の写真（本誌口絵に発表不能のものを含む）

光沢面 印刷紙焼付 五枚一組 （一集分） 二百円（送共）

第六篇	（第五十一集より第六十集まで）	十集分
第七篇	（第六十一集より第七十集まで）	十集分
第八篇	（第七十一集より第八十集まで）	十集分
第九篇	（第八十一集より第九十集まで）	十集分

◎各組とも一集分は五枚一組です

集を重ねる毎に充実、斯界独自の新天地を開拓して参りました写真集は同好者の間に貴重なるコレクションとしての役目を果し、更に従来多数読者の趣向をとり入れ、直接分譲用として特別に撮映して参りました、何れも印刷ではなく印刷紙に焼付けヘロタイプを施したもので極めて安価な実費にて同好者に分譲しているものであります、読者の要望をとり入れまして、多くはメイドの縛られた女の各種姿態であります、其の外着衣のもの（洋装、長襦袢等）や半裸のもの、道具を用いたもの等多様を含んで居ります。次に三篇三十集分及び新版、第九篇十集分の各姿態の概略を示します。前号折込口絵の緊縛美のオンパレードと併せ御覧下されば幸甚です。

【姿態内容の概略】

（第六篇）51、逆さ吊り、絞首台、椅子後手縛り、ハシゴ吊り、くさり緊縛、52、猪吊り、椅子、後手棒、ハシゴ吊り、高手小手、緊縛、53、腰巻二態、逆手吊り、くさり、ベッド、54、吊り、ソファ、鴨居、くさりと縄、手摺と棒、55、絞首刑、ストッキング、ハシゴ吊り、腰巻、蒲団、56、ローソク、吊り以前、くさり、ドア、逆立、57、椅子逆立、猿ぐつわ、腰巻、ハシゴ折檻、ベッド後吊、ズロース、58、ベッド、ストッキング二態、椅子、ローソク、59、雁字搦目三態、手摺縛り、腰巻、60、梯子逆さ吊り、床柱後手、板の間、大の字、ハシゴ逆吊り（第七篇）61、柱しばり、十字竿、ストッキング猿轡、天秤棒、ローソク、62、長襦袢、ローソク立、柱しばり、後手、竿、63、長襦袢、

後手天秤棒、前向十字竿、荒縄背面、猿ぐつわ、64、梯子段、立柱しばり、エビ責、アクロバット、芋虫、65、立正面縛り、後手芋、拷問台、後手、66、逆立、荒縄正面、後手棒責め、ハシゴ責め、半吊り、67、涕泣、長襦袢足踏、綴通、エビ責、柱しばり正面、68、階段、柱竿横面、同正面坐、晒し台、竿正面、69、柱しばり、晒し物、荒縄荒縄、立正面縛り、下り藤、70、高手小手、立エビ責、荒縄荒縄、ストッキング、高手小手棒縛り、

吊り三態特選集

（第一組、第二組、第三組完成）

トリックでない本当の吊し責めの姿態の中最も興味のあるものばかりを選んで三組を得ました。これは総べて未発表のもので前記の女体緊縛美の写真集と重複することはありません。

◎襲われる女

シリーズ、十二態集 五百円（送共）

これは暴漢に襲われる美少女の恐怖の姿態を幻想的に繩をアクセサリに使用して、極度の緊縛感を誇張した珍しい得難い作品です。（第九篇）81、（少女目かくし）前屈み、立膝正面、正坐横面、後手横面、太股縄正面、82、（雁字搦目）グルグル巻き、蝸牛、舟、弓なり、供物、83、（猿ぐつわ恍惚）手膝下緊縛、後手股間縛り、手拭を噛む、拒否、恍惚、84、鞭打ち片足吊り、さあ打て、お尻丸出し、諦め、疼痛、85（芋虫縛り）俯伏横面二態、俯伏足部から二態、横臥、86、エビ責横面足場、正面前屈み、横面前屈み、片足揚片足曲、後手変形縛り、87、両手前縛り前手正面正坐二態、仰臥二態、両手前首吊り、88、両手前向後反り、両足交叉、正面正坐、仰向、俯伏、89、後手後向高手小手足投出、首縄、中膝立、足交叉、90、柱縛り床柱爪立ち、床柱後手足投出二態、床柱正面、柱立縛り（以上）

大阪府堺局区内菅原通四ノ三〇 曙 書房 代理部
振替大阪第三四九五六番

奇譚クラブ 十月号 目次

豪華なる口絵集

針に刺された女
 艶情女体地獄繪
 體操倉庫
 瀕死の白鳥
 野外の責め場

月岡芳年・画
 南川初子・画
 村田誠一
 河村哲夫・画
 津森達子・画
 新藤三郎・画
 堀江本三・画

現代のサジズム

久留木 榮

研究 花 杖

付田 誠

私の想い出

岡田 咲子
 左脇かおる・画

聖画の誘惑

近見 啓
 龍 置子・画

私の服・縛られ服

らぶ・すれいぶ
 アーヌ・ド・ノボへの讃歌へ答えて
 再びスラックスについて

三谷三三子
 左脇かおる・画
 鬼山純策
 林 正三
 沼 止三

情らざる告白の記

愛情の絆
 我が生い立ちの記
 孤獨な放浪記
 奇妙な告白
 サジズムの芽生え
 大阪陸軍幼年学校

北野 川長
 太田 昌一
 小宮 正也
 水上 廣安
 上村 和夫
 白石 文

或る被虐淫愛者の手記より二
 西田琴江殺害事件調査書
 呪縛

大庭 修 装
 辻村 隆
 岡田 史郎

兩棲動物(男色夜話)

飛田 良一

★蜘蛛と蝶々★

飛田 良一

情話 燭 相撲

土佐 四股平

哀艶責め場繪嘶

岩 広志
 三條 泰彦・画

女学生アルバイトの告白
 マダム組鶴

野村 恵美子
 野村 恵子・画

店待の記録

前島 芳雄

淫 (みだらひ) 火 (第十回)

松井 節子
 栗原 伸・画

貞め場の舞台装置法
 あるマゾヒストの手帖から

伊藤 晴雨
 沼 正三

甘美なるアリスの降伏(三) 寒川 緑・訳 (180)

歡義先生性愛相談欄
 悦庵に笑く 秘つた自語集より

川端 多幸子



針と刺さる女

南川和子



ふきあきうしろ
もろつふの



きり
きり

戦前に現れた責絵

艶情女体地獄絵

・伊藤晴雨傑作選中より・

村田誠一

春の夜や髪の匂ひも艶めきて



髪乱れ裾みだれ月に声もなく



晴雨さんの絵

明治、大正、昭和の三代に亘つて、女体の責めの中に美を求めて止まない晴雨さんの業績はまことに偉大なものである。画筆の巧みなのは言う迄もないが、文筆の妙は本誌や人間探究、あまとりあ等各誌で諸君も熟知の通り。会うと仲々愉快な人で、其の話題の豊富な事、その話し方の巧妙な事、生粋の江戸っ子の倅がある。それもその筈、明治十五年三月三日、浅草区金竜山下瓦町三八四に伊藤錠太郎氏の長男として生れた、所謂水道の水で初湯をつかつた江戸っ子である。本名は伊藤一。責めの絵を書く事数十年。其間幾多の傑作をものにして居られるが、最近の雑誌等には時折やゝ粗雑というか、一寸戴き兼ねるものも散見するが、過去の作品や、絹本の大作

正体もなく泣き崩れ散る桜



月光や妖しきまでに白き肌



月冴ゆる恨めしげなるまなざしに



になるとどうして／＼仲々垂涎おくあたわざるものがある。こゝに掲げたのは私の秘蔵している画集「美人乱舞」——昭和七年七月竹酔氏の粹古堂から上梓——の中からである。この本は発行部数が少ないので、発行当時すでに珍本であつたが、今次戦禍により更に稀本となつてしまつた。晴雨さん自身も非常になつかしがつて居られたし、発行元の竹酔氏の手許にも一部もないという。私一人いたずらに筐底に秘めておかないで、こゝらで諸彦にお目にかけたらと、



扱し帯ご紅きし月ぎ冴さゆる庭の松蔭に



くち果つる身にも抜け毛の秋悲し



箕田編集長の要請によりこゝに掲載する事にした。晴雨さんの傑作といつても過言ではあるまい。

晴雨さんは「私は裸体のモデルではなく日本古有の美風を存した日本特有の美を求めて——」といつていられる。さきに本誌で黒井氏と論争をされた黒髪的美云々もうなづかれる。又「私の責め場の標準は強姦の一步手前で終止符を打っている心境である」とか。あくどい戦後派の露骨な無残絵とちがつて、どこか余韻というか、風格というか余情を残しているのが、晴雨さんの絵の特長ではないかしら。（戦後の責めの絵は他日に譲つて機会があれば紹介したい。）解説のかわりに絵の傍らに、私の拙い句を附してみた。

白鳥の瀕死

津森澄子 都築峰子・画

(一) 私は今年十七才で新制高校の一年生です。

流行のバレエ熱にのつて、私の家の近くにもバレエの塾が出来ました。学校からの帰り、ふと立ち寄つてバレエの練習を見てから、急に自分も練習がしてみたくなり早速その翌日から入門しました。先生は特別、私に目をかけて下さるよう思えて辛い毎日の練習も私にとつて楽しい日課の一つとなつてしまいました。或る日の事、先生は特に私一人に残るようにおつしやいましたので、何かと思つてみると、瀕死の白鳥を教えてあげるといふのです。私は自分一人に特に教えて下さる親切がうれしくて、いそぐ稽古所へ入つていききました。先生は少し辛いかも知れないが、急速に身体を仕上げる方法



をとるから辛抱してほしいとおつしやつて私を隅の柱へ後手に縛り、片脚をその柱へ緊縛し、他の方の足首に縄をかけて股が丁度、直角になるまで天井へ吊り上げました。(二) これも修業の一つだと私は懸命にこらえていましたが、そんな姿勢で長く辛抱しているわけにはいきません。股が裂けるように痛んできました。それに先生はもつと足を伸べてと云いながら私のあげた足の裏に手を触れるので擦つたくてなりません。私は先生に「いや、いや」と叫び身悶えしましたが、縄が股に喰い込んでくるばかりで身動きすることも出来ません。そんな私の哀れな姿を見て先生はニヤ／＼と笑いを浮かべながら

見ているのです。私は次第に気が遠くなつてゆきました。気がついた時、私は上衣もスカートも脱がされ、うすいタイツ一つで手も脚も雁字搦目に縛り上げられて床の上にころがされている自分を発見しました。



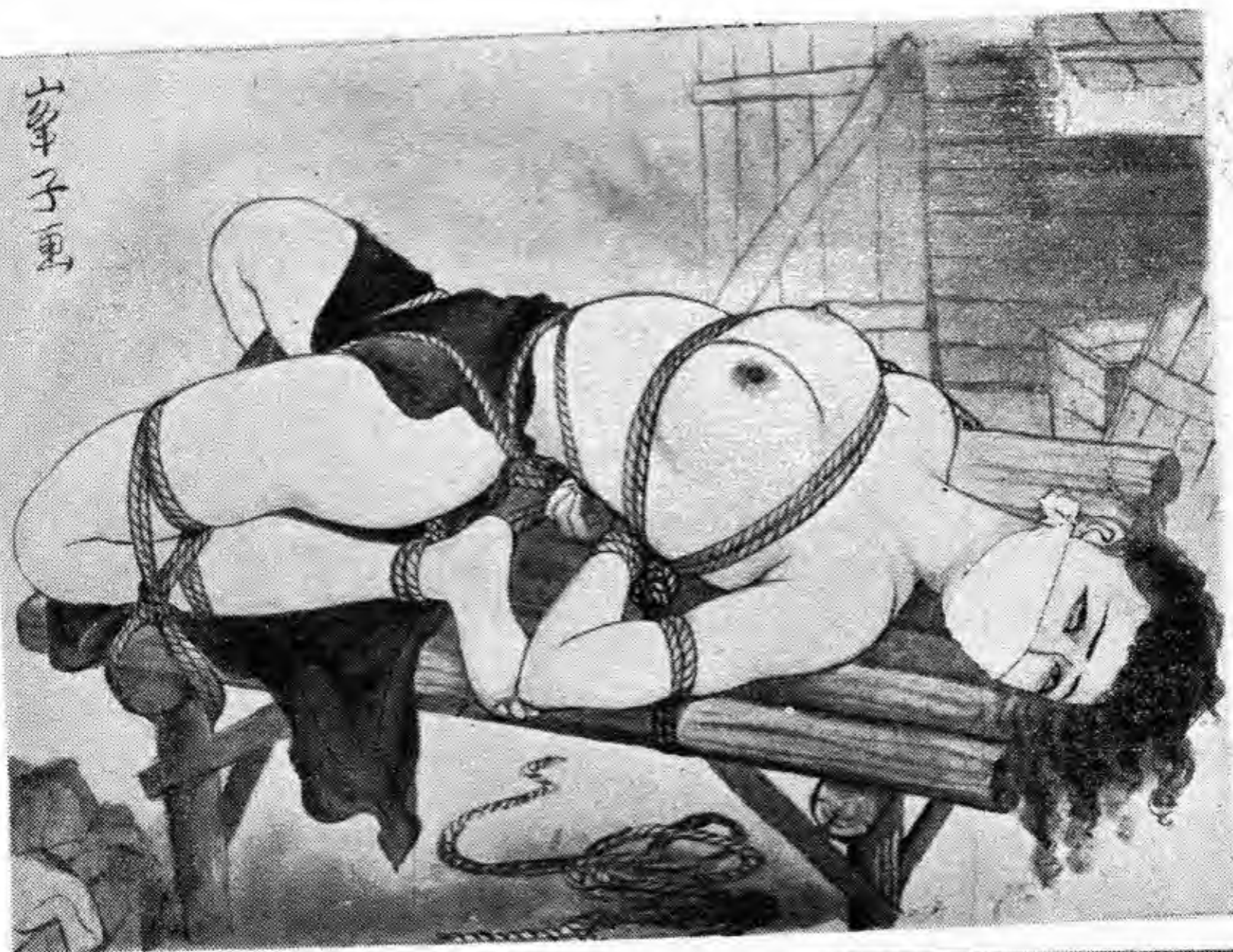
山手子画

私は驚いて叫び声を挙げようとする、いつの間にか口には猿ぐつわをされているではありませんか。先生は気がついた私を見て「どうだい、僕の正体がわかつたかい」と薄気味悪い笑いを浮かべて私を見下しているのです。

(三) 先生は「では瀕死の白鳥を教えてやる」といつてロープをお腹のくびれへ二巻きして「ゲイ」と天井へ吊り上げました。白いタイツに喰い入る縄目、私の身体は次第に宙に浮き上り、先生の手にあつたしなやかな革の鞭は私のお尻に音を立てゝなりました。私はそのうち、その痛さを通り越して自分が本当に瀕死の白鳥になつて行くような、うつとりとした境地をさまようのでした。



山手子画



(四) そんなひどい目にあつていながら、私は何故か先生が慕しくて
なりませんでした。そして数日後、野外で練習をしようと誘れたとき
もとう／＼断りきれませんでした。「バレリーナは全身が柔軟でなけ
ればいけない」と先生はおつしやつて、山小屋のテーブルの上でまる
で荷造でもするように私を縛つてしまうのです。
「さあ、こうなつたら観念して、何んでも僕の言う事を聞くんだよ」
先生のその言葉に私は思わず、こつくりと承諾の意を示していました

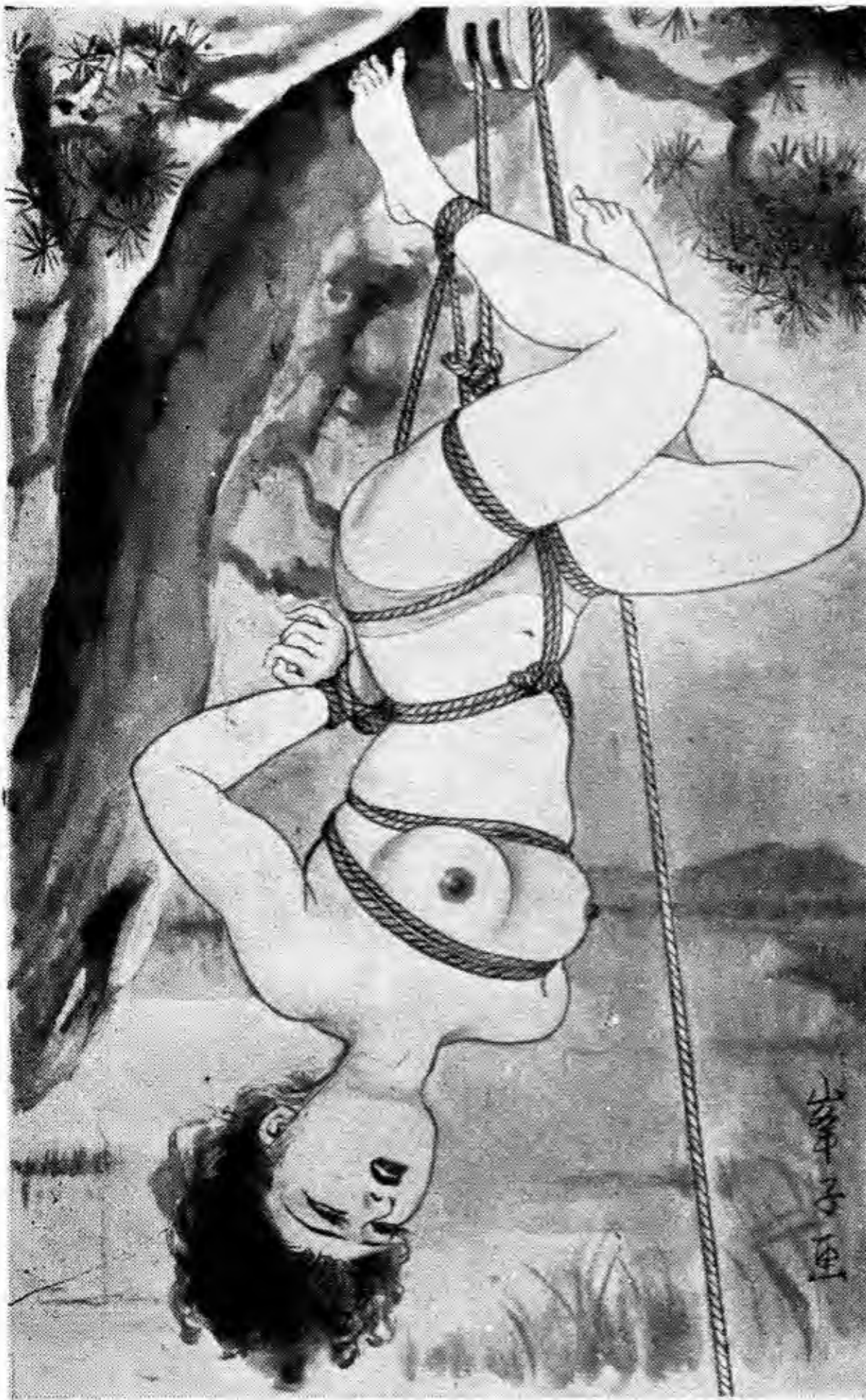


でも私は先生に自分の身体を荷物のように扱って貰うのが嬉しくてならなかつたのですもの。

(五) 次には椅子の上に後手に縛られて、両足は開いて椅子の脚へ結えられました。先生は「今度はちよつと苦しいかも知れないから、声を出さないように猿ぐつわをするよ」とおつしやつて、口の中へハンカチを押し込んで手拭で掩つてしまいました。そして私を縛りつけたまゝの椅子を床の上にどろりと転しました。私は椅子を背負つた恰好で二の腕には縄が喰ひ込んできて痛くて仕方がありませんでしたが、口にハンカチが詰め込まれているので声を出すことも出来ません。先生は椅子ごと、私を抱え上げると裏木戸を開けて外へ運び出しました。

(六) 外はすでに夕靄が立ちこめていました。見ると松の木の上に滑車をつけて一本のロープが下つています。先生は椅子から縄を解くと、そのロープを後手から足にかけて結びつけました。私は只されるまゝにじつと観念の眼をつぶつて今からどんな事が起るのかと思つていました。急に私の身体は椅子から離れて宙に浮き上りました。

た。私は足を上にして逆さに吊られたのです。私は先生の「これが僕のいう瀕死の白鳥だ」という声をぼんやりと夢の中で聞いていました。身体中にぎつちりとまきついた縄は私の全身を快くしめつけているのです。私はうつとりとした夢心地で逆さのまゝ吊られていました。





★ 野外の責場 撮映 にて ★

辻村 隆・構成
塚本 鉄三・撮映

十月号の口絵として編集長より命ぜられていた野外での撮映は数日前からモデルの村田那美子嬢に連絡してあつて、その時の話では野外のことだから今までと違つて思いきり派手にきつく縛つて見てほしい、水の中へ浸けられたり茨に引つかけられたりする位は覚悟をしているからという健気な申出だつたので、さてこそ一同張りきつて準備に余念がなかつた。二日前にはロケハンのためかねて予定してあつた甘山古戦場へ下調べに行き、山の尾根からは一望千里とはいかないが西は河内平野を見下すことが出来、東には金剛葛城の連山に連つて生駒山を眺めることが出来る。背後は深い谷となり、この丘陵へ来るにはたつた一本の降づたいの道があるばかりで、それも遙か彼方から人影を発見することが出来るし、山あり川あり池ありというマード撮映には絶好の場所であることを確認することが出来た。大雨以来、ずつと快晴続きだつたのに運悪く予定のこの日は朝早くから今にも降り出しそうな重苦しい空模様、ひよつとすると一日中雨になるかも知れない。然し延期するにしても締切日に間に合わない。運を天に任して



とにかく強行することにして、万一の場合を考えてビニールの風呂敷数枚にカメラや露出計、フラシユガン等を包んで、待合せの駅へ向う。予定の時間を三十分過ぎても村田嬢が見えないので、天候の悪化と共にイライラして待つこと約一時間、あたふたと駆けつけた彼女の曰く、運の悪い時は悪いもので電車の中で急に生理的変調を来したと

いうのだ。

「まだ四五日は間があると思つたのに急にきて自分も驚いていますの、折角来て下さつた皆さんにお気の毒なので私は出来るだけ辛抱しますけど」という彼女の言葉を頼みの綱に直ちにその準備を整えて、目的地へ向うため電車に乗る。急に予定を変更して、川の中での水に濡れての撮映や、樹

木を利用しての強度の縛りなど全部中止して、主として着衣のままの野外に於ける縛りを行うことにした。

郊外の閑散な駅に下車して徒歩約三十分、微風あれども曇つて蒸し暑く、途中で村田嬢疲労を訴える。最初の日が一番身体にこたえるそうである。松陰にて暫時休憩、雲間から時折陽ざしが洩れる。まだ立秋にならないというのに桔梗が咲き乱れている。山頂に到着した頃は風が相当きつく吹いて雲が流れ、どうやら雨だけはまぬがれそうだ。

「まだ脱がなくてもいいの？」と村田嬢が脱衣の催促をするが、着衣のままで松の木に縛りつけて十数枚、あらゆる角度から撮る。それが終つてメーキャップするといふので約三十分休憩、陽がさしたりかげつたりするので露出計の光度がその都度急激に変化する。松林の中は思つたより暗く、外へ出ると禿山の白い土が眼に眩しい。樹間から古代、壺を焼くのに使つたという池の面がちらちらと輝いて見える。二十枚、三十枚と撮映している中に村田嬢の疲労もすつかり回復、メードにて撮映してほしいと申出たが、それは次回にすゝとして、水着にケープ姿で立つた



り坐つたりして、とにかく注文通りきつく縛つてみた。後手に首縄という姿で樹間を歩かせて、前後左右から動体撮映をしながら漸次、池の方へ道のない熊笹の茂つた中を下りてゆく、池の畔にて始めて猿轡をかます。寝かしてもころがしても従順にポーズをとるので、思わず時を過して、数十枚のネガが本日の撮映行の記録として残された。

帰途の村田嬢の感想では、最初は身体が疲れてどうしようかと心配だったが、撮っている中に疲れがふつ飛んでしまつて大変元氣が出てきた。着衣よりもどちらかといえばメードで撮つて貰う方が好きだから、最後の方では裸になつてもよかつた。との事、こちらも丁度気候は暑い盛りだから小川を利用して縛つたまゝ水に浸したり、頭へ水



をかけたたり、或は岩と岩との間の深みへ浮かしたり、いろ／＼変つた野外撮映の趣向を考えていたのに予定を変更しなければならなかつたのは大変残念であつた。幸い、村田嬢は次回はこの埋め合せに、どんな所へでも出張するし、ポーズも堪えられる限り辛抱して協力するからとの事なので、それを楽しみに、炎天下数時間に亘る野外撮映を終つたのであつた。



襲う男と犯される女

襲撃 (肉迫)



パンとシリックス

ルパン画





森の神に襲われるニンフ

ピーター・パウル・ルーベンス

アドリアン・ファン・デル・ウエルフ



より「庫倉操体」画シナリオ

河村 哲夫・作

滝 麗子・絵

時 現在
人 或る男女共学の高校

高木映子、温和な優等生、気が弱い

石倉和美、映子のライバル、勝気

田村武雄、男子優等生

井田幸一、不良グループ狼団の首領

山本富造、通称 トミ

坂田健二、通称 ケン

大谷 守、通称 爆弾

大野良平、通称 ブル

山下 進、通称 ポンチ

狼団の団員

中田悦治、河田志保、共に球技部員、以上いずれも高等学校三年生、その外、担任松岡先生、映子の父母、弟妹、他に男女高校生多数。

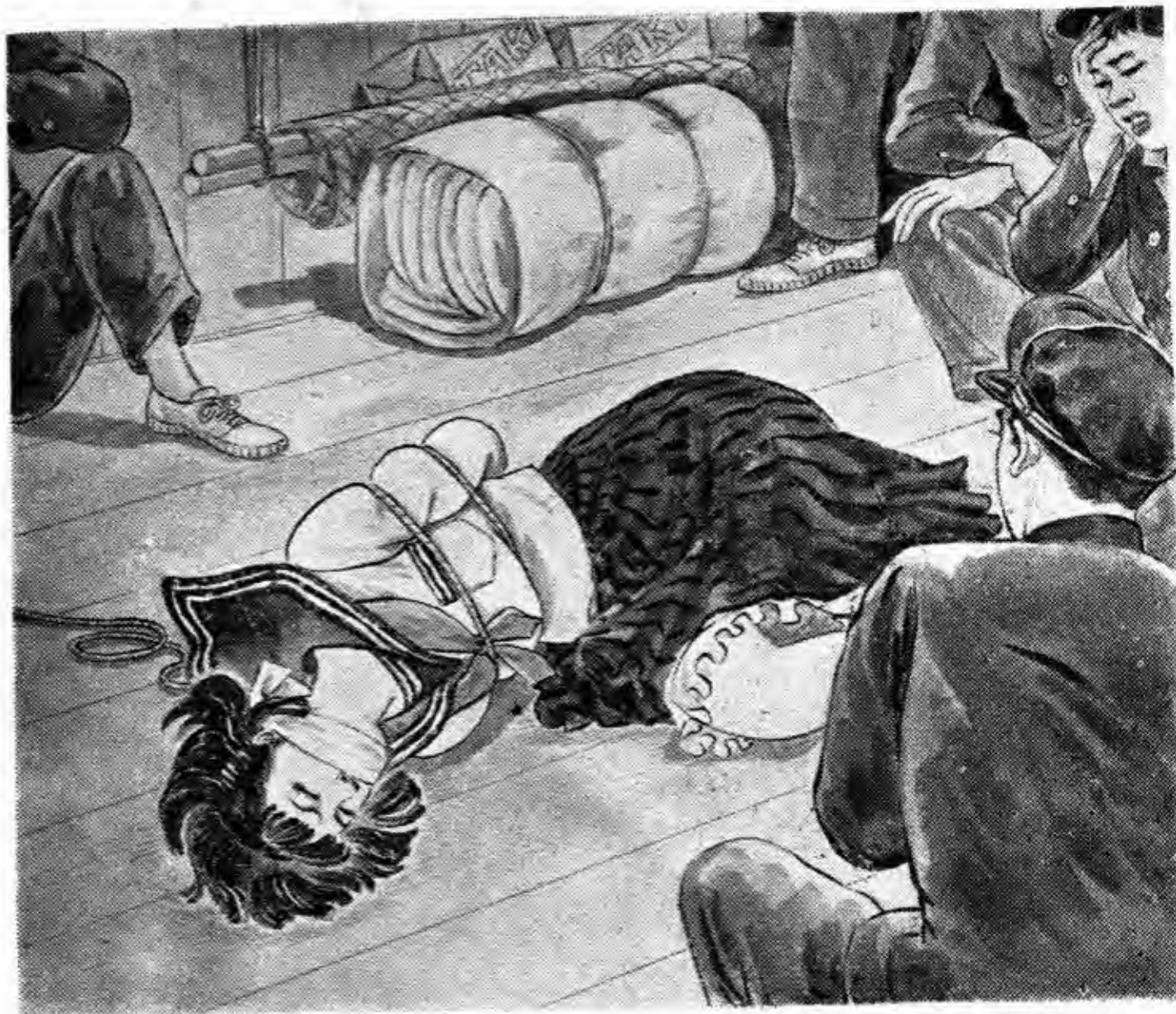
1 11迄

——美貌で優等生の映子は男子優等生の田村武雄と仲よくしている。狼団の団長井田幸一は映子に横恋慕して団員の山本に口説かせるが、映子はねつける。石倉和美にそゝのかされて、井田は映子を欺いて体操倉庫の中へ連れ込む——

12、体操倉庫の中

雑然と種々の運動用具が置いてある。扉を閉めきつた中に電灯が明るく照らしている。一隅に映子が制服のまゝで両手を後手に縛られて転され、そのまわりに狼団の連中が立つたり腰を下したりしている。

井田「おい、映子、よくも俺の顔をつぶしてくれたなア、狼団がにらんだら、お前らの一匹や二



匹どうでもなるんやぞ、泣くなツ、もう晚いわい、今日は狼団がみんなてゆつくり可愛がつてやるからナ、おい、ケン、ぬがせ」
おう、と答えて坂田、大谷、大野、山下ら映子の縄を解き必死に抵抗するのをつきつき脱がしてゆく。

13、もつれあう狼団と映子——
 上衣がとられ、シユミーズもぬがされる。肌着からふつくらと、こぼれるようにとび出す乳房、絶望的な映子のうめき声。
 14、井田と山本——



この二人は手を下さずにじつとこの光景を見守っている。息をのむハツとした表情、ギラ／＼と光る脂汗、
 15、映子——
 既にブロース一枚にされている。そして再び柱を背負って後手に縛ら

れる。

16、倉庫の一隅――

これまで腰を下していた井田がやおら立ち上る。

井田「さて、最後はゆつくりとお楽しみつと」

井田、映子に近づく、映子の哀願するような表情、眼に涙がいつぱいたまっている。バラ色に紅潮した頬にも、一粒二粒、涙の玉が露のよう光る。井田、悠然と映子の前にしやがみ、指先でその頬をついて映子のズロースに手をかける。

17、その一瞬、狼団の顔――

皆、はつと息をのむ、視線は一斉に映子の下半身へ、

18 映子、羞恥の表情――

真白い大理石のような皮膚が苦痛と屈辱に耐えかねて、必死になつて波打っている。

19、倉庫内の一隅――

映子は完全な裸形を狼団の前にさらした。野獣の前の小羊のように恐怖と羞恥に戦きふるえ、首はがくりと垂れている。山本、肩にかけていたカメラを映子に向けてピントを合わせる。

山本「ブル、そいつの髪、引っぱつて首上げさせい、バクダン、用意えゝか」

大野、よしと答えて映子の頭髮を持つて顔をカメラに向けさせる。大谷、フラッシュの用意をする。

20、カメラのフラッシュ――

眼のくらむ閃光の一瞬、

21、倉庫の中――

井田「どうや、映子、もうなんぼ騒いでもあかんやろ、今撮った写真、百枚程焼増ししとくから、これから先、お前が狼団を裏切つたら、三年生の皆に配るぜ、わかつたなア、猿ぐつわはずしたるから、声を立てたら素裸の恥さらすだけやぞ、おとなしくするか」

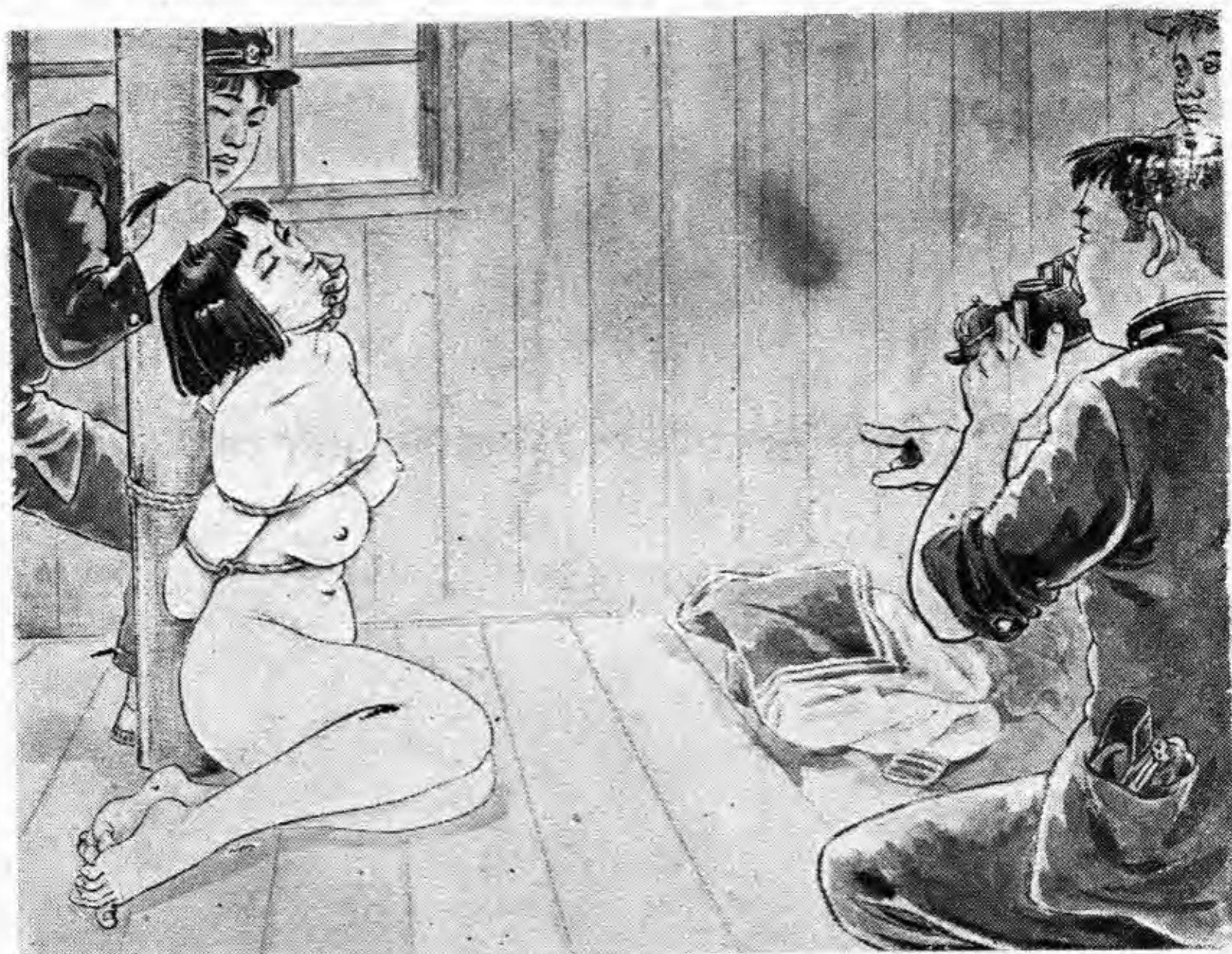
映子（かすかにうなづく）

井田「よし／＼。始めからそんなおとなしくして俺の言う事をきいていたら、皆のえゝなぶりもんにならんでもえゝのに、ポンチ、猿ぐつわ取つたれ」

（山下、猿ぐつわをとる）

22……63

それからの映子はその写真をタネに恐迫される



新時代の風俗雑誌

奇譚クラブ

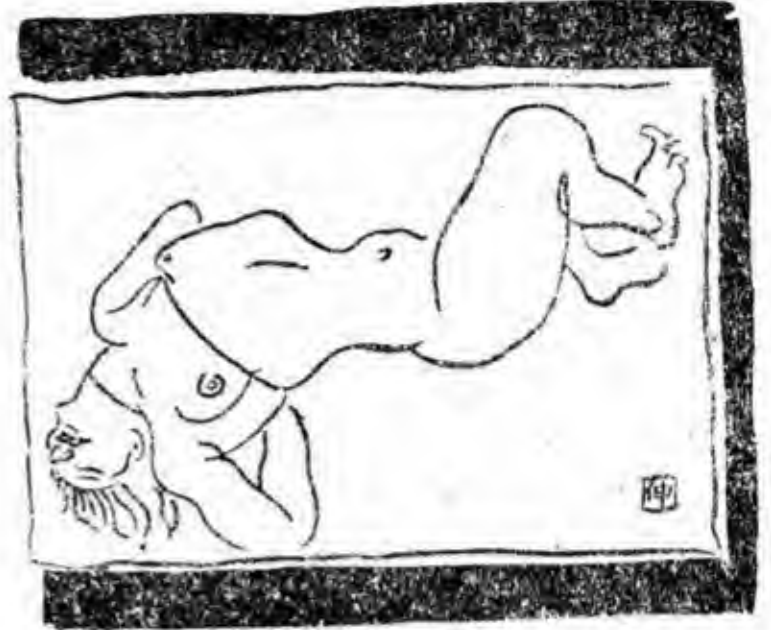
1953年10月号

第七巻 第十号 通刊第六十号

ローランドソンの海水浴場にて



たくましき女体美の群



(一)

長い軍隊生活を終えて復員し、静かな学生生活に入るようになった時、私は、この世の不合理と運命の不思議さをしつかりとみつめ認識しないわけにはいかなかった。中学校から士官学校、航空士官学校に学び、終戦後いちはやく国立大学に入学することのできた私の歩んできた道は全く順調で一見して全く我が世の春を謳歌しているような錯覚を人に与えるが決してそうではなかった。貧しい田舎新聞記者の子に生れ、移転と家庭悲劇に傷けられた私は十四才の春、家をとび出したまゝ転々と居をかえた。それがどうした加減か最も順調なコースをたどつたような恰好になつてしまつたのだ。下男から土方、商人、ペンキ屋といわばアルバイトに軍日ない歳月を送らねばならなかつたのに表面は全く逆の結果

現代のサジズム

久留木

栄

になつてしまつたのだ。

さてそれはそれとして、そういう生活がみえざる力となつて私の心情を圧迫したせいであろうか。或いは青年期の強い感受性がこの世のすべてに反響を覚えさせたせいであろうか。大学に入り始めて自力で物を考えることを学んだ時、私は私の性向がはつきりと正常でないことを認めないわけにはいかなかった。大学時代の三年間、卒業後実社会に出てから二年間、終戦後八年間のうちその大部分がこの異常と正常の戦いのうちに過され、そこから数多くの性愛に対する考察を生んだのである。

(二)

ポールボワール女史の「第二の性」の巻頭に有名な言葉がある。「人は女に生れない。女になるのだ」というのがそれである。人はサジストに生れない。サジストになるのである。私は自分がサ

ジストであるとはいへ、切れないがそれに近いものになりつゝある。その故に私は至高の悦楽が正常な行為に宿ることを知つていながら、その反面すなわち、無限の悦楽がアブノーマルな行為の中にあることを忘れきれぬのだ。私は前者をすてることはできない。だが後者をすてることなど思いもよらない。私は人間であり人間である以上、そのどちらの奥技をもみきわめたいと思つてゐる。たとえそれが不可能でありそれが私を生活の矛盾、シレンマに追いこむことがあつたとしても。

(三)

元来、異常性愛というものは個人的なものである。そこに社会的必然性はない。吾妻新氏がサディズムの精髓の中で言つてゐるように、「興奮の中の自己忘却」である。たとえば最も多くの人にみられる想像的サジズムスの例をとつてみても、それはたゞ縛られ、責められる数多くの極端な異形の人形を勝手に描き出し、それによつて深い、悲しい、自己陶醉を味わつてゐるだけだ。そこに社会的影響や社会的生活の極端があつたとしても、それが生み出されるための社会的必然性をみいだすことができない。然らばサジズムス——異常性愛の進歩はないのか。否、私は否といわなければならぬ。進歩があるならばそれによつて来るべき社会的必然性がなければならぬ。そこで吾妻新氏は語をついで、新しいサジズムスとは、拷問でなくて折檻であり惨酷でなくて凌辱暴力でなくて啓蒙と教育、日常生活の中に採り入れられ、享樂しうるものといわれるのである。だが残念ながら私はこれに組みすることはできない。なぜならこれは昭和初期のような感じがするからだ。が私は現在では折檻というより蹂躪、凌辱というより殺

戮、教育というより強制、享樂というより順応の方が応わしいような気がする。なぜならサジズムス進歩の第一は吾妻新氏の述べられるようにサジストとしての自覚、すなわちサジストとして育てあげられた自己——人間の発見からはじまる。この段階では教育の分野に属するのである。ところがサジズムスの真髓に徹するためには、かゝる人間——すなわち自己が生れてきた社会的必然性を追及せねばならない。そしてその原因をきわめ得た結果としての社会的極端からの人間の解放、すなわち宗教的救済や芸術的歡喜にまで高められなければならない。新しいサジズムスは常に社会的要求から生れてくるものである。されば現在のサジズムスは何が私はその極端なあらわれを朝鮮戦乱にみることができるのであるが一步時代をずらして、戦争裁判と原子爆弾にみることができ。すなわち戦争という民族と民族の斗争。その斗争の結果として強いものが弱いものをいじめめる。このいじめめる真相が戦争裁判であり、原爆攻撃である。戦勝民族の心理的サジズム戦敗民族の心理的マゾヒズムそれが前者であり、そののぞみが現代科学の粹によつて最高度に發揮されたのが後者である。人間心理の内層にひそむ性愛をふえんして社会の諸相をえぐり、それを社会的サジズム社会的マゾヒズムと命名するのはおかしいであろうか。終戦後パツとあらわれた性科学雑誌、その普及につれ異常性愛者の数もぐつとふえたようだ。各地に雨後の筍のように出た変態グループ、少年性犯罪の増加、それは何を意味するであろうか。アメリカ国務省の統計によると年々変態性慾者が増加して困るそうだ。また異常性愛者の数は文化の進歩と正比例するといわれる。そういう意味で私は新しいサジズムスの本質を規定したいのである。

(四)

さて最も古い異常性愛の考え方にフロイドの精神分析学があるがそれによると、かゝる性愛は慾望の抑圧からおこるそうであるもしそれが真であるとすれば現在のようによつての人が分業化された仕事に従事せねばならぬ時代にあつては人は当然商品でありきわめて精巧な機械としか考えられない。さればその機械から人間にもどるためにはどうしたらよいか。そこにスポーツや娯楽、芸術の必要性が生じるのだ。そしてそれと同じ強さをもつて家庭的な愛情が必要とされる。家庭的愛情——その大部分は性的愛情に淵源があるのだ。ところが人間が心を忘れ体を機械として働かすためには当然欲望を抑圧せねばならず、するとそこに必然的に異常性愛が生れる結果となる。すなわち文明社会は変態性慾者を田舎より多く作るのだ。かくて逆に変態性慾を家庭にとりいれ職場にとりいれることは逆に文化の進歩を意味するようになる。現在では変態的であり異常性愛に関心をもつことの方が正常なのだという意味で人を縛り、人を苦しませ、悲しませ、泣かせる法律ができてゐる。こういう現在の桎梏からのがれるため、本当に妻を縛り、愛人を叩き、自分も満身創痍となつて人は空しい自己陶醉にふける。私はそこに現在のサジズムス、マゾヒズムスをみるような気がする。

(五)

或る日の夕方、私は只一人大学の芝生の中に寝、空しい空想にふけつていた。

それでも私の前には美しい古典的な光景が横たわつていた。中世風の廃墟を前に、老樹がティティとそびえ、ナイチンゲール

が夕ぐれの歌を歌つていた。空には薄く雲がかゝりその中に半月が浮いて寒からず暑からぬ氣候であつた。だがあたりは静かであつた。静かすぎて死の恐怖が燐光となつて人に迫るほどである。私は目をとじた。すると、

とある激情がさつと私の胸の中を駆けめぐつた。

All thoughts, all passions, all delights,

Whatever stirs this mortal frame,

All are but ministers of Love,

And feed his sacred flame.

あらゆる思想、あらゆる激情、あらゆる歡喜凡そ人の心を動かすものはすべて愛の従者にして、その聖なる祭をもちやすのみ

(Loue=By. S.T. Coleridge)

私は静寂の中から一人の女性を作りあげていた。気だての優しいこの女性は柔順な知性豊かな女性で私はこれに求愛するため、古めかしい武士のお話をしなければならなかつた。武士が深傷を負い、敵にとらえられた。その時受けた縄目の恥、拷問、いずれにしても生命の危機——いやそう長く生きぬであらう人を前にしていかにほど冷酷な仕うちがなされたか——だがその武士は遂に折をみて脱走することができたのだ。

そう語つた時の彼女の喜び、彼女は武士が縛られたときいた時顔をしかめつゝも、よつてきたるべき出来事に胸をときめかしていたのだ。

x

x

x

原作の筋とは少し違うが……いっしょに涯しない空想が私の心をとらえて行つた。コールリツチは英国ロマンティックバイバル時代

の詩人、千七百七十二年に生れ千八百三十四年に死んだ。さきに引用した詩をかいたのは千七百九十九年、彼が独逸旅行を終えて帰国し間もなくであつた。元來彼は体が弱く、おまけに宿痼があつた。それ故時々麻薬のおせわにならなければならなかつた。前記の詩はそういう意味で彼には珍らしい恋愛至上的、理想主義的なもので妻に求められなかつた心の慰安、失いかけていた詩才を惜しんだとみられる節がある。

しかしそれとは別に彼の本質はあくまでもロマンティックな詩人であり、その好んで歌うところは超自然の出来事であつた。魔女が登場し、予想だに出来ぬ出来事がつきつきにおこつた。だが私はそれ故遂に考へて、現代流に言えば彼は多分に異常性愛を好む傾向があつたのではないかと思う。たとえば彼の一世の名作「クリスタベル」などは魔女にとりつかれた女、すなわち戦争に夫を送り出した妻の同性愛の物語りである。

(六)

異常性愛を好む人たち、すなわちわれわれが一度とおる過程として拷問というのがある。一体拷問という奴は悲惨なもので、最近の外国映画では鎖でぶらさげコテで肌を焼くというのがおきまりである。幸い日本映画にはあまり出てこない。「憲兵」の原作にはそういう場面もあるが映画にはなく「真空地帯」にあつたのは外国ものと似たりよつたりのものであつた。先般、坂口安吾氏が九州を根城とする西日本新聞に「発明の拷問」と題するエッセイを掲げ彼一流の珍論を掲げているのでこれを紹介してみよう。

このエッセイは明日は「天気になれ」というエッセイの第六十一番目のもので世界各国の拷問を比較しそのあとで

「日本になぶり殺しや拷問がなかつたわけではなく、特に切支丹の拷問では、あの手この手の変化の数において世界無比のところがあつたかも知れない。

その方法は斬首、ハリツケ、火アプリ、水責め、氷責め、熱湯責め、ノコギリびき、囊踊り、穴吊し等々いろいろある。それは死刑の方法の如くであるが棄教すればカンペンしてくれるのだから、この場合は拷問といつた方がよろしいかと思う」といつている。

さらに彼は語をつぎ(——このあたりから彼の持論?が出る)「だいたいこのように拷問や処刑の方法が変化したのは理由があつた。はじめには斬首やハリツケであつたが見物人に挨拶したり説教したり、改心をすゝめたり堂々と死ぬので見物人や首斬り役人まで改心して信者になる者が処刑のたびに増加した。

これはイカンというので、死の莊嚴を封じなければイカンということになつた。火アプリは死ぬまでの時間が長く、それまで説教しつづけるので最も莊嚴でいけなかつた。

最後に発明したのが穴吊しだ。手足を各々縛して妙な逆さ吊しか何かにするらしいが、これをやられると実に滑稽きわまるもがき方をし、見ているとおかしくなるばかりで全然重々しいところがない。おまけに声がでなくて、実につまらなく死ぬので、見物人もバカバカしくなるのだという。

この穴吊しの発明いらい急速に信者が減つた。この穴吊しの発明の必要や過程を考えるとどこかユーモアがある。発明者の側の真剣な懊惱ぶりがうかがわれて変にユーモラスなのかも知れない再びこのようなことが日本において行われぬように祈るや切であ

る」

と結んでいる。

坂口氏の拷問論は以上で終るが、キリスト教徒への拷問はその時代のいわば社会的必然性をもつて生れた社会的サジズムの典型であつた。それはさておき現代でも、もう縄で人を縛るといふこと事態が常識を逸脱しているのに、縄で人を縛らねば愛し得ぬと

いう風になつては奇妙というより滑稽である。かゝる意味に於て坂口氏のこの論は一種独得の現代諷刺をやつてゐるようだ。ともかく新しいサジズムというものは当事者の真剣さ故に第三者に逆に滑稽味を与えるといふことがわかる。奇クの内容が案外正常な感覚の読者から慕われるのもそういう處に原因があるのではないか。

——この項終り——

奇具「^{はつ}發^か花^{じょう}杖」

村田 誠 一

奇書研究とか、珍籍解題とか、此頃色々雑誌に掲載されている。仲々面白いものもあるが、つまらないものも多い。いづれそのうちに「責めと残虐」を取扱つた戦後版の珍書の紹介を書く予定だが、その前に本誌にふさわしいと思われるので、少し毛色の変つた処で、珍奇具の研究を発表してみよう。案外つまらないとお叱りをうけるかも知れないが、全然他誌に載つた事がないか

ら珍らしいと思う、責めの実際にも有効だと信じるので一筆。

古来随分多くの人々が、色々創意工夫して責めを楽しんで来た。勿論処罰としての責めもあるが——。責める方も、責められる方も充分堪能していたらしい。手拭一筋紐一本、煙管一本でも、責めの道具にはなる。今紹介しようというものは、竹二本と紐、題して「発花杖」というものである。

過ぐる日、古いがらくた本を整理していたら、何にか本の断片らしい珍らしい図が出て来た。それがこれなのである。まあ挿画をよく見て下さい。

写真丈けでは判り難いかと思つて、左にその写しを記してみよう。

○同 奇具 是は年はとりても

極のきむすめに用る也

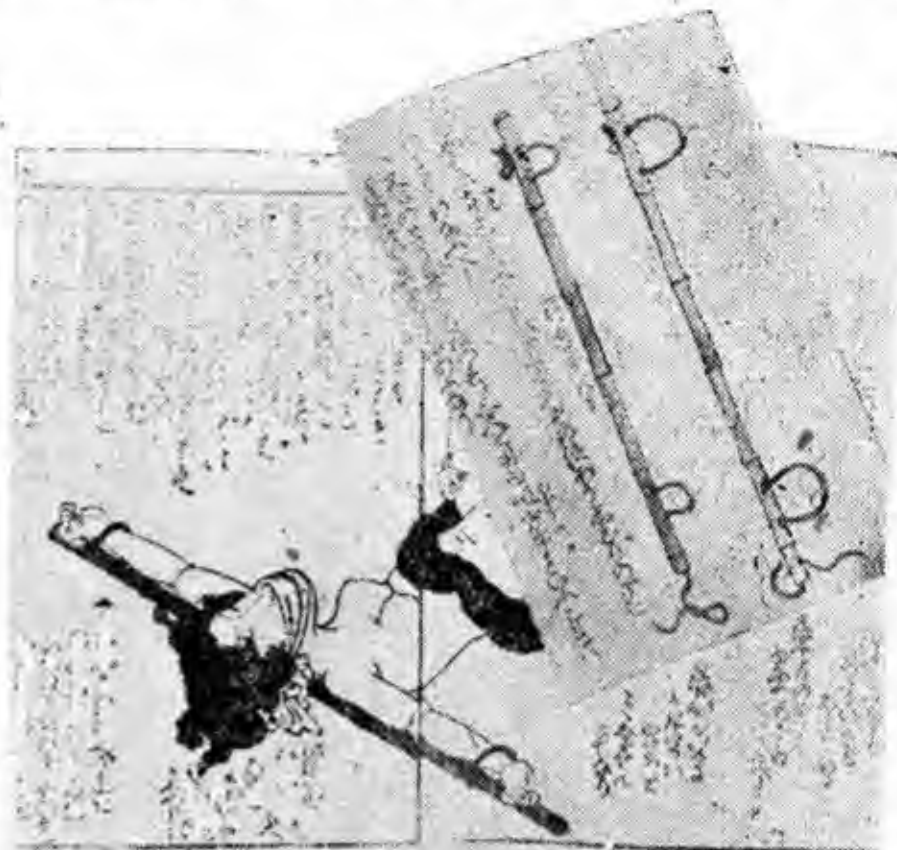
まづ竹のふしをぬきてやわらかき糸をかくのごとくあなをあけたる中へいるべし

○発花杖の図

右の如く二本こしらへて是を用ふ也其法ぼうしばりのごとくし図のごとく行ふべし

(○前掲図参照——遺憾ながら一部抹消、読者よ、これを諒せよ)

○又一つのどう具はきぬの長さ三尺を用



ふ啞方布といふ。これは手拭にても間に合ふなり

○又一つのどうぐ(図を略す。不悪)微蒼寶和名せせりといふ。(ゆびにはめてつかふ水牛にて製したるものなり)

以上の三つの品をもつて、処女の破瓜をする時はどんな××でも、怪我もなく心のまゝに行う事が出来るとするされてある。さてこのものは何んの本の断片か、永らく

疑問に思つていたところ、酒井潔著

【らぶ・ひるたあ】(昭和四年三月発行)の中の「張彰考」の文中に

④発花杖 これは飛んでもない、新製品で読んで字の如く、蕾の花を開かす道具である。あまり委しく話すと穏かでない。只手と足を拡げて縛りつける二本の棒であると丈け云つて余は諸君の想像にまかす。これも金鷄大人の発明だ。

「防泳手事巻」所載という記事が見付かった。これによると梅亭金鷄大

人即ち吾妻雄兎子(吾妻男

一丁)の作だから大体安政—

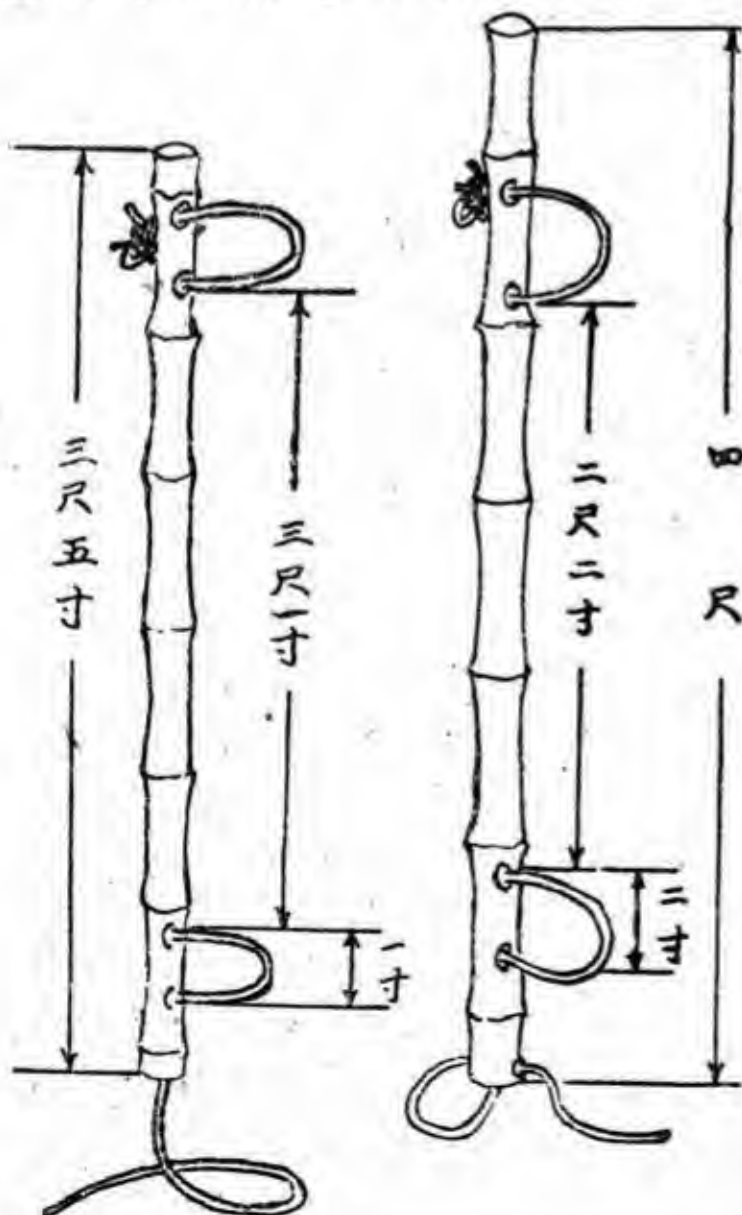
文久年間、今か

らざつと百五十年位前になる喜

多玲子氏の習作

十五態(本誌昭和廿七年八月号

にも棒を用いたものが、二三



あつたが、この発花杖も用い方によつては残酷感はあるが、どこか艶めかしい性的興奮を感じさせられる様な気がする。竹の棒二本と紐と手拭、温故知新ではないが、今でも充分利用出来る可能性があると思う。尚念のため書添えておくが、竹の棒が首のところへ当ると痛さを感じる故、何んでも柔らかないものをあてがう様にと注意がきがしてある。

泰平の夢円らかなる時代には、それ相応にのんびりとした、愉快な工夫が構ぜられたものだと思つた。

私の思い出

岡田 咲子

左脇かおる・画

八月号の読者通信を拝見致しました。

同じ八月号に信太蓉子さまの悦唐秘帖にも私の〃悪女〃のことが書いてありましたので、本当に汗顔の至りとはこのことを申すのでしよう。今日はお返事をかねて色々私が想っている雑談などしてみようかと考えて筆をとった次第です。

A

岡田圭介様

私は男性の方へお返事するのは全く始めてなのです。まして私は自分の秘かな喜びなど小説以外には書いてみたこともありません。

今日、でも書いてみようかなという気になったのです

同姓である気安さの為かも知れません。

お話の様に、体育大会での事余り良く似ているのでびっくりしてしまいました。本当に私が女学生の時に縛られたのと同じく違わないお話でなんだか、あの頃、校庭のテニスコートでキヤア／＼黄色い声を張り上げながら縛られたりしていた私を、岡田さんに見られていたんじゃないだろうか？ なんて思う程同じようで今でも女学生々活なんて変らないものだとなつかしく微笑しくなつてしまいます。

あんな、面白半分に縛られたり白状したりした事が私を責めの楽しみを喜ぶ女にしてみましたのですもの。今から想えば一寸考えさせられる思い出かも知れませんが、今貴男にお見せしたらどんなお顔をなさいますかしら



ルボ式なんかは書けませんけれど、あの当時を思い出しながらお話を進めて行くことに致します。でも学校以外のお話は度々かきましたから、今日は学校内での私が親友のグループ仲間と遊んだことをお聞かせしましょう。

B

丁度、あの時四年生だったと思います。江川乱歩全集が盛んに女学生の間でも読まれた頃でした。私達のグループは毎日黄金仮面になつたり明智小五郎になつたりして、放課後当番が済むと、私たちは静かになつた校舎や校庭で遊ぶのが一つの楽しみでもあつたのです。ジャンケンで悪者を選びます。それは二人の時も三人の時もありましたが。なぜか私は悪者を追う女探偵が好きで自分から買つて出たこともよくあります。

それは面白いんですよ。悪漢になつた者は校舎、校庭内だつたら何処へ逃げようと勝手です。約五分程してから私は女探偵で外の探偵と手わけして悪人をさがし始めます。

教室、音楽室、作法室、講堂、終いにはお便所や倉庫地下室のボイラー室まで足音をしのばせて探し廻るので

す。
急に悪者が飛び出して大声でびつくりさせられたり又ある時は誰れかに掌で口をふたされ両手をつかまれたまゝ中に引きずり込まれたりしました。

この時の悪漢は四人で相談して同じ所で私たちが来る

のを待つていたのです。

「駄目よ、声立てさせちやアー」

「早くしないと次の人がくるわよ」

「そのロープで縛りなさいよ」

こそく云っているが私には誰れだかすぐに判りましただけれどわざとふたされた口のまゝ呻き声を上げ縛られない様にもがくと、相手は本気になつて私を柱の所まで連れて行きぐるぐるまきに縛りつけてしまいました。

「ねえ、縛つた？」

「うん」

「口はどうする？」

「早くハンカチでふたしないと駄目よ」

声と一緒に私の口へ固く、まるで本当に誘かいでもして来た様にハンカチでしばられてしまいました。

「騒ぐと痛い目に合やすよ」

なんて言いながら、私の胸から胴、腰、太腿あたりまで固く巻きつけたロープにさわつて云うんです。

そして皆は次の探偵が来るまでかくれるのです。静まりかえつた暗いボイラー室。私は私の体中をしめている縄の痛さに例え様のない酔つた様な気持で助けが来るまでいつまでも縛りつけられているのでした。私はこんな時言い様のない程楽しいのです。でも時々悪漢にもさせられて手錠だと云つて両手を縛られたことも有りしました。

あの頃から私は、もう縛るよりも縛られる喜びの方が



好きになりつゝあつたのです。

C

そうーこんな遊びもありました。

夏になると長い休みが私達をたいくつにして学校のプールの水泳部の合宿が終ると、誰にでも自由に開放されることになつていました。その頃になると私達は云わず語らずのうちにグループが集まつて来るのが毎年の習慣になつていたのです。

ある日、私がプールへ行くと昨日合宿が終つた水泳部の上級生達が脱衣場で集つて話しているのです。

私がふとその方を見ると、バスタオルを首へかけた水泳着のまゝのキャブテンだつた五年生の人が笑つて私を呼ぶので立止ると、

「ねえ、いらつしやいよ——」

「……………」

私は不安な気持でよつて行きました。その日に限つてグループの人はだれも来ずどんよりと曇つていました。

私は水泳着のまゝプールへ入る訳にもいかず仕方なしにその上級生の仲間に入りました。キャブテンは

「面白い遊びをするのよ」

嫌とも云えず私は

「なにするんですの？」

ときくと皆んながドツと笑いました、するとキャブテンは叱る様にそれを制して

「鬼ごつこよ」

「鬼ごつこ」

「そうよ、でもあんた達のやるような泥棒ごつこみたいんじゃないのよ。あんたが鬼の子でプールから校舎までならどこへ逃げてもいいのよ。私達が追いかけて捕われずにあの国旗台まで逃げれば帰りに、みつ豆と、アイスクリームを御馳走するわ」

私はこんな人達に御馳走してほしくなかつたけれどもその場の情況でとうとう仲間に入つてしまつたのです。

「さア、百よむ間に逃げるのよ、ぐずぐずして居ると捕まえてオヘソとつちやうぞ」

私は仕方なく逃げたのですが始めから彼女達は逃さない様にしているのです。

廊下づたいに教室から階段の所へ来た時、もう後から追つて来るのです。私はこわくなつて水泳着のまゝであることも忘れて、国旗台と反対の校門の方へ走り出したのです。追手は私が違う方向へ行くのを見て

「駄目よ、そちらに行つたら早く誰か捕えてよオー」

もう駄目だと思つた私は大雨の降っている校庭へ飛び出しました。その時足をすべらせて泥水の中へ引くり返つてしまいました。

岡田様、お見せしたかつたわ、あの時の様子を……

「捕まえたわよオ……」

「構わないから脱衣場へ連れて行きなさいよ」

私はよつてたかつて連れられて行きました。みな水泳



部の選手になる人ですから体格のいい人ばかりでした。

「放して、もう帰るから―」

「いやよ、あんたルールを違反したから罰をするのよ」

「縛っちまおうよ」

と一人の人が云うと皆賛成／＼といつて手をたたくのでした。そしてこゝではまずいから合宿所へ連れていくというのです。

「嫌よ、放して／＼」

と大きな声でいつても放してくれずとうとうその合宿所に入れられました。入学以来、始めて見る部屋で五十畳はあるでしょう。

電燈は二つ、昨日までカヤをつつていたらしい麻縄や細紐が天井からぶら下つている外、何一つないがらんとした部屋でした。

キヤブテンは戸を閉めると

「あれで早くしぼりなさいよ」

「……………」

「駄目よ、もつときつく押えなさいや……………」

私は四、五人に押えつけられて身動きも出来ません。

「助けて―誰か―」

叫んだ私の頭をおさえていた一人が口をびつたりとおさえました。キヤブテンはタオルをなげて

「それでしぼりなさいよ」

その人は笑つてそれをひらうと素早く口をおさえつけてしまいました。ほつと一息ついたその人達はおどけた

様に

「さア、今日のお料理はなに、致しましょうか」

今から思えば大変な情景だったのでしよう。部員の人々はみな水泳着一枚の半裸姿です。雨をうつ音がはげしく私はもがきました。その人達は私のたれ下つた水泳着の片方から今にも出そうな乳房をじつと見守っているのです。

私は周囲の音が静まると自分の耳にタオルでふたされたこもった様な泣声が聞えて来ました。大声で泣いているのですがタオルのために遠くの方で泣いている様に聞えるのです。

突然、私は許してやろうかという声を聞きました、すると横にいた人がうなずいて

「今、何時頃」

「まだ三時頃でしょう」

「でも小使さんが見廻りに来ると先生に言われるわよねえといてやりましょうよ」

キヤブテンは笑つて

「だめよ、まだ罰が残っているわ、それが済んだらといて上げる、そうだ、いいことがあるあの机の上に寝かせて罰するのよ、そしてら解散よ、いい？」

命令的にそう云うと、だれも反対する人もなく同意しました。あの頃は軍国主義の花やかな頃で女学生の間でもキヤブテンの命令は絶対に服従する気持が知らず／＼若い娘心にも、しみ渡っていたのです。



遂に私は縛られた体をかかえ上げられると合宿の食卓に使う細長い机の上に、あおむけに寝かされ別の縄で落ちない様に胸と胴と太腿へ縄をかけられてしまいました。胸の乳房の下へ縄が、かかると今まで辛うじて乳房の上で止つていた水泳着が乳房の下まで縄で引張られて、ずり下つてしまつたのです。

縄が乳房へ食い込んでゐる、息をするのさえ苦しい。私は恥かしい自分の体からのがれる方法は、固く目を閉じることでした。

キャブテンは顔を近づけて私の耳に口をよせ小声で「もうすぐだから辛抱するのよ、これから私が貴女のお姉さま、どう縛られるの嫌い、今はいやでもきつと私が好きにして上げる。だから今日は一寸辛抱なさいね。もがいたらかえつて痛いよ、よくつてー。じや始めるわよ。」

つぶやいて立上つたキャブテンは

「私が云う順番にするのよ、終つた人は脱衣場で着換え一人づつ帰ること、判つたわね、それから今日のことしやべつた人は同罪よ、全部退学よだから他人にしやべらないと誓いましょう。まず最初は貴女よ、この子の二つの腕をつねるのよさあ、早く」

私は手術台に載られた時のように次々と責めの数々をこらえようとして奥歯をかみしめました。でも体のふるえだけはどうしても止りません、その時、突然二つの腕に痛みを覚え思わず呻き声を上げました。

「そんなの駄目、もつと強くするのよ」
声と共に痛さは強くなり私の悲鳴を上げる姿にキャブテンは

「いいわ、下で着換えて早く帰るのよ」

第一の人は逃げる様にして出て行きました。

「今度は貴女、太腿をつねるのよ」

二番目の人がうなづいて私に近より小声で

「ごめんね」

謝つて私の太腿をつねりました。

「だめよ、もう片方つねらないと」

その人は泣きそうな顔をしながら力一杯つねりました。その時の痛かつたこと今でも忘れません。縄が食い込んで私も私は首をふり猿ぐつわのタオルの下で悲鳴を上げ自由にならない体は無我夢中であばれつづけました。

「次は両足の裏をくすぐるのよ、いいと云うまで」

「次は、その可愛い乳房をー」

私は次から／＼と迫る責めの数々を苦しさで痛さに半ば気を失つてしまいました。

「さあ、起きるのよ」

ゆり動かされて我に返るとキャブテンが立っています。「やつと二人だけになれたわ、どう苦しい、えらかつたわ大へんな汗だこと、さア、机から降して上げるわね」私の縛られた体を次々にとくと、キャブテンは私を抱きかかえて畳の上へねかしました。そしてまだ手足も猪ぐつわもとかない私の顔に近づけて



「苦しいけれど今大声を出されたり逃げられたりしたら大変だからもう少しがまんしてね。私、貴女の体がみたいの、縛られた全裸体なんて考えただけでも素敵なことよ、私、貴女を思う通りにしてみせるから……」

キヤブテンの話す様子は血走った目で何んだか嬉しそうです、次第にずり下げられ裸体にされました。

「私、私こうして上げる、こうやつて——ねどう？」

私の乳房を左手で握り、右手で素早く猿ぐつわをとると、一声も叫ばさない早さで私の口はキヤブテンの口と舌とで再び声が出せなくされてしまいました。

それから私は今までに一度も経験したことのない、しびれるようなうづきを体中に感じると同時に、腰から力がぬける様な異様なだるさを覚えました。私はキヤブテンの胸に顔をうずめて、しのび泣きをしていたのです。

私はその日から、水泳部のキヤブテンを、お姉さまにして色々と教わりました。そのうちにとうとう私はキヤブテンの完全な人形になつてしまったのです。

D

岡田圭介さま

貴男は、女が女に責められる美しい姿がお判りになつて下さると思います。その喜びも楽しさも理解していただける事を信じて私はこの想い出話をしたのです。

あのキヤブテンだった子は、終りにはグループの一人が告げ口したためまもなく放校処分を受け学校を追われ

ました。そして他の人達は停学になつた者、あるいは自分からやめていつたりしてあのグループの人は、一人も居なくなりました。そして卒業する日まで校内での探偵ごっこは姿を消してしまいました。

今、おもえばあのキヤブテンだった人の体内には、もうすでにあの時、サジズムの喜びと楽しさを知る血が流れていたのでしょうか。

それ以後、あの人の噂も姿も一度もきいたことも見たこともありませんでした。

生きていたならば必ず又何処かで責める喜びと楽しさを味つてのことでしょう。

(終)

KK通信

第十三号出来ました

B6判十六頁に記事、挿絵、写真等満載の特別会員機関誌です。本誌を御覧下さった方は是非通信も併せて御愛読下さい。絶対に他の追隨を許さぬ充実した内容と極めて低廉な誌代です。見本一部送共二十円、一年分予約二百円、半年分百円(何れも送共)尚旧号は第五号以前品切、第六号より在庫しています。一部二十円、六回分百円にてお送ります。(KK通信係)

◎責めのアイディアを募る◎

写真及び縛り絵について、こういった構図やポーズ或は趣向で作成してほしいという御希望があればお寄せ下さい。採用の分には画稿又は写真を差し上げます。

(編集部)



聖

画

の

誘

惑



近 見

瀧

麗

子・画

啓

(一) 闇の男

映画館の前で、麻夜子がハンドバックから財布を出した時もう恵一郎が切符を二枚買つて了つていた。

「いゝのよ、今日はお金持つてるのよ」

「遠慮しなくて良いつてば」

そう言う恵一郎から麻夜子は一枚受取つた。彼女はそれが嫌だつた。貴男からお金貰う程貧乏してはいないわ、と口迄出掛つてゐる言葉をやつと我慢して、すつと先に切符を渡して中に入つた。後から恵一郎が追つて来て、

「何うしたの、今日は怒つてるの？」

「怒つてやしないわ」

麻夜子はつんと言つてさつさと扉を開いて逃げる様に闇の中へ入つた。満員だつた。立錫の余地も無いとはこの事だろ。むつと人いきれが鼻を突いた。その上恵一郎が横に寄添

つて来て又話しかけた。

「ね、今日忙しいのじやなかつたの」

「そうよ、忙しいの、今シヨウの準備で大変だわ、着る服未だ仕上つて無いのよ、そうお返事したでしよ」

「そう、併し逢い度かつたんだもの」

「だから無理して来て上げたわ、それで良いんでしよ」

「うん、有難う、そりや嬉しいのさ、けれどつんとせられると僕辛いなあ」

麻夜子は溜息をついた。物足りない、何でこんな男と結婚せねばならぬのかと思う、大体この男には男らしい所が唯の一つも無いんだわ、変に私の機嫌だけとつて、笑つてやればつけ上るし、怒つてやれば泣声出すし、此方迄悲しくなるわ、とも思う。

この九月に麻夜子は恵一郎と結婚する様に話が進んでいた。亡くなつた父の遺志で同業である化学工業会社の一人息子で今年大学を卒業したばかりの彼と一緒にになる様に今朝も叔母から言われ、嫌がるのを無理に映画へ行きなさいとヒステリックに叫ばれると仕方なく来て了つたのだ。麻夜子自身はまだ二十一でもあるし、高校卒業以来続けている洋裁の方が面白く結婚よりこの方を当分続けて行き度い希望だつたが許されそうにも無かつた。

「見えないわ、疲れてよ」

こう呟やくと

「僕座席探して来るから動かないでね」

恵一郎はすぐこそくと座席の方へ人波を分けて行つたが、すぐ引返して来て、

「駄目だ、とても無いよ、済まないな」

「いゝのよ、此処でも見えるわ」

人の頭で見えないのを承知で麻夜子は言つた。恵一郎に頼むのが嫌だつた。

すぐ映画は終り、うまく見付ける事が出来て二人は中央の座席へ坐つた。

「荷物重いんでしよう、僕が持つ」

「いゝわ」

「でも」

彼は麻夜子の布地の入つたナイロンの包みを奪う様に取ると膝の上に重ねた。

映画は海洋劇で美人が逞ましい若者の腕に抱かれ、無理に接吻を受けている所だつた。麻夜子はその力強さの中で女はどんなにか幸福だろうと思うのだつた。その時麻夜子の右手は異種の肉体に触れた。肌目の荒さは男の手だつた。彼女は、はつとして右手を引いた。今迄も幾度か映画館で男に手を握られた事がある。併しその都度、逃げて座席を変えることにしていた。が今は恵一郎への不満からわざと動かなかつた。

又粘つこい手が彼女の手に触れ握つた。麻夜子のはねつけ様としたが、しつかりと握つて離れなかつた。

「誘惑されているわ」

麻夜子はそう思つたが、されても良いと云う気持があつた。恵一郎よりもつと強い逞ましい男性に愛され度い希いが、彼女の反撥を鈍らせていた。

彼女はそつと横目で右の男の顔を見た。厳しく角張つた顔付の大柄な男だつた。鋭い眼が画面を注視して居り、その瞳か画面の光を

受けてキラ／＼輝いて居た。

映画を見乍ら、横の女を誘惑し様とする、二重の、言わば巾の広い、男の心が頼もしくも思われ、手の力を抜いた麻夜子は冒険を試みたいと思つた。

画面は海賊船上の描写、空に聳立つ帆柱の下で若い男が両手を縛られて、制裁を受けていた。先が幾条にも分れた太い鞭がピシリと男の肌にと、赤い筋が何本かくつきりと現われた。

麻夜子は自由な片手で顔を覆つた。クワツとする程の血が沸き上る様だつた。これだわ、とすぐ彼女は想い出した事がある。

それは家にある絵画集のルネッサンス篇で見た聖セバスチアンの殉教団だつた。肉体は大木に縛られて自由のきかぬ儘、全身に矢が刺り、その一本は首を通し鐵は抜けて光つてゐるのだ、それにも関わらず、その若人の眼は遙かなる天国を夢見る静かな瞳、逞しい肉体の受ける苦痛とは別の恍惚の境地なのだ。その絵を見た時の異様な心のときめきが今再び起つてゐるのだ。

「ワン」「ツウ」「スリー」

横でその若者の鞭打たれる数を数える船員達の眼に残虐を喜ぶ血の色が見えると麻夜子は同じ眼付になつてゐる自分を意識した。

その感動で思わず彼女は握られている手を固く握り返していた。

すると前にも増して強い力が骨が折れる程の強さで反応して来たのだ、

「痛いわー」

そう言う積りで肩を男の方へ寄せた時、長い腕彼が女の胸を後から巻き、抱き締め、その先は乳房を深く押しつけてゐるのだつた。嵐にも似た血の動きが麻夜子をかすかに震わせた。

「あゝ」

彼女は眼を閉じて力を抜いていた。これ以上の行為は衆人の居る館内では行えないという安心があつたからだ

横で恵一郎は無心に画面を見てゐるのだつた。

(二) 迫る足音

麻夜子は電車に乗ると、ぐつたりと座席に身を沈めていた。縞のスカートの下から現われた脚と、その先に革のサンダルに縛られた足にまるで感覚が無かつた。朝からブラウス二枚仕上げ映画を見た疲れが、今ドツト押寄せて来ているのだ。

向い側の半分降りたガラス窓に愁え気な疲れた顔が映つてゐる。切上つた眉と、限の現われた眼の中で瞳がキラ／＼輝いて居り、唇がふくれ上つて濃く濡れていた、白く広い額に切込んだ髪が生際がくつきりと明瞭だつた。肉体を酷使するにも関らず、眼だけは心の鋭さを表わしている自分自身の顔を、麻夜子は好きだつた。

彼女は包みの中の布地をそつと開けて覗いた。間もなく来る夏の装いを主題にしたフアッションショウに着るのだ。バスト、八二、ウエスト、六〇、ヒップ、九二、女としては標準に近いが胸囲り多く胸が少し細い、麻夜子は自分の身体の寸法を想い出してみる。

「理想的な体よ、麻夜子さんに今度のショウのモデルになつて戴くわ」

先日先生からそう言われた。彼女は市内のＬドレスメーカー女学院を卒業すると引続き研究生として残り、Ｓ百貨店の注文品を仕立てゝゐるのだ

電車は海岸沿いの松林の中を走つてゐた。黒い海面に漁火が連つ

て見え、初夏の夜風が窓からまばらな乗客の間を、冷やかに流れている、白い取手が規則正しく揺れているが、カーブに來ると乱れた間もなく下りる駅へ着く筈だった。

その頃になつて麻夜子は右手の隅からしつこい視線を投げかけている青年の眼が氣になり始めた。広い胸巾でスポーティなウールのグレイの背広に紺地に赤い縞ズボン、胸元のグレイの赤いネクタイが強烈な色感を持つている。無帽で乱れた髪が褐色の額に暑苦しく動いている。顔は角張つて鋭い眼付、映画館で横に居た男の様だった暗くてよく分らなかつたが、あの顔だった。そう言えば先程発車駅で恵一郎が、

「又逢つて呉れるね」

と繰返すのを

「いゝわよ、分つてよ」

と邪険に別れた時も闇の中から見ていた様な氣もする。麻夜子は変な予感がしていた、押伏せる様な氣魄をその視線から受けると同時に彼女の心中にスーツと空虚な場所が出来たのだ、恐いと思つて麻夜子は眼を伏せた。

海岸沿いの小駅に着き、麻夜子はホームに降りた。注意していた通り、その青年も降りた。明るかつたホームも発車と同時に又闇に返つた。下車客は二人だけだった。カツカツと靴の踵がアスファルトに鳴り、すぐ柔かい土の感触が脚に伝わった。県道からそれ、ずっと山裾の燈火が乱れている彼方迄二軒程の間を結ぶ一本道に入つたのだ。市内の家が戦災で焼失したのでずっと麻夜子は叔母と共に山裾の別荘に居るのだ。

小走りに歩き乍ら彼女は時々止まつては後の足音に注意したが追

つて来る様子は無かつた。麻夜子はふと失望を感じた。淋しいと言ふか変な空虚な心の中だった。瞳に初夏の星がぼんやり浮んだ。高い煙草工場の煙突の先に一際光る星を見た。名は分らないが、自分の星だと思つている星だ。それは丁度、分らない肉体の神秘の中に明滅している光の様だったか、一人でそう定めている。

麻夜子は少しの間、足音から注意を外していた。この辺りは煙草工場の鍊瓦塀に沿つた草深い道で、音は草に吸われて分らなかつたのだ。ふと氣付いた時には、もう重々しい大地の音が被さる様に迫つていた。彼女の肉体は不意の驚ろきで急に棒の様に固くなつていた。逃げる積りで足を運ぶのにまるで強ばつて了つて、動かないのだ。すぐ程の様に固い腕が麻夜子の胴に巻き付き、広い掌が口を蓋した。その時始めて麻夜子は声を上げた。

「いや、助けて、いやよ」

併し彼女の声は空しく掌の中で消えた。青年は一度も声を出さぬ不可抗力な強い力で道端の草の上に麻夜子は押えつけられた、スカートが翻り、内股迄虚空におどつたが、その脚も青年の鋼のような脚で押えられた。尚最後の力を尽そうとした時、夜闇に鼻の先でキラリと光るものがあつた。ナイフだった。瞬間スツと力が抜け、麻夜子は観念の眼を閉じた。

.....

黒い影絵がそつと乱れ、夜道を静かに歩み去つた。眼を開きその影絵を追つた。心も体も疲れていたもので、もはや恐怖の思ひは失われていた。麻夜子はそのまゝ草に寝て空を見上げた。先程の星が見当らなかつた。流れたのかしら、いや何処かに居る筈よ、

——私もう処女じゃないわ——

そう思うと、長い間持つていた奇妙な毀れ易いガラス細工の人形を人にあずけた時の安心が沸いた。

少しの間麻夜子は茫然と散ばる星を見ていた。ふと自分の眼付が今、聖セバスチアンの眼になるかしら、と思った。がキツト違っているあの様な恍惚の眼ではないとすぐ心が答えた。すると、青白い何の取えもない恵一郎の思いつめた瞳が馬鹿らしく浮び上った

「何よ、あんな眼付！」

麻夜子は反抗的に立上った。途端に眩暈がし、足がふらついたので又草の上に坐ると、青年が落してい行つたハンケチが目についたうつつら黒いものが星の光を受けていた。血らしかつた。遅ましい青年の力が再び迫る様だつた。

「私はあの男のものになつたわー」

彼女はそう考える事に不思議はないと思うのだつた。

(三) 魔 の 誘 い

三日目の朝、麻夜子は二階でミシンを踏んでいる時、女中から差出人の書かれていない一通の手紙を受取つた。何処かで口聞きしたものか、本字を使わないで、まや子と平仮名を書いてある。

変な手紙だつたが彼女はすぐ先日夜の事と関連があると直感した。動悸の打つ胸を押えて封筒を開くと、白紙にペンで走り書きしてある。十分上手な手に違いないが崩してあるので読み難くかつたが、次の様に判読された。

「一夜以来、貴女の面影が忘れられない。あの時の貴女の妖しい眼の輝き、男の心を灼き尽くす光があつた。貴女は僕を求めていたのだ。十年、否それ以前からかも知れぬが、僕が現われるのを待つて

いたのだ。僕も逢い度い。来る六月三日夜八時市駅前で待つて欲しい、なお、この事は貴女と僕以外絶対に秘密。映画で誘われた男より」

麻夜子は男の十分過ぎる計算を見た。わざと映画館で誘われた様に書いてある。ではあの夜の事は、私が誘つたものなのか、だから訴えても駄目だぞと釘を打っているのだ。

併し一度肌を許した麻夜子はあの男の肉体の強い力に引かれていた。三日は今日なのだ。急いで身仕度すると、叔母に「シヨウの打合せに行くわ」と昼過ぎに家を出た。

八時、用事を済ませた麻夜子は駅の太い柱を背に立つていた。ネオンが小雨に濡れて、夜の妖しい影が其処からにじみ出て来る様だレコードが「第三の男」に出て来たエキゾチックな曲を奏で、いる彼女はそれを絶望的な運命の曲として聴いていた。レインコート、新調の服、下着は清潔、母の遺品の指輪、何処で死んだつて恥かしくないわ。そう思うと、行ける所迄行くのだと勇気が湧いた。

電車通りの向い側から例の黒い影が大腿でゆつくり現われた。コートの襟を立て、傘は無かつた。

「来てたね」

初めて麻夜子が聞く声だつた。乾いた老人の持つ声だつた。身なりは青年なのに、齢は幾つかしら、と考えた。

「此方へ来なさい」

命令的な口調によるよりも、消し得ない肉体の繋がりが彼女を素直に従わせた。

電車通りを突切り、ネオンの光る街角を廻ると静かな細い通路に

入った、其処は未だ麻夜子を通つたことのない道だつた。両側に普通の家の様だが綺麗な小作りの家が續いていた。その中の一軒の門口に立止まると、

「這入ろう」

青年が言つた。

「いや」

麻夜子は反射的にこう返事した未知の世界が不安だつた。

「もう遅いぜ」

こう青年が言ふと、強い力で彼女を横抱きにして戸を開けて押し入れた。

女中が現われた。青年は、麻夜子を抱えたまま、

「例の部屋へ頼む」

と言つた。女中は表情を変えず、事務的に案内した。長い廊下を幾曲りもした最後の部屋だつた。曲り具合から一軒の家ではなく、表では数軒に分れていても中は続いているらしく思われた。部屋は三方が壁、一方の半分に小さい出入口がある異様な作りだ。四帖半位の大きさで明るい夜具がもう一杯に敷かれてある。

麻夜子を見た時又足が入口で止まつた。

「もう遅いぜ」

重ねて青年が言つた。



「そうね」

麻夜子は覚悟していた。恵一郎と結婚するよりはましよ、そう思つていた。

青年はスタンドの灯を赤色光に切替えて、背広を脱いだ、純白のシヤツの上に四角い顔が骨々しく光線を受けて真赤だ。麻夜子は自分の体もその熱の様な赤で爛れ行くかに思つた。次の動作で彼女をまるで小雀同様に抱き締めると、やにわに衣服を剥取ろうとするのだ

「いや、いやよ」

麻夜子は渾身の力を籠めて反抗した。

「ふん、そうか」

彼女を一時突き放した青年は押込みを開けて細引を出すと、有無を言わさぬ力で忽ち麻夜子の両手を後ろに縛り上げた。そして上向きに倒すと、ブラウス、スカート、シュミーズと女の身を覆う総てを順々に剥いで行くのだつた。白い裸身が赤色光を受けて燃える肌に変つていく。唯白眼だけが、真白く残り愁え気な空しい反抗を續けているのだ。

青年はウイスキーの角瓶を出すと、漏斗を麻夜子の口に入れて、液を静かに注いだ。強烈な味が未だなじまない彼女の舌を刺戟し、嚥下すると同時に五体に滲み渡り、次第に神経を麻痺して行くのだ

麻夜子の躰はすぐ力を失い、くねくねする肉塊と化して夜具の上に長々とびた。知覚を失った一個の玩具に外ならなかった。

朝、麻夜子は疲れていた。ぐったりと夜具の中に居る自分を意識しても頭が上らなかつた。細引は解かれていたが、力強い青年の腕はまだ蛇の様に巻きついていていた。

「苦しかつたかい」

男が言った。

「そうよ、とても、貴方は不良ね」

「そうさ、不良と思つて良いよ」

「何なさつてゐるの？」

「新聞記者、ボロ新聞の」

「新聞記者？」

「うん、僕の名前は……」

「よしてよ、言わないで」

麻夜子はくるりと青年の方を向くと、口を手で蓋した。聞き度くなかつた。彼女は夢の中に居る様だつたから。現実に帰るのが恐ろしかつたのだ。

(四) 男の欲望

「真夏の装いに明るいローズ地に白と黒の縞を縦横に扱つた若々しいデザインです。縞そのものが相当大胆な柄なので、スタイルはどこまでもシンプルに致しました……。」

麻夜子はアナウンスと共に、軽い音楽に乗つて輝くシャンデリヤの下でステージで軽く廻り乍ら歩いた。いゝわねえ、途端に客席の

前から女学生らしい一団の溜息が漏れる。

ふと右隅を見ると一人の男性が居るのが目に付いた。も一度廻つてよく見ると恵一郎だつた。青い背広を着ている。

——嫌な人、女の集まる所へ来る男なんて——

そう思うとすぐ視線を外し、中央を向いた時、真正面でフラツシユが輝いた。それは、グレーの背広の男、麻夜子は息を詰めた。例の男ではないか、新聞記者だと言つたから、記事を探りに来たに違いない。彼女は少しの間ステージに立往生した。顔面が自分でも引つたのが分る。あの夜の赤い部屋の光景とこの現実の衆人環視の光景が相容れないものだつたから錯乱した頭を整理出来なかつたのだ。

「麻夜子さん、早く」

ステージの蔭から先生の鋭い注意が通つて始めて気付き、も一度スカートを翻えして廻ると幕の蔭へ入つた。

「何うしたの、困るじゃないの、止まつたりして」

先生はそう言うともう忙しそうに次の番組の少女を指図し始めた。其処へせかくと入つて来た新聞記者は、

「もう一枚写させて呉れませんか」

と大声で言つておいて、小声で、

「今夜とても綺麗だ、今すぐ、例の家で待つてゐるぜ。その服で来て呉れよ」

と言つた。麻夜子は驚いて周囲を見廻した。誰にも聞かれ度くなかつた。好都合にも近くに誰も居ず

「さあさ、早く、写すものは写して帰つて下さいよ、忙しいんだから」

と手を振り乍ら近づく先生だけだった。

素早く後片づけを済ませると、勝手知った道を小走りに家へ急いだ。青年は先に来っていて、赤い光の下で煙草を吸っていた。彼女が入るとすぐ舐に手を廻していきなり押え様とするのだ。

「待つて、休ませて」

男の手を遮り横に坐ると大きく息をついた。

「走つて来たのよ」休んでいる間に、彼女は逞ましい男の舐を一種の美しい彫像として感心して見入った。併し、この男に引かれゝば引かれる程、将来は暗黒だと思ふ不安があつた。

「貴男はひどい方ね、まだ私をいじめ度のい」

「うん、いじめるよ、何時迄も」

つと男の手は新調の服に手が掛り、強い唇が、燃える様な熱を持つて麻夜子の唇に重ねられた。

「いや」

無意識にこう言わずには居れない圧力なのだ。何もかも押し流す勢を持つ力、その故にこそ彼女は引かれるのだ。

「私をどうなさるの」

「遊んで売り飛ばしてやるのさ」

瞬間、麻夜子の胸はキュツと痛かつた。これが男だわと、思う。

「恐いわ」

「よし、恐くない様にしてやろう」

男はそう言ふと麻夜子を押し乍ら手を縛り自由を奪つておいて、ゆつくり服を剥ぐのだつた

——私はいじめられる——

そう思うと彼女の心の中に沸き上つて来る感情は防ぎ切れない洪

水と同じだった。

ピシリと革の鞭が半ば剥がれた乳房の上に打たれる。一瞬身を震わす苦痛が襲うが、それは快感となつて反射して来るのだ。ピシリと夜の静寂を破つて、麻夜子のうめき声と次第に調和して盛上つて行くのだつた。

麻夜子は疲れて、その秘密の家を出た。未だ明けやらぬ朝の冷気がすつきりと昨夜の油っこい情熱を吹去るのだ。

「麻夜ちゃん」

白つばい明方の街角でこう呼ばれた。彼女はギクツとした。誰も知らぬ秘密を見られたのかしら、

「僕だ、分る？ 恵一郎」

「……………」

麻夜子は咄嗟に返事が出ない。

「今迄何処に居たか分らないと思つてゐるんだろ、どうも変だと思つて、僕昨夜からずっと君の行く所つけていたの」

「……………」

「責めているんじゃないよ。君、あの人好きかい」

「……………」

「好きなら好いんだよ、僕とは、もうこれでお別れだね」

麻夜子は一言も無かつた。

「最後に言わして貰う。僕は君を女神の様に思つていたの、だから君には指さえ握れなかつたの、それが良かったか悪かつたか、僕は一晚中此処で考えてたんだ。結局それで良かったと思う。もし君に触れていたら、女神を失うかも知れない。僕はこれで一生女神を持つことが出来る。」

其処迄言うと恵一郎はポケットからキラリと光るナイフを出した「あつ／＼」

麻夜子は飛び退がつた。殺される、と思つたのだ。

「今の僕の女神を永久に失わないために」

いきなり恵一郎は左手の自分の手の甲へぐさつとナイフを突き立てた。さつと血潮が散つた。

「本当は君を殺し度いの」

麻夜子は男の激しい眼付を見た。その視線は麻夜子を向いているが、焦点は合っていない。麻夜子より後の、或るものに、結ばれていた。恵一郎の夢かも知れぬ或るものに。

【読書通信】

(投稿歓迎)

始めてお便り差上げます。私由利瑞枝と申します。お友達の八島佐和子さんとお誌を昨年から愛読させて頂いております。いつも素晴らしい記事をつぶり拝見させて頂いて心から御礼申し上げます。特に最近の「クリスチーナの愛難」や「甘美なるアリスの降伏」絵物語として「お小夜嵐」は私達の趣味にピッタリで新しいサディズムの洗練された極致として感激致しました。実は私達は毎月一回第三土曜日に(その日は丁度私の家が無人になり都合がよいので佐和子さんが来るのです)二人だけの楽

しい集いをするのでございますがその際にはこれらの名作が大変参考になり有難い事に存じています佐和子さんは本当に可憐な淑女かな方でクリスチーナやアリスやお小夜にうつてついでお目にかけていたような素晴らしい演技をして下さいます。(その中に写真が撮れたらそつとお贈りします。……八島さんはとても内気で恥しがりますからまだ撮つていないのです)私達は毎月の御誌の発行日お待ちきれず、その日が近づくとまだ少し早いとは思いますが殊によつたら来るのではないかしらと逸る気持ちを抑えかねて本屋の前をウロ

——セバスチアンの眼——

麻夜子はそう心の中で叫んでいた。悪感が背骨を伝わった。恵一郎の眼こそ、今、画集の聖セバスチアンの天国を見る眼と一致していた。肉体の苦痛をよそに恍惚の眼だ。

彼女は茫然と立ちつくしていた。

空ろな眼で恵一郎の立去る後姿を見乍ら麻夜子はこう呟いていた。

「神ね、うらやましいわ、私もそんなものを持ちたかつたのよ」涙が静かに頬を伝わって、微かな嗚咽が漏れていた。(終)

ウロしてしまいます。それですから新しい月の号のあの他誌にぬきんでて清新な表紙を発見した時の喜び！本当にドキ／＼してしまつて手に入れて帰るのもどかし／＼殆んど徹夜して読んで、いろいろ研究しその月の集いに応用して効果を挙げると又次の号が待ち遠しい始末でございます。

先月佐和子さんにお逢いした時の感激(この時はクリスチーナのクライマックスを演出したのですが)を機会にと／＼筆を執りました。勿論お目障りのものと思ひますが、佐和子さんと合作してともかくまとめたので別便でお送り致します。又拙い絵ですが習作(挿絵のつもりです)を同封しました。私が佐和子さんの姿をスケッチしたものです。尚此の外に絵物語(辱められる良家の美しい令嬢)を考えています。題名は「佐和子受難」というように考えて居ります。貴誌上で私達YSクラブのヒロイン佐和子さんが責め苛まれる日の一日も早い事をお祈り致します。では終りに貴誌が同類の雑誌をぬきんでゝその典雅な格調をいよ／＼発揮されて女性美という芸術追求のため益々発展されることをお祈りします。

(YSクラブ、由利瑞江)

◎お手紙に引続いて原稿と挿絵受取りました。次号に掲載したいと思ひます。御支持感謝致します。

私の服

縛られ服

三谷二三子

其の日は丁度良人が会社の宿直の日だったので、私は早目に夜の食事を済ませると、蒲団を敷いて横になりました。ふと、手首を見ると、昨夜良人に縛られた縄のあとが、まだ赤く痣のようになっています。袖をまくつて見ると、二の腕のあたりにも、縄目のあとが鬱血したようになっていました。今日一日中此の跡のために、どんなに氣を使つたことでしょうか。朝から変に蒸し暑かつたのに、袖の長いブラウスを着て、それでも始終袖口に氣をつけなければなりませんでした。緊縛感を味うために、荒縄できつく縛つてもらつ

たからです。此の悩みを今日まで何回繰返したことでしようか。私達夫婦の間に、あの遊びが始まつてから、絶えず私の頭を離れぬ悩みでした。

しかし、これでは困ります。私も社会人として生活しているのです。人目に触れない訳にはいきません。そして、体の垢を落すためにお風呂屋さんへも行かなくてはなりません。其の時、手首や腕や、そして体のあちこちに赤く縄でこすれた跡が残つていたらどうでしょう。か、公衆の目の前に、私達のかくされた生活を触れて歩くようなものです。夏の暑い

日でも袖の長いそして袖口の締つた服を着てその痣のようになってた場所を隠さなければなりません。他の人は腕を丸出しにしたフレンチスリーブなどを着ているのに――

「何故、あの人は袖の長い服ばかり着ているのかしら」

などと、不審の目で見られながら過ぎなければなりません。何か良い工夫は無いものだろうか。私は蒲団の上に仰向いて考えるのでした。

一番手軽な方法は、私が縛ってもらうのや止めればよいのですが、それでは良人が不満に思うでしょうし、第一自身が満足出来ません。と言つて、洋服や着物の上から縛つたのでは、洋服が汚れたり着物がまぐれたりして見苦しいと良人が嫌います。

しかし、仲々良い考えが浮んでこないのです。私は、先日良人が買つて来た「クリスティーヌの受難」という本を読み始めました。読んでゆく中に、私ははたと感ずる処がありました……というのは、此の小説の中で、主人公のクリスティーヌという女性が着せられる服のことです。この服は、彼女を他の男が悪戯することが出来ないように、体にびつたり合うように作られ、背中の処を紐で編んで封印して

おくのですが、此の服のデザインを応用したらと私は思い当つたのです。

そこで私は、その本を読むのを止め、ノートと鉛筆を出して、デザインの研究にとりかかりました。いろいろ工夫に工夫を重ねた末に型紙を裁り始めた時には、時刻は既に夜中の十二時を過ぎていました。

私の考案というのは、縛られるための服を着ることです。そして、縛られても、体に跡が付かないようにしようと思つたのです。此の考えから、私がデザインした服というのは簡単に言えば、割烹着とモンペを継げたものです。しかし、あのダブ／＼とした恰好の悪いものではありません。私の体にピッタリ合うように各部の寸法を合わせて作りしました。

胸の処は頸の下まで迫り、袖も長くし、背中の部分でスナツプ止めにします。そして、それは素晴らしい着想だと思つたのですが、乳房の上に当る胸の部分は、左右の乳首の各々を中心にして円形に切り抜いて、二つの胸の窓とも言うべきものを作つたことです。これを袷に作り、全体に暑苦しくない程度に綿を入れました。裏地は着脱に容易のように、滑りの良い縞子を用いたのです。

この服を、私は翌日一日かゝつて、一生懸

命に縫いあげました。縫い終つて、仕附糸をとつた時には、既にあたりは夕暮の気配でした。

出来上つた此の服を、私は早速着てみました。全裸になつてから、先ず下の部分に足を通しますと、裏地に使つてある縞子が、ひやつと肌に触れました。そして腕を通し背中のスナツプを止めると、ピッタリと私の体に合



つた仕立が、その儘私自身のシルエットになるのでした。それに裏地に使つた縞子の触感が、又何とも形容出来ない程よいものでした。その上、胸の窓からくびり出た双つの乳房が美しいアクセントをつけています。乳房の部分だけが外気に触れている為でしょうか、周囲の部分との体温の差が又一種の快感を覚えさせるのでした。

此の服のあまりにも快的な着心地に、私は直ぐ脱ぐ気にはなれません。暫くは着たまゝで、鏡に映して見たり、ソファに寝そべつたりしていました。

その中に玄関の方で、

「たゞいま」

という良人の声がしました。その声には私は「はい」

と答えて立上り、玄関の方へ迎えに出ようとして、まだ此の服を着たまゝでいるのに気がつきました。そこで、私は玄関へ行くのはやめて、カーテンの後へ隠れていました。

良人は

「留守なのかな」

と独り言を言いながら上つて来ました。その良人の前へ、私が

「わッ」

と言つて飛出しますと、良人は

「なんだ。居たのか」

と言いながら、私の異様な姿に気を吞まれた様子です。まじく私を見つめていた良人は、

「これは素晴らしい」

と立つたまゝ私を抱きしめました。露出している乳房が、シャツに触れてゴリゴリと鳴りました。

「どうして、こんなものを着ているんだい」

良人は尋ねます。

「あなたに縛られるためよ。これを着て縛られれば、縄のあとがつかないから、お風呂屋さんへも行けるし、袖の短い服も着られるのよ」

「なる程！」

良人は感に耐えない様子です。

「だから、早く縛つてよう」

私はソファの上に横になりました。

「まだ晩飯も済んでないんだぜ」

「晩の御飯なんて、どうだつていゝじやないの。第一、今日は此の服を作つていたので、お食事の仕度なんかしてないわよ」

「これは驚いた」

良人は呆れたようでしたが、しかし衝動に

駆られたのでしよう。直ぐ戸棚から縄の束を出すと、私の腕をねじ上げました。背中にねじ上げた手首に縄をかけて、ギリ／＼締めつけてゆきます。何という良い心持でしょう。

そして、縄は胸に頸に腹に肘にと巻きつけられてゆきますが、常のように局所的な痛みなどありません。快的な緊縛感が身体中を締めつけていきます。今までは、背中に廻した手首の縄が背骨に当つて擦れたりしていました。丁度、ネジを締めつける時に、フェルトやパツキングを間に挟むと、堅く締まるのと同じ理由でしょうか。上体を縛り終ると、良人は下肢を縛り始めましたが、今までは腿の方は兎も角かたく縛れたとしても脛の方は隙間が出来て工合が悪かつたのが、気持よくピッタリと付いて縛ることが出来、僅かの身動きも出来ない程です。全く滑らかな縄子を通して肌に伝わる緊縛の味は、末だかつて経験したことのない醍醐味でした。その全身を一樣に締めつける快い緊縛が、体の奥の方まで浸み通つてゆくのです。

胸に廻した縄の間から覗いている乳房は、縄で括れて外へ出ようとしているのですが、私の服の胸の窓は其れ程大きく出来ていない

ので、其の上を円く締め付けます。その気持が、何ものにも例え難い程の溶けるばかりの快さです。私は動けぬ体を身悶えするのでした。

「あゝ、とても良い気持！ 今までは違わ。あゝ、耐まらないわ」

切無げな私の訴えに、良人も満足そうに頷きました。そして、私を抱き上げると、長い接吻を交わすのでした。再び良人は私の体をソファに横たえたと、仰向いた私の体の中で露出している部分を擦り始めました。私は締めつけられている体を身悶えして、消え入らんばかりの細い声で呻きました。そして身悶えすればする程、縛つた縄が此の服を通して更に更に強く締めつけてくるのです。しびれる恍惚感の中に私は此の服に感謝しました。

此の日から、此の服は私達夫婦の生活に缺くことの出来ないものとなりました。もう縄目のあとを心配する必要は少しも無いので、心ゆくまで二人の楽しみに耽けることが出来るからです。そして、私は此の服を縛られ服と名づけて愛用しています。

(おわり)



アブニストの記

らぶ・すれいぶ

〔10〕

LOVE SLAVE

鬼 山 絢 策

方 金 三・画

一

あゝ！敗けた！

私と大槻三郎との戦いは、思えば随分久しいものでした。学生時代から牡丹の花のような春美を争つて、彼は積極的に、私は消極的に彼女の愛を求めて行きました。

あの鎌倉海岸で、始めて彼女の匂やかな弾力のある肉体に唇を触れてからは、私は一層狂的に彼女を慕うようになりましたが、彼女の母親から私の敗北を宣告されて、心ならずも彼女を諦めて、あき子と結婚し、浩と言う子供迄出来た仲だったのに、終戦後再び彼女とめぐり合つた時、私は理性も義理も人情も、彼女を想う情熱に溶かされてしまいました。

私がひきあげてくる迄の四年の間、妻は浩と共に慎ましく貞節を守つて来ました。そして春美を見ぬ迄の私の家庭は、堅実で幸福そのものでした。それが春美をみた時、私の心の中に棲む悪魔が眼をさましたのです。私は何の落度もない貞淑な妻のあき子を浩とともに離別して、春美と同棲しました。そして親から貰つた財産の大半を、彼女のために、瞬く間に蕩尽してしまいました。

それでもよいのです。春美との間がうまく行つてさえすれば。……然し春美と言う女を私は真に理解することができませんでした。

春美が私の性格に適した女だと、早呑みこみしたのがそもそもの破局の原因でした。



春美は私の感化に依つて、或る程度は確かに同調してくれたと思います。それで私は益々有頂天になり、春美の愛に溺れ彼女を女王と仰ぎ、私は恋の奴隷に甘んじて、何も彼も彼女を信用してこの家に愛の巣を作つたのでした。

その時は、私は大槻に勝つたと思ひました。

どう考えても勝ち目のない大槻に勝つて春美を得た喜び！と思つたのも今考えれば、やはりその時から私は大槻に負けて居たのでした。大槻と春美がしめし合せて、私が親から受けた遺産に眼をつけて、遠大なプランをたてゝいたのです。

私と言う甘い男は、その罠にウマ／＼とひつかゝつて行つたのです。春美と大槻は私から絞れるだけ金を絞り取つてから、私に最後の嘲罵と恥辱を代償に代えて、手を携えて逃げて行つてしまいました。それは徹と言う者が間に入つてその時期を早めたとは言え、おそかれ早かれ、あゝなることは、今思えば当然来たるべき現象にすぎなかつたのです。

あゝ恋の奴隷！ラブ・スレイブ。

貞淑な妻や。可愛いゝ子供を無慈悲に振り捨てた非道の報いが、今になつて現れたのでしようか。

それでも……

それでもまだ私は春美を諦めきることができないのです。私はまだあの僅かな間ではあつたけれど、あの痺れるような官能の陶醉に浸る夢を追つて居るのです。

春美の今迄の私にしめした態度、別れ際のあの言葉の中から一縷の望みを見出して、私はもう一度春美に会つて見たい

と思ひました。

一一

翌日、私は池崎をもう一度訪ねて見ようと思ひました。今日は月曜日なので会社に出て居るだろうと思ひ、電話して見ると、折よく池崎は居合わせました。

「君ン処へ行こうと思つた所だから直ぐ来い」と言う返事です。

「昨日春美が行つたろう？」

「ウン、十万円渡したよ」

「エツ？ そりや何の金だい」

「何の金つて君がそう言つてよこしたんじゃないのかい？」

「……兎に角電話じや何だから直ぐ行くよ。えゝとその金は現金で渡したのかい。」

「日曜で現金なんかある訳ないさ。小切手でやつたよ」

「何処の小切手だ」

「東京銀行神田支店だ」

「じゃそつちへ廻つてから行くよ」

今になつて思えば徹の予想は悉く的中して居ました。

私は直ぐ自動車を拾つて銀行に馳せつけて、その小切手のことを問いたゞして見ると、

「今朝銀行が開くと同時に、取りに見えました」

とのことでした。男か女かを聞くと男だと答えました。

「何かお間違ひでもあつたのですか」

行員は心配して聞きましたが、



「いゝえ、別に、何でもないので」

私は直ぐ銀行をとび出して、直ぐ近くの池崎の出版社へ行ききました。

以前は毎日通つた懐かしい事務所です。暫らく来ないうちに人が殖えて、五六人の編集員の中には見知らぬ顔も混つて居ました。

徹は私が座つて居た机を占めて、この事務所では社長の池崎に次ぐ位置に座つて居ました。池崎は正面のデスクへ足をのせて原稿を読んで居ましたが私の顔を見ると、

「ヨウ、一体どうしたんだい。一寸お茶のみに行こう」

と原稿をおつぼり出して、セカ／＼と歩いてきました。私は彼の机の傍へ半分も行かぬうちに廻れ右して一緒に事務所を出ました。振返つて見ると、徹が私達を見送つて居て、私に一寸会釈してニヤリと笑いました。気味の悪い微笑でした。「イヤ俺も君自身が出て来ないんでおかしいと思つたんだがね。春美さんに下条君はどうしたのかと聞いたら病気で寝てると言うんだ。この前君の会社に電話したらやつぱり病気で当分の間休むと言うことだつたし、満更嘘じやないと思つたんだがね。それにしても、金が要るんなら僕が下条君に合つてじかにお渡ししましょうと言うと、春美さん怒つてね。女房の妾を信用しないのかつてんだ。どうもそう言われちゃ、それでも強つてと言う訳に行かずね。然しわざ／＼金の出さない日曜に来たのがおかしいと思つて明日銀行から出してお渡ししようと言つたら、急ぐから今小切手を貰つてくと言うんだ」

敏感な池崎は春美の無心が私の意志でないことを早くも見抜き、或は、昨夜の出来事に迄進展したであろうことも内心では推察して居たかも知れません。

「一体春美はその金を何に使うと言つてたんだい？」

「君を入院させるために要るんだと言つたよ。君が肺病で、肋骨を切る手術をするんだと言つてたぜ」

「バカなこと！、僕に肺病の気なんかあるものか！」

「俺に怒つたつて仕様がないう」

此処は喫茶店「マヤ」池崎が常連の店です。私も会社に居た頃はよく此処のコーヒーを飲みに来たものです。

奥の部屋に落ちついて、コーヒーが運ばれると、池崎は「春美さんはどうしたんだい」

「昨夜別れた」

「フム……」

池崎は半ば予期して居たものか別に驚きもしませんでした。「俺が不注意だつた。君と春美さんの間がそんなに切迫したものだとは思つてなかつた。イヤ随分理屈をつけて断つたんだがね。春美さんは『あなたの所に預けてある君の家の権利書を抵当にすると、君から言いつかつて来た。』とまで言つたぜ。勿論真に君からの話なら抵当もへつたくれもない、十万や二十万問題でないからね。そんなことを言い出すのが却つておかしい、君がそんなこと迄言う筈がないと益々訝かしく思つたんだが、相手が春美さんだろう。まさか君との間がそんなに險悪になつてるとは思つてなかつたもんだからね」

「イヤ金の事はいゝんだ。僕はもつと余計言つたかと思つて」



「たんだが、存外妙かつた、そんなものはどうでもいゝよ」
「まあ金は大したことはないが、どうして別れたんだね」

「春美に男があつたんだ」

「そう言つて、私は池崎を睨むように正視しました。池崎は私の視線を受けると、流石に眼をそらしました。」

「フーム」

「君にもいつか話したと思うが、春美に対して僕は学生時代からのライヴァルなんだ大槻と言う男さ」

「……………」

「春美は僕と一緒にいる前に大槻と同棲して居たことがあるんだ。僕は、学生時代には彼に負けたと思つて、一時春美を諦めたんだが、終戦後、春美を再び知つてからあんな風になつてしまった。君にも随分反對されたけど。やつぱり僕と言う男は大馬鹿だったのさ」

「……………」

「僕が春美を得たために、失つたものがいくつあるだろう僕は決してあさ子が嫌いではなかった。子供だつて可愛いもんだつたよ。ただ春美に夢中になつて、君との仕事もルーズに



なつてしまった。金も随分使つたよ」

「……………」

「大槻は昨夜僕に、春美は以前から俺の女房だと言つた。暫くの間、僕に貸してやつて居たと言うんだ」

「……………」

池崎は急に黙りこくつて、下を向き、頭の毛をモシヤくと掻きむしつて居ました「兎に角理屈はどうでも、要は春美の気持一つなんだが、春美の心は既に僕から離れ去つて居たのだからどうにも仕様がな。然しこの間に

春美にはまだ関係した男が居るんだそれはあの徹なんだがね」

「下条君」

池崎は一人で苦しんで居たようでしたが、何か意を決したらしく、首をあげて私を見ました。

「俺は君に詫まらなければならぬ。裏心から謝罪しなければならぬ。実は僕も春美さんと関係があつたんだ」

池崎はこの告白をすべきかどうか今迄悩んで居たのでしよう。



「君は知つてただらうか」

私は静に微笑して言いました。

「満更知らない訳でもなかったよ。君が春美と、代々木のホテルへ昼間行つたことも、僕の留守にチヨイ／＼家へやつて来たことも実は知つてたよ」

「えッ、どうしてそれを……」

「まあいゝじやないか、過ぎたことはどうでもいゝさ。春美と言う女はあゝ言う女なんだよ、恐らく君から手を出したのではなく、春美の方から誘惑したんだと僕は思つて居る」

「何と思われても僕には弁解の余地がない。もつと早く君に告白して謝罪しようと思つてたんだ。君は僕を許してくれるか」

「許すも許さないもないよ。君の場合は一つの過失だらう。」

一時は無二の親友に裏切られたような気がして、僕は眼の先が暗くなつた。僕がこの世に望みを託して居るのは春美と君以外になかつたんだからね」

「済まない。君のもつとも大切なものを汚してしまつて。僕はどんなにでもしてその責任はとるよ」

「現在の僕には君を責める気持は毫もない。君に多少でもその気があるなら、今後の僕の力になってくれよ。まだいろいろ相談して頼みたいこともあるんだ」

「勿論だ。これで僕もサツパリした。いつかは君に謝罪しようと思つて悩んで居たんだ。君からいろ／＼話をされても自分のことを心配しながら聞いて居たんでは、ちつとも身が入らないからね」

彼の表情は再び活き／＼としてもとの彼らしい男性的な明るさに戻りました。

「然し君はどうして僕のことや大槻のことをそんなに委しく知つてゐるんだね」

「イヤ実は前から春美の素振りがおかしかつたんで、時々隣室から様子を窺つて居たのさ」

まさかベツトの下からとも言えなかつたので私はそう言いつくろいました。

「そうか。ちつとも知らなかつた。でも君はよく今迄辛抱出来たね」

「ハ、ハ、ハ、僕みたいな弱い男はないよ」

私は力なく自嘲して冷えたコーヒーを飲みほしました。

「それで徹がどうしたんだつて？」

私は昨日の顛末を隣室から窺つたように潤色して彼に説明しました。

「兎に角彼の心の底には相当兇暴な復讐心が動いて居る。僕が何と言つても聞き入れまい。一体彼は大概にどんな復讐を企てて居るんだらうか」

「サア、あの男は陰険で執念深い男だからね。何を考へて居るか分らんが……いゝじやないか。復讐するなら勝手に復讐させればいいだらう」

「ウン、だけど春美の身に間違いが起るようなことはないだらうか」

「君は末だ春美が諦めきれないんだね」

「僕は、僕の生命のある限り春美を忘れることは出来ない」



「……だが徹は春美には危害を加えないと言ったんだろう。それなら大丈夫じゃないか」

「ほんとうだろうか？」

「徹の性質から考えると、彼も又春美に多分の未練を持つて居る。だから大槻さえ倒せば、再び春美を手に入れることができると思つて居るに違いない、だから春美には何もしないよ」

「そうかも知れないね。兎に角彼の今後の行動に注意して居てくれないか」

「承知した」

「そこで今度は僕の頼みなんだが……」

私は池崎を再び信頼してもよいと思ひました。イヤ、するもしないも、現在の私には彼より相談する相手がないのです。「僕の春美に対する気持は君が一番よく理解してくれてると思つてゐる。もう一度春美を取り戻したい。で、春美の居所を探してくれないか。そして春美に会えたら、僕の気持を話して僕の所へ帰つてくれるように説得してくれないか」

「よし、分つた。春美を見つけ出すことはさして難事ではないが、春美を大槻から切離すことがむづかしいね。然し出来るだけのことはして見るよ」

「何分頼むよ」

「十萬円の件は、俺が春美さんに進呈したことにしよう」

「イヤそれは僕の責任だから、僕が払う。君から受取る月々の分からなくづしにしてくれ給え」

「イヤこれは俺に持たしてくれ。もう春美さんには手を出さ

んから安心してくれ給え」

「手を出したつていゝよ。僕は春美の自由は束縛しないつもりだ。そこまで束縛できない僕にもひけめがあるんだ。春美がどんな男とどんなことをしても、僕は決して嫉妬もしなければ、妨害もしない。たゞ春美が僕の傍に居てさえしてくれゝばいゝんだ。この気持を春美に会えたら伝えてくれ給えね」

「よく分つてる。あまり気をおとすなよ」

三

池崎と別れてから、私はその足で春美の兄の霧塚恭夫を訪ねました。

恭夫は四十近くなつてまだ一人で暮して居ました。私が行くと申し訳なさそうに借金の言い訳をしました。春美にねだられて、恭夫に五十万円貸してやつたことがあるからです。私としては返して貰う気ありませんが、恭夫の方は非常に氣にかけて居るようでした。

私は池崎に話をした時程、打ちとけてはしませんでしたが大槻と逃げた要領だけを話し、恭夫からも私の所へ春美が戻つて来るように説いてくれるように頼みました。春美の過去の行為は一切水に流すからとつけ加える事を忘れませんでした。徹と関係して居たことも簡単に知らせました。

恭夫は何から何迄、寝耳に水と言つた風で驚いて居ました。「僕の想像では大槻は又、きつと春美をどこかのキヤバレーか何かに勤めに出させると思ふんだけど、そんな心当りない



かしら？」

「春美は私ン所へも最近ちつともやつて来ないんです。あんな薄情な奴はありません。一時銀座のキヤバレーに出て居たこともあつたのですが、直ぐ止めたと言つて、それから何をして居るのか私にも喋らなかつたのです。でも私も出来るだけ探して見ましよう。もしやつて来たらお知らせします」

恭夫はまことに頼りない男でした。

私は疲れた足をひきづつて空虚な我が家へ帰つて来ました。寝室に入り、ベットのの上に寝転びました。軟かいスプリングは私の全身をフンワリと抱擁してくれましたがそれは私の心を慰めるにはあまりにうすいものでした。

あゝ、春美はもうこのベットの永久に帰らないのか……このベットの所で春美とくり返した情痴の数々。ひとはそれをアブノーマルなものと嘲うでしょう。然し私にとつてはこれ程本能に陶醉し、この世に生を享けて、始めての歓喜を味つた貴い体験でした。

その後の数日は、私はこのベットの敷となつて苦悩に明け暮れましたが、今それ



を追想すれば、苦悩の中にもマゾヒストの愉悅があり、声も立てられず、身動きもろくに出来ず、いろ／＼な束縛を受け然も自分の妻の犯されるのを、頭上に感知しながら、私は心のどこかで、この状態が長く続いてくれることを望んで居るものがあつたことを今判然と意識しました。

それもかえらぬ痴人のくり言です。

私は心の灯の消え入るような孤独と寂寥を感じました。

春美は今頃は大概の腕に抱かれて、泣く程嬉しい思いに浸つて居ることでしょう。それに嫉妬は感じませんが、只々春

美を失つたことのみが今の私の心を傷つけるのです。

春美は私にとつてほんとうに敬慕する愛の女神でした。

昨夜の別れぎわのとき！

春美は私がたとえ敵わぬ迄も大概に一撃することを期待して居た。その期待が裏切られた時、私がどうにもこうにも不甲斐ない弱虫であることを知つた時のあの春美の顔はいつも二人きりで居る時の春美と同じ表情になつて居ました。

——別れのキスを与えてやる。——



傲然と私の前に立ちはだかつて、命令するように言つたとき、私は半ば泣きながら春美の逞ましい腰を抱えました。

「フ、この腑抜け！ちきしょう！」

春美は尻を揺つて上から悪罵を浴せかけました。

「もうお前には漢もひっかけてやらないよ」

それは、私にとつては絶望の縁切りの言葉でした。

「フ、何と言われても、何をされても怒らない。それでもお前は男かと言いたいところだけど、お前さんは男の持ち物を持つてないんだから仕方がないわね。持つてたつて役に立たないんだから、ハ、ハ、ハ」

春美はベッドに腰かけるとグイと片脚をあげて、

「おい、此処へ来て妾の足をお舐め！」

と、私に向つて白い形のいゝ裸の脚を突き出しました。

「今晚一晚限りだから、お別れにいつものようにチツとばかり可愛がつてやつてもいいだろう？」

春美は、諒解を求めるように大槻に聞きました。

「フ、ハ、ハ」

大槻は煙草をすいながら笑つて居ます。

「おい早く此処へ来て舐めろ！。足がくたびれちゃうじやないか」

大槻さえ見て居なかつたら、私はとんで行つて春美の足を心ゆく迄味わつたでしょうが、私はこの場に立至つても、多少の羞恥心を持つて居ました。

「このバカ野郎！」

いら立つた春美はベッドから立上ると、思いきり私の頭を

蹴とばしました。

洋服ダンスから革バンドで作つた鞭を出してくると、いきなりそれで一撃をくれました。

「あゝッ！」

その鞭は、いつもの春美の振る力とは思えない程、激しい鞭でした。

「畜生ッ」

続けざまに振る鞭の痛さに私は片手でそれを避けるようにしました。

「何だいその恰好。サブ、縛つておしまいよ。此奴を」

「可哀想になあ」

「いゝから縛つておしまいよ」

「もういゝじやねえか」

「妾の言う通りにおしよ！」

「ヘイ、ヘイ」

サブはニヤ／＼笑いながら、春美のさし出す帯を受取ると「下条君、わるく思うなよ、こうされるのが君は好きなんだろうからな」

薄笑いを浮かべながら、私をうつ伏せにして両手を後手に縛りあげてしまいました。

「ようし、ちき生、ウンとひつぱたいてやる。そのど性骨を叩き直してやる！」

ビシ／＼と、ビシ／＼と春美は酷しい鞭の乱打を浴せました。私は始めて、骨身にこたえる痛さの鞭を彼女から受けました。息も出来ぬ程の苦痛！



「ア、ウム、ムツ」

その苦痛と正比例して何とも言えぬ快感が、私の身体中を馳せめぐりました。

身体に受ける鞭の痛さが、ピーンピーンと頭に響いて、次第に私の感覚を麻痺させて行きました。

幾十回、鞭の乱打を浴びたでしょう。

鞭を振る春美さえ、汗をタオルのパジャマの袖で拭いた位です。から打たれる私の方は、氣も遠くなるような思いで、苦痛と屈辱の底からもうあがつてくる快感に、陶然とした境地に入つて居ました。

私は上半身を裸体にされ、背中に何十貫もの焼けた鉛を背負わされた如く感じて、腕一本、片脚一つ動かすことさえ出来ない状態でした。

「此奴、いゝ氣持になつてゐるのよ。妾の鞭に酔つぱらつてやがるんだ。こんなことじや此奴を益々、氣持よくさせるばかりだよ。そうだ、サブに面白いものを見せてやるわ」

私は苦痛のために半身を起して居ることさえ出来なくなつて彼女の足もとにひれ伏して居ましたが、私の顔の前に、パジャマの裾を片手に捲いて男のように脚を外股にひろげて突立つて居た春美は

「おい、仰向けにおなり！」

と、私に命令しました。私には寝返りを打つ氣力さえなくなつて居ました。

春美は、足で私の胴を蹴つて仰向けにしました。大槻に手伝わして、私のズボンを脱がせ、パンツさえ剥ぎとられてしま

まいりました。

「ホ、こんななんたもの、情けないじゃないの」

春美は大槻にあからさまに示して嘲笑いました。

私は羞恥と屈辱に顔をそむけるのがやつとでした。

それから――

春美は細い棒を持つて来て、芋蟲でも突つつくように……

四

さんざん私の身体をおもちやにした二人は、その夜おそく春美の衣類やら身の廻りのものをまとめて、出て行きました「アバよ」

大槻は私を尻眼に、一声そう言つただけで扉を排して先に出了ました。春美は

「こんなこととして御免なさいね。でも、これもあなたへの最後のサービスだと思つてしたことだから悪く思わないでね」春美は部屋を一寸見廻した後、扉の傍へ行つて一寸此方を振返りました。

その時の春美の眼の中に漂つた感情の動きは、今も忘れることのできない複雑なものを宿して居ました。

嘲侮、憐憫、哀愁、反抗

と言つたものが混交して、更にその中には、私の自惚かも知れませんが「未練」も僅かに交えて居たと思います。

今、こうして昨夜の出来ごとを思い出すと、その苦悩を裏づけるように、背中がズキン／＼と痛んできます。

便所へ行つても、或る種の疼痛に昨夜のリンチを想い起さ



せるのです。

あゝ、春美は今頃どうして居るでしょう。

あの匂やかな肉体をどんな尊に控えて居ることでしょう。

疼く背中痛みは、春美が「愛の答」だと言いました。私の

肉体には、まだ彼女ののこして行つた「愛の記念」がズキ

／＼と私の肉体の内部に囁いて居るのです。

私はこれからどうして暮したらよいのか。

考えれば考える程絶望感、自己嫌悪に襲われて悩みを増すばかりです。

翌朝一度眼を覚ましましたが、起きるのも大儀なまゝに、又一眠りしてしまつた私は、玄関を叩く音に眼を覚まされました。

身体中が氣だるいのですが、仕方なく起きて戸を開けると池崎が入つて来ました。

「まだ寝てたのか。今朝の新聞を見たか」

「まだ見ないけど」

「これ！」

彼は手にしていた新聞を突きつけました。そこには、

「与太者のでいり」と言う小さい見出しで、五六行ばかりの記事が片隅に小さく載つて居ました。

昨夜十時頃、銀座七丁目のキヤバレー「モンテカルロ」の前で与太者風の三人連れの男が、キヤバレーから出て来た男に二言三言言い合つたと見る間に、三人連れのうち二人の男が七首よりの刃物で、一人の男を刺した挙句、滅茶苦茶に殴

つて逃走した。刺された男は、これも銀座の与太者で通称「サブ」こと大槻三郎（三二）で、与太者同志の「でいり」らしく、大槻は新橋の神尾病院に入院したが全治一ヶ月の重傷「とう／＼やつたね」

「ウム」

池崎は私を見てニヤリと笑いました。（続く）

（寄稿家への連絡）

川合伊都子様「紅花草紙」掲載しますから是非お寄せ下さい。由利瑞江様、原稿は匿名でいゝのです。御安心の上ドシ／＼お送り下さい。中野の若杉早苗様あの原稿でOKです。続篇（日記の）を必ず送つて下さい期待しています。羽村京子様、他誌は鼻にもかけないで大好きな奇クだけを御支援下さるといふ御言葉に甘えて、懸案の創作物をお寄せ頂けるようお願いいたします。那須不二夫氏へ、予告頂きました原稿お送り下さるようお願いいたします。

（編集部）

「美しき縛しめ」

縛られた女ばかりの十六態を揃えた豪華絢爛たるアルバムを目下分譲中です。

本誌の信用をかけた良心的作品ですから、何卒売切にならない中に一冊お求め下さい。

「時代物責絵巻」

極めて安価な値段で極彩色の責絵を八枚入れた画帖です。優雅な和装釘によつて皆様のコレクションとして更に異彩を放つこととしてう。目下限定版分譲中ですのでお申込下さい。

愛 情 の 絆

北 野 由 紀



私が自分の拙い告白記を書いて見ようかしらと思いましたが、私の出した手紙が七月号の読者通信に載って、その末尾に御送稿をお待ちしますという返事を見てからです

その時は源氏名を用いましたが、商売をしている都合で支障がありますので別の名でお願いいたします。私の部屋には御誌を置いてありますので、お客様が読まれて「これはお前が書いたんだろ」なんて云われたら大変でございますので若し此れを発表せられるようなことがありましたらその点よろしく御願い致します。

私は、今年の二月、こちらへ参りましたがそれまでは浜大津の方に居りました。こちらの方が景気が良いと、お友達が勧めてくれま

したし、それに、あちらは知った人も少しはあつて顔がさしましたので、ついフラ／＼と出て来てしまいました。今から考えますと

浜大津にいた時の方が何かにつけて家庭的でお父さん、お母さんといつても親味に世話を焼いてくれましたし、朋輩達ものんびりしていてこちらのようにな一人のお客を喧嘩ごしで取り合いつこをするというような事もありませんでした。まるで温泉へでも遊山に来てい

るようで、楽しく商売をしていました。そんなわけか存じませんが、私はあちらでは三度も妊娠して、おろしたことがあります。

日常の生活を見ておりますと、とう／＼自分も流れ／＼て娼婦の群に迄落ちたかという悲哀感が、身にひし／＼と迫ってきて長らくこんな所にてはいけないという氣持を起す時があります。

何故、私がこのような泥沼の世界に陥んだかという事を最初に申述べたいと思いましたがそれは浅はかな女心の復讐心と申しますか、はかない女の抵抗だつたのでございます。

私は松江の郊外の農村の二女として生れ松江の工事場の鹿島建設の飯場で炊事婦として勤めておりましたが、その工事場が浜大津へ移った時、私も一緒について新町というところへ、二階を借りて通つておりました。

その工事場へ野菜を売りにきていた篠崎と

告白する偽

いう青年と知り合い、私は、その時十八でしたが、親の反対を押しきつて結婚したのでございます。二人さえ愛し合つておれば良いという私の考えは、何んと浅はかなものだつたらうかと、結婚して半月も経たない中つくと、思い知らされました。農村では都会と違つて嫁入の時の荷物の多少や披露宴での御馳走の多寡が想像もつかない程、やかましく云われるということは田舎者の私としましては知らないこともなかつたのですが、初心な女心の一閃さが、そんな事も忘れ果て、好きな人と家庭を持てる喜びにのぼせ切つていたのでございます。

それに悪い事には、彼の叔父に当る人の口きゝで両親の間では既に、内々、心当りの娘さんもあつたらしかつたのです。トランク一つに風呂敷包というみすばらしい姿で彼の家へ来た私には、式の翌日から針の筵に坐らされるような辛い日が続きしました。それでも最初の中は夫も蔭になり日向になりして私をかばつてはくれましたが母親という人は二言目には、

私が裸のまゝで来たということをねに持つてどこの誰は何荷の荷物を持つて来たとか、三日間も宴会をしたか、聞えよがしに云うのです。

そんな周囲の空気に、私のたつた一人頼りにする夫も次第に私に冷たくなつてゆくのはどうすることも出来ませんでした。あれ程愛しあつていた男心の変わりよう。酒も煙草ものまずその真面目さが、一目で私の心を引きつけた彼でしたが、新婚三ヶ月も経たない中に「お前が荷物を持たずに裸で来たので俺も辛い立場に立つている。こんなだつたら慌てて結婚なんかしなくてもよかつたんだ」と、暗に後悔しているような口振りでした。

私の心の中は煮えくりかえるようでした。彼の心がそのように変つていては私のこの家にいる理由はなくなりました。然し、一旦結婚した身が再び松江の田舎へ帰ることも出来ません。いや、よし帰れたとしても喰うのがやつとの四段百姓の実家ですから、出戻り娘を養つてくれる余猶などありません。私は両親はじめ親戚や近所の人達の冷たい眼に囲れ乍らも、夫だけはやはり初めて逢つたときのように、愛をとり戻してくれないだろうか、と、それを一つの望みに生きて居りました。

そうです、本当に生きていたといつてよいのです。私は何度死んでしまおうと思つたか知れませんが。世間知らずの十八の娘が、他人の家へ来て最初うけた試験がこのようなものであろうとは、夢にも考えませんでした。一銭の金も自由にすることも出来ず、朝早くから夜暗くなる迄田圃でこき使われ、それに家へ帰れば洗濯や炊事が待つています。けれども貧しい百姓の家に生れた私としてはそんなことも只それだけであつたら、恋しい人の家の為と思えば何の苦にならなかつたでしょう。

元々、自分達でできた嫁でないという気持ちから私を何んとかして追い出そうとしている両親達ですから、事々に私に当り散らし、いろんな用に事づけては夜になつても夫を私の傍へ寄せつけないような事も度々ありました。そんな仕打ちをしたら逃げ出してゆくと思つた私が案外、素直にしているのです。とうとう私が嫁に来る前から夫にきめてあつたらしい遠縁の娘を呼びつけては、私の前で、いやがらせをするのです。そういつた空気の中で私は、優柔不断の夫を齒がゆく思い、私を連れて外へ出てくれと泣いて頼みました。その時の夫の返事が私を家を去らせる決心をさせたのです。頼みの綱と思つた夫は

「自分は両親や家を捨てることは出来ない、お前がこの家が気に入らないのなら別れるより仕方がない」

と云うのです。あらゆる希望を失った私はその翌日の夜、着のみ着のまゝで人目を忍んで家を出ました。誰も送ってくれる人もありません。本当に泥棒猫のように、こつそりと逃げ出したのです。私は自分を裏切った夫に復讐してやるつもりでした。一度は死んだつもりで自分です。この身体を卑しい職業に落して、彼の前にその哀れな姿を見せてやるつもりでした。だから場所も彼の家から程近い浜大津市を選んだのです。彼の村からも時折酒を飲んでこの街へ冷やかしに来る青年がありました。そして、私を見て驚いて、

「篠崎の前の嫁ではないか」

と、言う人もありました。そんな時は、私はわざ／＼不逞くされてその男の袖を引つづいて客に上げた事もありました。又、私が家を出て半年程してから、篠崎が二三人の友達とお店の前を通った事がありました。彼はそんな私を人から聞いて知っていたらしく「あれから嫁を貰ったが、やつぱりうまくゆかない。どうか今迄通りつきあつてくれないか」

と、私を物陰へ呼んで囁きました。

「馬鹿を云いなさんな、私はもう何人もの男を知った身体なんだよ、お前さんみたいな泥臭い百姓なんか、相手に出来るかい」

と啖呵をきつて、そのまゝぶいと奥へ入ってしまった。そして、御不浄の陰で一人目をはらして泣きました。憎い男ですが又、初恋の男でもあつたのです。私はもう二度と彼に逢うまいと心にきめて、今年の二月、仲のよかつたお友達と二人、大阪へ出て来たのです。

もうこの世の中に何の望みも持てなくなつた私は、酒でも煙草でもじやん／＼のんで、痺れるような耽溺の世界に生活してみたいと思いましたが、そんな私の自暴自棄な気持ちにブレーキをかけて下さつたのは年老いた父でした。私がこのような世界に身を沈めてからも父は毎月のように私を尋ねて来てくれました。

「他の人は俺を馬鹿な奴だと云うだろうな、娘がこんな商売をしているのを承知で訪ねてくる父親だから、村の人達にはお前はやはり嫁にいつて幸福に生活しているように云つてあるのだよ」

陽にやけた皺だらけの手で私の手を握つて

くれるのです。私は父が出てくると、みす／＼借金が増すのを承知で三日も四日も宿屋へ泊めて遊ばせて帰しました。父親は娘の嫁入り先へ行つてくると云つて、家を出てくるのだそうです。私はヤケクソな生活を送ることも出来ず、只このやるせない気持ちを自分の身体を虐げることによつて僅かに憂さをはらしていました。

私は、気に入つたお客であつたら、どんな悪どい遊びでも嫌がらずにさせました。この世の中から見放された身体がこれ以上、どのように苛められようと、泣く人も悲しむ人もあるわけはないのです。いつそ死んでもいい身体なのです。

こんな時、私の気持ちにびつたりする馴染のお客が出来ました。森本という紙屋の店員で二十八だという瘠型の青年でした。彼は最初から無口で余り喋りませんでした。私の腕を捻じ上げたり、足を殊更に開かせたり、嫌な事ばかりするのでしたが、自虐的な気持ちになつていた私は、そんな仕草にも、嫌がらず黙つて従つていました。そんな私でしたから彼

偽らざる告白

告白と体験を募る

は、三日に上げず通つてきて、とうとう／＼或る晩、私を縛つてしまいました。私はそんな自分の縛られる姿にも何ら嫌な感じは少しも抱きませんでした。どんなひどいことをされても嫌と云わない女になつていました。彼はそんな私を面白がつて、来れば全裸にして縛り上げ私にあらゆる羞しめを与えるのでした。そういう事にも私も次第に同化して、彼が来ない日は何か物足りなく、淋しい思いをするようになりました。私は身を落してから、それこそ何百人という男の人に接して来ましたがそんな沢山の男でも彼が一番、懐しい男になつてしまつたのは何としたことでしょう。私はいつしか、縛られて喜ぶ女になつてしまつたのです。私は何時か、彼

に
「あなたはなんで、私をそのように縛るんですの？」
と尋ねる事があります。すると、彼は「お前を縛つて自由を奪つて、お前の身体の間々まで自分のものにしたんだ」と申しました。本当に私も彼に縛り上げられて、身体の間々まで、余すところな

く彼の目に見られるという事は、羞しさの中に云うに云われないぞく／＼とする歡喜が味わえるのでした。そしてこの身体を彼に与えてやろうとこう思つたのです。

そんな時、どこでどう尋ねて来たのか、前夫の篠崎がお客として私の家へ上つて来ました。彼は私を慕つて家を出てきたというのです。長男である彼がそんな気持になるのは、よく／＼の事でしょう。でも私は只普通のお客として遇していましたが、それから毎日のように昼間訪ねてきて、しつこくこの家を出ようと云うのです。今迄の私でしたら或はその熱心な気持にほだされて一緒に行つたかも知れませんが。然し今の私は森本とのあの痺れるような遊びが心の奥底にまでしみついていたので、篠崎の言葉には耳を藉しませんでした。四月の雨の降る晩でした。森本が一冊の雑誌を持つてきました。私はこの雑誌を見て始めて自分の気持がはつきりした様に思えました。そして、死んだつてどうしたつていゝわ、と思つていた自分の身体がむしろいゝとおしくなつてきたのです。その晩は一晚中森本は私を眠らせられませんでした。朝十時頃まで、私は縛られ通しに縛られ続けました、それは、世の中にこんな楽しい世界があ

るかと思われる一時でした。

然しその夜、運悪く、篠崎が通つてきたのです、二の腕には昨夜の生々しい縄跡が傷のようになつて白い肌に残っています。それを見た彼は狂人のようになつて私を殴り蹴りして責め立てました。それから彼は私の顔さえ見れば乱暴を働く男になつていました。こうして私は二人の男から競争で責められることになつたのです。そしていつしか、その暴虐のもとに悶え喜ぶ女となつてしまつたのです。今日も私はお化粧をして店の前に立っています、森本が篠崎のどちらかが私の身体を求めてやつてくることでしょう。

告白と体験を募る

読者の皆様の偽らざる告白と体験を募ります。文章の巧拙とか用紙や枚数等は問いません。便箋でも反古紙でも結構です。匿名で一向に差支えありませんが、筆名の個人的秘密は厳重に守ります。皆様の雑誌としての奇クをより真面目で真剣な雑誌としてゆくために今迄以上に読者諸氏との血の通つた連絡を密にし、てゆきたいと思ひます。掲載の分には謝礼を差し上げます。

(読者係)



「アースへの讃歌」

へ答えて

羽村京子

住田弘志様

八月号におのせになつた文章を拝見いたしました。私が時々書いておりますつまらないものをご覧下さつて大変ほめていただいているので本当に恥かしい位です。

でも女つておかしな者ですわね。ほめていただくといい気になつてお返事差し上げずにはいられなくなつてしまふんです。やはり見栄坊なんでしょうかしら、でも終りの方は少しこわいんです。「不倫な妻にしたい」とか、「幸福で平和な夫婦生活を破壊」するとか大分不穩当ですわ。私だつて時たま誘惑されて見たい気持になることはありますが実行に移すことはとてもため

すの。

私、始めから夫のことは申し上げてありますし、住所も編集部の方にさえかくして参りましたのも、誌上だけのおつきあいでも満足して戴きたかつたからです。いいえ本当を云うと私をどこのだれだか分らない人間にしておいて「かくれんぼ」の鬼さんを困まらせることにたまらないスリルがあつたからかも知れませんが、でもどうかお許し下さいませ。最もお許しを乞わなければならぬのは私の次の様な想像です。

私は九月号に「京子の意見と生活から」という雑文を載せました。その中で私は肛門から空気を入れてお腹をふくらませる仕

方を詳しく書いているのです。貴男はそれをお読みになつて相手が得られないまゝにきつと御自分の体のためにためしてごらんになる——いゝえ、駄目、一人でこつそりと、秘密の遊びをお始めになるわ。ひよつとしたら鏡に映して、そこで自虐者としての貴男が始まるわけですけど、男の方は直腸のすぐ前にセツゴ腺というのがあつて貴男は適当に苦しいけれども時々人のいない時にゴムマリを愛用なさるのじやないかしら。でもそのあげくミイラ取りがミイラになつて受身の鶏姦者 (Passivepederast) なんかになつちやいやです。京子それだけはいやですからそんなにおなりにならないで下さ

ね。きつと貴男には京子なんかよりずっとくすばらしい奥様がお授かりになると思います。失礼ですけれど貴男はまだお若いし教養ある独身の紳士じやないかという気が私には致します。

貴男が臀部とアーヌスとを夫々、独立した別のものと考えていらつしやる事、私もそうだと考えています。臀部への讃美は女性の胸、腹、背中、そして脚への讃美につながるもの言い返えると、第二次性徴としてのふつくらと脂肪の、のつた女らしい体つきが男性を魅了にすると言われることの一部にすぎないのではないのでしょうか、アーヌスはそれと全くちがいます。アーヌスはもつと現実的な生々しい感覚に結びついているのです。

アーヌスは第二次性徴ではなく第一次性徴たる性器と直接の関連にある性感の座なのです。下等動物においては性行為の場でさえあつたわけです。

住田様は Cloaca という言葉を御存知でしょうか。岡倉由三郎編「研究社新英和辞典」を見ると訳語として、1、下水溝2、便所3、排泄腔（鳥類爬虫類魚類などの）4、醜悪、淫行の巢窟、魔窟というのが残

つています。勿論こゝは3が問題なのですがこのカツコの中は少しばかり訂正する必要があります。魚類で Cloaca をもっているのは板鰐類とよばれる一部（さめ、えいの類）だけで、他の私達が普通お目にかゝる魚はこれをもっていないません。

それから両棲類、爬虫類、鳥類には、全部これがあつて、哺乳のうちでは、単孔類（monotremes）という部類（かものはしよりもぐらの類だけ残っています。）

それでは Cloaca とはどういうものかと申しますと、これらの動物では、泌尿、生殖系統と消化系統とが末端で一つになつていて、これが即ち排泄腔とよばれているわけです。

だから直腸が少し広くなつていて、大便も小便もその他生殖に必要なものも一旦そこに溜つてから肛門を通つて排泄する仕組みになつていのです。

その様な動物では肛門性交が正常の性行為であることは言うまでもありません。

鶏姦という言葉もはつきりとそのことを示しています。単孔類、以外の獣類では会陰が形成されて、泌尿、生殖系と消化系とは別の開口をもっています。だから私達、

高等動物においては鶏姦に正常な性行為として現れるのでしょうか。こういう風に見て参りますと肛門は私達の過去の進化の一時代においては性的にきわめて重要な役割を果たしたことが分ると思います。だからそれが現在では昔の様な意味を持たなくなつたとしても、何にかの拍子で昔の感覚によみがえることがあるのではないのでしょうか、いわば隔世遺伝Ⅱ退化の現象として、何万年、何百万年、いいえ何億年か昔の先祖の感覚がひよつと私の体によみがえるのでしょうか、私はこの様な先祖返りをなつかしく思います。

動物学なんぞは女学校で少し習つたくらいでもうすっかり忘れている私が苦心して図書館で調べたりして、間違つている所も多いと思いますが、よくわからないなりに随分面白い題目でした。

フロイド流の心理学で肛門慾という概念があつて、それを応用して肛門自慰などということもいう人がありますし、それを利用すれば古い過去に溯らないでも人間の幼年時代の経験から説明出来るかも知れません。

どちらが正しいか分かりませんが、私の好

みでは cloaca から説明したい様な気がします。

勿論学問上の理由なんてありませんが辞書を引いて偶然 cloaca という単語を見つけて私は loacism, cloacism; cloacal dism, cloacal masochism 等という新語をこしらえて喜んでいますが私の様な女のこしらえた言葉は誰もつかってくれないかもしれないですね。cloaca のお話はこれ位に致します。また、だん／＼と誌上で御交際いただくうちにいろ／＼お話することが出来たと思いますけれど、今日はこれ位で失礼させて戴きたいと存じます。

貴男が cloacist になつてゴムマリを愛用なさるだろうなんて申し上げて大へん失礼だつたと思うんですけど、どうか冗談と思し召してお許し下さいませう。でも京子はそれでいいんですよ。むしろそれを願っているかも知れません、本当よ、男の人のお腹の皮は薄いからゴムマリに近いわけですから――

住田弘志様

羽村京子

☆××——××☆

住田弘志様

この間、差し上げましたお便りをお読み

下さいまして？住所をお知らせしてないのでお返事いただけませんけど、私また、お手紙を書く気になりましたの。

でもアブノーマル・ラヴレターなんていうのじゃありません。

私の書いたものを読んで下さる方たちの代表として住田様にお手紙を差し上げるだけですが。だからこの前の分も今度の分も誌上にのせて下さる様に編集部の方にお願ひしましたの、本当に勝手なことばかり申しますけれど。

住田様のお書きになつた「常識的」でない姿勢で排泄すると、この間の土曜日にとうとうやらされてしまいました。私常識的な姿勢の方が恥かしい様な気がしてたんですけど本当はそうじゃありませんのね。鏡の面を下にして天井から吊して、私も自分で見せられましたの、脚を頭の方に折りたたむと背中が曲つてお尻がうんと高くなります。小便が飛び散らない様に尿道にはカテーテルを入れておきました。

姿勢が苦しいのと心理的な抑制があるのとでなか／＼でしたが、夫は私に女にとつて一番恥しい恰好で排便させることに成功しました。それこそ貴男がお書きになつて

いるチューブからしほり出される練り歯みがき見たいでした。だつて私の体は腰の所で折り曲りしほられているチューブみたいなんですもの。

住所も顔も知らないのをいいことにして随分恥しいことを書きました。実は今日書こうと思つてたのは浣腸のことです。お医者さんから見たら何でもない当り前のことかも知れませんが私、少し調べてご報告したいと思います。でもとつくにご存知かも知れませんが浣腸といつてもいろ／＼あつて目的も決して同じじゃないことが分りました。そのうち私が特に興味をもつたのは高圧浣腸というのです。これは二〇〇〇—三〇〇〇CC 即ち—三リットルも生理的食塩水を肛門から入れるのです。普通いくらか多くいれても、五〇〇—六〇〇CC くらいですからこれが特殊な目的のものだという事がお分りになると思います。

これは腸捻転か腸閉塞とかいう病氣にかかつて腸がもつれた時、大抵なら手術をしなければならぬのですがこの療法で腸のよじれがなおることがあるそうです。空気を送入することも書いてありますが、要するに大腸をふくらましてお腹の中をひつ

くり返えすという乱暴な方法の様です。ついでに腸洗滌法というのもありました。何回も液をとりかえてそれが透明になつて出てくるまでくりかえし腸を洗うのですがこの方は一回に用いる量が二〇〇—三〇〇C位です。

私、一度こんな病気になつてお尻から水でも空気でもいい、うんと入れてお腹をふくらませたあげく手術台の上でお腹を立ち割られてみたいと思います。もつともお腹一ぱいみにくい傷が残るのは嫌なんですけれど想像してみると素晴らしい気がします。そんな時実際にはあり得ないことでしょうが、大腸が大きな風船の様にブク／＼ふくらんで飛び出して来ます。空気は圧力に反比例して体積を増すので、体外に出たときにそれは／＼びつくりする程大きくなるのです。

でも夢の世界での私の本当の願いは手術台の上にのせられることなんかではありません。本当は私、解剖されたいのです。それも今の様に美しいとは申しませんが若々しい肉体のままで全身解剖されて大きなビンの中に入れられたアルコール漬けの標本に

なつてしまうことです。そしてそれを大きなデパートの最も目のつきやすい所に飾つてもらつて多くの人達に見てもらふことです。これこそ私のマゾヒズム・エクシビシヨニズム、ナルシズムその他あらゆる背徳的欲望の理想であり極致であると思います。螢光灯に照された中の標本をよく見えるために、何ならガラスのビンに鼻を押つけてのぞき込んでも叱られないのです。高さ二メートルもある円筒型のガラスビンの中に大きなガラス板に解剖された私の体は縛りつけられています。

頭の上の方に貼つた紙にはいかめしいラテン語で

ANATOMIA
TOTIVS CORPORIS
HOMINIS(♀)
日本語に 人間(雌)の全身の解剖
なおすと 解剖

と書れています。私はばつちりと目を見開き口を軽く開けて、真上を向いているので顎の裏側がすつかり見え解剖された蛙の様に手足を開いて上と下にのばしてはりつけになつていゝのです。その顎の所から肛門まで従に腹面を切りさかれて、両側にべつとり開かれ内臓がすつかり現れているのです。薬液で洗われて白ぼけなために解

剖の時、手早く色素の注射がしてあるので臓器は解剖された時と同じ自然の色を保っています。どす黒くて大きい、恐らく一番グロテスクな内臓である肝臓の下は掻き出された長い腸がひろげられ子宮とか卵巣などの深部の内臓までよく見える様になつています。股の下には「羽村京子」と記し略歴、年令、住所、などが書きこんであります。それをよく見ると「妊娠五ヶ月」と書いてあるでしょう。普通なら握りこぶし程の子宮がかなり大きくなつていたので分ります。京子は明るい照明の下に腹わたをさらけ出して見せた無恥な姿でビンの中でアルコール漬けになつていゝのです。

自分のそんな姿を衆人の前にさらしものにしていゝのです。

住田様もう分つたたくさんだと貴男は叫び出しておしまいになるでしょう。京子はこんな女です。もうこれでやめます。

今度貴男のお書きになつたものを誌上で拝見したいと思つています。八月号に書いていらつしやつた三つの原稿とかも是非誌上にご投稿下さいませ、たのしみに致しております。 住田弘志様 羽村京子

再びスラックスについて

— 吾妻新氏に答える —

沼 正 三



は冒頭の願いの一端が叶ったわけである。この点に於て氏に感謝するに吝でない。

然しながら、その内容に於て、私としては更に一文を草する必要を認める。それは、氏の文章が、私の文の誤読又は曲解に基いていられると思われるからである。氏の文章を読んだだけでは、少くとも私には、私の文の内容に「根本的な誤りがある」とは思えないのである。

二

私は「あるマゾヒストの手帖から」の稿を起すに当つて、あらかじめ「博雅の読者にして、間違いに気付かれた方は、マゾヒストの共通地盤を作るため、教示の筆を惜しまないで欲しい」という趣旨の言葉を記しておいた。図らずも前号において吾妻新氏から、「女のズボンについて」と題する一文を与えられたことは、正に私として

氏は先ず「スラックス」という言葉を私が用いたのがお気に召さぬらしい。氏は自ら衣服研究二十五年の経験を誇つておられるのであるから、特に服飾を研究したことのない私としては何とか思召に添いたいと思つて考え直したが、どうも納得できない。第一に、氏も認めておられるように「スラックス」というのは日本の洋裁界共通の用語である。（例えば今手許にある「ドレスメーカーキング」一九五三年六月号七二頁の戸塚文子の「旅行に着るもの、持つて行くも

の」という一文を読んでも、「ストラックスを着て行け」とはあつてもズボンとは書いていない。氏はそれを承知の上で洋裁家は皆無知なのだと言ふされる。然し、言葉というものはそんな風に論ずべきものでない。学術語として定義される場合を除き、語は自ら成るものであつて、作られるものでない。既に洋裁界の共通語であるということは、日本中の女性が「婦人服の一部としてのズボン」を觀念する時にはこれを「ストラックス」と呼んでいることを意味する。丁度「アクセサリ」としてのズボン」が「ボウ」と呼ばれるようなものである。ある語の使用が既成事実になつてしまえば、それを受入れるのが当然である。

私が、「アブニスト」という語を作つたことを以つて鬼山氏を咎めたのも、それが既成事実となることを恐れたからである。然るに鬼山氏は、正鶴がセイコウと呼ばれるというような既成事実を引用して私に答えられた。(KK通信九号及び十号)これは私には、飽きたりなかつたことである。

所が吾妻氏は一方で既成事実を認め乍ら、私とその既成事実の上に立つて(私は曾て「共通の用語を使おう」と読者に提案した。それは「既成事実の上に立て」ということに他ならぬ)女のズボンを「ストラックス」と呼んだことを根本的に誤りだとされる。いかなるものであるか。

三

単に既成事実というだけで、本当は誤りであるならば、私はその点で非を認めることを辞さない。「病入膏肓」をやマイコウモウニイルと読む人がいくらか多くなつても、コウコウという正しい音がなくなるわけではないからである。そこで、次にこの点を考えてみた

い。氏は流行の時にだけストラックスと呼び、風俗と化した以上ズボンと呼ぶべきだと主張し「言葉の争いでなく、歴史的意味が違う」から区別すべきであると教示されるのである。然し一定の流行としてのストラックスは決して当時の紳士ズボンではなかつた。

流行が風俗に固定しかけた頃である一九四二年四月二十日のライフ誌(本国版)によると、その頃婦人服装に関するWPB規定がストラックスに関して *no cuts* (折り返しなし) *no belt* (ベルトなし) の原則を公定し、「ロウ・ヒールの靴、テイラードのシャツ又はスウェーター、帽子なし」などのストラックス用アクセサリの規則をも定めた(研究二十五年の氏は勿論御存じのことであろう)。男のMボタンの所が割れていないこと等は、いうまでもない。

かように紳士ズボンと異なる諸点を有した婦人ズボンがストラックスの名で流行したのである。さてこれが風俗化した時に、そのストラックスの名がその儘保存されて何がいけないのか、却つてその方が歴史的意味が味えるではないか。私が家内に私の紳士ズボンを穿かせて、それをストラックスと呼ぶならば、それは確かに誤りであろう。然し私の家内は、ノー・カフス、ノー・ベルトのズボンを穿いている。それをストラックスを穿いていると書いてどこが誤りなのか。私がフツックスの書の絵の中で、夫と妻とがストラックスを争つていと書いたとすれば、それは歴史的におかしいであろう。然し私はそうは書いていない。そこは区別しているつもりである。そして右の意味でのストラックスをもズボンという必要は、私には認められないのである。かりに女の「ズボン」をストラックスというのが日本だけだとしても、そして流行時の規格外のズボンを女が穿くようになって、私は尚ストラックスの語を用いて差つかえないと考える。西洋文

化が日本に継受された時以来、そんなことは幾らでもあつた。ジレ-iletはフランス語ではチヨツキである。男がジレーを着ている。然し日本でジレーといえば女の服装にきまつてゐる。外来語とはそんなものである。チャツク発明前からあつたボストン・バッグの名は、チャツクが着いて機能を異にしてもその儘残つてゐる。言葉とはそんなものである。それをとやかくいうのは野暮であるか術学である。ストラックスという言葉に対して、吾妻氏が寛容さを示されんことを私は希望する。(但し以下の記述では、氏の文章を扱う關係上「ズボン」に統一する)

四

次に氏はズボンが合理的で、スカートが不合理のという議論をしておられる。私は別にその反対のことを主張したおぼえはないからこれは、私には関係のないことではあるが、近時訳本の出たエリツク・ギルの「衣裳論」のように、ズボン(尤も特にテイラードのズボンについてであるが)に対する露骨な反感を表示する人もあつて、仲々面白い議論をしているから、ズボンのみを合理的と云い切ることは独断ではあるまいか。私は股間の一物の有無ということから云えば、女のズボン、男のスカートこそ合理的であると考えるし、花森安治の「スカートへの郷愁」という戯文も、そんな結論だつたと記憶するが、研究二十五年の吾妻氏に対して、この点で新しい論争を吹きかける気持は別段持たぬから、これはこの位にしておく。

五

次に一三三頁上段で、女のズボン採用が「個々人の自覚に依るのではなく」、「流行に依るものでもない」ことを述べておられる。これだけ読むと、私が「個々人の自覚によつて女がズボンを採用し

た」と云つたように取れそうだが、私はそんなことは云つていない。「流行」の方でも、私は「戦後の日本に於けるストラックス流行が米国の流行の輸入であつた」と述べている丈であつて、このことは日本でそれがストラックスと呼ばれてゐると云う一事で充分証明できる。「流行丈から風俗に固定する」など私は一言もいつていないしむしろ、風俗化が社会経済的条件の成熟を待つという見解を第十四サニスタンドの項で述べてゐるのである。だからこの箇所も私への教示としては當つていない。

その頁の中段には「女のズボンの風俗化は女の地位向上による」という断定が下されている。これも私への非難ならば当たらない。何故なら私は「女のズボンは、男にとつてマゾヒズム的な意味のある現象である」と書いてゐるのであるが、女の地位向上ということは、その儘私の文への説明になることだから。——マゾヒストは女の地位が向上して自分よりも上になることを求めるのだから。

六

同頁下段に至ると、はつきり私へ向けられた文章が出て来る。その節の終りに「だが私は、はつきり主張したいのですが、それは女の人間性の回復であつて、男性化は違います。どんな優しい女の子でもズボンは穿きません」と力んでおられるのであるが、一体私の文のどこに、ズボンを穿くことで女が男性化するの、優しい女の子はズボンを穿かないのと書いてあるのか、私が立言してゐるのは男についてである。エドワルド・フックス(私はアルフレッド・キンと云う人は知つてゐるが、寡聞にして氏のあげられたフックス・キンと云う人を知らない)の風俗史関係の諸著に於て、夫のズボンを奪うのを描かれた妻は或は氏の云われる「男性化された女性の性的

「プロテスト」の例であるかも知れないが、私はそういう男性化された女性について論じてるのではない。その絵に描かれた夫のマゾヒスティックな姿から、女のズボンが男にとつて（殊にマゾヒストにとつて）何を意味するかを論じているのである。

七

そこで、その「何を意味するか」について一三四頁上段に於て、氏は「現代がマゾヒズムの世界だとか、女のズボンを喜ぶのはマゾヒスティックだとか考えられると、非常に危険です」と懇切に教示されるのである。この前半の「現代がマゾヒズムの世界云々」というのは、私の「この新しい風俗は、米国という国の、又現代という時代の、マゾヒスティックな性格を端的に象徴しているといえるであらう」という文章に対するものである。氏は特に、米国については触れておられないが恐らく、これにも反対されるであらう。そうでないとい貫しない。問題は先ず、米国という国をどう見るかである。性格学者のアップフェルバツハは、ワイニングルの男性、女性観を發展させて、男性的性格、女性的性格の対立と、サディスティック性格、マゾヒスティック性格の対立とを明確に分類区別した人であるが、その適用を論じて米国民はサディスティックであるとし、その論拠を事業を愛する開拓者魂に求めている。たしかにこういう見方も可能であらう。然し、男性と女性との斗争に於て、どちらが勝利を占めるかで、ある社会がサディスティックかマゾヒスティックかを定めるとすれば、米国は明らかにマゾヒスティックな国であると云わなければならない。ナチスの理論家ローゼンベルヒは「二十世紀の神話」で、女性支配の弊に長舌舌を振っているが、その中で婦人に同権を許した米国では、国家は男性の国家であり乍ら社会

では婦人が支配している。女性の社会的地位は明らかに男性を凌駕している。米国に於けるこの女性支配の結果は、著しい文化水準の低下となつた。という趣旨のことを述べている。（第三篇、第二章、第四節）

モーリス・テスカの引用によると、ジャン・コクトーは「女はアメリカでは大きな場所を占めている。そこでは男の連隊が、女の鼓手長に左右されている。ニューヨークのある家庭にあなたが招かれると、女主人があなたを迎える。少し身をかがめて、少しばかりぼんやりと、御亭主は彼女の後にかすんでいる……」と述べている。（テスカ「女性に関する十五章」訳本一九九頁）。……この種の立証なら、まだまだ私にはあげられるが、これらは「手帖から」の方に項目を設けることにして、こゝでは書名の一つだけあげておこう。二十年来性的方面に研究を怠らぬと豪語される氏のことであるから、恐らくお読みになつたかと思うが、この方面の書物を沢山出しているライブチツヒ出版社から出ている「教育に於けるアメリカ」*Amerikabeim Erziehen* である。これを読めば米国社会のマゾヒスティックな性格は、結局小学校に女教師が多いということが一つの大きな原因となつてることが分るようである。——とにかく、私は米国という国をマゾヒスティックな国と見、つまり女尊男卑の女上位的要素の勝つた国と見、そして女がズボンを穿く風俗をその象徴として見得るといつたのである。一体氏は私の右の意見には反対され乍ら女のズボンが女の地位の向上に基づくことを主張される。私にはそこが理解できないのである。女尊男卑の国の象徴として女の地位の向上の結果獲得された風俗をあげることが危険であり、根本的に誤つてると云われるなら、その理由をもう少し伺い

たいものである。

八

くどくなるので、以下簡単に述べるが、現代という時代についても同様である。新憲法により男女同権の規定された日本に限らず、戦後の世界は一般にアメリカナイズされているのであり、女性に対するアメリカン・マナーはある意味では現代の青年男女の常識となりつつある。現代は女上位的要素が一昔前よりずっと甚だしい時代なのである。それを特徴的にシンボライズするものとして、女の地位の向上の結果獲得された女のズボンの風俗を以つてすることのどこが危険なのか、どこに根本的な誤りがあるのか。(因に私は「現代がマゾヒズム世界だ」などという云い方はしていない)

九

次に前掲後半の「女のズボンを喜ぶのがマゾヒスティック」という結論はいけない」という点についてであるが、吾妻氏がいかに、二十年来性の研究を積まれたとしても、自らマゾヒスティック傾向皆無といわれる。こういうことを云う資格を果してお持ちなのだろうか。氏の二十五年来の服装研究は、女がズボンを穿くのは便利で、暖くて、活動的であるためであり、何等性的な理由に基くものではないことを証明するだろう。氏の学殖に敬意を表する私は、その結論を疑わない。然し、私は男についていつているのである。男が特に女のズボンに興味を持つ時、それは何等か性的な意味を持つのが当然ではないか。勿論二十五年前、氏が新婚の夫人に対してズボンを穿けと命じられた時、(三月号の「精髓」では女の責めにズボンを穿かせることを特に指摘推奨しておられるにもかかわらず)氏はそれを氏の「サディズムと何の関係もない、純粋な服装の問題」とし

て命じられたであろうことは、氏が衣服研究家であるという事実に徴して、私はそれを疑うものではない。が一般の男が、スカートよりもズボンを穿くことを特に女に要求しているとしたら、私は彼が衣服研究家であろうと考えるよりも、マゾヒスティックな人間であろうと考える方が正しいと信ずるものである。一般社会において、女の多くがスカートを穿いている間は、フックスの書の絵から男のマゾヒズムを感じるのが当然なのである。

因みに、氏の見解によれば「手帖」の「第十六鷹司夫人」の項に私の書いたことなど全くのナンセンスで、単に鷹司平通氏の個人的趣味の問題に過ぎぬことになる。然しこの外人記者との問答を記した御成婚当時の雑誌記事によると、その記者は女のズボンに対して、私の述べているような意味を与えて、平通氏の返事を理解し、その意味で夫としての平通氏を健気であると称讃したそうである。実は趣味の問題かも知れぬ、然しそれをこのように理解する人がいるということは社会通念の問題であつて、吾妻氏が「ズボン即主権」観を古いと簡単に否定しておられることへの一つの反証となるであろう。(右の雑誌名を今どうしても想起しえないのは遺憾であるが)

進んで一特に女がズボンを穿いた姿に惹かれる者にはマゾヒストが多い」という私の主張について又、妻のズボンに男性的なものを感じる私の体験については吾妻氏ではなく読者中のマゾヒスト諸君が、今後の投書に於いて、それが正しいかどうかを明らかにしてくれるであろう。氏自身も女のズボンに魅力を感じるといわれるが、サディズムと関係ない服装のためである以上、私の論への反証にはならない。その他の部分は私への教示を離れて、氏の深遠な衣服研

究の蘊蓄の一端である。全く反駁の余地なしとは思わぬが、私から答えるべき限りでなく、又その紙幅もない。

十

甚だ不遜の言辞を弄したが、私としては納得できぬからそれを正直に述べたまでのことで別に詭弁を弄する意図はない。道理があると思われることには素直に頭を下げるつもりであるから、吾妻氏や大方の読者諸賢から更に蒙を啓くべき御意見を戴くことを期待するものである。

そして、以上の書方に多少大人気ない所があつたとしても、既に

読者通信 (投稿歓迎)

私は只今大阪の南で商売に出ております沼田扶二世という十九才の女です。私がなぜこのような職業に従うになつたかという理由を書いてみたと思つております。少女時代に不良から差しめを受けた私、あのいまわしいせいさんな拷問、親にも云えないどころか、今

思い出しても全身が総毛立つ思いです。あのような拷問だけが結果でた私は自分で現在のような身の上になつたのも仕方ないと思つていました。先日友だち(彼女は飛田の接客婦をしていて光と言います。大阪のS高校時代の同窓でした)から貴誌を見せて頂き大へん方を得た思いで感激しました。小坂多美枝さんも飛田に居られ

る方の方ですのね、私は一人秘めておこうと思つていた私の受けた数々の私刑を発表させて頂く決心ができました。どうか読者の皆様、この哀れな商売女に同情して下さい。私の書きまますことは拙いけれどもぜんぶ真実です。あとで送ります。(沼田扶二世)

写真早速お送り下さいまして有難く御礼申し上げます。拝見しますと仲々美事な出来上りで本当に感心いたしました。御社ならでは到底出来ないでしょう。真に敬服の至りです。あの写真について愚考を述べますと、女は縛られて眼かくしをされると上を向くくせがあります。この写真でも大層上を向いていますが、余り上を向き過ぎると感じがそがれます。又眼かくし

老大家である氏に比して、私は前にも書いたように、戦後派のマゾヒストであつて復員後からマゾヒズムの勉強を始めたのであり、専門は人文科学の方であつて、片手間にこれに関する書物を読み漁つたのみのほんの青二才に過ぎぬのであるから、若い者が血気に任せて偉そうなことをいう位に大目に見て戴きたいし、又、日常家庭生活に於いては、相当極端な形のマゾヒズム生活を送つていて、心内の攻撃的なものがすべてに抑圧されているので、偶々こういう機会があると、爆発的にサディスティックになり論争的になる(前のK通九号のも然り)のであると理解して寛恕して戴きたい。

の布の中が広すぎて鼻まですつぽり覆れていますが、鼻の頭と額とが少し出ている方がよいのではないでしようか。(川野美水)

アルバム「美しき縛め」落手致しました。失礼ながら想像していただいたよりずっと立派なのに正直感心した次第です。極めて廉価で良心的です。写真技術は優秀、モデルまた気に入りました。ポーズにも苦心の跡が見えます。もつとも優秀と小生に感ぜられるものを試みに挙げてみますと、「床の置物」「観念」「犠牲台」の三点です。これは肉体の美しさ、ポーズの良さに於て卓越しており、ヨーロッパの物でも、これ以上のものを小生は知りません。他も満足すべき水準に達していますが、とにかくこのアルバムは保存欲をそゝられ

ます。たゞ、これはこれとして完全で非難すべき点は全くありませんが、今後の試みとして進言したいのは、装置にもつと新しい変化を与える余地が多分にあることです。例えば床の間や床柱等、日本座敷のみですが、これを洋間にすれば様々のヴァリエーションができます。ベッド等、いくらも使います。あると存じます(例えば手足を宙に固定した革紐や環等は、アクセサリーとしても刺戟的效果があります)。クリスチーヌの全訳では、ベッドの下に縛つたまま下半身だけベッドから出すとか、興味あるサディスティックな状況は沢山考えられるのです。次にはそういう趣向を取入れられるよう希望いたします。(吾妻新)



我が生い立ちの記

大島

一

(一)

私は私が幼年時代に経験した強い印象に残った事柄がそれから後の私の人生にとつて如何に大きな影響を与えたかという事を書き述べて皆様の参考に供したいと思います。それは小学校二年の初秋の事でした、私は一匹の蠼螂を殺したことがあります。裏庭の道端に一匹のすばらしく大きなお腹をした蠼螂がいたのを、乗っていた三輪車で面白半分に轢いたのですが、二本の鎌をふるわすように動かしていたこの恐しいばかりに大きな蠼螂も、暫くして動かなくなつてしまいました。所がその時私と一緒に遊んでいた私より年下の子供が二人居りましたが、「一ちやんカマキリのお尻から変なものが出たよ」と大きな声を

立てました。

それは今死んだ筈の蠼螂の大きなお腹のお尻の方から、細いゴム紐のようなものが、まるで生きもののようになり、する／＼と出て来ていたのです。その頃、私の身体がまだ幼なかつたので、すべてのものが大きく見えて居たわけですから錯覚があるかも知れませんが確か三十糎位（よく覚えていませんが蠼螂の長さの三倍位はあつたと思います）の長さのものが十分間位もかゝつてとう／＼、そのお腹から出きつてしまいました。

色は白いゴムまりの色、太さは輪ゴム程でした。そして更に、私達を驚かせたものは、その紐が少しづつのたうつて動いてゆくのです、一人の子供は「こわい」と云つて帰つてしまいました。私は「これが魂だ」と思つて

大変気持悪く感じましたが、天へ行くと云われる魂はどんな工合にして昇天するのかという好奇心のためにもあつて暫く見つめて居りました。少しづつのだ打ち廻つている白く光つた針金のようなものに向つて、もう一人の悪戯な子が棒切れで叩いたり転がしたりしている中、とう／＼その紐のようなものをつまんで固く結んで地面へ投げつけました。所が、どうでしょう。その紐のようなものは、丁度蛇のようにくねくねと長い体をくねらせていました。が、次第にすうつと、結び目がふくれて遂にほどけてしまい、又前のようにのたうちまわつて居ります。私は傍の子に「これは魂だから墓を作つて埋めてやろう」と提案しました。裏庭を掃除して移植鏝で穴を掘るとその紐を埋めて、その上から綺麗な砂をふり

告白する偽

かけ、小さな砂丘を作りました、その上にコスモスの花もさして置きました、それでもよい事をした積りでその日は、それらのことを忘れて寝てしまいました。

翌る日、ふと見ると昨日のまゝの墓があります。昨日の隣の悪戯坊も一緒です。私は好奇心（勿論恐い気持ちもありましたが）の余りこの墓を発掘することにしました、所がどうでしょう、砂丘を作っている一塊りの砂を全部払い除けても、昨日の魂は既に昇天してしまつたのか、其所にはありませんでした。私は、あゝ、という溜息と共に漠然と乍ら神様を無視することが出来ないような気がしました。（私は小学校一年の頃から教会に通つて

居りましたけれど、少しも善良なクリスチャンではありませんでした）

非常に前置きが長くなりましたが、私はこの頃から、私自身の魂も、自分のお腹の中にいるという先入観念が植わつていたようです。しかも腹の中に蔵している腸はあのゴム紐にも通ずるものがあるように、私には印象と想像の世

界が開拓せられていったようです。

勿論、今ではこの紐が魂であつた等とは思つても居りません。恐らく蛔虫の類だつたんでしようか。

(一)

小学校では、四十七士の話等沢山切腹に関するものもあつたように記憶しますが、それは単なる認識でしかあり得なかつたようです。所が小学校六年の時、楠正行が父正成の首が故郷へ送り届けられたのを見て、仏壇の前で切腹しようとして、母から止められた話を聞いて、当時、私達の弁当用の箸に二段伸縮アルミ製のがありました。少し頭の足りない級友がその箸を使つて、切腹の真似をやつて

いるのを見ました。

先生の居ない教室で休み時間、彼は上衣ごと押上げてお腹を出し、伸ばした箸を腹に突くと、二段の箸が縮んで一段となり、丁度腹の中へ箸が突きさゝつてゆくように見えしました。この時私はぞくつとするような快よい気持ちで初めて味わいました。そして、そのことがあつてから私は「腹」に対して、或種の被虐的な興味を覚えるようになりました。その頃から私はよく、「もしも次の試験の点が

及第点以下だつたら切腹して死のう」と、いうような事を考えるようになりました。本当にそのような羽目となり、切出しを前にして仏壇（母を亡くしてからは、キリストに代つて仏が御光を照らして居ました）の前に座りました。そうして「お母さん、私は親不孝者でした。これからお母さんの許へ行つてお詫びします……」

私は刹那的に死の恍惚境に浸つていました。そんな時幻想の母から「先生が、父が、お祖父さんが」と一族の人々が私の死後にあびせる悲歎や非難、はては嘲りの声を聞かされ、私の幻想は現実世界に引き戻され、結局果すことが出来ませんでした。

今から考えてみると、未熟で自己意識の完成して居らない小学校時代に、もしも、もつと切腹礼賛が説かれていましたなら、私は既に此の世に存在して居なかつたかも知れませんが（この点に就いても、五月号の風流責各態で吾妻新氏が「私はサディズムという言葉から、不合理な残虐や犯罪的な観念を追い出したいと願う者の一人です」と述べられて居られますことに私は大いに賛意を表します）

(三)

私は性的發育が非常に遅れていたのかも知れませんが、中学三、四年になつても性典に書かれた意味がわかりませんでした。実はその頃或る難解な書物を偶然見付けたのですが、それは明治時代のむつかしい文語体で書かれ知らない漢字が多く、漢和字典を引いてもそれが又、難解な註釈でした。とにかく、こんなことから概念的な知識は得ましたものゝ、論語読みの論語知らずといった所だったのでしよう。

処が、私が小学生の頃、近所の友達の家で動物や童話の絵本と一緒に見たことがあります。その時、私達は桃太郎の絵本を見ていました、婆さんが桃を割ると中から桃太郎が生まれました。この様な絵を見てから、私は、母体から子供が生まれる時、母体の腹が自然に割れるのだと、その当時は思っていましたそれは桃太郎が桃を割った時に生まれたという童話に負う所大なのでしよう。私は又、これを非常に羨しく思つたものです。男は死ぬ為にしか腹を割ることが出来ないのに女は子供を産む時に、必ず腹が割れるというわけです。当時既に継母がいましたが、自宅の風呂等に入る母の腹をちらつと見ては、よくまあ、あとかたもなく傷口が平癒するものだ

驚いたものです。

或夜、その日の勉強を終えて寝に就く前にこの謎を我が腹に試みてみようかと決心しました。切出して下腹をぐつと突いた時、痛みを感じた所は全く別の所でした。不透明の大量の膿を発見して驚き、早速バイブルの頁を気ぜわしくめくりました、そして遂に、禁断の実とは何であるかの真理をこの世の中に発見したのであります。私は怖しくなり、且つ羞恥の余り、天国を逐われるアダムとイヴ以上の裁きを神から受けました。

(四)

私はその当時から既に、変態的になつていたのかも知れません。冷い継母はそのまゝ、私の女性観を形成していました。友人が女性の尻を追う心理は理解出来ても、その熱心さは私には或る程度不思議だつたのです。

唯一度、独乙映画で美女の手にキツスする場面を見た時(洋画はこの時が始めてです)流石に私も、「大和撫子よ、強き妻たらん為日夜研讀してたもれ」と何処かにノートしたことを覚えて居ります。

社会へ出てからは、若い女性に心を惹かれつゝも、一種の不安はロマンスに花を咲かせ

るまでに至らずというわけですが、奇クを愛読するようになつてからは、恋態必ずしも致命的にはあらずという自信を得た次第です。羞恥と無知とのいたちごっこ、これが私の精神的な大きな負担だつたのであります。



一度精神医学の本を読み、私の性格が精神分裂症にかゝる資格を具備しているといつた幻想に襲われ、自らH大学で診断して貰つたことがあります。勿論勇気を振つて診断を乞うたということは、私の精神的負担をうんと軽くして呉れました。しかしそれは矢張り、本当の私の悩みを解決してはくれませんでした。それを解決してくれたのは、前にも述べましたように奇クだつたのです。知ること、唯それだけです。新渡戸稲造博士の論説だけでは解けなかつたものが、中康先生によつて解いて頂いたわけです。即ち私に關する限り禁断の実とは何かと云うよりも、禁断の実を何故喰べたいかと云うことがわからないまゝに、苦しんでいたのであります。(完)



第二章 女調馬師

「此処は淫蕩流れる如き皇女、
エロディアの宮庭ではなく、
異形の神々の影深く、
我等、只、獣性の淫、神聖の魂、
常に在れと祈るのである」

(ア・シエルエル作)

常に豪壯な雰囲気と荘麗なる幻想とが付き
まとうて、始めて、変態性慾の究極の目的は
得られるのであるが、次に書き記す一篇は前
篇の常識的な場面と異り、私共マゾッホやシ
ュリヒテルの後嗣にとつて、限り知れぬ愉悦

或る被虐性愛者の手記より【二】

天 泥 盛 栄

を呼び起す――。

彼の女士官は五尺一寸そこくでしたが、
そのずらりとした姿態は正に肉慾的なもので
した。彼女はさんくいたためつけられた私に
近付くと、優しく助け起してさゝやきました
「ずいぶんひどくやられたのね、私はあんな
ことはしないのよ」

そうして、私の身体についた色々の傷痕に
薬を塗り、労わり乍ら私を奥の新しい部屋に
連れて行つて呉れました。それから暫くの間
私を寝台に寝かせて傍らに付添つて居てくれ
たのです。

やがて私は、朧ろげな眼を開けて室内を眺
めました。何んと其処には、私があまり見た
こともない華美を尽した調度や、敷物が緑り
ひろげられ、泰西の芸術最高品と考えられる
ような彫刻が其処此処に置かれていました。

曾て或る日に読んだ、ヴィリエ・ド・リイラ
ダンの小品の中にあつたような幻想的な風物
が、そこに鈍い光輝を放つていたのです。

彼女の優しい眼差しに、私は安心を取り戻
し、ゆつくりとした態度で私に腕を差しのべ
てくれる彼女に、自分の身に加えられた先程
の淫虐について訴えました。そうして心から
彼女に、自分を決してあの様に虐めないでほ
しいと頼みました。

「いゝのよ、私の役目はあんたを虐めること
じやないのよ、私はあんたを可愛がつてあげ
るの」

私はほつとしました。

彼女はニコツと微笑し乍ら、その手はデリ
ケートな感覚を以つて、リズムカルに動き始
めました。私はこの救世主の様な女士官に感
謝の念に溢れて、思わず彼女にしっかりと抱
きつきました。しかし何という事でしよう。

彼女は矢張りR国の士官でした。先程、私を思うまゝに虐めた、あの黒い女性用の長靴を彼女も又は持っているではありませんか。そうして先の女士官のつけていたよりも、もつとく長く鋭いトゲのある拍車を彼女はつけているのです。

一瞬、私はどきつとしました。内在する彼女のサディズムがこゝに伺われたのです。併し先程の事件で、私の心の中は既にマゾヒスティックな心が芽生えて来ていました。私はどうなつてもよいという決心をすると同時に彼女の乗馬靴を舐め始めました。

彼女はびっくりして、

「まあ、あんた矢つ張りそんなことが好きなのね、いゝわ、可愛がつてあげるからね、けれどまだ急ぐことはないのよ」

けれども、私は黒い皮革の感触に昂奮していました。

「私はあなたの云うことを聞きます。どうか何でも云いつけて下さい。あなたに打たれるのならどんな痛い鞭でも受けますし、あなたが若し、私を馬にする魔力があるのなら、馬にもなります」

彼女は暫く黙つて私を見ていましたが、「この世の中には、万人が不可能と思う事が

実現するのです。〃若しも〃という言葉の中に、必らずしも百パーセントの不可能という意味は含まれていないのですから」

豪華な戸棚の中から黄色い有名な古酒を出してつぎ乍ら、彼女はその美しい声で続けます。

「若しも私が、魔法使だとしたらあなたはどうします。若しも私が貴方を石にでも、虫にでも、或は山羊にでも変えられるとしたら、貴方は一番何になりたいの、人間以外の動物や植物の中で、貴方は一体何が好きなの？」

沈黙の一瞬、彼女が飲み下す古酒の音が、静かな部屋に一きわ音を立てました
「判つたわ、貴方は馬にして貰いたいのね。判つたわよろしい、馬にしてあげる、実物の馬にね、そうすれば私がどんなような愛情を貴方に示すかが判るでしょう」

と云つて先程の古酒を私の鼻先へ塗りつけました。

「さあ、起つて！」

私が起ち上ると彼女は寝台の下から古い木



箱を取り出し、うや／＼しくその蓋を開けると、中には黄金の拍車が入っていました。確かに私の見たところでは、その刺のある拍車には何者かの血痕がついていました。彼女は静かにその拍車を差し上げ、可愛いくて仕方がない様な様子で接吻すると、私に向つて云いました。

「さあ、そこへしやがんで！」

彼女は長靴を穿いた足を私の膝の上へ載せていました。

「今ついている拍車を取りなさい、そうしてこの黄金の拍車をつけるのです」

冷たく、厳しい

彼女の言葉に私は無言のまゝ云われた通りに致しました。

「向うを向いて！」

背を向けた私に彼女は素早く、肩車の様にして乗りました。

「いゝかい、動くんじやないよ、一寸でも動いてごらん、あんたは死ぬんだいゝかい」

私は気配で、彼女が私に、その拍車を当てる事を知り、何か云おうとした途端に、早くも力一杯蹴りつけられて昏倒しました。気が付いてみると先程の部屋です、彼女は居ません。

「何だ、みる、魔法なんて」

と思い乍ら四方を見るとどうも何となく部屋の様子が変です。

「そうだ、四つん這いでは」

と、立ち上ろうとしますがどうしても立てません。もがくと息が詰つてきそう、何か口の中には入っている。と、思つた途端に私の脾腹に何か痛いものが触ります、ひまいと後を向くと、何んと私は馬になつていたので、何たることでしよう。茶色の上品な乗馬靴を穿いた誰かが乗つています。先刻触つたのはその拍車でした。尚もよく見ると、私の首のつけ根から下へさがつてゐるもの、私はびくつとしました。乗馬用の革鞭です。それは私が動く度に動き、その柔軟性と同時に、その鋭い苦痛と、乗り手の持つ厳しい懲らしめの気持を表わして居ました。

彼女の声で、乗つてゐるのは矢張り彼女です、拍車で私の腹を蹴ると、手綱をぐいと絞ります。私は立ち上らざるを得ません。立

ち上らせておいてから彼女は云いました。

「判つた？私の可愛いお馬さん、一寸運動をしにしようよ」

私は外へ通ずる扉の方へ行きます。石段が三段になつていて、跳び下りるのは一寸恐く躊躇してゐると、

「ホラ、恐くないよ」

声だけではありません、脇腹をすぐ拍車が蹴ります。

「あつ！」

と、云つて跳びます。何のことはない、大した高さじやありません。道へ出るとすぐ並木です、巾が五米位の並木道、女主人はきつと、すがすがしい空気を吸つて気持が良いのでしよう。ずい分永い間歩きました。後から爆音がきこえて「自動車らしいな」と思うと彼女の声、

「さあ、あの自動車と競争してごらん！」

早くも激しい拍車

「自動車がすぐ後よ！走れ！もつとく」

一言叫ぶ度に実に巧妙な拍車を加えられます。彼女は私の耳の傍で叫びます。

「もつと早く！もう走れないの？鞭を使うよ！お前のお尻はそんなにあたしの鞭が欲しいのかい？いゝかい？そら、走つてみる！走れ

！走れ！」

彼女はビュウ／＼と鞭を振り上げて、私の尻へ打ちおろすのです。私は「これ以上もう走れない」と思つた時、やつと自動車が止つてくれました。彼女はひよいと跳びおりて、私の首を軽く叩き乍ら、

「いゝ子、あたしの可愛い子」

と云い乍ら手に持つていた砂糖を呉れました。何という幸福！私は疲れも忘れて、思わず大空へ向けて大きく啼きました。こうして私達の最初の散歩は終わりましたが、彼女は実によい女主人でした。彼女のきりつとした男装姿に私は無言で忠誠を誓いました。偶に私が従順でない時、いつでも私の耳の傍で声がします。

「お前は、あたしが伊達に長靴をはいてゐると思うのかい？この靴はお前の主人だといふしるしだよ、味あうがいゝ、この味を」

彼女は拍車のついた靴の踵で思い切り私の脾腹をぐり／＼と抉ります。そうして少しでも不気嫌な時はその上、革鞭で私の身体の至る所を打ちます。時々、皮の手袋をつけた手で愛撫して呉れる所へも思い切り鞭を当てられるのです。こうして私の馬としての生活が始まりました。(未完)

西田琴江傷害致死事件調書より

『呪

縛』

辻村

隆

西田鋭二第一回供述調書

一、私は大正十二年十月八日、本籍地K市×町×番地に生れ、本年満二十九才であります。前科はありません、又官庁等に勤めたこともありません。

二、私の両親共既に亡くなりまして、亡父吉岡鋭造は、呉服行商を営んでおりました。私は亡父の二男として生れ、K市第二尋常小学校を卒業後、商売見習の為、大阪市東区本町のR商店に住込奉公をし、昭和十九年一月現役入営、昭和二十年十二月中支から復員致しました。

三、復員後、R商店は戦災でなくなっておりましたが、自宅で暫くぶら／＼しておりましたが、親戚の世話で、翌二十一年四月、西田琴江と養子縁組し、同家に参りまして、西田家の家業である製粉業を現住所I市×町×番地で経営し、現在に至っております。

四、私は、妻西田琴江殺害の件につきましてありの儘事実を申述べます。

妻琴江は昭和二年十一月一日生れで結婚當時廿才でありました。昭和廿四年三月に長男鉄之が出生致しましたが、それ迄の三年間程は、別段何事もなく平和に暮しておりました。五、私は、琴江が後に述べます様な、異常性

癖、即ち被虐的な性癖の持主である事に気付いたのは、長男出生後、約半年程してからのものであります。それは丁度九月中旬の、残暑の末だ厳しかつた宵の事でありますが、私達三人は、奥座敷の六帖の間で、長男を中に挟んで就寝していましたが、長男鉄之が、何故か急に泣き出しましたので、私は妻になだめる様に申しますと、妻はいきなり立上つて、鉄之の両脚を掴むや、まるで気の狂つた様に満六ヶ月に充たぬ鉄之を振廻して、その挙句処嫌わず殴りつけました。私は驚いて、妻のその行為をとめ様としました処、妻は私に喰つてかかり、その時私の頬を引掻きましたが、

やがて幾分気が鎮まつたのか、今度は涙を流して、悪かつたから許してくれと申しますので、私もさして気に留めず、それなりで黙っておりますが、妻は尚も執拗に、許したと云う証拠に好きなだけ殴つてくれ、そして今度から、鉄之に対して斯様な乱暴をせぬと云う誓いの罰に縛つて折檻してくれと申して、私の膝に身を投げかけて来ました。私も始めは唐突で、それ程迄に及ぶまいと、聞き流しておりましたが、再三再四哀願した妻は、縛らないのは自分の行為を許していないからだとして私を恨む様な素振り迄見せましたので、私は詮方なく、形式的でも妻を縛る氣になりました。

私は妻のしめていた寝巻の細紐を解くと、妻の両手を後に廻し、両手首を揃えて、三重ぐらい巻いて縛りました。妻は私の為す儘に凝つとしていましたが、私は約五分間程してから、もうこれでいゝだろうと云つて、解こうと致しました処、妻は、この儘で朝まで懲しめの為縛つておいてくれ。今解くと、又鉄之に乱暴してもいけないからと申しましたの

で、それもそうだと思ひ直し、私は琴江を朝までその儘縛つておきました。私は妻の寝乱れた姿になまめかしい肢態に慾望を憶えまして、私は結婚後始めて、こうした縛つた儘の妻と………た。

その時は、妻はいつもよりも悦びを感じていた様に思えました。尚妻は当日より月経期に入つておつた事をその時知りました。月経が始まると、妻は多少メラソコリーになつておりますが、今夜のこうした唐突な妻の態度も、月経時の異常のなせるわざと、その時はさして氣にもかけませんでした。妻が縛る事を私に要求しましたのはこの時が始めてであります。

六、其の後、妻は何かと理由にかこつけてはしばしば私に、緊縛を要求する様になりました。それも夫婦の営みの行われる前に多く、わざと私を怒らせる様な行為を致したりしまして、私が黙許しておりますと、果ては鉄之に乱暴をした挙句、私に縛つてくれと哀願する事が度々でありました。始めのうちには十日か一週間に一度ぐらいでありましたが

そのうち段々嵩じてまいりまして、昭和二十五年の春先ごろからは、殆んど隔夜ぐらいに妻は私に縛る事を要求する様になりました。私はこうした嗜虐的な行為には、全然何の感興も起らず、又現在の心境に於きましても、積極的なその様な行為は好みませぬが、養子の立場もあり、又その行為が妻を一層歡ばせる事を薄々氣付いてからは、妻のその希望に對しまして、私は妻の云いなりに、色々形を変え、方法を変えては縛るようになりました。併し妻の寒母、西田かめ(六十六才)が一部屋隔てた三帖の間に就寝しておりました為、後に申述べます様な、極端な被虐的行為はなく、精々柱か鴨居に縛つたりする位の程度で済んでおりました。

七、妻の実母で、私の養母に当る西田カメが心臟病の為、昭和二十五年七月九日に亡くなりましてから、琴江は、今は誰に氣兼ねもなくなりましたので、間もなく、白昼にても自分の性癖が起ると、製粉工場で働く私を呼びに来ては、緊縛を要求する様になりました。梯子を使つたり、逆吊りにしたり、鞭撻をせ

がまれたのもこの頃からであります。私がそうして妻の肉体をさいなみますと、妻は……いる様でした。そして更に強く縛ってくれと請求し、処嫌わず鞭打ってくれと要求しました。妻は腰紐、帯の如き柔味のあるものよりも麻縄やロープや、細引の様な、緊縛感の強いものを好み、自分から何処かで次々買求めて来まして、妻の箆笥の一つには、これ等の太細とりくゝの縄類が一杯につめられてありました。

養母が亡くなつてからは、妻は全裸になつて縛られる様になり、私が妻の衣類を一枚残らず剥ぎとり終ると。妻は箆笥の中から、好みの細引や麻縄をとり出して来ては、常に身動きの出来ぬ程縛ってくれと申して差出すのでした。その時も妻の月経時でありましたがさらでだに、その性癖が激しくつゝのると見えまして、八月末の頃でしたか、妻は私を製粉場へと引張つて行きました。時間は午前一時頃であつたと思います。妻は作業場で浴衣を脱いで全裸になると、撒水用のゴムホースを引曳り出して来て、天井を指さし、これで梁

にかけられた製粉機廻転用のモーターに繋がるブリーにベルトのかゝつたシャフト(車軸)に体を巻きつけて縛ってくれと申しました。私は到底その様な危険なことは出来ないと思いましたが、妻はがえんぜず、自ら車軸に梯子をかけて、片手にゴムホースを握り昇つて行きました。私は仕方なく、妻に従いて梯子を昇り、要心し乍ら、どうやらこうやら妻の体を胸の方から順々にぐるぐるとゴムホースで車軸に巻きつけ、尚、万一落下しない様にと、工場の片隅に積んであつた荒縄を大量に持つてきてゴムホースの上からぎりぎりと固く縛りつけました。妻の背線はびつたりと鉄の車軸に密接して、手先から足先まで直線に伸びて、轟々とシャフトに絡みつきました。妻は頬を紅潮させ、眼をぎらりと輝かせ乍ら、たわごとの様にモーターと叫び私にモーターのスイッチを入れる事を頻りに要求しました。妻の激しい情熱に圧迫されて私は思わずタラ／＼と開閉器に近づき、モーターのスイッチを入れました。ブーンと廻転音と共に、ベルトがうねつて廻り始め、そ

れにつれて妻の肉体はコマの様にくるくると車軸と共に廻り始めました。妻の頭が、ガク／＼と揺れては、廻転の度毎に、車軸に当つて、ゴツリ／＼と異様な音を立てました。その度に妻は、ヒーツと哭く様な悲鳴を挙げました。私は直ちにスイッチを切り、梯子をかけて、ぐつたりした妻を漸くにして抱き降しましたが、手足を縛つた荒縄の跡が深く肉に喰い込んでいて、見ただけでも痛々しうでした。この行為のあと暫く妻は被虐的行為を要求しませんでした。私はホツとして、思い切つた事をして反つてよかつた様に思つたぐらいでありました。

それも長くは続かず、当時の苦痛が薄れるにつれて、妻は再び、前にもました行為を希む様になりました。雨降る夜、庭先の松の木に三時間も、濡れて全裸の儘、縛つて、私がいくら解こうとしても承知しなかつた事もありました。私はその頃から、妻の余りにも異常な性癖に多少恐怖を感じる様になりました、何時果てるとも知らぬ妻のこの行為が、やがては、妻の死を早める、不幸な破局に到

るのではないかと、恐れる気持で、日を過しておりました。とは云え、緊縛や、ナイロンバンド、箒等による打擲の後の妻の熱情はまるで狂った様に激しく献身的で一晩中私を眠らせぬ事も往々にしてありました。

八、事件当夜の模様について有りの儘申し述べます。

前述のような状態の下に、昭和二十六年五月八日の夜を迎えました。鉄之の寝た後、私は枕を並べて暫く雑談を交わして居りましたが、妻はいつもの癖が頭を擡げて来たのかしきりに私に、縛られた時の快さを訴え、遂に、もう一度製粉場にて車軸に縛って欲しいと頼んだのでありました。あの時の苦痛が今は懐かしく、想い出すだけでも身内の疼く思いだと掻き口説き、果ては早くも寝巻を脱して、長いロープを簞笥より取り出すと、追いつ立てる様に私の手を引つ張つて、製粉場へと私を誘いました。

私は疲れてはおりましたが、妻の要求をいなり難く、外部に洩れるのを恐れて、ローソク一本の光を頼りに、車軸に梯子をかけ、妻

を梁にかけられた車軸の処まで昇らせて、その場で、妻の両手をロープで縛つた上、車軸にしつかりと括りつけ、両手をあげて梯子に凭たれた姿勢の妻の両脚を揃えて麻縄で縛りその縄の端を持つて、私は車軸の反対側の乾燥箱を積み重ねてある、屋根裏の物置に昇りました。私はその位置で、麻縄をぐつと引き寄せました。妻の足が梯子から外れて、体が宙に浮き、ハンモックの様に胸部を下にして弓なりに両手足が伸びて、空間に裸体が泳いだのを見定めて、私は縄をぎり／＼引きしぼつて、しつかりと羽目板の受木に括りつけました。尚この行為はすべて妻の指示によるものであります。

手足の縄が刻々と肉に喰い込んで行くのか妻は呻き声を挙げておりました。

二つの梯子を外して私はゆらめくローソクの灯の下で、影絵の様に妖しく空間にのたうつ、妻の肢態に見惚れていましたが、流石に妻の苦痛の色が濃くなつて来ましたので、足の縄から解く為、物置に梯子をかけて昇ろうとしたその瞬間、突然電灯がパツとともると

ブーンとモーターの発動音と共にベルトが動き始め、あつと顔色を変えて梯子を飛び降りスイツチの処まで夢中で走つた時は既に遅く妻の肉体が、空間に硬直して引き裂かれそうに一線に張りきつたかと思うと、奇妙な骨の外れる音と同時にギヤーツと一声、断末魔の叫びが闇に流れ、足を縛つた麻縄が緊張度を越してブチリと千切れ、スイツチを切つた時妻の体は一廻転の後、車軸に半ば巻きついて、ダラリと長く垂れており、足首の縄は、その部分の皮膚を剥ぎとつて、くるぶしの骨の辺りで無惨にも喰いこんでおりました。何処から流出するのか、ポトリと鮮血が私の足許に垂れて来ていたのであります。

九、私が昼間作業中、停電の為、うっかりとスイツチを切り忘れてその儘にしておいたのが、偶然妻を縛つて宙吊りした際電気が来ました為、斯様な惨事を惹起しました。誠に申し訳ないと思います。私は決して私の意志で妻を縛つたのでもなく、又妻を殺害する目的での計画的犯行でもなかつた事を茲にお誓ひします。

十、犯行後、本日まで逃走を続けました経過につきまして有りのまゝ申し述べます(続く)

孤 獨 な 放 浪 記

小 暮 達 也

私は土木工事の斧指しよきさと呼ばれる支柱夫の子として生れた。父は工事のある地方を転々としなければ喰つて行けないので、私達家族も旅から旅へと、一年と同じ処に居着いた事はなかつた。家族が居るので、工事場附近の農家等に間借りをしたが、山奥でそう云う家のない場所では、飯場住いをした。しかし、幼い子供連れの場合は環境を考える必要があつたと今になつてつくづく思う。

私は満六才で、既に或る性癖を教えられた或夜、女人夫ばかりいる大部屋へ連れ込まれた私は、母親以外の女の、奇妙に息苦しい玩弄に病みついたのである。大柄な女達の豊かな太腿に挟まれて、幼い赤裸の私が、どのように汗みどろとなつたかは、御想像に任せる

その夜から三ヶ月もの間、毎晩のように私は女部屋へ忍び込んだ。飯場住いの女達といえど如何に野性的で本能的であるかという事を私は身を以て知らされた。

私はこのようにして、体の他の部分より早く性的に成長した。そして大柄な年上の女性群に思うまゝに玩弄される快感を知らず知らずのうちに教えられたのである。

小学校時代――

私は非常な露出欲にかられた事があつた。女の前で裸になつて、見られたいという強い衝動である。所が、裸になると云う事は、内気に育つた私には、如何にその欲望が強くて、とうてい出来ない事だつた。そしてその二つのジレンマに日夜苦しんだ。

その頃、大太平洋戦争が始つた。私はアメリカに婦人部隊のある事を聞いて、婦人部隊に捕われて捕虜となり裸にされた挙句、あらゆる惨酷な方法で弄ばれると云う幻想を描いて性的悪癖に耽つた。

私の教室で小さな盗難事件が起つた事があつた。何が失くなつたのか忘れてしまつた位ほんの小さな事件であつた。処が、その事件が私の傾向を決定的にしてしまつたのであると、云うのは、受持の女教師は、今で云う戦争未亡人であつたが、皆の良心に訴えるから盗んだ人は今夜、村社の境内まで来るようにと云つた。この女教師は決して美しくはなかつた。ただ長い禁欲の為か全身色つばい雰囲気を書かせていた。隠してもく洩れて出る本能の匂いのようなものが、その女をスツポリ包んでいるように感じられた。私はひし／＼と起つて来る或る期待と計画を押えきれなかつたが、私は犯人では勿論なかつたが、その夜、出掛けて行こうと決心したのである。

人家から離れた岡の上の、林に囲まれた村社へ出掛けるのは、恐くはあつた。その恐怖を抑えさせたのは私の奥底から湧き上つてくる桃色の幻想である。最初は隠れて見ている

偽らざる告白

つもりだつたが、村社へ着いた頃は、暗い処にひそんでいる勇氣は全くななくなつていた。思わず境内の中央へ歩いて行つた。私は彼女に自分が犯人であると偽つた。私は彼女に荒縄でギリギリと縛り上げられ神前に座らされて、奇妙に快よい昂奮を感じながらお説教を聞いた。

私は嚴かな氣持になるより、次第に淫らな氣持になり、暫く経つてから、彼女に小便をしないと訴えた。彼女は背後に座つていたのだが、急に立ち上りウロ／＼と辺りを見廻した。私は縛られたまゝ立たされ、境内の一隅へ連れて行かれ、ズボンのボタンをはずされ彼女の指に支えられて小便を始めた。

丁度その時、境内へ駆け込む足音が聞こえ、半泣きの声で「先生、先生」と呼ぶ声があった。彼女は驚いたようだったが、私をそのまゝにしてその声に近づいた。真犯人の少女が盗品を持つて登場したのである。彼女は盗品を受け取り、少し叱つてから少女を帰した。

彼女はすべてを悟つていた

近づく私の背後から縄を持つて引つ張り私を立たせると再び社殿へつれ戻して畳の上へ押し倒した。

「何故、嘘を云つたの？」

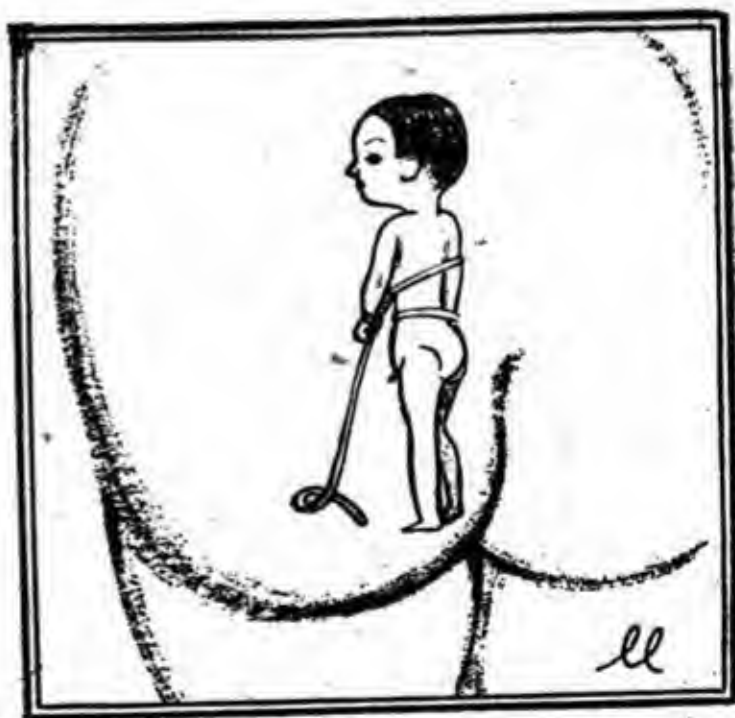
女の眼は妖しく光つていた。

「何故、嘘をついたの？」

私が返事出来ないでいると、彼女は氣が狂

つたように私の頭や頬を拳で叩いた。私はその拳の下で縛られて身動きの出来ない身体であることに無上の喜びを感じ乍ら、じつと眼をつぶつていた。——そういった関係が教師と生徒であり、年令も二十も違いがあり乍ら一年半も続いた。その一年半の間に、私はいつても縛られた姿であり二人とも他人には見せられないあられもない裸体だつた。彼女は戦死者の妻であり、世間体を憚つて表面は至つて真面目そうな生活を続けていた。

その中、私の住居の移転が二人の關係にビリオドを打つた。それ以後は、私の内向性が



昂じ適當な相手もないまゝに、二十才四ヶ月と云う年令に達してしまつた。

私は現在に至つて、つらく／＼考へてみるのに私の場合、私の内向性と幼なさが、責任回避のためにマゾヒスト的傾向を生んだのではなからうか、と思ふ。

つまり、私のようなマゾヒストは横着と云えないだらうか。又、異性に縛られての Coitus 又は数人の女性に依る輪姦への憧れは、マゾヒズムであらうか。又、フラウオーベンの地位は、どのような傾向と云えるだらうか。

私は幾多の疑問を胸に抱いて、肉身もない孤独の身を、ある電源開発工事へ葬ろうとしている。私の生れつき余り丈夫でない体が、その重労働にどの程度耐えて行けるか。ともかく、この貧しい手記を訣別のしるしとして再び放浪の旅を続けることになるだらう。



蜘蛛と蝶々

飛田良二

方金三・画

——不運なニューフェイス——

(一)

蜘蛛はその罫に掛つた獲物を直ちに息の根を止めようとしな……

先ずその見えない様な糸から、どうしても逃げられない程度に引導を渡すのである。そしてそれからゆつくりとなぶりたのしむ。

哀れな犠牲者は死よりも苦しみその新鮮な生血を提供させられるのである。

そしてついに屍と化す。蜘蛛はその貧婪な欲望を満たして、尙あきたりない。あたかもその凱歌の記録をとどめる様にしばしその残塊を空中にさらすのである。

御川里枝は俳優部屋（大部屋）でぼうつと一人、はや夕暮れる灰色の空を眺めていました。里枝の心は何時晴れるとも知れない梅雨空よりも暗く、そして重いのです。

「あせるまい」と心に云いきかせながらも足踏みたい程のいらだたしさ、苦しい毎日の連続に、若い夢も手のとどかない彼方の幸福とうすれ、あのはちきれる様な研究生当時の毎日がまるで夢の様にさえ思われてくるのでした。うるさい程お友達から推められ、おず／＼受けた此の撮影所の「ニューフェイス」審査に幾千人かの応募者の中から幸運にも選ばれたのでした。そしてそれから、あのすばらしい

満ちたりた希望にふくらんだ研究生時代は去り、そしてこの俳優部屋に籍を置きましたが、専属とは名ばかりではや二年の月日は流れました。

下積の苦勞—そんな事が解らない里枝ではないのですが、しかし一しよに研究所を出た友達の幾人かは輝くライトを浴びてスターダムにのし上つた人もいますし、なかには早くも家庭生活に幸福を求めて去つて行つた人もありました。又たとえどんな端役でも一度、二度とタイトルに名の出て、目の前まで来た成功に興奮し熱中している人も少なくありませんでした。

「それなのに私は……」

此の俳優部屋には幾十年ライトを浴びぬみじみな人々の不満、そして嫉妬の塊りをもつその空気の中でますます自信を失なつて行くばかりでした。それからもう一つはこの世界もやはりお金の力が左右していることでした。

何時呼び出され、どんな成功へのチャンスが訪れるかもわからない毎日……明日へ待機する「ニューフェイス」が一人前の恰好をしていなくては、宣伝用のマネキンにもなれないし、映画雑誌に載せてもらうことさえも出来ないのです。その事が如何に大切なチャンスであるかは、常識なのですが研究所出の専属料は雀の涙に等しく故郷の家には生活に追われている母と妹が待つてゐる里枝の身の上でした。そして里枝は此の撮影所という所がだんだんわからなくなつてくるのでした。

「あんな人が……」と思つていた同僚が今では「今年のホープ」だと撮影所は莫大な宣伝費をかけて売り出しています。

一方里枝がたまに狩り出されて出るという役は、点景人物か、ゾ

ロ／＼歩きのエキストラの一人だつたのです。

里枝はこれまでに幾度、「スター」になつた夢を見たことでしょうか。それが今では虹の様にぐん／＼消え去つていくばかりです。

「あゝ、ライトを浴びたい……」

「お金が欲しい」

と里枝は灰色の空に向つて心は叫んでいるのでした。

「おや！ 一人かい……相変らずだね」

助監督の岩木が入つて来たのでした。何んだか日頃から里枝の好きになれないタイプの人でまだ若いのに三、四十に見えるやせた男でS組の助監督の一人です。

「さつちやん、耳よりの話があるんだがね」

こゝでは里枝のことをさづちやんと呼んでいるのでその前にニヤ／＼笑いながら岩木は座り込み里枝を見ながら云うのでした。その時、里枝はみじめな気持を見すかれた様に思えて不快な顔になりましたが、何んだかその話が氣にかゝりました。

すると岩木は

「お金になるしね、主役として一本撮らない？」

「いやならいいんだよ、誰かに頼むから」

岩木は躊躇する里枝にそう云いながらも

「まあよく考えて置いて、返事は明日まで待つから」

と付け加えると、折から帰り仕度にドヤ／＼と戻つて来た大部屋の人達と入れ換つて出て行きました。

その日の岩木の話というのは、個人的な経営になる小さな撮影所で（里枝はそんな所があるということさえ知らなかつたのですが）無名の新人に主役をやつてもらい、輸出専門の短尺物ばかりを作つ

ている所があるというのです。そして出演料は少ないが二、三日ですむ仕事で十万円はもらえるし契約と同時に半金前払いするというのです。又他社出演などの、あと／＼個人的な迷惑は決してかけない様に秘密にするということでした。

そして自分は全然関係がないが友人がその技師をしていて「ぜひ前途ある有望な新人を紹介してくれ」と頼まれたので君にだけ話したのだから君もそのつもりでいてくれというのでした。

里枝はその時、そんなうまい話を信じることも出来なかつたし又そんなにいい条件で仕事のあるということも考えられませんでしたそれから一週間経ちました。ようやく陰気な梅雨も上り、撮影所は一段と活発に動き始めて来ました。S組もM組も新しい撮影が始つて中には徹夜組も出来てきました。

宝塚から引抜かれた人達が輝かしい名を上げてくる有様です。ニューフェイスのオールド組は忘れられた存在になつて行くばかりですから里枝の心はますます／＼暗くなつていきました。こへ毎日、心の迷う里枝の前へ、忙しいS組の仕事を抜けては岩木は何度かやつて来るのでした。

「僕はね、何も君に恩を着せてどうしようと云うたくらみが



ある訳じゃないんだよ……誰でもチャンスということがあるからね。君にそのキツカケになるかも知れないと思つてさ……おせつかいかな……」

岩木は熱心に云うので里枝の方もだまつているわけにいかず「何んだか心配になるんですの、あまり話がよくすぎますから」「馬鹿だな君は……アルバイトのつもりで軽く引受けたらいいんだよ」

里枝は大人になつたつもりではいますがまだ／＼その岩木達の悪計略が解りませんでした。研究所時代が満十九才、それから二年経つても、北国生れの純な里枝は美貌とその均整のとれた四肢、ひたすらにスターへの夢におきかえると、万事が控え目の性質で悪とい

うことは殆んど知らない里枝に岸木達は目をつけたのでした。

「君は知らないだろうけどその僕の友人、瀬田という人だがね実は君の事をとうから知つているんだよ、ここへも、チヨイ／＼来るからそれで君を承知させてくれと、うるさいんだよ、僕も仕事の上で瀬田君には借りがあるし……それで引き受けたというわけさ、どう一度、瀬田に会つてみない？ 実際カメラの前に立つという事もいい経験になるよ」そういわれると里枝

の心はぐらつき瀬田とかいう人に会つてみようかしらという気持がこくなり、たとえ少しは気まづい思いが残る様なお仕事でも後々に問題もなくて済むなら謝礼だというお金の半分でもいい……とそんな甘い考えが浮んでくるのでした。

(二)

それから間もなく里枝は始めて撮影所を休みました。そして岩木が紹介するということで里枝は彼と一しよにタクシーに乗りかなり長時間、都心とは反対の方角へ走り続けました。降りてみると洋館建の古めかしい二階作りの大きな家でした。車の中から見た様子では静かな別荘地帯の様に思われ何んだか気持が晴々としてくる様です。岩木は近くに国電の駅があるとか四季の移りはとても素晴らしい等と教えてくれました。

そして鉄製の門を入るといかにも勝手を知つた風でベルを少し押したと思うと、すぐ里枝を応接室に案内してくれました。

しばらくたつてから入つて来た人が瀬田という人だそうでそこで始めて岩木から紹介してもらつたのです。

「ホウ！ これはよくよくお出で下さいました。まあ、ゆつくりして下さい」

瀬田と名乗つた人は、大げさなゼスチャーで里枝を見るのでした。又里枝は里枝で、四十男の岩木とは反対にキラ／＼油ののつた妙に赤い顔、目の動かし方にもすきのないこの人を見て不安に思つてくるのでした。

「じゃ、僕は帰らんと親父（監督）におこられるからお先きに失敬詳しい相談は二人でやつて下さい」

岩木は落ちつかなくそわ／＼と腰を浮しながら煙草をポケットにしまいました。

「やあ、もう帰るのか、お茶でも飲んでいけよ」

「有難う、又出なおして来るよ……それからこの人、今日は休みをもらつているから大丈夫ですよ……ではさつちやんごゆつくり」

岩木が部屋を出ていつた後二人きりで向い合つている里枝は目の置き所に困つてしまつて今、岩木が出ていつたばかりの入口を見ていました、すると瀬田は

「岩木君からどの程度、聞いてくれているか知りませんが僕が経営しているというほどでもないんですが、まあ一経営しているんですよハハ……撮影もやります。監督は友人の滝尾というのがしてゐるんで今日は来ると思つています。撮影といつても本当に名ばかりですがまあ、後から見て下さい二階にスタジオを作つてありますから」

その時、里枝は

「どの様な撮影を主になさつているのですか」

と聞きました。

すると瀬田は

「ちよつと変つたものばかり作るんですよ……それも主に中国向きでワドル／＼かせぎの貿易品です。実はね今度も先方から特別の注文で面白い物を二、三巻作ることになつたんですよ、それで素晴らしいヒロインが必要になつたので心当りを探したのですが適当の人が見つからなくつて困つている所、かねて岩木君に聞かされている貴女にお願いしたのですよ、いや早速承知してくれて有難う」

里枝は岩木と瀬田という人の話の少し違つているのが不安にな

又今瀬田がいつた話の中にも俯に落ちない所がありました。それにまだはつきりと承知していない里枝は

「どんなお仕事かおつしやつて下さい」

とつめよりました

「何に心配はいりませんよ後々に迷惑をかけませんし、秘密は厳守ですよ……今の若い人は、皆夫々アルバイトをしていますよ……」

少ない御礼ですが前金で契約の半分差上げますから後でお持ち帰つて下さい。詳しい打合せはさつき云つた滝尾君が来てからします」

その時、戸が開いて中年の女中らしい人がお茶を持って来ました。

それで一応、瀬田との話も中断しましたが出て行くとすぐ長々と又話し続けるのでした。

「個人経営ですからいろいろとむづかしいことがあります。資金面によいパトロンが居りますのでうまくいつていますよ……市場は中国ですが、いくらでもさばけますし、そしてこの次は、長尺物で中国の王宮の秘史を近代文化人の求めている高級なエロチズムを巧みにおり込んで作る計画です。その作品には貴女が承知さえしてくれましたらぜひ重要な役処で出演して欲しいと思つています、謝礼の方も今回の短尺物の様にケチな事は云いませんよ……それに貴女がその気になれば僕が中国の映画会社の要人に親しくしている人がいるから紹介して上げてもいいよ……あちらで売り出して華かに帰り咲くという手もあるからね……」

里枝はこの話をきいているうちに幾度か問い返えそうかと思いましたがその余地もない程に話すのでとうとうあきらめました。

そして結局、その日は監督の滝尾という人も他の出演者も顔を見せませんでした。そこで一応スタジオだけ見学しました。

スイッチを入れると各種のライトが点いて一方に十六ミリらしいカメラが一台あり其の他は、ちようど撮影所の模型を見る様でした。隅には色々の道具があり里枝には想像もつかぬ様な異様な器具類が備えられていました。

里枝はそれからまもなく瀬田に型通りの別れの言葉を告げてその家を出ました。

国電の駅はすぐにわかりましたが帰りがけにむりやりに渡された五万円の紙幣がとても気になりました、それは岩木が云つていたことよりも一層話がうまくほかされていて要点がつかめなかつたからです。

(三)

それから数日後に、里枝は再びこの家を訪れました。昨日、岩木から事務的に瀬田の連絡をきいてから里枝の心は決つたのです。誰にも相談は出来ないし一人苦しんだのですが身に迫る危険を覚え十万円欲しさに打勝とうという気持がこくなつて、わざと岩木から聞いた時間を無視して瀬田の家に訪れたのでした。

瀬田は困つた顔を見せながら云いました。

「まあ、上つて下さい、だめなら結構ですよしかし詳しい説明をして下さい、それにこちらは一同、今まで待つていたんですからね、滝尾君も、今日は早くから来ているですよ」

里枝はお金を返してすぐに帰る気でいたのですが帰る訳にいかなくなりとうとう監督という滝尾に紹介されました。

岩木や瀬田よりも年齢も上で少し落ち付いた性格の様に思われ、また、それは「監督」という名の響かせる錯覚であつたかも知れま

せん。滝尾という人は、

「大した事はありませんよ、こんな映画を作るのは今に始つた事じゃないんですよ、フランスにいた頃もちよい／＼作りまして、日本でも今じゃ数多く作っているんですよ、貴女の処の○○さんね、それから○○さんも今で云うアルバイトでとつたんですよ、ネガは今でもありますがお見せする訳にはいけません、……秘密厳守ですからねハハ……」

それに女優さんの方は一部出

てもらつて後は吹きかえのトリック……、どんな手でもありますよだから別段どうと云うわけはないでしょう、貴女なんかもこれからと云う人だし他に絶対もれる様なことはしない……、これはお互い様、貴女も一つ我々の利益をよく考えて下さいよ」

「……………」

監督だという男の説明もやはり不明瞭な所が少くありませんでしたが、そういう事に未経験な里枝は、深く問いたゞす勇氣もなくとうとう承諾した形になつてしまいました。

それで助演者として出る男の人が二人（瀬田は或る新劇団体の名を挙げて説明しました）と此処の女中であるお茶を運んで来た中年の婦人に紹介されました、それから里枝のスタンドインになる人は



さい」

滝尾はそう云つてセット用の下塗りと「ナイロンオーガンデイ」の着物を一揃え渡すのでした。

さて里枝の役というのは、或る今売出しの女優で第一シーンはその女優の私室で「フアンレター」の山を満足そうに読んでいる所から始まるのでした。

豪華な室内セットが豊富に並べられ、螢光灯がかたわらにあり、そして素晴らしいベットの用意されているのです。

里枝は初めて、ライトの前に立てる喜びは何にたとえることも出来ませんでした、しかし渡された衣裳は（部屋着、パジャマ、スリッパ、ブラジャー）全部高価なものばかりでしたがナイロン製でみ

来ていませんがもう先に大分撮つていますから後に紹介して頂くことになりました。

「それじゃ、大分待つていたんだし今から少しでも撮りましょうか」

瀬田は待ち受けた様にうなずくのです、二階のスタジオには早くから今日の準備が出来ていました。

「ドローンはいらないから、これで簡単に顔を作つて下さい、出来たらすぐ始めますから、……この衣裳と全部とり換えて下

な透けて見えるのです

「時間がありませんから早くして下さい……」

カメラを調節しながら瀬田がせきこみました。

里枝は始めての仕事……、そんな興奮より、何故かこれから起る不安と羞しさ、恐しさが手伝つていくら勇氣を出して力を入れても体のふるえを押えることが出来なくなりました。

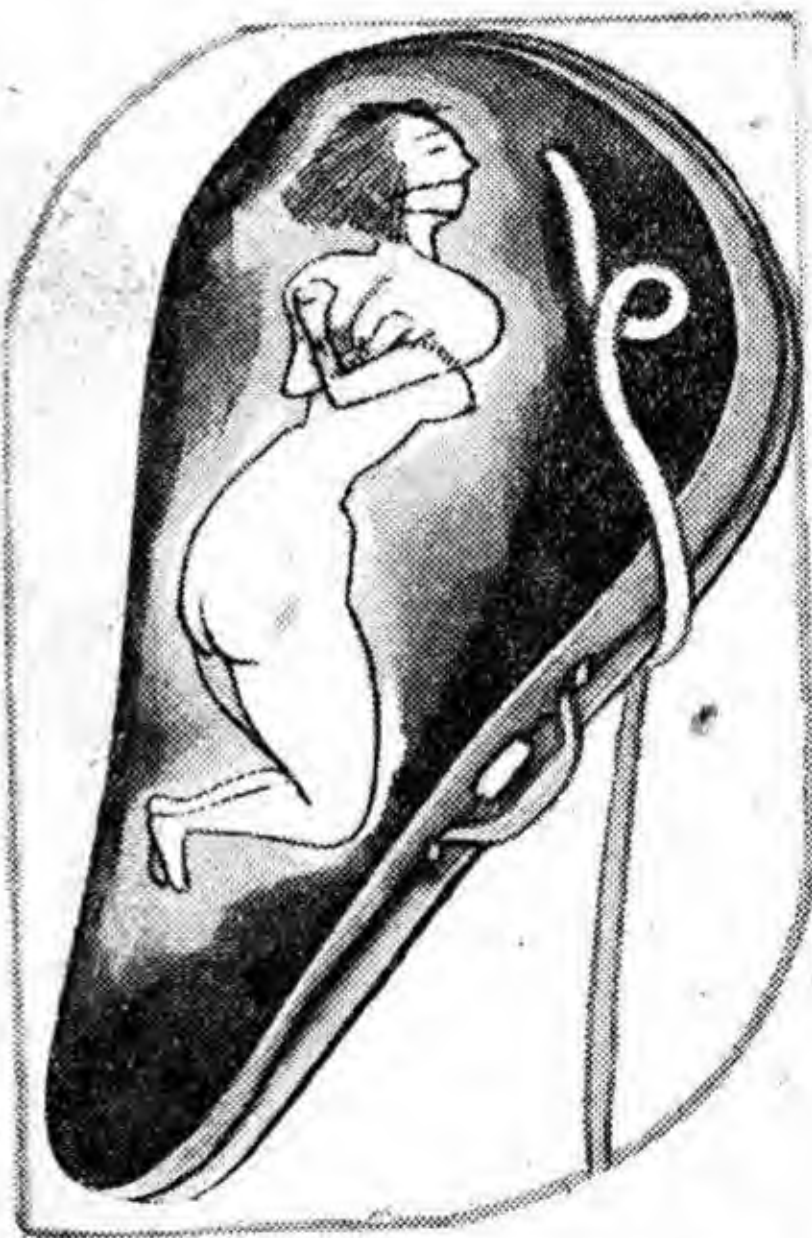
一度テストがあつただけですぐに本番に移りました。

「シユート」

滝尾は監督の威厳をこめて云うと瀬田はカメラを助手もなしに一人で引受けるのでした。カメラは廻り、里枝の扮する、新進スターは山と積まれたファンレターを満足そうにベットの端に腰かけて読み始めます。すると女中の中年婦人がお茶をもつて入つて来る、女中が出てゆくと、そこで里枝はレターを読みあきた風で立上り三面鏡の前まで行つて得意そうに全身を写して見る、色々なポーズをして自分の美しさに満足した表情をします。

ガウン（部屋着）をすてたパジャマ姿は、ライトの輝きでナイロンの魅力を十二分に發揮させてそこに里枝の美しい透けて見える乳房、あまりにも薄いパンティでたまらないのでした。

カメラが移動してアツプ……こゝで一層数多くのポーズを繰り



らヒツプへ、……美容体操で大きく広げた太股……、わずかな蔭影など、無いのも同然でした。

里枝は全身を染めガタガタふるえ上りました。一方、滝尾、瀬田はナイロン地を通して白い肢体の動きに予期以上の興奮と満足を与えられたらしく会心の笑を洩しあうのでした。

(四)

「大丈夫か？、一まず安心させた方が……」

「いや、もう少し続けよう」

二人は里枝に聞かれぬ様にさゝやいています、何にも知らない里枝は滝尾の命令に従つて今度は、ベットのの上に寝る所でした。

返えさねばなりません。

美しいこんな素敵な自分！

誰もいない私室で美容体操でもしているのなら、……そんな空想も廻るカメラの低い音に破れ去り痛い様な視線に追われては尚一層、羞恥に身を固くするばかりでした。

今度はいよいよ画面一ぱいのアツプ……、カメラが迫り瀬田のキラキラした瞳が無遠慮に里枝の胸の隆起を追い廻しますバックからナイロンの薄紫色を通して、くびれたウエストか

「リアル」に行く様にと滝尾の説明でテストなし、二人組の男が侵入してくる手はずになつてはいるのですが、そんな事は夢にも知らない里枝は豪華なベットのの上にパジャマ姿をして石の様に堅くなつてゐるのです。

照明を落して、やゝ暗くした室内へ、セツトの窓から助演の二人の男が大きな黒い箱をもつて飛び込んで来ました。

そしてベットを囲み次の瞬間、本能的な戦慄が里枝の全身を走りました。監督もカメラもその二人の男も無言です、毛布がすばやくまくられ二人の男が同時に襲いかゝりました。

両人が望んでいた姿です。

それは演技でなく必死の争いです、そうしてとうとうナイロンのパジャマは、はぎとられ里枝の両手は後でしぼりつけ、もう一本の紐は足にしぼりつけられました、ナイロンパンティ一枚の下半身にカメラが近づき四人の男の淫らな視線が迫つて来ます。

里枝は悲鳴を上げてものがき続けたが奇妙な形にくゝられた上ベットの上下から押えられた体は自由にならず、手早くはめられた猿ぐつわの下からかすかなうめきがもれるだけです、用意された黒の大きな箱、それは例のバイオリンのお化けの様なバス楽器のケースでした。里枝は二人掛りでその中へおしこめられました、すると突然真暗になつて蓋が閉められました。そしてそのまゝ宙に持ち上げられたのです。

「ストツブ」……………

殆んど泣き出しそうな里枝は滝尾と瀬田に慰められながら大急ぎで元の姿にもどつた時は日も大分暮れて窓辺には濃い夕闇が漂つていました。

「御苦労さん、びつくりしたでしよう」

里枝は言葉も出ません、

「では今日はおそくなりましたから又連絡があつたら来て下さい、後は大部分身替りの人がやりますからもう一息、アツプの処の表情だけ頼みますよ……………」

本当に名演技でしたよハハ……………、外にタクシーが待つていますから、それにのつてお帰り下さい」

滝尾と瀬田は玄関まで里枝を送つて来ました、里枝は一刻も早く一人きりになりたい一念で一ぱいでした。

自動車は里枝を乗せると暗くなつた路を走り出しました、そのとたん里枝は今まではりつめていた気持が急にほぐれ知らぬ間に後から後から涙が頬を伝つて来るでした。

滝尾と瀬田はその影が見えなくなると、

「フ……………」

すべては計画通り、ジツクリ愉しんだ上に、一儲けさして戴くかハハ……………」

(未完)

ククリスチーヌの受難々の全訳成る

B6判二二六頁、上製函入、ボール表紙、挿絵十五葉入り、
定価三百二十円 (送料四十円)
キドロシュトツク郷著・吾妻新・譯

クリスチーヌ全譯 (被虐の家)

発行所 東京都文京区蓬萊町一八、亜風社

本誌に三カ月に亘り連載の絶讃を博したサディズム文学の最高傑作と称せられる本書の全訳は全篇を通じて緊縛とさるぐつわ、汚辱と鞭打と凌辱の地獄の中に呻吟する美少女クリスチーヌの可憐な姿態を刻明に描写し、中央画壇に活躍する尖鋭画家の一方の雄(特に名を秘す)の筆によつてアブノーマル挿画に一陣の新風を吹き込んだ。曙書房代理部へお申込下さい

申込所 曙書房代理部



艶 臭 に
むせびて
奇 妙 な 告 白

水 上 流 太 郎

何と云う先天的因果な事でありましようか
僕は生れつき女のお腰に狂的な愛着を持つて
いました。この傾向は未だ物心もつかぬ小児
の時に既に根差していましたので決して後天
的な現象で無く生れ乍らのものであると最近
つくづくと思われて来るのです。その傾向が
幼少から一種の固定観念となつたのは、未だ
それが極く幼少の頃で、僕が幼友達の花子と
遊んでいた頃からでした。

花子は細面の愛らしい少女で僕とは遊び馴
染でよくその少女の家へ行つて、彼女と共に
その二階の雨戸を閉じた薄暗い部屋で遊ん
だものでした。その時僕はよく彼女の母親の
お腰を持出させました。彼女の母親は花子似

の愁い顔で細面の美人でした（僕は幼心にそ
の人に恋をしていたのかも知れません。）花
子の持つて来たのは白地に紺の絞りの木綿も
のと、赤い花模様美しい色彩のメリンスの
ものでした。

僕は花子とまゝごとくこをするのですが
何時も花子は美しい女奴隷で僕は王様になる
のです。シャツとパンツ一枚になつた僕は例
の木綿ものゝお腰を畳の上に真座まがいに敷
き、その上にあぐらをかきます。そしてもう
一枚のお腰の匂いを香いだり頬ずりしたり膝
の間に狭み込んだりして不思議な香りの陶醉
境をさまようのでした。

あゝ、その匂やかな女の香りが、僕を女の

体臭の狂崇とフエティシズムにさせてしまつ
たのです。不思議なお腰にしみた女の香り、
そして僕の官能を興奮させる赤い色彩、それ
が僕の心に消し難い印象を深く刻み込んだ事
は間違ひありません。それが僕の後年の宿命
の十字架でもありました。僕にこの甘美な女
の体臭の味を覚えてくれた花子は、小学校を
卒業する頃他へ移転して行つてしまいました
それから僕が稍々長じて十六七の頃、僕の
父親がカフェーを経営した時分最もフエティ
シズムに乱酔した頃でした。と云うのは僕の
部屋の隣が住込の女給達の化粧室兼寢室にな
つていましたから堪りません。

僕は夕方になつて、女給達が化粧を済ませ

偽らざる告白

て階下へ下りて行つてしまつた後で、入違ひに女給部屋に忍び込んで行つては片ツ端から腰巻類を香き廻すのでした。何しろお腰が婦人の肌近く、而も下腹部に巻かれているものだけに、その艶臭と来ては応えられぬ位強烈なものです。中にはたつた今女が腰から脱いだ許りと思える温味のある物には、フエティシズム独自の嗅ぐ、吸う、舐める、頬ずり、果ては自ら腰に巻くのです。そして腰巻を畳の上に敷詰めその上で、狂いのた打ちあらゆる女の匂に狂酔するのです。

僕は学校から帰ると何時も二階の窓際の場合で勉強するのですが、勉強の方は少しもみが入らず只ぼんやりと窓外の近所の物干場を眺めては、歓楽街の裏通りですから色とりどりの長襦袢やお腰がハタ／＼と風に翻つてゐるのにロマンチックな空想を浮べて眺め暮らしてゐました。時々自製の望遠鏡を出して眺めて見ることもありますが、望遠鏡は此方を見られずに、どんな遠い所でも細大洩さず展望が効くので興味は全く格別なものがありました。

そして夕刻が来ると僕は僕だけの秘密な天国の世界に入つて行くのでした。その中父は事業不振から、この商売をやめてしまつたので、僕のこの耽溺も自然打切られました。

その頃、実話雑誌に載つていた「腰巻の誘惑」と云う実話小説を見て、異常な興奮を覚えた事を記憶しています。その主人公は醜怪な容貌をした電線工夫で、猿のような小男なんです。その主人公が下宿している宿の娘のギン子に心密かに思いを寄せているのです。

或る晩、彼は小用のために二階から降りて来て、ふとギン子の部屋の前で立止まると、ギン子の寝息を窺つてから、懐中よりマツチを取り出し、シユツと灯をつけますと、メラメラと燃え上つたマツチの光に、あゝ生きた浮世絵ギン子の濃艶な姿体が浮び上つたのです。白いむつちりとした太股にからみ乱れた華美なお腰の幻像！その妖美！その濃艶！二三日して二階の物干場からギン子のあのお腰が消えました。ギン子の母親は風の仕業と思つて別に氣にも留めていなかつたのですが、フト或る日彼の布団を日干しする為に出した処バラリツとあの無くなつた筈のギン子のお腰が布団の中から出て来たのです。一切

を知つた母親は彼を下宿から追い出しました。彼はやがて夕方近く女装すると、まるで通り魔のように、或は広場の物干場に、又階上の物干場に、お腰の閃めく所まるで千変万化の如く出没し（ギン子よ！）と呻きつゝ次々にお腰を奪い去りました。

後年彼も遂に法網をくぐり得ず心なき刑事の功名心に天運尽き捕縛されますが、彼の住んでいた屋根裏を一目して、流石の刑事も舌を巻いたと云う事です。畳の上に真座敷に敷かれたものが、全部赤青黄紫、色とりどりのお腰だつたからです。四面の壁、夜具、寝巻、襦、電燈カバー、窓掛け等すべて盗品の腰巻だつたのです。此れが腰巻小説の圧巻でした。

後年もう一篇読んだ小説の主人公は、あらゆる有名人のお腰を蒐集する人物で〇〇と云う女優〇〇令嬢と知名人の物ばかり集める男で、彼はまた料亭の主人でお腰の同好者を求めて腰巻展示会や腰巻交換会を催す話です。

また其処の料亭に使つて居る仲居に真新しいお腰をさせ、そうして半月程させてから脱がせそれを高価に売るのです。半月程女の腰に巻かれていたゞけにほんのりと匂いがしてゐて、時には月水や小水のあとも着いて

いようと云うのだから堪りません。

競売せられると、男達が次々に嗅いでそれで金高を評価する件りが実にユウモアに満ちています。又その主人が風変わりで何時も夜が更けてから仲居を一人自分の部屋へ連れ込むと、コレクシヨンしたお腰を一枚々と女の腰に巻付けて行くのです。

その女は両手を天井の梁に縛られているのでただ身をくねらす許りで男は次々に腰巻を女の腰に巻つけて行く、次第に腰から下が腰巻の層で覆われて行く、やがて主人公は梁の紐を切ります。どたりと倒れる女、主人公は今度は待兼ねたように一枚々々女の腰からお腰を剥いて行くのです。剥ぐ度にゴロ／＼転がり廻る女体！一枚々々！そして最後の一枚！

そして、その散らばったお腰の上で主人が——女は観念して——と云うよりこの責めに氣を失う所でハッピーエンドとなる一編です。此の二作品が当時僕が愛好した二大傑作であつたのでした。

父が事業に失敗してから僕も學業を捨て一介の小店員として、或る呉服店へ住込みしました。やがて父も死に、僕は母と二人暮らしになり、店からも通勤を許されますと、二階を貸

すことにしました。最初は若い女給さんに貸していましたが、これは二年許りで他へ移りました。次に若い夫婦もの、これは一年程いて、続いて中年の夫婦者に貸したりしました。僕が彼等が不在の時にその女達のお腰をどのようにに慰んだか、全く罪深い仕業に耽つたものだとも思います。

その内、僕は年が長じ一人前になつて遊びの味を覚えました。がそれも悲しい哉女を受する為では無つたのでした。

何処の女郎屋へ行つてもその部屋に、その敵娼になつた女のお腰が二三枚壁に掛つていない事には承知出来ませんでした。

何時からともなく僕は氣の弱いマゾヒストになつていました。女と寝ても唇一つ盜めはしないのです。只管女と云う生物の目がひどく怖ろしくて、女と遊ぶのでなく遊んで貰う男となつていました。だから女が愛して呉れぬと、僕は時々不能になりました。女は冷笑して睡るその後で僕は女の膝からこぼれていゝるお腰によつて僅かに慰められるのでした。

此れが戦前の僕の自画像だつたのです。

戦後、僕の此の原因が急速に因果關係を結び恐ろしい罪の深淵に転落して行つた過程は前記の一篇の小説の筋書その儘の宿命図を描

くのですが、これは亦次の機会に譲る事としましょう。

僕の今日の考えから行くと独悦者は大体氣の小さな、それでいて人の好いマゾヒスト傾向の性情の持主であると思います。しかしマゾヒストでも無生物に対して極度なサディスティックな行為をすることがあります。人にはこの両極が存在する事が心理学上で証明せられているようですが、僕もそういった傾向がない事もないのです。

そして、それが或る一点で像を結ぶ現象が同性愛であつたり、フェティシズムだつたり汚物嗜好であつたりするのだろうと考えたりします。つまり僕の場合は腰巻がスポットライトされた訳だつたのです。

僕もお腰を自分の身体に巻くことによつて満足出来るのですから、まあ生来一種の典型的なフェティシズム者かも知れません。

お腰、お腰、お腰、僕はこの地上でこれ以上の妖美なるものを知りません。お腰は僕には地上の華です。(それを見ただけでカツと胸が熱く血が騒ぐ)しかし盗むことはもう出



来ません。と云つてお腰を恵んで呉れそうな殊勝な婦人はどこにもないし、金を出して買える腰巻には匂いがないし、又男の僕にはとてもみつともなくて買えません。

僕はそこで図らずも奇クを見つけ出しました。そして昨年の八月号に僅かに一篇待望のフエチシズム小説を見た時(変態コレクトマニア)その主人公のベソスに涙が流れました。何と云う善良な稚氣愛すべき彼の姿ぞ!そ

あるマゾヒストの手帖から

八月号の補遺と誤植訂正

(第十九、マゾヒスト国王) 鷗外の「水泡集」とだけ書いたが、詳しくは水泡集中「うたかたの記」である。岩波版全集三巻にある。

(第二十三、妻は天なり) 中川教授の著書名「女大学の批判」は「女大学批判」が正しい(第二十地獄の狂楽) 標題の前後に「」を附されたい。(第二十四、白人崇拜症) この

中で人間探究誌に載つていた読者相談を引例して「重点が、英国婦人の犬になることにあり」と書いたがこの相談者の症状は、根原的にはウロラグニアであることを念の為に書き添えて置く。本文にも書いた様にこれは非常に面白い症例であるから一読されるとよい。次の号に読者から募った解答が出ているが

して最後に彼もその嗜好の故に、法網の人となる運命! 悲しき蒐集狂の末路を!

そこで僕はこの蒐集慾を、今あらゆる雑誌や写真の蒐集に転じました。そしてそれも腰巻か長襦袢を纏える婦人の写真に、そうする事によつて僕はお腰蒐集癖を見事転換する自信を得ました。一種の昇華とも云えましょう。こんな奇妙な告白が何の参考にもならないでしょうが、僕は恥を忍び思いを忍んで告白

不十分なものである。相談者は植民地在住の内地人の子として生れているこの事は、手帳の第二十六の終りで書いた様に、サディズムにさそい易いが超自我の形成を高くする状況が重なる逆マゾヒズムに転化することが考えられる。又、幼時犬を殺した記憶を述べておりその記憶に変形した何等かの幼児期体験があつて、それが後年の犬願望を誘い出したように思える。犬願望も英国婦人Cの夫であるKの自動車にひかれて両脚を切断され四ツ這にならざるを得ぬという状況を設定しその状況の下で、Cの飼犬になりたいたく空想しており相姦自己懲罰の傾向が顕著である。誌上の解答はこう云う事を洞察せず常識的な答え方にとまづている様である。なお本誌八月号の「被虐性愛者の手記」はソヴァイェト(?)の女士官達の玩具になることを書いているので白人崇拜症の一例に数えてよいであろう。

することにしました。編集部の方々もこの哀れな愚人の願いをお入れ下さつて、時には奇ク誌上に腰巻長襦袢を羽織つた女の写真を載せて戴きたいと思ひます。そうした写真がどんなにフエチシズム者を喜ばせるか。

あゝ、そう云つた鮮明な写真をそれが僕のイメージです。この哀れな痴人の夢をかなえて下さい。

(第二十五、山椒魚戦争) 標題の前後に「」を附されたい。昨年の傑作とあるのは晩年の誤り。石川達三の「最後の英国」とあるのは「最後の共和国」の誤り。トリオン競争はトリオン競争の誤り。トリオン(Trition)というのはギリシヤ神話の海神ポセイドンの子で半人半魚の姿をしている。又、山椒魚などに近いイモリのことをトリオンという。そこでこの人間のように思想のあり、物のいえる畜生をトリオンに見立てたのである。レガッタはボートレースのこと、本当の人間を使つたトリオン競争は非常に面白い、しかも今迄に例のないアイデアである(第二十六、ある植民地的風景) 引用の全文は、単行本になつた「基地の子」に収められた。引用した部分の最後の行「だまつてしまいました」は「だまつて出てしまいました」の誤り。



両棲動物

(二)

—男色夜話—

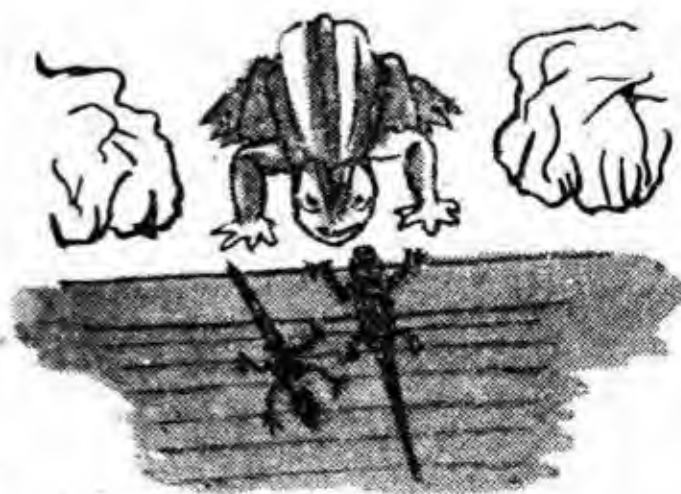
岡 真史郎
木内恒司・画

日比谷に集るゲイボーイは総じて数十名いるだろうが浮沈変遷が激しかった。彼等は入れ代り立ち代り現れた。一週間程現れないかと思うと続けさまに五日も十日も現れた。関西から遠征に来る者も先ず顔を出すのは此処だった。客の大半がサラリーマンであるから彼等も身だしなみだけは銀座色をまねていた。見たゞけで、飲食店かキャバレーのボーイと云う感じのするような恰好の者も居るしサラリーマンと区別のつかぬような者も居るし、貴公子然とめかして居るものもある。純プロとセミプロに別れ、外人専門と両方兼用

と、外人を相手にしないのとあつた。等級のあるのはパン女と同じだった。気の合つた者同志それぐのグループがあるようだった。戦前の日比谷には純プロは居なかつたろう。公然とゲイボーイ達が濶歩し始めたのは戦後のことである。多くはみ入りの良い外人の尻を追つかけた。

日本に上陸すると直ちに日比谷に来るアメリカ人もあつた。地球のソッドイクシン男色地帯以外では、この風習は嫌悪と厳罰をもつて迎へられている。アメリカもその一ツだった。GIは男色者であることが判れば兵役免除になる

ばかりか隊中ばれた場合は本国に送還され凡ゆる就職の機を失うのだ。女尊男卑の紳士道のやかましい国程そうなのだ。男色者！へん、彼等は絶滅させねばならぬ、毒蛇みたいな奴等〃と、支配者と残酷冷薄な多数決原理の民主主義が教えていた。アメリカの男色家にとつて日本は天国だった。日比谷はその入口だった。しかし彼等の方でも戦々競々としておびえていた。悪質のプロの中には、彼等をその筋へ訴えると云つて恐喝する者も出て来て不当に稼ぐのがあつた。それ等は得意顔に仲間に語られ、客に対して尻をまくるこ



とが珍らしくなくなつて来た。客の方でも賈札をつかませたり、強引に食い逃げたりする奴があつて、全体として日比谷の品格は下落しつゝあつた。居直つて洋服を剥いだり、枕探しをしたり、勤先や家庭まで押しかけて行つて暴露戦術で手切金をゆすつたりする毒魚がはびこつていた。

或夕、内幸町の歩道——ポリスポツクスの傍の便所の前で、バスの停留所より稍離れた地点に一人の老外人が帽子もかぶらず、背広にスプリングで漂然と立つていた。バスでも待つてゐるような恰好だつた。腹は突き出し尻は大きかつた。さつきから便所の前に五、六人寄り集つて話してゐたゲイボーイの一人は秘かに注意してゐた。背の低い普通の顔立ちの少年が外人の傍へ行つて話しかけた。皆はそれを見ていた。姉さん株の田川がもう一人に

「あいつ、今日始めて見る顔だね、啓ちゃん知つてゐる？」

と聞くと

「知らないよ、おチヨコで駄目なのか知ら」と呟く。

リーゼントスタイルのお花がそろ／＼傍へ行つて話しかける。おチヨコが戻つて来る。

「何なのさ？」

皆が顔を集める。

「今日横浜へ上陸したんですつてさ、とりあえず場所を見に来たんだつて、背の高いのが良いんだつて。」

「それならおコマが良いよ。」

と云つてゐるうち、薄化粧をし、めかした

当のおコマがすつと便所から現れて来たが音もなく外人の傍を通り過ぎ、一寸ウインクすると現金なもので老外人はスタコラおコマと一緒に帝国ホテルの方へ行つてしまつた。

「一目惚れさあますつてとこね」

「だらしない野郎よ」

お花が

「あら、少しこちらへも廻してもらえないか知ら」

「およしよ、花ちゃん、ガイなんかつまらないよ、私やあの匂いだけはいくら金をもらつてもいたゞけないね」

「腋臭なんて何でもないじゃないの、五分間で済んじゃうもの、天井見てお金のこと考へてるわよ」

「こつちのシャツまで臭くなつちまうんだもの、それに案外けち臭くて日本人の方がよっぽどいゝや」

しばらくするとおコマがぶらりと帰つて来た。皆は案外な顔で、

「どうしたんだい、振られたの？」

と聞く、おコマはさり気なく

「もつと齡とつたのが良いんだつて、また来ると云つてたけど、畜生！五千円取り損ねちやつた」

と云つて商売熱心に遊泳に出かける。ペーブメントを通るGIがあるところそれツクと魚がその辺に泳ぎ始める。帝国ホテルの方から一人の若いGIが急ぎ足で来たがそれに絡みつくように少年が走りながら何かしきりに訴えていたが二人は交叉点の処まで行つた。田川が云う、

「あいつ、またインチキだよ。」

「でもお富必死だわね」

しばらくすると、とう／＼お富は断念して帰つて来た。しよんぼりしている。

「どうしたのさ、富ちゃん」

「あつちの便所でさ、やつてやつたの、これしか呉れないのよ」

と手にしたもみくちやの二五セントの米国紙幣を見せると一同はチエツと舌打ちした。

「そして奴出したの？」

「そうよ」

「あきれた奴ね、なぐつてやれば良い」

「煙草一つ買えるよ、富ちやん」

一同は便所を絶えず注目していた。それらしい中年男が入ると誰か後を追つて便所に入つて行つた。便所の壁には性病薬の広告が貼りめぐらされていた。

向山はおヒロの一件以来男娼に対して幻滅を感じていた。また内容の稀薄な若い子に対し急に興味がなくなるのを覚えた。総てがおヒロのように下司つぽくなくとも危険性は覚悟せねばならない。彼は懷疑的な反逆的な、また嘲笑的な気持ちで夜の世界を迎え公園に立つた。もう以前のように歩き廻らなかつた彼は花道の下の樹蔭の石にじつと腰掛けてまるで意地悪い傍観者のように動かなかつた。それはイソギンチャクやホヤかサエのようであつた。八時前後になると魚族はぐるぐ廻遊していた。至る所にいるかと思つたとさつと皆居なくなつた。たつた一人座つてゐるのが馬鹿らしくなる頃にまたどつと一群が現れたりした。並木の向うには朝日生命館や三信ビル、八階と日活会館の九階の大建築が空をよこぎり、三信ビルのピーターズレストランの緑のネオン、日活会館屋上の真赤なネオンが点滅していた。通りまで出るとアニーパ

イルの城のような建築も日本生命のドーム屋根も又ノースウエスタン航空会社の白銀のネオンも更に廻転する。地球のネオン広告も見えるのだが……通りは警笛を鳴して走り続ける高級車が洪水のように流れ埋つていた。交通の騒音は公園の中まで侵入していたがしかし樹立の中は静かだつた。

さつきから盛々回遊していたやせたインテリらしい物腰の柔い男が通りがかりに向山の前まで来て煙草の火を求めた。彼はだまつてマツチをさし出した。背広の胸ポケットには真白なハンケチがのぞきマツチの火がパツと紳士の顔をてらした化粧はしているが顔のしわは隠せない年配の男だつた。相手は町重に札を云つて立ち去るといきなり若い子が彼の傍に来て腰掛ける

「今晚は、おじさ

ん遊びません」

と朗かに云つた。丸顔の愛嬌のある表情をしていた。

「君なんと云う名前なの」

「お花……どうぞ良ろしくね」

「この前も若い人と遊んだんだけど、何一つ話するじやなし……つまらないね」

「そりやそうよ遊んで戴くからにやお客次第で映画の話でも文学の話でもスポーツの話でもなんでもしなやね。サービスですもの」



「君は面白いけど今日は駄目なの、金がないから」

と云うとあつさりお花は立ち上り

「そうじゃ又この次ね」

と云つて去つてしまつた。

お濠ばたの門の傍の男色事務所は今や盛んな取引の最中だつた。真暗なヤツデのしげみに数人の男がものも云わずに立ちしきりのないうんちやんこにこれも又数人が目白押しに並んでいたが小便するでもなし互いに砲列をしいたまゝじつと動かないのだつた。そして互いに他の容色を抜目なく観察し合つていた気分がむくとびつたりよりそい相手の手を握りだき合うのだつた。絶対の沈黙と臭気と性慾が單的にからみ合いホモばかり互によりどり自由の肉体の市だつた。バツクスタイルと容色と生殖器をさらけ出していた。しかし此処へもあぶれたプロがカモを漁りに来ていた、彼等は忙しげに出入した。向山は暫くこゝをのぞいていたがものすごいノツポのやせたネグロが彼の隣で猛烈にオナニエの様なかつこうをしてキヨロ／＼しているのを見ると面白くなつて出て来てしまつた。白人が来るとすわとばかりその隣に砲列をしきに行くのもあつた。ちよつと手を握り合うだけで意志が通じ

るのかやがて二人はどこともなく立ち去つて行つた。総てがパントマイムなのだ、追いつめられた悲しさと不潔さと同僚を求める求道者の情熱と競走者に対する無視と男の性慾の劇しさと女の性慾のマゾヒズムが同時に苦しげにのたうつパントマイムなのだつた。

もう帰ろうと思つて向山が内幸町の歩道に立つた時彼の傍へ来て

「お一人ですか」

と聞いたハンサムな青年があつた。目の大きな鼻筋の通つた顔立ちには向山の趣味に完全に合つていた。すらりとしたスタイルで褐色のスプリングを着ていた。

「あなたも？」

ときくと青年は彼の腕をとつて歩き始めた二人は男の花道を登つた。

「ねえ、遊んでくれない」

「うん……ところで君はなんと云う人なのさ」

「誰でもいいじやないの、私、啓ちやんで通つてゐる、どう云う字かしら、佐田啓二に似てるから啓ちやんと云えば皆知つてゐるわよ、日比谷じや一番古いでしょう」

「じや大兄貴というところ？」

「まあそう……さつきそこにいたお客待たし

て来たの、お宅の方が私の好みに合うもの」

と云つて正面から向山の顔をしげ／＼と眺め向い合つたまゝ腰をつけてダンスの様な身振りて彼を迎えるのだつた。向山はたとえどれだけかかつて金銭で解決つくならこの美青年の肉体を所有したいと思つた。

二人は田村町の方へ歩いて行つた。啓ちやんはビジネスははつきりしていた。

「つまらない客なんて取らないの、こつちでビックアップするもの」

「じや啓ちやんなんか良いパトロンがいるんでしょう」

「そう、三人程ゐるわ一人はとても楽なの。

私あんな楽な客知らない一週間に一回で良いの、銀行員なんだつてその度に三千円くれるの五分間で終つちやうわ。鳥みたい、早漏だろうとその人云つてたけど」

「五分間で三千円じや大変ないとなみね……高いね。」

「その代り一晩映画から散歩からおつき合ひしなきゃならないもの時間がもつたないじやないの」

「かせがなきゃならないの？」

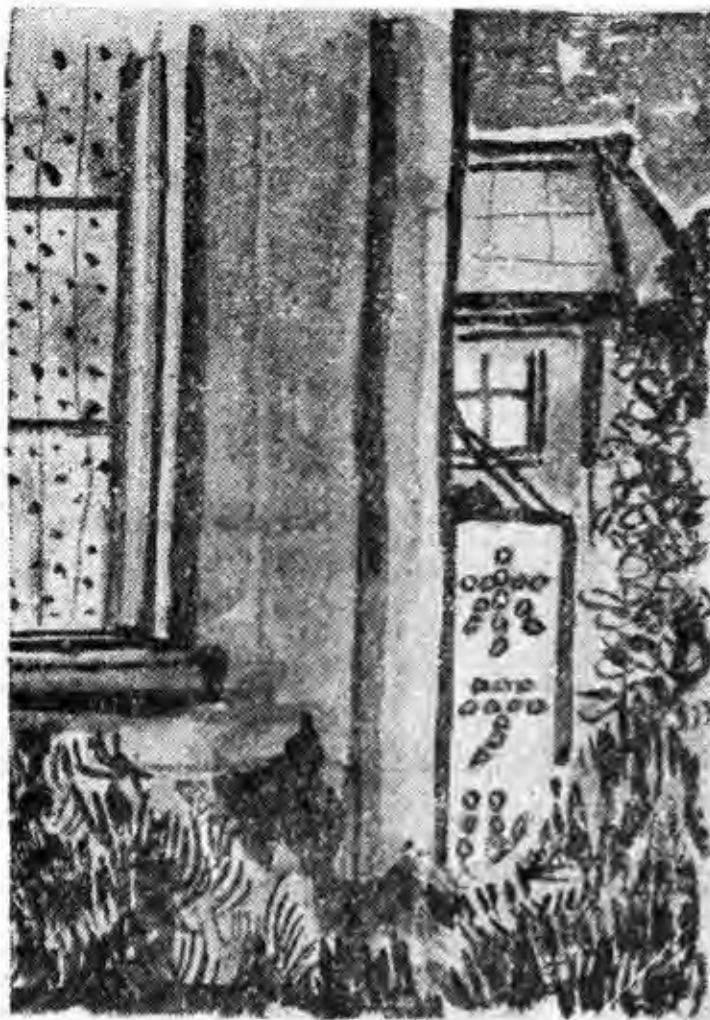
「そうよ」

「リツ屋だねあんたは」

「馬鹿おつしやい私昼間勤めてるでしようそう毎日も来られないし馬鹿な真似も出来ないもの」

向山はおヒロの一件を語った。

「なあんだお宅なの。おコマとおヒロでもめてたわよ。今度から私に話したら話つけてあげる、用心しないと駄目よひどいのがいるからね。勤めている連中のアルバイトなら大丈夫よ、そうあせつてかせがなくても良いでしよう。客筋の良いのつかまえてれば……これだけで食うとなるとやつぱり人以上に稼がなきゃならんでしよう、だからたかつたり尻ま



くつたりひどいことするのよ。名刺なんか渡しちや駄目よ、名前なんか云わない方が良い皆秘密でしようだから泣きねいりなの」

「この間僕はひどい目にあつたよ、浅草のT館でさ良い人つかまえて自動車に乗ろうとしたらきつと後つけて来たに違いない刑事と云つてね、一寸来いさ。もう一方の方は帰らしておいて僕だけねち／＼と説教なの。家庭をお持ちでしよう家庭に連絡しましょうかつて」

「うそつけば良いじやないの」
「バス取り上げやがるの、交番へ行こうと云うんでちぢみ上つちやつた」

「馬鹿ね、みていられない。行きましようつて行けば良いのよ。第一この方面の者つかまえたつて大して功績にならないんだからね。一応は説論しても放免よ……手帳に書いたつて表面のお芝居ですよ、ハア／＼云つてれば良いのよこんな遊ぶ時はバスも名刺も何も持つちや駄目、勿論偽名でさ所番地だつていつてもわかり易い何丁目一番地で

良いのよ」

「あの野郎、偽刑事なのかな、結局金借してくれなから」

「借したの？」

「わずかばかりだつたけど勿論呉れてやつた様なものさ、馬鹿／＼しいつたらありやしない」

「……」

「でも勤め先にでもバラされたら誠だものね冷汗が出たよ」

「お宅よつぽど人が良いのね」

「それはそうと啓ちやんなんか若い人が好きでしよう？」

「お宅位の中年の人が好き。若いのつまらなくつて」

「金になるからつてわけ？」

「勿論それもあるけど生活がしつかりして落着きの出来た男らしいのが良いわよ。肉体なんて最初の五分間だわよ、第一の興味はMだけどそんなもの直ぐ終つてしまふ。後は精神的內容でしよう、青臭いのなんかつまらないじやない」

「そう云えばそうね。僕も此の頃あんまり若いお人形みたいのいやになつちやつた啓ちやんみたいのが良いな」



「あら有難う」

「啓ちゃん、銀座のB知ってる」

「知ってるどころか有名なものよ、東京中で私の名知らない人ないわよなにしろ十七からですもの。でもあんな店つまらない、金ばかりかかつてさ」

「ああした店のボーイと較べものにならないね」

「較べられるの迷惑よ。こつちは大学も出たちやんとしたサラリーマンですもの教養が違いますよ」

「これは失礼」

「でも黙つてて下さいね、うるさいんですから」

ホテルのベツトで向山は啓ちゃんをおおむけに寝かせズボンのバンドをとりズボン下をはいた。彼は学生時代の解剖という悪趣味に学生がわいわい騒ぐのを思い出しこのノールな肉体の露出する瞬間の貴重な興奮に酔うのだった。毆井と生卵で精力をつけた美青年の体は潑刺としていた。

一夜の歡樂があけるとまるで刑務所か何か特別の暗い世界から出て来た様に社会が明るかった。巨大な資本主義の機構がぐる／＼廻つていた。男も女も極めてノーマルだったこの世界では向山課長は相変らずしかつめらしい面をし算盤をはじき帳面をくり判を押し若い社員に命令をし重役のお伴をしどこを押しても崩れた生活の腐臭が出る人とは思えなかつた。彼は啓ちゃんとは無関係だった。

啓ちゃんの情交をひそかに胸で暖めているうちに向山はこの事を半年程前から文通をしだした岡田テルに書いてやつた。向山の情事

は別に男が女に惚れ込む様な深刻なものではなかつたからこれがそれ程キザなものとも思われなかつたのである。向山がある雑誌に投稿した男色記事から関係してきた人間が岡田テルだった。向山はこうした一部のフアンからだけ先生と云われた、それは妙にくすぐつたく気持の良い言葉に響いた。岡田テルというのは不思議な人間だった。

岡田テルより来た来信は次の様な調子である。(続く)

読者通信

(投稿歓迎)

私の女に対する幻想を申し述べますと、ピタリと足によく合つた編上靴、ビカ／＼光る金具、のびちぢみする弾力性のある脚線、アイスクスケートをする若い女性の下半身は、乗馬靴をはいた女性のそれと同じく男性にマゾ的連想を起させないでしょうか、又ビヤホルの中央に立小便するヴィーナスの像を作り客に口を開けて飲ませるようにしたら。後手に縛つた全裸の女性を自転車にまたがらせ、ランプを反対に向けて責めながら責められる者の脚の動きを楽しんでみては?

(東京、A・H生)



サジズムの芽生

土井 楨 夫

この物語は、実際あつたことを、私が目のあたりに見て、当時のことを追想しながら書綴つたもので、幼い頃に受けた衝撃がどのような結果になるか、と云うことに對し、皆様の御参考になれば幸いと思う。

私の生れたのはS市であるが私の幼い頃、町角にあまりパツとしない貧弱な魚屋の店があつた。そこに敏子と呼ばれる六つになる可愛い女の子がいた。敏子の父親は後妻を迎えると、朝鮮へ出稼ぎに行つてしまつて、三年も帰らないということであつた。

後妻というのは、お白粉をべたくぬつた一目でそれとわかる玄人上りの見るからに意地の悪そうな女であつた。その後妻は夫が出

稼に出掛けると、すぐ自分の母親という五十年輩のでつぷり肥つた老婆を連れ込んで一緒に生活しはじめた。

その老婆も、後妻に輪をかけたような、底意地の悪い目付をした女であつた。老婆が来てからは、敏子は今迄より一層ひどいめにあわされるようになった。継母一人の時は、近所の手前もあり幾分遠慮があつたようだが、婆さんの押しの強さから、近所の人が見兼ねて止め立てすれば、却つてその人に喰つて掛るといった調子で、近所の人も可哀想に思ひながらも、しまいには見て見ぬ振りをするようになった。二人はそれをよいことに、打つたり、抓つたりする事位は毎度のことで、

敏子の悲鳴は絶えまないといつていくくらいで、近所の人は「今に責め殺す考えだろう」と話し合う程であつた。

「お母ちゃん、ごめんなさい、もうしませんかんにんして！」

と、ヒーヒー泣き叫ぶ声がすると、近所の子供達は好奇心から、その家の前に集つて、破れ障子から覗き込むのである。

僕もその一人であつた。しかし、まだ小学校の三年生で、いたつて気の弱かつた僕は、一度も破れ障子に直接顔を押しあてゝ、中を覗き込むようなことは出来なかつたので、一番前の子供が、「あゝ、裸にされた」「今もぐさに火がつけられた」とかいうその時その

告白する偽

時の報告と、「熱い／＼」という悲鳴で、その場面を想像して胸を躍らしているばかりだった。

しかし、その中幸か不幸か絶好の覗き場所を見付けることが出来た。

他の子供が、表障子ばかりに集っているの、裏の方には気が付かなかつたので、僕は何の気なしに折檻の行われている部屋の裏に廻つて見た。その家と隣家との間が、やつと子供一人入り込めそうな露路になつていて、あかり窓が一つあつた。そこ迄は子供の僕には届かなかつたが、その辺に捨てゝあつた七輪の毀れたのに乗ると、丁度障子の破れから部屋の中は、手に取るように見ることが出来た。やつと念願がかなつたのに、その日は、折檻が終つたあとらしく、裸のまゝ泣きじやくりしている敏子を、継母が後から、肩越しに手を掴んで、

「今度したらこの手にやいとをすえるから」

と云つて聞かせているところだつた。

きつと、つまみ喰いか、な

にかしたのであろう。老婆は用足しにでも行つたのか、そこには見えなかつた。

その日は諦めて、七輪の毀れたのをそつと脇へやると表へ廻つた、見物の子供達もそろ／＼帰りかけながら「やいと熱いだろうとか、今日は三つづゝ両腕に据えられた」とか、しやべりあつていたので、僕はそんな言葉聞きながら、次は心ゆく迄見てやろうと楽しみに思つた。

それから幾日か過ぎたある寒い日で、外には大きな牡丹雪が舞つていた。僕は、学校から大急ぎで家の近く迄帰つてきた時、附近の悪童達が何か声高に罵り合つていたので、又喧嘩でもしたんだらうと、後から覗いて見たするとどうだろう。あの継子の敏子をぐるりと取り囲んだ悪童達が

「こいつが取つたんだ、お母さんに云うてやるから」とか

「またお灸すえられるぞ、早よ取つたのん返してやれ」

とか云いながら、その中の一人が敏子の肩のあたりを突いている所だつた。敏子は黙つて、じつと皆の顔を涙をうかべて見ているだけ、一言もしやべらない。

「そら、お母さんが来た」

と一人が叫んだので、皆がその方を見た。

継母は掃除でもしていたのか、片手に箒を持つて、注進に行つた子供と共に、その場にかけて来た。皆が道を開いた。そして敏子の横に立つた継母を囲むように、ぐるりを取りまいた。

「一体どうしたの？」

と、継母が聞くと、えたりとばかり、一番がき大将らしいのが、

「こいつが、ケン坊のん取つたんだ、ケン坊泣いてるんだよ」

「何取つたの？」

「アメ玉だよ」

「ふん、敏子がアメ玉を取つたんだね」

「そうだよ」

継母は改めて、冷たい目でじろりと敏子を見下ろすと、

「お前、取つたの？」

と尋ねた、敏子がかぶりを僅かに振つた。

「嘘いつているんだよ、俺見たんだもん」

子供達は飽く迄取つたと云い張つた。

「敏子、本当に取つていないんだね、じゃその手を出してお見せ」

敏子は、かたくなに黙つて、じつとうなだれたまゝだつた。

「手をお出しつたらお出し！」

と片手で、じやけんに手をひきあけると同時に敏子は、

「ワーツ」と泣き出した。

敏子の掌から、黒いアメ玉が一つ取り上げられ、継母の口の中に消え、継母は

「ケン坊、これで又新しいのを、お買い」

と財布から一銭銅貨を掴み出すと、ケン坊に渡して、

「敏子、やかましい、泣きやまんの」

とピシリと箒の柄で尻のあたりを叩いた。

「今日は罰で夕食は喰べさせないからね、さあ、お帰り」

と、引立てるように家の方へ歩き出した。

僕は好機到来とばかり、急いで家に帰るとカバンを置き、家の者には学校に忘れものをしたからとつて来ると云つて、慌てゝ外にとび出した。敏子は案の状、門口で泣いている「やかましい、まだ泣きやまないのか」

と、継母は容赦なく箒の柄で打ちすえた。

敏子は更に大きな声で泣きわめく。僕は、継母に気付かれぬように、裏に廻つて例の七輪を台にしてあかり窓から、家の中を覗いた。

老婆は、炬燵の中でこつくり／＼居眠りしていたが、表の物音で目を覚ますと、大きな

声を出した。

「何処の子だい、大きな声で泣いているのはお政や、泣いているのは敏子かえ」

「そう、敏子つたら近所の子のアメ玉を取つて食べたり、一寸怒ればあんな大声で泣いたり、しようがないつたらありやしない」

「アメ玉盗んだのかえ？ 敏子が、よしつ連れておいで、うんと打ち懲らしてやらねば」

僕は、しめたと雀躍りした。今日こそ折檻の場がたんのうする程見られると思つたからである。

やがて、手足をばた／＼させながら、泣き喚く敏子を、横抱きにした継母が、無造作に畳の上に転がすと、

「私は一寸、片づけてくるからね」

と老婆に云い残して、表の方に行つてしまつた。

「ごめんなさい、ごめんなさい」

と泣き叫ぶのを、炬燵から出て来た老婆は敏子の首筋を掴むと畳に押しつけ、背中や尻を拳で殴りつける。やがて、着物を剥がれ、色褪せた赤い腰巻一枚にされると押入れから細引を出して、足を縛り手は胸のあたりで両手合せて縛つてしまつた。

敏子はもはや免れぬとは知りつゝも必死

に許しを乞ひ泣き叫ぶ、

「それでも泣くか、これでもか」

裸の肌の手あとがつく程打ち叩く老婆は正にこの世の鬼婆のような形相である。継母も、あと片づけが終つたのか、前掛で手を拭きながら、立つたまゝそのまゝその場を見ていたが、

「どんなに泣いたつて、許さ

れないのだから観念すればいいのに」

と云いながら、仏壇の抽出から小箱と線香を取り出し、転されている敏子の頭の傍へ来て座つた。

「やかましいね、泣くところすのよ」

と口の端を抓つたようだったが、私には母親のかげになつてよく見えなかつた。余りの痛さに泣くのを忘れたのか、一時泣き声は止んだ。

老婆は箱からもぐさをつまみあげると、一寸指先に唾をつけてくる／＼と丸め始めた。

「何処に据えるの」

「泣くのはお腹に虫がいて、あばれるからその虫を追出してやるのさ」



告白する偽

「じゃ、お腹ね」

継母は腰巻の紐を解くと、するりと抜きとつて、ぽんと後に投げた。

もぐさは、臍の下へそら豆大のが三つつけられるとも線香の火がそれを焼いた。三つとも白い煙を上げて、次第に肌を焼き始めたのである。

「熱い／＼、婆ちゃん、母ちゃんごめんなさい、熱い／＼」

と、身をもがこうとするが、縛つた手の上から継母がしつかり押えつけ、老婆は足の上に馬乗りになつていたので、身動き一つ出来ない。僅か六つ位の子供が、その灼熱地獄の責め苦を耐えるのは如何ばかりのことだろうか。私は手に汗を握つてその場の有様をじつと見つめていた。

継母は、薄笑いさえ浮べている。あゝ、何と云うサディスティックな女達であろうか！やがて、煙も出なくなつて黒いもぐさの灰かたまりを残して火は消えてしまった。老婆はその一つ／＼を指で押し、もぐさきりをする、又新しいのを臍の上に三つのせ

る。又しても起る、哀しい叫び、僕はもう夢中でぞく／＼身をふるわしながら見ていた。

やがて、灸を据え終えると、「このまゝ転がしておけい」と、老婆はさつさと、炬燵に入つてしまった。継母は、小箱と線香をしまうと、台所の方に行つてしまった。

外は牡丹雪さえ降り始め、室の中とはいえ着物も腰のものさえ剥ぎ取られて素裸のまゝ、置に縛られたまゝ転がされている敏子は、どんなに、寒いことであろうか。

僕は、初めて折檻の場面を見て、ある興奮にかられ、それから度々、敏子が、風呂に逆さに突つ込まれたり、井戸端で、腰巻のみで

深夜

谷北成也

まなじりのふるえのしばしうしろでに
はだにくさりのひきしめられつ

おとがいにさしのべられし革むちにただ
うなだれてまなことじける

ひきたてしむちのうなりはきびしくも
うなじのもとにまきつきにけり

井戸の屋根の柱に縛りつけられて、冷水を浴びせられたり、棒で打たれているところを見る度に、興奮の度には更に強くなつていた。遂

には、そのような責め場を見なければ、もの淋しくて仕方がないようになつてしまった。大きくなるに従い、年頃の女を縛つたり、虐めて見たいという衝動にかられるが、それは残念ながら、その場面さえ見たことがない。

あの敏子が子供でなく、年頃の娘であつたなら、僕の満足は更に大きなものであつたらう。私自身、「継子虐め」を覗き見たことから自然に、サディズム的性質の培われたことは否めない事実である。

うちひびきうなりしむちは百ひきの
蛇のとびかうはねかとおもう

いましめのほそきくさりはきらめきぬ
むちふりひびくたえまたえまに

うちふしてあせのにおいにいきづける
むちの小止みにしづもれるとき

かたわらにばら紅いろのうつつにもこ
のしむちはむちうたれつ

ゆきよるせめのちごくえ
雪夜責地獄繪

哀艶責め場絵噺

岩 廣 志

三條春彦・画

手本の悩み

江戸に現れた黄表紙——恋川春町の「金金先生栄華夢」初版が、アツと云う間に売りつくされた安永四年師走のことである。

責め場物に興をもつて、その特異な画筆の巧みさを江都の珍画蒐集狂の間に知らしめんと、漸く此の頃、発起した浮世師の松野親信は、出先で買い求めた黄表紙、金金先生栄華夢を懷に、霏々と降る雪を



春彦画

まともに体に受け乍ら、思案に余つた浮かぬ顔で戻つて来た。

「まあ大変でございました事。出先が判つて居りますれば、傘を持つてお迎えに参りましたものを——又、此のように急に降り出すとは思いませんでした」

眉を剃り、カネを染めた新妻のお志津は、土間へ立つた親信の体の雪を、払い乍ら、済まなさそうに良人の顔を覗き込んだ。

「いや、心配はいらぬ。出先で借りる気なら借りて来られたのだが大した事はあるまいと思つてな」

いたわるように優しくそう云つて、親信は髪の上で解けた雪の水玉を指先で払い乍ら座敷に上ると、火鉢の上に両の手を重ねて、ガツクリと頭をたれて思案に沈んでしまつた。

「あのう、何処かお体でも悪いのではありませんか？」

お志津は傍から熱い茶をすすめ乍ら、親信の顔を覗き見て、美しい眼許を曇らせた。

「何故そんな事を訊くのさ？」

「何んですか、余りお顔の色が優れませんから、もしや何処かお悪いのではないかと思ひまして——」

「体が悪いのではない、絵の構図に悩んでいたのだ。ありきたりの絵では既に世間では受けなくなつてきている」

「あなたの絵はかわつてゐるではありませんか。浮世絵では、既に名の高いあなたが、今度初めて試みられたあの絵が、今迄の絵とかわつていなくて、他にかわつた絵があるでしようか」

お志津は励すように——しかし淋しく云つた。浮世絵師として、既に名の高い親信が、好んで書き始めた責め場の絵は、お志津にはたまらなく嫌だつたのだ。

「今迄の絵を続けても、決して松野親信の名声はおとろえはしないのに」

そうは思い乍らも、絵に見識をもたぬお志津は、親信の画筆の転換に意見は差しはさめなかつた。

「お前は芝居を見た事はないのか？」

「ございます。でもそれはずっと以前の事で母に連れられて、一度だけ見ました」

「その時、絵看板を見なかつたのか？」

「見るには見ましたが、只チラツと見ただけで、心に止めては見ませんでした」

「今日俺が持つて行つた絵はそれなのだ。芝居の看板絵にザラに有るような絵を書いて、かわつた絵だとは自惚れていた自分が羞しくなる」

親信は、炭火の熱さを顔一面に意識し乍らじつと両眼を閉じた。着物の上から、粗縄で縛つた娘に、七首をかざしていともうとする絵を、特異な絵と思つて自惚れしていた自分が羞かしかつた。

「——先生、どうせお書きになるんでしたらもつと思ひ切つた妻味のある物をお書きになつては——」

注文先の万寿屋の言葉が、親信の脳裏に、刻みつけられたように離れなかつた。

当時、江戸の財閥の一ツに数えられた豪商万寿屋徳兵衛は、数名の絵師の中から、特に流麗な筆捌きを以て知られる松野親信の絵を高く評価していたのである。

精力絶倫を思わせる肥大な万寿屋徳兵衛は親信の持参した責め場の彩色絵を、暫くは感嘆の眼で見つめていたが、

「流石は松野先生、実に見事な出来栄でございます。しかし先生、此のような事を申し上げましたら、差出がましい奴とお思いかも存じませんが、此の女から着物をはいだら、一段と凄艶な絵になるのではないでしようかねえ」

親信の顔を見て云つた。

「裸体の女の責め場の方が凄みがある、と云われるのですな」

「勿論此れは、素人考えではございますが、先生のお考えは如何がでございますようか」

「――」

親信は腕を組んで眼を閉じた。

万寿屋に云われる迄もなく、親信は、幾度それを頭に思い浮かべたことであつたらう。

緊縛された裸体の美女の責め場！ 浮世絵師松野親信が、幾度か筆に託そうと考へ思つた場面であつたか。

だが、其処に大きな問題が取上げられるのだ。均斉のとれた、美女の裸体が、モデルとして絶対的に必要なのだ。

改めて此処に書くまでもないであろうが、当時の女が、如何に人の目に素肌を触れさせる事を恐れたか——恥としたか。まして男を知らぬ生娘の全裸の姿を求めるとしたら、これは如何に名声高い絵師の懇望であろうと、高値な代償を投げ出そうと、絶対不可能な事だつたのである。

もとより、人妻にしても、良人との閨房の秘技以外に、その素肌は見せなかつた。

浮世絵師、松野親信ともある名画工が、衣類の上から、女の素肌を想像し、描き得られない事はないであろうが、其処に浮彫りされ

る偽りの線は、芸術の意慾を満足させよう筈はなく、いや、それこそ彼自信の心が許さなかつた。

全裸の生娘——否人妻でもいい、男の肌荒れきらぬ、生娘の名残りを止どめる女の全裸体を描いて見たい！ 此れこそ歴史に名を止どめた安永年間の名浮世絵師、松野親信の見はてぬ夢であつたのだ。

「万寿屋さん、今あなたに云われるまでもなく、わたくしは、何度それを考えた事だろう。だが、手本のない女の裸を、そのまゝ筆に染める事は、わたしの心が許さない。いや、いい物の出来よう筈はない」

親信は苦しうに万寿屋の顔を見た。

「ハツハハ……先生ともあるお方が、唯そんな事で諦めなさるとは――」

万寿屋は、脂ぎつた顔にズルそうな笑いを浮かべて、

「此んな事を申し上げると、お怒りになるかも知れませんが、先生のお内儀さんは、以前は、此のかわいではならした美人、先生のお仕事の為だつたら、悦んで、その手本の役を果されるのではありませんか。それも、子供さんがお有りだと云うのでしたら、話は別ですが、まだ先生の所へお嫁きなされて日も浅く、なまじつか、其処らの娘より、余程素晴らしいお手本だと思います。わたしなんか、まだお志津さんが先生の所へお嫁きなさる前、是非一度は、あのような娘を——なんかと、いい年をしている癖に、そんな考へを起した事もございましたよ、ハツハハハ」

殊更冗談らしく笑いに紛らした万寿屋だつたが、羨望の色は隠せなかつた。

「何んと万寿屋さん、わしの妻を手本にして売物にしると云うのか？」

親信の眼は鋭く光った。

「まあ、先生、そうお怒りなさつては困ります。唯、思いつきを申し上げただけで、おすすめ申して居る訳ではありません。いや、先生のお心が、其処までいつていなさるのでしたら、万寿屋、かならず近い中にお氣に召すようなお手本を探して差上げます。兎に角今日は何もございせんが、是非一杯召し上つて行つて下さいまし」

万寿屋は慌てて腰を上げかけたが、

「いや、今日は他に用事もあります。何づれ又御造作に預りましよう」

親信は優れぬ心持で座を立つた。

外には白い物がチラ／＼降り始めていた。

抵抗

自分が描こうと心掛ける物に、手本を必要とするならば、万寿屋の言葉ではないが、妻のお志津以外に何者があるう。

他の女から、禁断の果実の汁を絵筆に染める事が不可能であれば今の野心を満足させる為に、妻の肌を筆に染めるより以外にないのだ。

責め場の絵には、嫌悪を感じているらしいお志津が、進んで手本になる筈がない。

しかし、断じてこれはやりとげよう。これが原因で、お志津は自分の許から去るかも知れぬが、もとよりそれは覚悟の上で――。

火鉢の端に重ねた手の上に、顔を伏せていた親信の心は、やがてそう判然と定まつた。

「志津！」

「はい」

「折入つて、お前には是非頼みたいことがあるのだ」

「まあ何んでございましょう、急にそのようにお改まりになつて――」

お志津は愁わしげに、良人親信の顔を見入つた。

「お前に一ツ手本になつて貰いたいのだ」

「手本？」

「わしが書こうと心掛けている責め場の手本だ。もとより着物は愚か、湯文字一ツ身に着けてはいけない。本当の素ツ裸になつて、わしの手本となるよう、責め場の型を作つて貰いたいのだ」

「まあ貴方を仰有います。如何にあなたの商売の為と云え、そのような馬鹿氣た姿になるのは嫌でございます。」

お志津は思わず後ずさつて、唇を震わせた。

無理もない！ 親信はそう思つた。

閨房にあつて、直接肉体に触れられるよりも、白日下に全裸を曝す方が、如何に良人の前であるとは云え、それは堪え得られぬ嬌差であつたのだ。

「頼む、是非わしの願いを聞きとどけてくれ。他に良き手本があれば、お前になど頼みはせぬ。他にそれが無いばかりに、お前に斯うやつて頼むのだ。お前の体を世間の者の目に曝そうと云うのではない。唯、一時わしの絵の手本になつてくれさえすればいいのだ」

「同じことでございます。あなたがそうして書いた絵が、世間にあ

れば、わたしの体を世間の人の眼に売り物に出したと同じことでございます」

「違う。お前の体は飽迄お前の体だ。絵は飽までわしの心だ筆だ」
「いえ、如何にあなたの頼みでも、此れだけは嫌でございます。お願いでございます。責め場の絵などと云う、恐ろしい絵は書かないで下さい。お願いです。あなた——」

美しいお志津の両眼には、ウツスラと涙さえにじんでいた。

さもあるべき事よ！ 親信は、腕を組んで眼を閉じたが、一気にそれだけ云い切つてしまつた後の心には、尚その絵に対する意慾が激しく燃えたつた。

「志津、頼む！ わしが一生一度の頼みだ、わしにお前の体から、女の裸の線をしめさせてくれ！」

「お願い、それだけは御勘弁下さい。他の事なら、何のようなこともいいとはいは致しません。今宵から、裸で寝ると仰有れば、裸で寝も致しましょう。でも、お手本だけは御勘弁下さいませ」
「どうあつても、聞いてくれぬか？」

「そればかりは御勘弁下さいませ！」

「そうか」

親信の心の裡に、最早抑えることの出来ない欲求が、音たてて狂いたぎつた。

突如、親信は狂人の如くお志津の体に躍りかゝつた。

「アツ、あなた！」

お志津は良人の眼を見た。顔を見た。あの女のように優しい表情はかき消えて、凄まじい眼の色は常人の眼の色ではなかつた。

「は、離して！」

お志津は恐怖に戦き乍ら、必死に良人の腕から逃がれようと試みた。処女が痴漢にいどまれたような、本能的な恐怖だつた。

だが、絵筆より重い物を持たぬ力の親信ではあつても、お志津との、必死！ の二語を比較する時、流石に男だけに勝つていた。

帯が解けて畳にうねつて、着物が破けて、お志津の体からはぎ取られた。

「許して！ あなた許して下さい！」

お志津は泣き叫んだが、親信の耳にはいらなかつた。襦袢が引きちぎられて、赤い湯文字がお志津の腰からむしり取られた。

お志津は尚も逃がれようと抵抗を試みた。しかし、それも空しく悲しい抵抗に過ぎず、お志津はやがて、其処の柱に、しごきで強く結びつけられたのだつた。

親信は、ヨロ／＼とよるめいて、ガツクリと腰を落す。荒い呼吸が止めどもなく唇をついて、額には玉のような汗がネツトリと浮かんでいた。

心の光り

行燈の灯影に、クツキリと浮き上つた、妻の全裸の姿を前に、画帳を片手の松野親信の顔は、凄まじく蒼白く冴えて来た。外は、しん／＼と音もなく雪が降り積つてゐる。

あの野獣のような荒々しい昂奮が醒めると、芸術家の拵つ冷徹な心が、所謂情操を没却して、物に対する観察と批判だけが、鋭く剃刃の刃のように、親信の心に動いた。

「美しい！ 何んと云う美しさだ！」

親信は思わず呻いた。

幾夜、此の腕かいなに抱きしめ続けて来た妻であつたろう。しかし、肉体の美しさは、親信の目には真新しい大きな発見であり驚きであつたのだ。

争いの為に浮いた脂肪は、白絹のような肌に光沢を添えて、着物の上からは、ホツソリと見えた肉付も、隔てる物もない眼には、豊かな弾力を帯びた、妖しい程の魅力であつた。



春彦重

改めて結い整えた丸髷は、根本から崩れて、漆黒の髪の毛は、長く横に垂れ下り、物云わぬ唇を切れる程噛みしめた表情には、隠し切れぬ反抗と呪が漂っていた。

丸い肩、処女と変らぬ固い乳房。やゝ張つた下腹部、細つそりと引しまつた腰、左右に丸く張り出した臀部、太股から一筋の線を以つて仕切られた二本の足の流れ――。

親信は、美の極致に酔う者の如く瞬きもしなかつた。

やがて親信の右手の筆は、憑きものがしたかの如く画帳の上を走つた。

「出来た、出来た、見事に出来たぞ！」

やおらして親信は、画帳を片手に立上ると、子供のように其処らを歩き廻つた。

今日まで、幾人かの美しい娘をモデルに、其の時々の快心の作をものにして来たが、それ等は、凡て着物の上からで、これ程までに血潮の通つた凄艶な全裸の姿を描き上げた事は一度としてなかつたのだ。

「責め場だ。何んと云つても責め場の絵だ。如何に美しい女を手本にしようと、着物に包まれた姿は、唯きれいにすぎないのだ。血の通つた誠の美しさは、裸以外に何ものもない」

親信の心は、初めて、新しい方向に活路を見出したのである。

外はおとろえもなく雪が降りしきつて、火鉢の炭火も残り少く、部屋の中は外気の如く冷えてきていた。

お志津は激しく身震いした。良人と争つた昂奮が次第に醒めると彼女は訳の判らぬ悲しみに捉えられて来た。唯泣きたいような衝動

だつた。

自分の此の憐れな姿への同情の悲しみではない。絵筆を画帳に走らせている良人親信の犯し難い悟入の姿に打たれた、自分の心の敗北に寄せる悲しみの心だつた。

人に媚び諂^{へつゝ}うて生きる多くの人々の中に、自己の仕事の為に、神となり鬼ともなつてただ一個の靈魂の塊りと化した良人の姿は、近寄り難い気高さであつた。

見よ、一と度ものにした靈魂の躍動を、片手に欣喜して舞う親信の姿は、妻をめとつた成人のそれではない、東西の判別すらつかぬ小児のけがれない再現だつた。

お志津は何時か、ククツと忍び泣いていた。涙が幾筋か蒼白な頬を伝つて落ちた。

「おゝ、落まなかつたなアお志津、つい乱暴をして。だが悦んでくれ、お蔭で素晴らしい物が書けたぞ、今までわしに書けなかつた素晴らしい物が書けたぞ」

親信は我に返つたように、お志津の体からしごきを解きはなして冷え切つた体を抱きかかえて布団の上に坐らせると、彼女の着物を背後から掛けてやつた。

「申し訳もございません。あなた——」

お志津はガツクリと畳に手を落した。

「何を云うのだ、詫びなければならぬのは此のわしだ」

「いえ、私は愚かでございました。私は今日初めて、あなたと絵を切り離して見る事の出来ない尊いお姿を知りました。何故私は、もつと早くそれに気付かなかつたのでしょうか」

「——」

「あなた、此んな醜い私の体が、お手本になるのでしたら、どのような責め場の仕草もいといは致しません。その為^なに此の命が失くなりましたようにとも、私は親信の妻として、満足でございます」

「志津、それは本当の言葉か？」

「はい、初めてそう覚りました」

「そう思つてくれるのか。有難い。お前のように整つた美しい女の線は、他の女からは決して求められないだろう。わしはお前を手本に、世の人をアツと云わせるような物を書く。」

今だ曾て、裸体の責め場を描いた絵師は一人として居らぬ。いやそう心掛けて居る者も少くはないだろう。しかし、手本の良いものがあつて、初めて優れた物が出来るのだ。その点わしは恵まれたのだ、世間の者が何んと批判しようと、絵師仲間がどう誹謗しようとわしは責め場絵の一人者として、かならず名をだして見せる！」

お志津に云うよりは、自身に云い聞かせるような熱の單もつた言葉だつた。

親信は、不意に妻を引寄せた。力限り抱きしめると、求めるように、お志津の唇が親信の唇の辺りにゆれた。

それから後の親信の生活は狂人のようであつた。

刻一刻の、妻の肉体の老化を恐れるかの如く、責め場百態を念願として、素描だけを画帖の上に幾十となく描き止めた。

とは云え、裸体を緊縛しての責め場で、充分に変化のある型がそう幾十となく有る筈はなく、衣類を纏うた姿、半裸、全裸と姿を変え、天井つるし、立木しぼりと、見る者をして眼を反けしめる場面を、筆に走らせた。

お志津もよく堪え、親信の命令の儘に従つた。しかし、念願であ

る百態の図は、親信の構想では、まだ遠かつた。

「暫くの間、型を描くのは休むことにしよう。今のわしの頭では、此れ以上の変化のある型は考え出せない。当分の間は、今迄書いた図を、一枚々々丁寧に仕上げるつもりだ」

親信は画帳を畳んで、ホツと息をついた。

休む隙もなく、筆に精魂を注いで来た彼の神経は著しく衰弱し、寒昼寒夜、裸体の責めに終始して来たお志津の五体からは精力が失せていた。それは肉の上にも大きな変化だつた。あの艶々とした肉体は、老化にも等しく光沢を失い、縄摺れの痕が、無残にも幾箇所かに血潮をにじませていた。

不憫な事をした！ フト自戒に戻つて、妻の痛々しい姿を見た時親信の心は、急激に愛しさを感じた。その愛しさは物狂わしい変態的な慾情となつて夜毎に現れたのである。

此の年は、明けて安永五年正月の十日であつた。松飾りもとれたばかりの江戸の町は、今朝からの雪に閉じ込められて、松野親信は一枚の絵を、丹念に色を彩っていた。

「おゝ、そうだ！」

親信は不意に大声で云つて顔を上げた。

「まあ何んでございますか？ びつくり致しました」

妻のお志津は、傍らから縫物の手を止めて親信の方を振り向いた。

「スツカリ忘れていたが、今日は頼まれた絵を万寿屋に届ける日だつた。」

「まあ、左様でございましたか」

「向うで取りに來ると云つたのだが、朝は上るか、夜になるか判らぬから、こちらから届ける、と判然約束して来たのだ。向うでは、

今夜にも必要らしい口吻だつたから、直ぐにも届けなければならぬだろうが——」

親信は筆を途中で置くのを惜しむ様子で、画面の上に当惑の視線を投げたが、

「あのう、それでは、私が一寸行つて参りましょう、大して遠い所ではありませんから」

縫物を膝の上からのけて、お志津はもう立上つていた。

「そうか、お前が行つて来てくれるか。しかし、此の雪では大変だなア」

「いゝえ、大した事はありません。私すぐに歸つて來ますから。それからでも夕御飯の仕度、遅くはないでしょう？」

「いや、そんな事は心配いらんが、とにかくそれでは行つて来てくれ、大変だろうがな」

親信は直接絹地の上に書き上げた、天井つりの責め絵を、お志津に手渡した。

親信にしても、お志津にとつても、此の絵は最も努力を要した思ひ出の作品であつたのだ。

お志津が出てゆくと親信は再び仕事に取りかかつた。

どの位の刻がすぎたか、親信は、フト画面の上が暗くボヤケテ來たのに気付いて、顔を上げて見廻した。

辺りはスツカリ黄昏れて、濃い夕闇が忍びこんで來ていた。

「もう此んな時刻になるのか！」

親信は思わず一人こちて気つかわしげに眉をひそめた。

それにしても妻のお志津は一体何をしているのであらう。余程ユツクリしても、半刻もかかれれば往復出来る位、わずかな道程である

のに未だに戻つて来ないのだ。

「何か途中で間違ひでもあつたのではあるまいか？」

と思うと、親信は、居ても立つてもいらぬ焦燥にかられて、外へ出た。雪は降りやむさまもなくひよう／＼と舞つてゐる。

雪を蹴りたてるように、急いでやつて来た万寿屋の店先に立つと

「おや、松野先生！」

一早く親信の姿を見つけた番頭が、慌てて腰を浮かせて来た。

「番頭さん、お志津は来て居らんかね？ 注文の絵を持たせて寄こしたのだが、余り戻りが遅いので、途中で何事か出来たのではないかと思つて、来て見たのだが——」

「えゝ、お居出になつて居ります——」

番頭は困惑の色を浮かべたが

「一寸お待ち下さい」

そう云い置いて、慌てて奥へ消えて行つた。

間もなく戻つてくると、

「どうぞ、お上り下さい！」

番頭のうしろから、妙に落付かぬ心持で跟いて行つた親信は裏庭に面した奥座敷の襖をあけると同時に、思わず棒を呑んだように、しきいの上に突ツ立止まつた。

裏庭に面した障子は一つばい



にあけはなたれ、庭樹に舞う白雪は、豪華な大行燈の灯を受けて美しく、寒さも忘れた雪見の宴は、此の上もなく風流ではあつたが、その宴席に座をしめてゐるのは僅か二人。万寿屋徳兵衛、妻のお志津の酒に耽溺した見るもいまわしい姿だつた。

二、三本の空徳利が、だらしなく一脚の膳の傍に転つて、しなだれかゝつて、お志津が唇の所へ持つて来てくれる盃の酒を、目を細めてさもうまそうに啜つてゐる万寿屋は、初めて親信の姿に気付いたように、顔を上げてニヤリと笑つた。

「おや、此れは松野先生、今雪見と酒落て居りました所ですよ。さゝどうぞ御遠慮なくお入り下さい」
フラ／＼と腰を上げかけたが、

松野

「いいじやありませんか、もつとお飲みなさいよ」

お志津の手に引止められて、他愛もなく腰を下してしまつた「お志津！」

親信は真ツ蒼に顔を引きつらせて、ワナ／＼と拳を震わせた使いに出て帰らぬ妻を案ずるの余り、絵筆を置き、雪を蹴り立て、尋ねて来て見れば、何んと云う相だ。

親信は余りの驚きと、悲しみと、怒りとで、後の言葉は暫く出なかつた。

当時の刑法が姦通にどれ程重きをおいたか——いや、此の場面を姦通と見なすのは行過ぎであるかも知れなかつたが、貞淑で柔順な妻と信じていたお志津の、不倫な正体を見せつけられた時、親信は打のめされたような激しい衝撃を感じたのだつた

「さあ／＼先生、何を御遠慮なさつています。どうぞ此ちらへお近付きになつて、一杯——」

万寿屋は、泳ぐような手つきで親信を招いた。

「松野親信とも云われる絵かきの先生が、余りにも気が利かないじやありませんか、人が折角、よい心持で居る所へ——ねえ万寿屋さん——」

お志津は、万寿屋の首に、白い腕をからませて、親信の方へ、皮肉な言葉を浴びせると、侮蔑を单めた眼差でチラツと眺めやつた。

「志津、お、お前はそれでも親信の妻か？」

眼も眩むような怒りと、嫉妬に、思わず駆け寄つた親信は、お志津の着物の衿を掴むと、力一杯引きずり倒した。

「アツ、何をするんです。私ア、あなたなんか、そんな乱暴を受ける覚えはない、離しておくれつてば——」

前を割つてもがき乍ら、お志津は親信の腕に、肉もちぎれんばかりに爪をたてた。



彼女が抵抗すればする程、親信の怒りには油が注がれた。

「万寿屋さん、助けて！ 私は殺されます。助けて！」

髪は崩れ、帯は解け、着物は引きちぎられて、全裸に等しい姿になつたお志津は、必死に救いを求めたが、万寿屋は、親信の勢いに怖れをなしたか、唇を震わせているだけで、腰も上げなかつた。

「淫婦、売女！」

親信は、お志津の救いを求める叫びを耳にすると、怒りと嫉妬は更に燃え狂つて、彼女のタブサを掴んで、ズルズルと庭の雪の中へ引摺り出した。

探すともなく目についたのは、松の古木の傍の積雪の上に、僅かに頭を覗かせている一本の粗縄であつた、片手でそれをひき出すと縄は意外に長く、親信はそれで、悲鳴を上げるお志津をがんにがらめに縛り上げると、松の幹へ結びつけた。

「売女！ 淫婦！」

親信の声は、むしろ泣声に近かつた。片手で頭上の枝を折り取ると、積つていた雪が振り散つて、お志津の体へ、親信の体へ冷く振りがゝつた。

「淫婦、死ね！ 死んで地獄へ落ちろ！」

呪いの怒声を浴びせ乍ら、親信は、折り取つた松の枝で、お志津の体を所きらわずなぐりつける、唇は切れて血がにじみ、肩から、胸から血が吹いた。

お志津はガツクリと頭を垂れて、もはや呻きもたてなかつた。

やがて、精魂尽きかのように、親信は松の枝を其処へ投げ捨て、よるめき乍ら、廊下迄戻つてくると、其処へベタンと腰を下してしまつた、不貞の妻に加えた苛責の満足感が、俄かにドツと疲労を呼んで、親信は放心したように、お志津の姿を見つめていたが、不思議に、その後には憐憫の情が切なく胸に突上げて来た。

親信は暗く、顔を反けたが、フト眼についたのは、自分が腰を掛けてゐる廊下の板敷の上に、大きく拡げられてある純白の絹地と、数本の筆と、絵の具であつた。

「おゝ！」

親信は突如として画工としての意識を呼び醒まされると眸を転じて、雪中の松の幹に縛られて身動きもない妻のお志津の裸体を見た。雪の夜景色を背景に、大行燈の明りに描き出されたお志津の姿は余りにも凄絶であつた。

これだ！ 此の場面だ、これこそ今日まで求めても求め得られなかつた責めの地獄絵だ！ 怒りも、呪いも、嫉妬も忘れて、親信は筆を執ると、画工の強化となつて、絹地の上にお志津の姿を描きはじめた。

どれ程の時間を費したであろうか、絹地を染めて描き上つた雪夜責地獄絵は、見る者をして心胆を寒からしめるような傑作だつた。殊に、描かれた女の苦悶の表情を見よ！ 嘗て描いた絵の中で、か程迄迫る凄まじい表情を現し得たのが、一枚としてあつたであろう

か。

「出来た！ 出来たぞ！ 素晴らしい出来だ」
親信は筆を置いて、思わず呻いた。

「おゝ、書けましたか先生、凄いい！ 何んと云う立派な絵だ！」
此の時背後で、賞讃の声を上げた者がある。親信は思わず振り向いたが、

「おゝ万寿屋！」

見る見るその顔は嫌悪に暗くかげつた。

「先生、お怒りは御尤もです。しかしこれには訳があります。だがそれをお話する前にお志津さんをお助けしなくては――」

万寿屋は、いきなり跣足で雪の中へ降りると、お志津の傍へ駆け寄つた。

「お内儀さん、先生は見事に書き上げましたぞ。素晴らしい絵が出来ましたぞ！」

手早く縄を解きほぐすと、お志津は前へガツクリとのめつた。

「お内儀さん、しつかりして下さい！」

慌てゝ、その体を抱え起した万寿屋だつたが、

「アツ、お内儀さん、どうしました？ 気を確かに持つて下さい」
激しくその体をゆすつた、親信も駆け寄つた。

「志津、しつかりしてくれ！ 志津！」

万寿屋の手から奪い取るようにして、抱きかゝえたお志津の体は氷のように冷えていた。

「志津！ 志津！ 気を確かに持つてくれ！」

不貞の妻と、呪い怒つた思いも消えて、親信は彼女の体をゆすり乍ら、泣くように叫んだ。だが、微かに、紫色に変じた唇が動いた

ように見えただけで、彼女の魂は再び甦えらなかつたのである。

万寿屋は、ただちに町内の本道（内科医）を呼び入れたが、遂にお志津の唇は物云わぬ不帰の人と変つてしまつたのだ。

「先生、此の万寿屋を、どうなりと、お気の済むようなさつて下さいまし、だがその前に一言だけ私の話を聞いてやつて下さい」

親信の前に手をついた万寿屋徳兵衛の両眼から、はらはらと涙が落ちた。

「お志津さんは、此の万寿屋風情と、乳くりあうような不貞な方ではありません、おこがましい奴とお思ひになるでしょうが今日お内儀さんが持参して下さつた先生の責め場の絵。今迄にない素晴らしい出来栄え、万寿屋頭の下る心持でした。だが更に慾を申しあげると責め場の凄さに引き比べて、女の顔に眞の凄みがありません。例えお手本になる人が、どんなに美しくても、納得づくの型では、本当の絵が書けよう筈はありません。此の女の顔さえ、眞実の恐れと、苦しみが書かれたなら、松野親信は、まさに日本一の責め場絵の先生です。それには、手本になる人も勿論の事です、書く方の人の心にも、それだけ激しい動きが必要でしょう——」

親信は言葉もなく万寿屋の言葉に聞き入つた。

「わたしは、たつた一枚、先生に本当の責め場の絵を書いて頂くために——いや、日本一の絵師になつて頂くために、お内儀さんと相談して、あのような芝居をやつたのです」

「——」

「お内儀さんにとつては、それはどんなに苦しい芝居だつたでしょう。しかし、あなたを日本一と云われる絵師にしたい為に、涙を呑んで、あの大芝居を打つたのです。先生の荒々しい打撃は、お内

儀さんに眞実の苦しみをあたえ、先生自身の心の動きは、御覧のように素晴らしい一作を描き上げたのです。だが、とう／＼お内儀さんは死んでしまつた。手を下さずとも、此の万寿屋が殺したと同じです。先生御存分になさつて下さい！」

膝に手を置いて顔を上げた万寿屋は、固く両眼を閉じていた。閉じた臉からは、大粒の涙が盛り上つてはあふれ、あふれては頬から膝の上に滴つた。

——そうだつたのか、そう云う心の芝居だつたのか——道理で凡てが定石通りに整えられていた。

「志津！ 志津！ 愚かなわしを許してくれ！ 志津！」

親信は、いきなりお志津の死骸を抱きしめた。泪は滂沱と頬を流れて、悔恨が心を狂わせるようにむしばんだ。

降りしきる雪は、踏み荒した足跡の上を、柔かく音もなく埋めてゆく。

何処で鳴くか、鶏の物淋しい夜鳴の聲が、雪の夜の静間を震わせた。

安永年間の名浮世絵師——責め場絵の大家と謳われた松野親信のたつた一枚の責め場絵、雪夜責め地獄絵は、かく悲しい物語りの中に描かれたのである。
(おわり)

○欽義先生性愛相談欄について○

前号に於いて欽義先生性愛相談欄開設について発表しました所、多数の皆さまからの御相談を頂き本月号に解答発表の予定でしたが解答者が旅行のため締切に間に合いませんでしたので次号より掲載いたします。尚御質問は御遠慮なく申出下さるようお待ちします。

奇譚クラブ最近号主要目次

- 九月号倒錯の告白特集号
- 十月号特集切支丹迫害史
- 十一月号宗教刑罰戦慄画譜
- 十二月号惑溺の愉快特集号
- 新年号 縛つた女を描く
- 二月号責めの小説特集号
- 口絵 怪奇派小説名場面集(乱歩の巻)
- 口絵写真 恋に狂つたワン・カット
- スペインの宗教裁判
- 妖 花(心の悪魔) 羽村 京子
- 夜開く孤島 岡 真史郎
- 淫 火(第一回) 松井 籟子
- 若衆散華(同性愛欲史譚) 戸崎 平馬
- 変の字問答(第二話) 浮家 鷹三
- らぶ・すれいぶ(第二回) 鬼山 絢策
- 光 久留木 栄
- 女嫌いの種々相 仁比山 等
- 女囚獄中記花井お梅さんげ談 小町右近
- 萬尿崇拜とト・テム思想 三瀬 淑朗
- 悩ましのサディズム 森山 美歌
- 切支丹迫害史 漆島 迫平
- 黒井珍平氏に答う 伊藤 晴雨
- しいたげられるよろこび 林田 澄子
- 硝子便所 芳野 眉美
- 映画とサディズム 雲井 彰

○三月号 東西拷問くらべ

- 口絵 柱に縛られた女 喜多 玲子
- 口絵写真 東西拷問くらべ
- サディズムの精髄 吾妻 新
- 切腹史談 中康 弘通
- 同性的男性愛の謎 染田 玄
- 受難記(ある女の告白) 岡田 咲子
- 妖異集案第 戸崎 平馬
- らぶ・すれいぶ(第三回) 鬼山 絢策
- 女囚私刑体験記(其二) 小坂多美枝
- 黒井珍平さんへ 羽村 京子
- 艶書通信(喜多玲子さまへ) 高野すみ子
- 文学歴史に現われたるサディズム
- 仁比山 等
- 悲痛と快楽 波多野 新
- 第七天国の夢想 梅井 清
- 伊藤晴雨先生へ答えて 黒井 珍平
- 屍 臭 丹波 太郎
- 色情の価値 角田 平八
- 猿 轡 考 千葉 三郎
- 白い便器の幻想 芳野 眉美
- 伊藤晴雨氏の解答を讀んで 和泉としを
- 破つた日記帳 川端多奈子
- 緊縛女優列伝縛られた女優たち升岡金吉
- アドニス灯 鷺巢 千芳
- ジブシイの性的生活 有馬 正秋
- 淫 火(第二回) 松井 籟子

○四月号 錯倒の告白特集

- 口絵 くすくすられる女 喜多 玲子
- 口絵写真 緊縛美の考察
- 後手と高手小手について
- 搾衣(続少年矯正院体験記) 獄 収一
- 神の酒を手に入れる方法 沼 正三
- 肥満体への郷愁 麻生津和夫
- 乗馬服と長靴と轡 森本 愛造
- 不思議な拷問 有馬 稻高
- 私の新婚生活 島村 康雄
- 開花の契機 信太 香子
- キヤメラ愛好会 岡田 咲子
- 妓の影 泉 辰之助
- 交 感 藤安 節子
- 支配者と被支配者 波多野 新
- 責めの美的表現 小此木 蘭一
- らぶ・すれいぶ(第四回) 鬼山 絢策
- 春婦哀歌(飛田の娼婦たち) 花村 野一
- 新裸体狂奏論 七条美樹子
- 続・囚 衣 古川 裕子
- 地獄繪行脚 長岡愛一郎
- 美少年の死 岡 真史郎
- 恍惚境と法悦境 高取 辰治
- 切腹史談(二) 中康 弘通
- 縛られた女優たち(二) 升岡 金吉
- 風流猿轡 吾妻 新
- 人獣交婚談異婚抄 山崎 浩平
- 或る家庭教師の告白 角田 平八
- 淫 火(第四回) 松井 籟子

○五月号特集男性MASOO

- 口絵 戦後の挿繪に現れた女の責め場
- 口絵写真 荒瀬による緊縛感のスポット
- 怪奇画集 塚本 鉄三
- (ドイツのグロテスク画集より)
- マゾヒストの会 沼正三・沢
- 風流賣各態 吾妻 新
- 捕縛難考 獄 収一
- 僕の記録(完結篇) 黒井 珍平
- らぶ・すれいぶ(第五回) 鬼山 絢策
- 家出の味 牧 さち子
- 雌獣の手記 近見 啓
- 女王様ごっこ 飛田 良一
- 偽られる殉教者 成瀬 亮
- 続・硝子便所 芳野 眉美
- 道徳的な物語 笹田 豊
- 私の歎び 瓜生 珠子
- 少年及び女性の切腹 中康 弘通
- 実験室にて 角田 平八
- 淫 火(第五回) 松井 籟子
- 吊られた白鳥 川端多奈子
- 魔都上海の思い出から 姫宮 四郎
- 奴隷の安の記 中野安太郎
- 縛られた妻以前 早川新一郎
- 盲いたる手 藤安 節子
- 真空地帯の一挿話 養 六平
- 暴帝イワン罪惡史 高取 辰治

〇六月号

口絵 お小夜嵐

喜多玲子・画

緊縛による二表情

塚本鉄三撮影

罪 夢はスカートの下に

口絵 地獄物語(往生要集)

クリスチーナの受難……………吾妻新・訳

虹の階段……………泉 辰之助

ヴァンア女儀列伝……………朝見 速夫

アブノーマル・ファンタジー……………岡田 咲子

責 苦……………竹谷 十三

拷問と倒錯の根源探求……………翁 要吉

静安劇場後日譚……………姫宮 四郎

廊の灯影……………片矢 薫

出獄(少年矯正院体験記)……………獄 収一

縛られた女優たち(二)

切腹問答(中康弘通氏へ)

深火(第六回)……………松井 鐘子

由紀子のお仕置……………大川由紀子

若衆武士道……………戸崎 平馬

らぶ・すれいぶ(第六回)……………鬼山 絢策

暴帝イワン罪悪史(二)……………高取 辰治

あるマゾヒストの手帖から……………沼 正三

其頃を語る(二)新派劇の賣場伊藤 晴雨

自殺の手段としての女性の切腹に

ついて……………油田 敏夫

文芸に於ける切腹描写……………中康 弘通

我が告白の断章……………須藤 律夫

第一回読者座談会松井鐘子女史を圍んで

〇七月号

口絵 百鬼夜行の図

口絵写真 寝ぐつわ五態

クリスチーナの受難(二)……………吾妻新・訳

妻は縛らす……………岡田 圭介

切腹本願……………亀岡絃七郎

川端多奈子さんと信太蒼子さんへ

祭壇に君臨する脚……………羽村 京子

深火(第七回)……………松井 鐘子

らぶ・すれいぶ(第七回)……………鬼山 絢策

片耳伝奇……………窪村 弘

女体緊縛美について……………千葉 三郎

囚獄の思い出……………獄 収一

歌舞伎とサシズム……………宮内 義雄

暴帝イワン罪悪史(三)……………高取 辰治

あるマゾヒストの手帖から(二)

辻番附の話……………沼 正三

切腹願望……………伊藤 晴雨

変の字問答(第三話)……………水内 武郎

磯になつたお姫様……………浮家 鷹三

四馬路外傳……………毛利 綾子

我が告白の断章(二)……………姫宮 四郎

くすくすされるよるこび……………須藤 律夫

女囚秘録(三)……………山本 百合

私の主題……………小坂多美枝

一清教徒の日記(二)……………岡田 咲子

雲後雨……………栗島 洋

新しいサディズム……………川端多奈子

〇八月号

口絵 戦前戦後の挿繪に現れたる責め

及縛り繪……………村田 誠一

苦笑オンパレード……………林 凡流

鞭打たれる外国の少女たち

口絵写真 被縛女体の研究……………渡辺彌三郎

色 狼……………辻村 隆

明治期の被縛圖家……………児島 光

アノスへの讃歌……………伊藤 晴雨

苦悶する裸像……………住田 弘志

女人群像……………福田 英一

悦楽秘帖……………藤安 節子

クリスチーナの受難(三)……………信太 蒼子

公妃の復讐……………吾妻新・訳

被虐の愛情……………沼正三・訳

甘美なるアリスの降伏……………若林 啓子

女腹切の考察と女性の切腹例田谷 敬生

夫婦愛の表現法としての裸女緊縛に

ついて……………西沢 芳造

片耳伝奇(二)……………窪村 弘

アブノーマル・プレイ……………松井 鐘子

手記妻は縛らす(二)……………獄 収一

らぶ・すれいぶ(第八回)……………岡田 圭介

あるマゾヒストの手帖から(三)

女のズボンについて……………鬼山 絢策

古川裕子さんへ与える……………沼 正三

或る被虐性愛者の手記より……………吾妻 新

淫 火(第八回)……………佐治 須十

〇九月号

口絵 本紙の旧号に現れた責繪辻村 隆

灸をすえられる女……………南川 和子

口絵写真 縛られた女の美しさ辻村 隆

折込写真 緊縛美のオンパレード

鞭うたれる外国の少女達……………吾妻 新

切腹願望と女性心理……………中康 弘通

繪巻板の咄……………伊藤 晴雨

深火(第九回)……………松井 鐘子

京子の生活と意見から……………羽村 京子

両棲動物(男色夜話)……………岡真 史郎

あるマゾヒストの手帖から(四)

神風連と大東塾……………沼 正三

縛られた女ばかりの座談会……………中康 弘通

幸福なる隷屬の告白……………川端多奈子

黒のハイヒール……………鐘坊 巡

我が告白の断章(四)……………須藤 律夫

私は何故責め繪を描くか……………芳野 眉美

らぶ・すれいぶ(第九回)……………南川 和子

た記……………鬼山 絢策

燃ゆる緋罽褌……………川合伊都子

められ……………孤児院での経験……………野々村由紀夫

秘手……………白粉地獄……………中川 秀夫

長期刑……………愛と憎しみ……………増 不二子

邦人女性受難事件……………古川 裕子

責めの自画像……………姫宮 四郎

続・悩ましのサディズム……………越野 義夫

甘美なるアリスの降伏(二)……………森山 美歌



女闘情話

うわなり
闘

相

撲

土俵四股平

緋牡丹のようなうら若い女性の相撲美、それを彼独特の代名詞「女闘美」の愛称で呼び、その醍醐味をこよなく愛する明石六郎は、夢に描くメトマーズ（女闘美研究生）の実現を、相撲の守護神摩利支天に祈念していた。その甲斐あつて、初夏を迎えて間のない五月十一日に、若鮎にもまごう矢辺順子をキャッチした。

一昨年まで、八重桜のこと北海千珠子をメトマーズのベストスリーの一人として愛してきた彼だったが、娘でない千珠子に対して明石の愛情を一本にまとめるには、よりの悪い絹糸を見るような、不潔感と光沢の乱射が

あつた。それでも強引に迫る千珠子の手管に童貞の明石はつねに受太刀であり、そのまゝずる／＼と引ずられていたが、根が賢明な彼だつたから、何かの機会に、千珠子から遠ざかるうと考え出した。

ある夜、二人で散歩に出た時、イラ／＼してきた千珠子が、

「先生、私を一体どうして呉れるの、どうする気？」といったのが彼の坎にさわつて、

「どうするつて、お前の勝手じやないか、僕の言葉にいつも反抗している君だもの」とい

明石の家へは帰つて来なかつた。千珠子は内心「私がいなくなつたら先生はどうなるの？メトミ／＼といったつて、私あつてのメトミじやないの？」よし一つ先生を困らせてギョウ／＼いじめてやれと、明石を愛していたが、わざと自分から遠ざかつて見せた、それは愛すればこそ憎い、相手に対する心にもない策謀だつた。

千珠子の行動は、明石にとつては思ふツボだつた。多少の不自由はあつたというものの彼の夢は再び理想のメトマーズの幻影にかえつて、好きな架空小説や絵画彫刻に、メトミの慾情を発散させていた。だが摩利支天の愛

情は、彼明石六郎を捨ててもせず、世にも美しい生娘「矢辺順子」を授けたのであった。

年の二十三にしては美事な成熟振である。

といつてもウレた感じはなく、どこまでも清純である。相撲は好きというものの、未だかつて同性とすら組んだことのない清浄の四肢は、日本舞踊にきたえられて伸びやかに育ち肌はムツチリとした餅肌で、桜具のように薄く浴後のソレなど、実にピンクの大理石像に体温を与えたようなヌメ肌である。ふつくらと盛上つた双の乳房は、こんもりとした丘をたかめ、男を知らぬ乳首は小じおらしく、一はけ紅をはいた乳暈の中心に、ほのかにのぞくばかりで、まだ荒い世の風も知らぬようである。

気が合うというものか、いかにもはにかんで、ものおじするような風情でありながら、一たん明石が「順子！」と呼べば、いさぎよく立上つて、いかなるポーズもこぼまず、頬に紅は散らしながらも、帯も解けば、襦も尋常に締込んで、ヨイシヨの掛声も初いしく四股も踏む彼女である。

可愛さあまつて、明石が抱きよせ、頬へキスをしようとすれば、ツブラな眼でチラと睨むが、さて逃げるでもなく、なすがままに頬

を与え、ゆるやかに胸乳を締めれば、眉根をよせながらも、彼の手を許す順子だった。

愛すればとて、まだ日も浅い順子の、口を奪つたり、それ以上の線を起す明石でもなかった。順子とて、師としての明石を信じ敬愛する以上、たつて反抗はせぬものの、度を知る彼であることに、安心感を抱いているように見られた、もしこの二人を好色漢が見たらさぞかしもどかしがる事であろう。

日と共に、眼に入れても、どこへ入れようが痛くない愛弟子のエースと、彼をして信ぜしめる順子に育つていった。

ある日「先生、私にも四股名をつけて頂戴ね」とねだつた。明石としては、つけてやらないのではなく、つけてやりたいのだが、これといういゝ名が浮ばないのだ、「八重桜」という名が、彼の大好きな四股名だった、それは千珠子にやつてしまつていた。

「矢筈山」が順子に与えられた四股名だった彼女の姓の「矢辺」からとつて、相撲の矢筈掛をこめてのソレだ。

「矢筈山」明石の愛弟子順子が、昔の闘打のように、先弟子、後弟子の争いから、もうあと小一時間の後、ところもあるうに、明石が順子のために、新に買上げた洛北二軒屋の

別荘「双月荘」で順子は千珠子と生れて初めての闘相撲を取る事になつてゐるのだ。

明石が至宝の如くいとしんでいる順子、その清浄無垢の肉体を、海山千年とはいかないまでも、男の肌も女の肌も、エロもグロも知りつくした、したたか者の北海千珠子と、命をかけて挑めさせられることは、明石にとつては身を万力でしめられる以上の苦しみだった。「この頃出ているK新聞の小説「木曾義仲」の巴御前を千珠子サンとすれば、さしずめ私は葵御前ですわね」と、そんなにいつてニツコリする順子だった。「この小説じゃ、二人の相撲は、葵に勝負がないね」といえば、「でも清く深く義仲を愛してるのは葵ですもの……」と、ポツと頬を染める順子だ、その初々しい桜色の頬をみると、明石は矢筈に両手で彼の頬をはさんで、蕾の唇へ火のようなキスを与えたい衝動にかられるのだ。でも師と生徒、といった線をみだりに越えまいとして、全身にたぎる若い血の躍動をグツと押えつけていた。

x x x

長い六月の日射しもうすらいで、蛙声と共に初夏の夜はスリ硝子を重ねるように近よつ

てきた。家族といえ、明石と順子と、それに台所を預る婆やお繁の三人、そのお繁も今日は孫のいる出町へ、明日の日曜日を幸に外泊を許されて、いましがた鞍電の警笛と共に、街の灯をめざして走っている筈。

「先生、もう見えるでしょうね」といつて、明石が選んでやつた鳴海紋の浴衣に、菜種色の兵子帯をむぞうさに締めた順子は、縁の藤椅子にくつろいでいる明石のそばへやつてきた。

「君も可哀想に、僕のところへ来たお蔭で……」

「先生！ よして頂戴、もうなんにもいわないで、そんな水臭いことおつしやるの……すべて私が背負ってきたお荷物なんですから先生こそ、順子が飛込んできたお蔭で……そしてお勉強のたりないメトマーズなんですから、いろいろお氣をつかいなさると思うとすみませんわ」

「僕に内緒で返事を出すなんて……」

「もういわないで、ね、先生、順子もモウ一人前の女ですもの、意地も張りもありますの、でも先生の前で、全力を尽すのだと思ふと、たとえ千珠子サンに殺されても怨みませんわ」と、いった時玄関のブザーが鳴つた。

た。覚悟はしていても、其処はやはり娘のかなしき、順子の顔が一瞬硬直したように見られた。

玄関では、いやに丁寧に挨拶している千珠子のアクセントの強い声がする。明石は立つて、かまちの上の通気窓を開いて、庭に面した暗幕をひいた、畑を渡る風が、その幕の裾を無遠慮にまくり上げる、滅燭の親子電球の豆電灯が、シルエットのすくない広間を照している。

「先生、しばらく」ニヤツと笑つたような千珠子の眼が、明石の顔を真正面から見すえるように射た、明石は無表情のまゝたゞ軽く会釈した。

「先生、怒つてんのね。ふふ、お睦ましいところお邪魔に出て……犬にでも食われろつていう御挨拶でしょうね」

順子は千珠子の横顔を睨みながら、それでも彼女に藤椅子をすゝめ、そそくさと炊事室へ下つていった。

「可愛い娘ね、トテモお氣入りだつて、私のようなアバズレ女は、もうお見捨なのね、ね先生」そつといゝながら故意になまめかしく椅子を廻つて明石のそばへ寄添うように立つた。

「今更何もいわなくつていいだろう、君らしくもない」

「らしくあるうが無かるうが、……えゝ憎らしい」そつといつて体当りのように、ドンと脇で明石を突いた、芳紀二十六才、十五貫三百の千珠子は、順子の存在を無視した振舞に出るのだつた。もし明石がこらえかねて、少しでも手出しをすれば、それをチャンスに順子よりは先に、久々明石の肉体にふれるべく、彼と一番大相撲を取ろうの下心と見えた。明石は千珠子の怪力も手腕も恐れなかつたが、一度捨てた女の肉体に、指一本ふれることの不浄感をきらつてトツサに軽く引外すと、自ら椅子を立つてのがれた。

「おひやをどうぞ」そつといつて冷麦を入れたカットグラスを卓上へならべた。流石の千珠子も、妬いた怒声すらあげぬ順子の落着いたとりなしに、これはナミ／＼ならぬ相手と見てとつたか「おや、御馳走さま、お氣の毒しますわね」と、もとの席に戻つて、素直に箸をとる度胸を見せるのだつた。梶の葉を散らした大模様の浴衣が、千珠子の豊胸を包み、張りのある眼を一層強いものに見せた。

× × ×
雨戸を締切つて暗幕をとじると、いくら通

気窓を全開しても、

室内の温度は八十度
に近づく、野中の一
軒屋とて、如何にお
めこうが、叫ぼうが、

庭も畠も広いし、第

三者にきかれる心配

はない、凄く殺し場

を思わせるような陰

惨な光が、十畳のア

トリエーパイにみな

ぎつっている。隣室で

禪一本に身をとくの

えた二人は、絨氈を

ひき詰めた、描き土

俵の東西へ別れた。

ジャンケンで東西を

きめようという順子

の言葉を無視して、

「東方は、千珠子と

きまつてんのよ、私は長刀鉾のようにクジ取

らずさ」と東方に廻つて動かぬ千珠子だった

「先生、呼出しも行司もお願いするわ」

それは千珠子の希望でもあり、順子の願

いでもあった。

北海千珠子



矢筈山順子

「東 八重桜——西

矢筈山」と明石が

呼び上げれば、尋常

に塵を切り四股を踏

む二人だ。

「勝手にお取り、僕

は行司をしない」

「マア随分ね、順子

さんの顔が、いじら

しくつて見ちやいら

れないのね、人身供

養に上るんだとわか

れば……いいわ」

順子はチラツと明

石へ視線を投げたが

何もいわなかつた。

仕切つた二人は、

互に自重してなかな

か立たない、千珠子

は手先を動かしたり

して誘いをかけていたが、今は互に首を縮め

て相手のふところ息づく乳房を狙っている。

「よおッ！」そう掛けて千珠子が立つた。

「おッ！」と短く順子も立つた。

パツ／＼と肩先を突合つて、描き土俵を半廻

転して、千珠子の背が明石の前へ来た時、パ

ツと順子が飛込んで組んだ、その相手の飛込

みを利用して「たッ！」と千珠子は右手で順

子の胸を突いた。女相撲に馴れた、千珠子の

乳房突きた。順子の張切つたリングの乳房が

ブルンと揺れるのが見られた。一瞬順子の眉

根が強く寄つた。

東西の二人が、場所を取替えて四つに組ん

だ。互の禪は羽二重の兵児帯だ、それに指が

錨のようにかゝつてグツと引合っている、千

珠子が腹を使つて前後にしゃくつて押立てる

十五貫三百の相手に対して、順子は十三貫

八百芳紀二十三才發育盛りの四肢を張つて、

相手の寄身を防ぎながら、隙あらば得意の下

手投を打とうとする。

千珠子の爛熟した双乳が、プリン／＼と重

そうに揺れながら、生娘順子の引締つた新鮮

な乳房と一騎討をせんものと寄る、女体の発

する強烈な刺激に、明石は次第に興奮を感じ

メトミの魅惑と吸引力に全霊を奪われそうで

ある。ズル／＼と抱込まれる順子の胸と腹、

そして二ツの女体が寸を刻んで相寄り、乳

首と乳房の一戦に、ハツシ／＼と上下を争い

左右を争う緒戦、片方は薔、片方はサクラ

ンボ、汗と脂に女体がベツタリと食付いて力み

かえる。

「相撲！」千珠子の力声にヨイショと吊る、臀部の筋肉が緊張して、臀部にエクボが大きい入る、パシッ！千珠子の平手打が順子の臀部を鳴らした。憎しみのこもった一撃だ、ハッ手の葉のような手形が充血の色でのこる。

互に拘る土俵際、腰を入れて「どうだ！」「どつこい！」「まだか！」「残った！」と土俵ギリ／＼一ぱいに大振りの乱取相撲を見せる。順子のパーマが床を、イヤ土俵の砂をはらえば、今度は千珠子のパーマが砂をはいた。しかし力量も相撲も千珠子が上だ、二ケ年たゞき上げた千珠子、まだ三ヶ月しかたぬ順子とは……でも順子には、目に見えぬ明石の愛情が彼女を雲のように、光のように包んで、あぶないところで残さした。

この相撲に負けたなら、相手の千珠子からどんな高圧的な難題が出るか分らなかつた。今となつて千珠子に負けることは、身を鎔鋳炉へ投込まれるよりもつらかつた。第一女同志の仁義として、順子は明石のもとから去らねばならない、いくら明石先生が力強く抱きとめてくれても、それが一番恐ろしかつた。「お母さん！」彼女はまだ／＼娘だつた、今はなき仏の母に心ですがつた、死んでも負け

られぬ相撲だつた。

互の「投」はモノにならず、順子は終始受身だつた、解けて二人は手車になつた。小麦色の千珠子の肌が赤味をおび、桜色の順子の肌も一層色を増してきた、二つの胸と腹がせつなげに呼吸している。双方の裾がグンナリとゆるみ、順子の一重は上にずれて臍をかくしている。明石は女体に馴れた自信を、今日ばかりは失っている自分を自覚した。今迄にもメトマーズの妬心に燃える相撲を見てきた、又その一方が彼に強く愛情をよせていたり、三角関係の場合もあつた、しかしその三角の鋭角が、今夜ほどチカ／＼と彼の目を射て、心をイラ／＼させる経験は始めてだつた。引分けてやろうか、引分けるとすれば今の内だが昨夜も順子が「私が千珠子サンにどんなひどいめにあつても、先生は指一本お出しになつてもいやよ、ね、先生、誓つてね、ね、女と女のする勝負ですものね」

横に円を描いてシリ／＼と廻る。女相撲の廻り舞合は重そうに廻る。そして二人が明石の席から振分けに見える位置に来た時、四つの手は解けた、トツサに千珠子が張手のような打込みをかけたが、順子はサツと外して双差しに入つた。腰の強い千珠子もソレを申し

た瞬間にズブリとふところへ飛込まれたのであわてた、「そこだ！」明石は心で叫んだ。

順子は四十八手の内、八手位しか吞込んでいない、自分の名に因んで、第一に覚えたのが矢筈掛、次ぎが櫓投だつた、しかし相手に対して彼女の背丈に不足があつた、腰を落して、千珠子の下腹へグツと我が腹を押付けて、ウームと順子は頬を紅に染めて吊つた。一歩々々と、二歩土俵際へ歩んだが、矢継早に攻める体力が練れていない、千珠子は外掛に防いで、顎を相手の肩口にかけた、小娘と悔つてかつた千珠子の顔に殺気がサツと流れた。金歯がキラツと光つて、勝気な口もとがグツと個性的にいがむ、臀部と大股筋が男のような緊張を見せた。順子はモウ動けない、動かないのだ、相手の力の落目を見出すと、彼女の二枚腰をきかせて、アベコベに順子を吊つた。二寸の背の開きがココでものをいつて、順子の二足が三四寸土俵を離れた、腹も順子より千珠子の方がやや大きい、多くのメトマーズはこんな場合、機を逸せず相手の乳房を掴んで去勢するのだが、生娘の順子はそんな手を知らない。「危い！順子、後がないぞ！後がない」

だが其処は女の相撲だ。今一息というところ

ろで千珠子も腕力に落目が現れた、順子の足ゆびが土俵にかゝつた、と、其瞬間素早く廻込んだ矢筈山順子、千珠子の両腕を矢筈にとつてグーツと押す、後がない、八寸が五寸に五寸が三寸に、あと二寸？ 八重桜千珠子の両足、十本の足ゆびが土俵にかかつて描き土俵と踏張りがきかない、はり合う土俵の反応がない。

「たッ！」

「畜生！」と千珠子がこらえる。

「おてッ！」と順子の両腕に小じおらしい力瘤がグツと入った。

「勝負あつた！ 矢筈山！」千珠子の片足がトトツと二歩土俵を割つた。完全な負相撲なのだ、もの云いのつけようもない。一瞬悲壮な顔にかわつた千珠子の目が、椅子から立つてきた明石の目にあうと、

「怪我負ね先生」と彼女の勝気にも似ずキタナイことを云う。

「怪我の功名ですわ」順子はおとなしく、そう謙譲にいつてソツと明石の目を求めた。

「完全な理詰め勝だよ、これで千珠子も思いのこすことがないだろう」

「ええ……」と千珠子は目を伏せて土俵へ落したが、彼女の頬がピク／＼と蹙撃した。無

念の形相が包みきれず現れる。順子がバスタオルをとつて流れる汗をぬぐつて、縲を解こうとすると、

「もう一丁！」いうが早いか、千珠子は牝豹のように飛びかゝつた。不意を打たれて順子が転ぶ、その上へ千珠子が共倒れのようにかかる。四本の手と四本の足が、千手観音のように乱れ動く、ソレは本当にアツという間の出来事だつた。そしてよく見れば上位にいるのが千珠子で、ぐつと組敷かれた順子の顔が千珠子の腋の下に見られた。

「卑怯なことするな！」怒りに真赤になつた明石が、千珠子の肩口に手をかけて引分けようとする、千珠子は必死だ、狂気のように首を廻して、明石の指を噛もうとする。

「先生！ いいの、いいのよ先生！」と順子「何がいいものか！」

「まかして、順子にまかせて、ね、先生、順子もモウ一度やりあいたい、やらせて……」

千珠子に咽喉輪を攻められながら、苦しい声をしほつて、泪の目で明石に訴える順子、順子の目には明石の顔がスリ硝子を通したようにうつる。若い女の体臭の渦の中に、二匹の蛇体はもつれる。見れば千珠子の五本の指は、順子の花の乳房を、崩さんばかりに掴ん

でいる。ゴロリと其まゝ烏蛇と白蛇はのたうつて転んだ、一度上になつた順子が、又も下になつた。

千珠子は「お前もお掴み」といわぬばかりに左よりも大きい右乳房をブルシとふる、其時「ぎやッ！」とも何ともいえないぬ声が千珠子のどから飛出した。

二人の死斗を呆然とながめていた明石が我にかえると、順子の二本の足先が千珠子の背でからみ、力一パイ胴締めがかゝつてゐるのだ、二本の腿が千珠子の肋骨を折らんばかりにしめてゐる。女性に与えられた貞女筋の緊搏力だ。咽喉と乳房から手をひいた、千珠子の二本の手が指が、順子のパーマに、頬に、虚空に、……それも三分とはつづかなかつた。降参とも負けたともいわずに、青白んだ顔をぐつたりさせる千珠子、順子の乳房に、頬に、肩に、数条の蚯蚓ばれと血の糸がひかれた。

× × ×

短い夏の夜はほの／＼と明けそめた。正しく寝具を敷く気にもなれなかつたのであるうまた心身共に疲れてクタ／＼になつた二人でもあつた。引止めても／＼無理にも帰るといつて、飛出すように闇に消えて行つた千珠子

悦 虐 に 哭 く

(破った日記帳より)

川 端 多 奈 子

十一月九日(日) 快晴

今日はもと／＼縛られることにほのかな憧れを持つていた私が縛られることに痺れるような喜びを初めて抱いた日なのです。朝からからりとよく晴れ渡った秋晴の日でした。午前九時、前日から伝えられていたので私は今日はどんな縛り方をされるだろうかと思ひ、期待を或る程度の馴れからくる事務的な気安さに包んで家を出かけました。場所は郊外電車で三十分

を、玄関に送り出したことが記憶にのこつていた。玄関の戸締りも忘れていた順子は、ふと責任を感じて細目をあけると、アトリエのソファに眠る明石先生に抱かれていた。順子が目をさますと、明石もうす目をあけた、順子が明石の顔を仰いでニツと笑うと、其目に明石先生の腕がうつる、手が見え、其指の間

に白片が、ソレに視線がいつた時、

「あッ！」そう叫んで順子はその紙片を奪いかえした、驚きに順子の目は大きく見開れ、

明石の目に見入った。

「先生、御覧になつたの？」

「順子、お前は死ぬ気だつたのかい？」

「いや！ もう何にもおつしやらないで……」

「可愛想に、娘心つてそんなものか？」そう思うと、順子を一気にまるめて、咽喉深く呑み込みたい衝動にかられるのであつた。

鉛筆書きの小紙片、それは矢筈山順子の襷に巻込まれていた、走り書きのその文は、

明石先生に対する敬愛の真心をこめた遺書だつたのである。

目当てに今日はこの小屋を借りたのだそうです。

準備万端が終ると、石油箱をたてにその柱の前に置いて私にその上に乗れというのです。半分こわれかゝつたその箱が私の重みでつぶれそうになり端の方へ足をやると床の凹凸があるためぐら／＼と引っくりかえりそうです。私はお尻を押され柱に抱きついてやつと箱の上に乗る、柱を背にして立ちました。カメラのピントを合すために五十ワツトの電灯一個がつけました。私はまるで礫にでもされたような面はゆい気持で下から見上げられ乍ら柱に両手をまわして前向きに立っていました。

十字に交叉して二巻きされて柱に縛られると両腕が逆に持ち上げられて肘がじんと痛く感じました。引続いて縄は乳房の上を走つて柱と一緒に縛り上げ下へ移つて鳩尾の上を一巻き、その端は丁度太股の上を二巻きして、宙吊りのために特に縄尻りは嚴重に結ばれました。私の身体が柱にカメラボコのように密着して身動き出来ない位の緊り方でした。しかし足が箱につかえていたので、時々足先を爪立てゝは縄目をゆるめようと思ひました。柱と身体に挟まれた後手の縛り目が一番痛く感じました。

「さあ、台をはずすよ、いゝか」「えゝどうぞ」

石油箱は取り除かれて隅へ投げ

つけられました。途端に全身にぎゅつと締めつけてくる緊縛感、胸に掛つた縄は片方の乳房を潰すように喰ひ込みます。全体重十四、五百が宙にういたのも、縄の節々の痛さ、それよりも全身を棒のように締めつける快さ、

「どうだい、辛抱できるかい」

私はその問いに返事するのも忘れる位うつとりしていました。今迄こんな縛られ方をしたのは初めてです。私は返事のかわりにうなづいてにつこりと笑いました。突然三方から五百ワツトの写真電球がきました。

「頭を挙げて、頭を！」

そんな言葉が耳に入りました。然し私は身体中が小さい穴の中へ無理矢理詰め込まれているような気持で自分の頭を挙げようと思つても挙げられないのです。電灯の熱さが長襦袢を透して肌へ伝ってきます。丁度、その時です。今まで皎々と照らしていた三方からの光芒がすうと消えてしまったのです。一瞬暗闇となりました。眼が馴れて薄ぼんやりとあたりが見えるようになると、消えたランプの

硝子だけが白く眼にうかんできます。

「ヒューズがとんだ。すぐ直すからそのまゝで辛抱できる？」

そう尋ねられた時、実際は私、もう身体中が痛くつて解いてほしかつたのですが、折角柱に縛られながら一枚も撮らずに下りてしまふということは済まない気がしました。すぐ直るんだつたら辛抱しようと思ひ直りました。私の返事をきくと今迄ソケットのあたりを調べていた彼は、荒い足音をたて、下へ下りて行つてしまいました。

薄暗い物置小屋の二階へたつた一人で柱に宙吊りに縛られた私、

「あゝゝゝ」

思わず呻き声が口から洩れました。全体重が縄にかゝつて、身体がくびれるのではないかと思う位です。後手も足もそこらあたりがジーンと痺れるようです。電灯がぽつとついて又消えました

「ついたか？」

梯子段の中程から声がしました「今、ついたけれどすぐきえましたわ」

自分でもはつきりわかる位ふる

えた声でした。

「もう一寸辛抱できるだろう」

返事も待たずに彼は慌て、下りてゆきました。暑くもないのに襟首のあたりに冷汗がじつとりとにじんできます。今迄の縄目の痛さがすつかり解けて身体がふわりと軽くなつて浮いたような気持、ぶらんぶらんさせていた足先は自分のでないように力が入らない。後手なんかはもうどこへ行つてしまつたのか、羽化登仙という言葉があらりますが丁度このような気持を言うのでしようか、自分の身体に羽が生えて中空をとんでいるみたい。遠くの方で光りが明滅してそれが近づいたり再び遠くへ行つたり

人声がしているようだつたり静かだつたり、自分の身体はどこかへなくなつてしまつて、意識だけが残っているのでしょうか、はつと気がつくと私は横に寝かされていました。柱の下の荒蕨の上です。私はまだうつとりとした気持でしたが、彼は心配そうに私の顔をのぞき込んでいました。

「どうだ、えらかつた？」

「いゝえ」

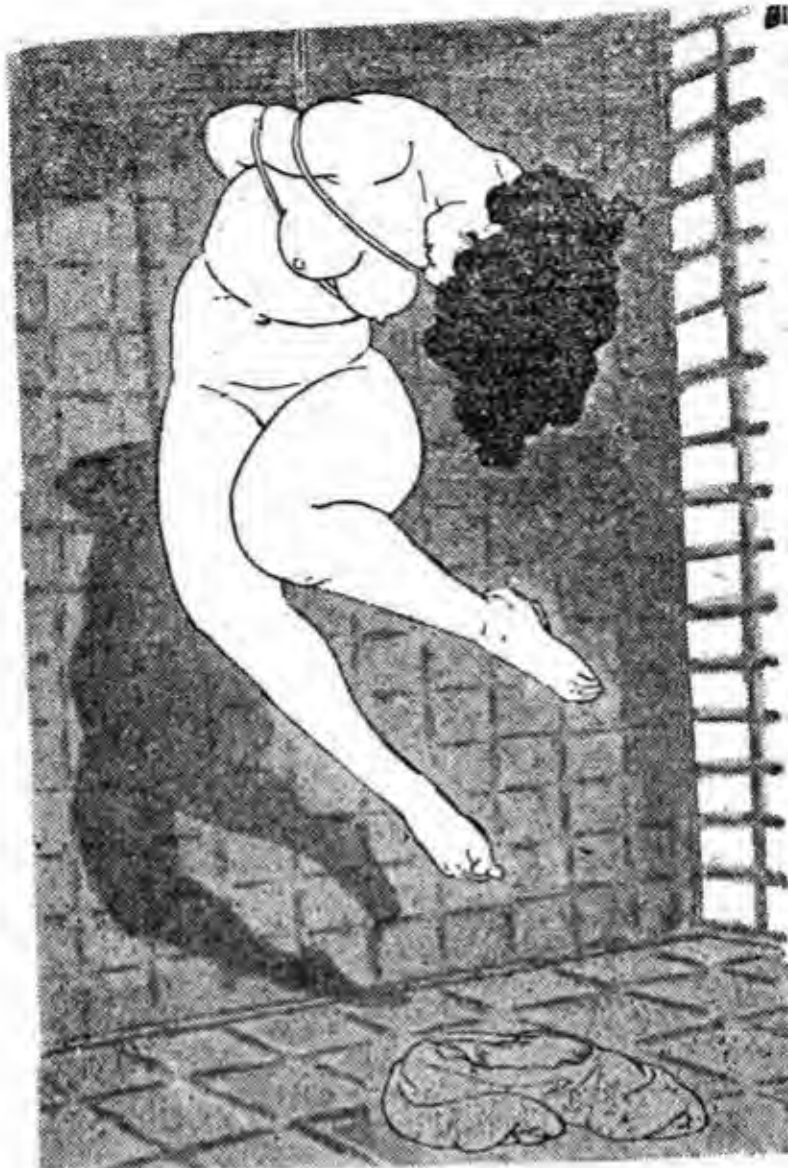
私は微笑もうとしましたが顔がこわばつて笑いになりませんでした。この日から私は縄の味を知つてしまつたのです。アルバム「美しき縛しめ」の「紅と白」はこの時撮つた一枚きりの写真です。



アルバイトの記

マダム紅鶴

野村恵美子
瀧麗子・畫



三月十三日、忘れようとしても忘れることの出来ないこの日が再び訪れてきました。

昨年この日、私はまだK大学の一年生でした。いや私の一生の中で忘れることの出来ない強烈な思い出を申し上げる前に一寸私の

経歴を申し上げます。私は昨年三月、K大学の傍にある有名なミツシヨン女学院を卒業しました。その頃は高校三年生ともなれば一応大学に入りたいと望むのが流行で、幸い私もパパママの同意を得てみんなのあこがれの的、K大学のフランス文学科に無事入学したのでした。

さて、その日の朝、私は学年試験を終り何もすることなしに退屈のあまり新聞の端から端まで読みふけていましたが、ふと求人欄を見るともなしに見ましたら、こんな広告が目につきました。

女店員を求む

◇女子アルバイト学生に限る

◇収入最高

◇通勤住込自由

◇時間、午後四時—九時

上品な良家の子女大歓迎

新橋 紅鶴

「紅鶴」といえば皆さんもよく御存知のことと思いますが、新橋駅前のお店先に「味の関所」と道標の形に広告標を立てたとてもシツ

クで粹なお店です。私もボーイフレンドの宏さんとのデートの待合せによく利用したので知っていました。

幸い、今は春休みだし、退屈なまゝ何か刺戟を求めて身体がうず／＼していた時なので夕食の後、早速、パパとママにお願いしました。

「ママ、あたしアルバイトに行つてもいいよ」

「まあ、ママが貴女に不自由な思いをさせた事があつて？」

「そうじゃないの、あたしだつてもう大人だし、社会学の勉強に行つてみたいところがあるのよ」

「何処だい、それは？」

とパパはパイプの煙をくゆらしながら聞きかえしました。もう一押しだと私は勇氣を得て懸命になりました。

「パパ、行つた事があるでしょう。新橋の紅鶴よ」

「まあ、この子は何んという事をいうんでしょう」

暫くパパとママは言い争つていましたが、パパはやつと私の申出に賛成してくれました。だけど私は一人でなくクラスメートの美代子さんと一緒だという条件でやつと許しを得ることが出来ました。

二

二、三日後、私は美代子さんと連れ立つてお昼前の暇な時間を選んで紅鶴へ行きました

私は印象をよくしようと、なるべくシツクな服装をと思つて、黒のスーツに黒のセーターを着て黒のハイヒールを穿いて颯爽と出かけたのでした。

戸を開けて「御免下さいませ」と言葉をかけて室内を見廻しました。まあ、お客のいないお店つてなんと汚いんでしょう。床には紙

屑が散らばり、壺に投げ入れた生花もすつかり萎れているのです。二人であきれた様に顔を見合せてぼんやりしていると、コツクラしいおじさんが出てきました。

そのおじさんに取次いで貰うとすぐ奥からにぎやかな声と共に黒地に小さな赤い花模様をちらした上品な着物を着たマダムが小走りに出て来ました。

「まあーよくいらつしつて下さいましたわね。私マダムの小川志津子ですの、どうぞよろしく。私貴女方みたいな若い人が大好なのよそれに貴女方何んておきれいなんでしょう」

私達二人共すつかり上つてしまい、来る途中ああ云おうかしらこう云おうかしらと考えていた口上も頭から離れ真赤になつてたゞもじ／＼するばかりでした。

「私、野村恵美子と申します」

「私、青木美代子と申します。それから、これ履歴書なんですけれど……」

「まあ／＼御丁寧に、別にそんなものはいりませんのよ。今日からでも手伝つて下さる？ 昼は前から居る人にさせますから、四時頃から来て手伝つて下さいね」

マダムは気易く言うのと、さあ、これで用件はすんだとばかり、「源さんお二人にお汁粉作つて上げて下さいね」とコツクに命ずるのです。

マダムの大きな丸い目は漆黒のベルシャ猫の目の様に、異常な光に輝いてそしてなめまわす様に私達の上から下に目を移し、特にピツタリ身についたセーターの下から自分でも恥しい位ピンと張つてゐる私の乳房のあたりを見つめているのです。

しかし私は唯嬉しくてそんなことを気にすることはありませんでした。そして夢心地のうちに一ヶ月過ぎ、やがて学校も始まりましたが、働くとなるとやはり疲れを覚えて授業も休み勝ちになりましたが、パパ、ママのやつとの許可に対する意地で止めることも出来ずする／＼と続けていました。

今考えてみて何故あの時、さつぱりと止めて皆と同じように学校に行かなかつたのかしらと後悔します。

三

一ヶ月も過ぎれば、私もすっかり落ちついて、まご／＼することもなくマダムの代りもする様になりました。それと同時にマダムは私を大へん可愛がつて下さつて、「エミー、エミー」と呼び続ける有様です。それに店の休日がくるとお宅に招かれてお芝居に連れて行つて下さつたりしました。

アプレゲールの若い者は年上の人に憧れる傾向があると言われていますが、私達の場合は同性愛なのですから更にアブノーマルなものでしょう。私はすつかり良い気持になつて女学校時代、上級生のSに可愛がつて戴いたのと同じだろ位に思つて甘え切つていたのです。

五月に入り人々の服装も開放的になり何か変つた事をして見たくつてたまらない今日この頃でした。

五月十日、日曜日、マダムはその日も私を誘つてくれました。

「今度は趣向を変えてストリップを見に行かない？」といわれた時私は上品だ上品だと思ひこんでいたマダムがこんなことを言い出すのかと一瞬驚きましたが、その反面私の心の中は「面白い、行つてみよう、行つてみよう」とその／＼のかしているのです。

マダムはすぐハイヤーを拾いました。何処へ行くのかな、池袋の何んとかいう……そうそうきつとアバンギャルドだわと想像しているうちに車は止まりました。下りてみると想像通りアバンギャルド劇場で劇場というよりは小屋といった方がびつたりとする様な処です。入口を入る時ふと私は看板をみて息の根がとまる程驚きましたサディストの秘戯――

縄で縛り上げた全裸の女が髪をふり乱しもがいているエキサイティングな絵が描いてあつたからです。

マダムは驚いている私を身体ごし押すようにして中に入れ、そして一番前に座つてしまいました。幸い場内は「裸と太陽」という短篇映画が上映されていて真暗でしたから、幾分か恥しさがしのげました。休憩時間にプログラムを見ると、配役の欄には女奴隷のリンチされる処が描かれ、見るだけでも胸がどき／＼して目の前が暗くなる様に思いました。

間もなく舞台裏の釘を打つ音もやみ仕度も出来たらしくベルがなり渡りました。未知に対する好奇心も手伝つて私は舞台に目を移しました。舞台には青いライトが幾条も注がれています。背景は毒々しい程塗りたくられ、上から縄が三本たれ下つています。そして右手の方には中世、西洋で宗教裁判の拷問に用いたと言われる水車見たいな仕掛けのものが置れています。私も以前、映画で見て知っていますそれがのぼし責め／＼をする機械なのでしよう。

やがて鎖でつながれた三人の奴隷女がよろよろと舞台の中央に現れ、スローテンポの音楽に合せていとも哀れに踊るのでした。

私はこんな踊りを見るのは始めてでしたので手を握りしめて見つめました。すると舞台の左側から悪どい絵具を顔一面に塗つた男が

現れ倒れかかった女の髪をぐつと掴んで引き起し腰にまもつてサロンをむしり裂いてしまつたのです。

バタフライ一つの全く全裸に等しいこの姿を見た私は自分がされている様に恥かしくなつて体をもじくさせながら目の置き所に困つてしまいました。

二人を裸にしてしまうと奴隷商人は薄気味悪い笑を浮べて鞭をビュー／＼と空振している中、突如ビシツという腹の底に響き渡る音がしました。私は思わず腰を浮かしマダムの手を握りしめてしまいました。始めは床をビシリビシリと打つて大きな鞭の音を立てていましたが、遂には女達の体に本当に打ちつけるのです。

彼等は本当のサディストにマゾヒストなのかしら、

氣を失つた女に男はバケツの水をぶつかけるのです。いくら暖かくなつたと言つてもまだ五月なのに、可哀想に女は鳥肌立ててぶる／＼ふるえています。残酷な男は拷問機の所まで女をずる／＼引きずつて行き両足を足枷にはめ、両手を車の輪に結び付けジワジワと締め上げて行きました。始めグンニヤリしていた体が次第に伸びきつてピンと一直線になつてしまいました。

細くくびれた胸は呼吸する毎にビクビクと動き、皮膚の上の水玉が強いライトの光にキラ／＼と光るのです。そしてどうしたことでしょうか、奴隷商人は狂つた様な声と共に車を更に廻らし始めます。奴隷女は本当に耐えられないのかヒィ／＼悲鳴を上げています。私はたまりかねてマダムの腕に抱きついてしまいました。そしてこわ／＼見上げると何んとマダムは恍惚とした目付で一心に見付めているのではありませんか、私はその時二度マダムに驚かされました。

その夜も帰りがけに中華料理を御馳走してくれたマダムは今夜私の家に泊つて行かないかとしきりに誘つてくれるので、断り切れず私もついその氣になつて、そのお店から電話で家へ今日はお店が忙しいから泊ると断りました。

自動車は新宿から甲州街道を真しぐらに疾走します。マダムの家は西荻窪のこんもりとした森の中の一軒屋です。やがて私達を乗せた車は豪荘な邸宅に着きました。

「先ずお風呂にでも入つてはこりを落しなさいな」

私もすっかり疲れていたのでマダムの親切に甘え、お風呂を戴きました。何んという素晴らしいお風呂場でしょう。浴槽の中は泳げる位広く天上は硝子張り窓の外は庭になつていて、泉水には金魚が泳いでいます。私は何んだか恥しくて、手拭でお乳を押えて湯槽の中で小さくなつていました。すると外からマダムの声がしました。

「私も入らせて下さいますか？」

私の返事も待たずガラリと戸を開けてマダムは入つて来ました。ムツチリと小肥りの体は乳房がやゝ垂れ下つてはいますが女の私が見てもうつとりする位均整がよくとれているのです。

「あら、……いやだわ、どうしてそんなに見るのよ」

私はあわてて目をそらしました。

「さあ、お背中、流して上げるわ」

「いいえ、先にマダムを流しますわ」

「いいのよ」

マダムは私の肩を左手で掴むようにするとシヤポンを塗つたタオルでごしごしこするのです。背中が皮がむくれる様にきつくこするのです、私はじつと辛抱していました。

そのうち両手を私の胸の方へ撫でる様にまわして、
「まあ、可愛いお乳ね」と言うのです。私は慄つたくて気が遠くなりそうでした。

「いや、いや、マダム、慄つたいわ」

逃げ廻る私を掴まえるのが面白いらしいマダムの触手はシヤボンに塗れた私の全身に這つてきました、妙な触感でした。

寢床に入つてからも、マダムは私を抱きしめて「エミーは私のものよ誰にも触らせない」とか「私は棄てちやいや、もし棄てたら今日の芝居の様にして貴女を殺してしまうから」と言つて涙をぼろぼろ流すので、つい私もその氣になつて、

「いいわ、私の体はマダムのものよ、私もしマダムを裏切つたら殺されてしまつても構わないわ」

何んて怖しいことを言つてしまつたのでしよう、そして数日後にこれが実際に現れ様とは……夢にも思つていなかったのです。

四

その様なことがあつてから、私は体が何んともなくだるく、美代子さんも色々心配して尋ねてくれたのですが、邪剣に只首を振るばかりでした。

或る日、宏さんが珍らしく店に現れました。

「どうしたんだい、此頃ちつとも学校に顔出さないじゃないか、美人の君が来ないんでクラス中大騒ぎだぜ、皆がお前振られたんだらうて言うんだ、それでさすがの僕も心配になつて来たんだ」

私はボーイフレンドの宏さんの姿を見て、うつとうしい心もすっかり晴れ、マダムがいなくて悪いけれど、黙つて店を出て宏さんと久し振りに銀座に向いました。

「チョコレート・シヨツプでクリーム、サンデーを飲んだり、小松ストアーで買物をしたりしてすつかりよい氣持になり御幸通りと並木通りの角の高級洋品店でジュリアンソレルのシヨウウインドをのぞいている時でした。後で自動車の急ブレーキの音がしたので振り返ると自動車のドアを荒々しく開けて出て来たのは何んとマダムなのです、きつと後を追つて来たのでしよう。」

「あれ」と驚いて私は思わず荷物を取り落してしまいました。
「貴女は何故黙つて店をあけたの、誰に断つて出て来たの」

と云つたまゝ私に何にも云うひまも与えず乱暴に自動車の中に押し込んでしまいました。あまり突然の出来事なので宏さんはぼかんと口を開けて見ているばかりです、自動車はフルスピードで店の前を通り過ぎました、私は漸く事の怖しさに氣が付きお詫びしました
「あの子、私が休んでいる講義の分を、ノートに書いて持つて来てくれたんです」

「お黙り、貴女、私との約束忘れてはいないでしようね、どんな仕打を受けても貴女が悪いんですよ」

私は助けを呼ぼうと窓の外を見ましたが、あたりは真暗になつていて光の束がスースーと目の前を横切つて行くばかりです、きつと西荻窪が近くなつたのでしよう。

五

「此処でおとなしく待つていらつしやい」

応接間にいれられ、マダムは鍵をしめると奥の方へ足音を立てながら去つて行きました。私は何んとか逃れる方法はないかと窓辺にすがりついてみましたが、窓はブラインドがしつかりと下りて居り、びくともしません、しばらく部屋中を歩き廻つてみましたが疲れを

覚え長椅子にどんと身を投げかけてしくしく泣き出しました。

そのうち足音が近づきカタリと鍵が開かれマダムが入つて来ました、ガウンに着換えたマダムは興奮に頬を赤くさせ、うわずつた目付で私を見付めています、私はねらわれたネズミの様に部屋の隅の壁にへばりついてがたがたふるえるばかりです。

「さあ、私についていらつしやい」

と私の片手をぐい／＼引張つて廊下のつきあたりまでくると、そこには下に降りる階段がありました、私は真暗な部屋の中に連れ込まれました。パチツとスイッチをひねると真昼の様な皎々とした螢光灯がつかしました。部屋は四方、タイル張りになつていてそう云えば何んだか病院の手術室そつくりです。

「さあ、早くお洋服を全部脱いで頂戴」

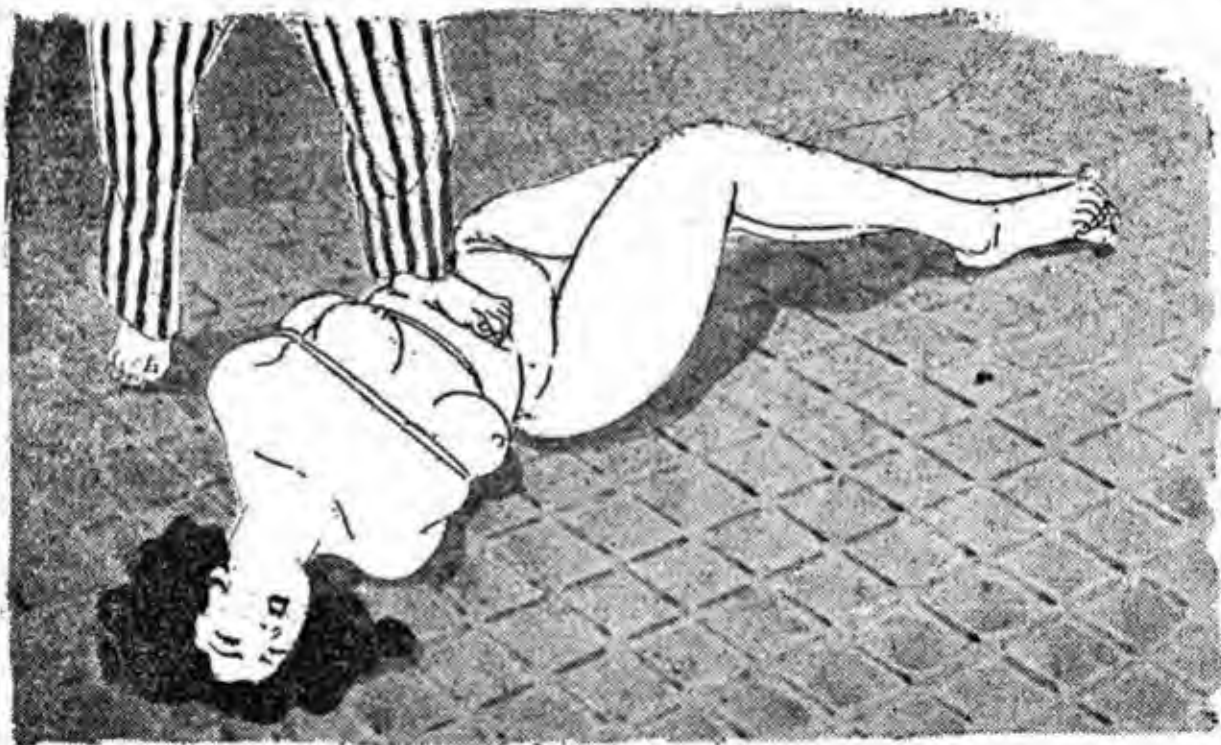
「……………」

「早くしないの」

ぴしりと鞭の音がなります。マダムが床を叩いたのです。私は思わず上衣のボタンに手がかりました。夢中でスカートのフアスナーを下しスカートを脱ぎ靴下を脱いでマダムの前に立ちすくみました。

「何さ、それで裸になつたと思つてゐるの」

「マダム、これだけは許して！」



「まあ、いいわ、そのうちに脱すから」

「さあ、この縄の下にいらつしやい」

私は云われるまゝにおずおず進みよりましたマダムは麻縄を掴み、私がそばに寄るといきなり後手に縛り上げそして縄の一端を引張つたのです、次第に両腕は背中に沿つて上つてゆき、首筋の所まで上つて来ました。

私は両足でつま立ちするのがやつとのことで、ナイフを片手にマダムは私に近付くとぶつりぶつりとブラジャーのボタンに紐を切つてしまつたのです。ブラジャーは身体を伝つて床に落ちてしまい、更にマダムは私の薄いナイロンのパンティに手をかけるのです。

「アツ、これだけは許して！」

しかし残酷なマダムは情けの色も見せずパンティのゴム紐も切つてしまいました、両足を組んで、ずり落ちるのを防ぎたい一念で一ぱいですが、つま先が床についているのがやつとのことでどうすることも出来ません、パンティは処女の私が誰にも見せたことのない所まですつかりさらけ出してしまいました。ひやりとした空気の感触、しかし私はその瞬間、恐怖も寒さも意識するゆとりがなく唯羞恥と屈辱感が全身を硬直させるばかりでした。

やがて、私は後手のまゝ、床から三尺も高い宙にぶら下げられました、後手に吊り上げられると、全身の重みが逆手になつて肘と手

首にかゝり五分も経たないうちに手はしびれ、縄目は肉へ喰い込んできてたえられない苦痛が襲つて来ます、身体を捻じようとすればする程縄は絞めつけてきて手は肘から折れてしまふか、それとも肩から抜けるのではないのかと思う程でした。

そしてヒーヒーと膏汗を絞り悲しい呻き声を上げると、マダムは私の足の下に椅子を置いて、

「どう、私はサディストなのよ、貴女が私のワナにかゝる日を今か／＼と待つていたのよ」

とさも楽しそうに言うのです。

私は次第に加わつてくる苦痛を思うとマダムの言葉も耳に入りませんでした。

しばらくそうして放つておかれると、膏汗が冷汗になり胸苦しさが全身を襲つてきます。今は手の痛さよりも身体中が燃え上りそうなのです。

谷底に引きずり込まれる様な感覚肉体の苦痛——その時です、眼の玉が抉ぐられる様に感じ、思わず知らず開いた口の中で舌がこわばりたらたらとよだれが唇の端を伝つたのを覚えています、胸が小刻みにふるえ上り二、三度お腹であえいだと思うとまもなく身も心もふわりと雲の上に乗つた様に軽くなつてしまつたのです。

六

………気づいた時はマダムの寝台の上でした、空気の冷たさを感じ全裸のまま横たわっている自分の姿を見て啞然としました。窓の外を見ると夕日が淡く輝いています、丁度十二時間気を失つていたのでしようか、はらはらと後悔の涙といふ知れぬ怖しさの涙が頬を流れます、逃げようという気があつても立ち上る気力もなく、た

ぐぐつたり身を投げ出してゐる自分がくやしくてなりませんでした
「あら、気がついて」

とマダムの相変らずあでやかな顔が私の顔をのぞき込みました。

「私の可愛いエミーが骨と皮になつたら悲しいからね」

と無理に私の口の中にスプーンを流し込みます。私はそれをこぼむという意気地もなく、マダムのなすがまゝにむさぼり飲みほしてしまいました。

間もなくマダムのその手が動かなくなると

「今夜は貴女をもつと楽しませて上げる」

とそう云つて私を軽々と抱き上げ再びあの怖しい地獄部屋につれてゆくのでした。

私は怖しさの中にも今度はどんな事をされるのだろうかという期待が昨日のことも今になつてみれば案外苦しくなかつたように思えるのです。

私は又後手に縛め上げられ、仰向けにされると同時に手首をつないだ縄を床に結びつけ髪をつかんでしつかり押えつけられました。そんな恰好の私の口の中へ割箸を押し込みアルミの大きなコップに入れた塩水を流し込みました。

「アア………」

塩水が続々と咽喉から流れはいます。その時の苦しさはたとえ様もありませんでした。塩辛さにむせびながら、口を閉じようとしたりも二本の割箸が私の唇もさけるばかりにかまされてゐるので注ぎ込まれる水はいやでもお腹へ入つてゆきます。無理にお水を飲ませられるという事がこんなに苦しいものだとは知りませんでした。

私は泣く事もわめくことも出来ず、たゞマダムが水を注ぐ手をや

める迄、じつとそのまゝの姿勢で耐えていなければなりません。じり／＼と破裂しそうな下腹部の苦痛、私はたまらずもがいて見ましたが、それは却つてマダムの目に虐げられる者の美しさを見せたのに過ぎなかつたのでしよう。

盛り上つた乳房の上にマダムのねつとりした足がのり全体重が乳房をふみにじるのです。私は恥も外聞も忘れて、タイル張りの床の上へ黄色い地図を描いてしまつていました。

マダムはさも堪らないといった風で「アア……」とよだれを流して踏み続けました。次第にその苦痛は忍耐の極限に達し乳房の核心が頭の芯まで痛みを響かせ「ワツ……ワ」と呻きから悲鳴に変わり自分では何んと叫んでいるのか判断がつかません。その大声で少しでも苦しみを訴え少しでも苦しみを和らげ様としていたのです。

身をもたえ本能的にこの足の下から逃れようとしていましたがそれは無駄な努力に過ぎませんでした。却つてマダムの嗜虐心をそゝるために身をくねらした様な結果になつていたのでした。

マダムの足の裏にふみにじられた肌は、足の指にはさまれて抓られて私はとう／＼大声で泣き叫びました。

それは心身共にたえ難い苦痛でした。私の全身は一時も休むひまがなかつたのです。

どれ程経つたでしよう。

私は重苦しい中に息を吹き返しました。しばらくは夢の様な意識が続きましたが、体中がずきん／＼と痛み始めたのと同時に今度は私の手首は頭の上で縛られているのに気付きました。全身隠すことの出来ないたよりない気持——。にんまり笑つたマダムは

「さあ、これが最後の折檻だよ」

そう云いながら握り棒の先についた鞭を拾い上げました。それを見た時私の朦朧たる神経も烈しい恐怖反応を示し、ピク／＼とケイレンを起しました。

マダムはいきなり力任せに宙に殴りつけました。ビュン／＼と鞭の尖端は空に孤を描いてなり渡ります。その音が段々低く小さくふるえながら下降して来ます。それをくり返して居りましたが何十回目には私の肌にその鞭の先が触れました。ジーンーと灼けつくような痛み。——

「あッ……許して」

「いや／＼まだ／＼もつと苦しめ！歯を喰いしばつて、足先に力を入れて——」

私は激しい息を肩でしながら歯をならし、吊り上げられた腕をふつてもがきました。

鞭はピシリピシリと胸に腰に飛び廻ります。

「許して——」

と声も絶え絶えに私は絶叫するのです。

しかし三日目にはこの地獄の責苦から逃れることが出来ました。家に帰らない私を心配しているパパとママの処へ、宏さんが当日の出来事を報告してくれたので、パパとママが迎えに来てくれたのです。それからすぐ紅鶴の経営者も代つてしまい、あのマダムは何処へ行つたのか知りません。だけど今でも時々ふつと美しいマダムにあんなにして虐めほしいと思うときがあるんです。こんなのをアブ・ノーマルっていうんでしょうかしら。でも、本当に虐められるんだつたら、こりこりですわ。

(おわり)



敗戦後八年僕は漸くにして「地方人」になれた。軍人の家に生れ、軍人の間に育ち、軍人教育を受けそして軍人となり、地方を識ることのなかった僕は終戦を迎えた時は、その過去のすべてを否定されて、与えられた自由に当惑した。

そして、今日軍隊のすべてから解放され乍ら、僕は直立不動の下に肉体に刻み込まれた「男色」という指揮者から自分を未だに解放出来ないのだ。僕は生来極く弱い人間だ、人が強そうにみるのは遅しく成長した肉体の外の部分に過ぎない、少壮軍人としての短い人生は、厳しい命令と規律に依つて盲従の精神

歪められた青春の告白

大阪陸軍幼年学校

白石

悠

を培れた、自由なき幾年間であつた。僕は幼年学校の制服の下で、少年から大人へと肉体の成熟をみた。そして男色の洗礼を受け、その渦に巻き込まれた。その制服を着る迄は僕も純情な子供にしか過ぎなかつたのだが。

高級将校として日夜敬愛する父を通じて、軍隊を想像していた自分はそれを神聖なものと信じていた、しかし今になつて考えてみれば、僕自身の素質の問題であつたとも思える僕達幼年学校の生徒の殆んどが、その最初の年に古参生の夜襲にあい、彼達の洗礼を受けた。そして自分達が古参になると、若い少年を襲つた、逞しい青春の溢れる力が、その捌

け口としてこの遊びを選ばせたのだ。しかしこの事は時と所を変えて、誰もが経験のある遊びであろう、例えば中学生が上級生の暴力に解剖されるように、船乗りを志した少年が先輩船員に裸にされるように、僕達も古参兵に愛されたのだ。

しかし、やはり軍隊と云う閉された環境では、上級者は絶対であつた。最初自己以外の意志によつて行われることに限りなき嫌悪を覚え、更に………される苦痛と羞恥に苛まれ恐怖を感じた。しかし僕は、遂にはその中に進んで身を委ね、果ては快い戦きさえ感じて応じるようになってしまった。

偽らざる告白

それ以後の経験はノーマルでなかったかも知れない。だが、僕をこのように仕上げていったのは、やはり軍隊に於ける上級者の絶対的権力であり、その利用者である若き暴君達特に西川古参生の影響であつたと云えよう。

僕は十五才の年に、陸軍元帥を夢みて憧れの大阪陸軍幼年学校の一生徒となつた。

幼年学校の最古参生は、絶対的な権力を持つていた。そして最初の後輩である二年生に対してはひどく苛めた。しかし新入生の僕達に対しては甘く取扱つてくれた。そして色々世話をしてくれた。しかし僕達が最初に教えられたのは上官の云う事、古参生の命令には絶対に服従するというであつた。僕達は三年生は勿論二年生に対して

も、敬礼は勿論何か話しかけるのにも、不動の姿勢をとらねばならなかつた。

こゝでは暴力それも権力者の暴力が認められていた。生意氣だとの理由でしばしば一人の下級生に対して集团的暴力が揮われた。そして下級生は、その制裁に対して一切手を出すことができなかった。気を付けの姿勢

の儘生身に上級者の絶対性を教えられていつた訳だ。そして夜になると古参生達は、新入生や同期の左翼の少年を襲つた。勿論これは見つければ退学ものだ。しかしその道の好きな古参生の「仲間」は皆の寝静まるのをまつて目的を果たした、入学して数日目に、僕は最初の襲撃を受けた、昼の訓練に疲れて僕は余程ぐつすり眠つていたらしい。それでも小さな寝台である、誰かが僕の毛布にさわるような気がして、目を覚ました時は身体の大い生徒が、半身を僕の毛布の中に入れようとしているときだつた。

しかし僕はまだその目的を知らなかつたしただ寝た振りをして、身を固くしていた。侵入者はその儘、身をすべり込ませると、僕の身体を抱き寄せ、僕の動静を窺っているようだつた。僕は重苦しい不安を感じたが、やがておぼろげながら、彼の意図が読まれて頬の紅潮するのが感じられた。

僕は絶望的な気持になつた。僕の肉体の反応を確かめると、侵入者の行為は大胆になつたそして……。

その後も僕はしばしば自由にされた。だが次第に僕自身その愛撫を喜んで受け入れるようになり、ふと夜中に眼覚めて、自分で自分

を汚すこともあつた。

夏が来た。全校の生徒は遊泳演習に参加し海岸に宿をとつた。最古参生は宿を別にとり二年生と一年の僕達は同じ宿に泊つた。修学旅行や遊泳演習の時は、それが殆んど毎晩の仕事のように僕達は夜の襲撃を受けた、この海岸の宿で、僕は二つの生涯忘れ得ぬ習癖を身につけた、その一つは初めて少年の侵されるのを目撃したことである、僕達が最初宿に着いた夜は、海が荒れて何んとなく寝苦しかつた、消灯して間もなく室の襖が開いて黒い影が入つて来た、暫く月光りの中で、一つ一つ顔を覗き込んでいたがやがて、こちらに進んで来た、僕は来たかと直感した。しかしその影は僕の一つ左翼の床で立ち止り、その儘身体をすべり込ませた、僕は新しい期待に思わず胸を躍らせた、僕の左翼は秋田で生れ東北で育つた山崎と云う僕より一つ年下の少年がいた、僕は固唾を呑んで、闇に浮ぶ山崎の童顔を眺めた、山崎はしかし深い眠りにあるらしく、幼時の顔がそのまゝ大きくなつたように、あどけなさを湛えて稚なく、しかも男らしい黒く太い眉の下には彫りの深い臉が閉ざれて、よく通つた鼻筋の下には形の良い清らかな紅い口元がやゝほころびて、健康そ

のものゝような真白い歯並がこぼれ安らかな
寝息さえも聞えていた。

両手を胸に組んで薄いふとんは胸元まであ
つたが、彼の肉体の線そのまゝに起伏してい
た、入学した時、僕はそのバラ色の頬のため
に淡い愛を彼に感じた、そしてきめの細い山
崎の裸は浴場で眺め得ることのために生れつ
き好きでなかつた入浴さえも、楽しく感ぜし
める程輝しいものだつた。巾広い胸、しなやか
な胴廻りそして桜色にすべすべした臀部、そ
の憧れの肉体が今汚されようとしているのだ
侵入者の心ない手が、山崎の秘密の個所を思

うがまゝに弄ぶのだと思うと、激しい妬み心
を感じ、又汚される山崎の肉体が示すであろ
う苦悶のさまを想像すると、喜びが妬みの心
に交錯した。

やがて、さすがに山崎も深い眠りから気が
ついたらしくびくりと身体全体を震わせたが
息をつめ喉をぐくりと音をたゝせた、山崎は
たえていた美しい眉を心持ち寄せてしつかと
唇を噛んでいた、しかし僕は見た、山崎の白
い足がふとんからはみ出して指先に力をこめ
られているのを、——やがて山崎は全身の力
を抜いた、征服者が床を出て行くと山崎は剥

がれた着衣を再びつけ、頭からすつぽりふと
んを被つてしまつた、僕は眼前に展開された
残酷な遊びをしつと最後まで息をこらして眺
めていた。

二日目の夜、僕の床に鹿児島出身の西川二
年生が忍び込んで来た、その夜から演習の終
る日迄が、僕の性生活に決定的な影響を与え
た夜々であつた、即ち巧みな西川の導きによ
つて最後の夜近くには禁断の味を喫つた、こ
うして侵される喜びと侵す愉しみの二つを覚
えたのだ、その二日目の夜から少し詳しく、
僕の男色生活への告白に移ろう。

【読者通信】

(投稿歓迎)

私は四月号を新宿の或る書店で
発見して以来忽ち惹かれて毎月か
ゝさず買い求めて夢中で読み耽り
ました。ベックナンパーも有る限
り買い揃え、この雑誌ならではの
感を愈々深く致しました。東京の
愛読者の方々に御願ひがあるの
です。私は不幸にして昨年の七月号
並にKK通信三号四号品切のため
入手不能になつたのですが二三週
間誰か貸して下さる御奇特な方は
いらしやらないでしょうか、若し
譲つて頂けるならこれに越した幸

いはありません。

(麻布 吉村生)

「女の切腹」なんと素晴らしいこと
でしょう。私は水内氏や羽村さん
信太さんに心から共感いたします
特に羽村さんの臓腑への郷愁は私
の感覚とピッタリです。女の体
中で最も魅力のあるのは乳房より
も腹部です。そして特にふくら
と膨らんだ下腹です。そしてサデ
イズムの本領はその腹を割くこと
にあるのです。ふくらとした雪
の様な白い女の腹を抉つて腸を出
す。なんと素晴らしいことではあり
ませんか。(熊本 永尾長生)

(岐阜 HN生)

私は御誌を偶然書店にて発見し
これ程私の好みに合つた、雑誌は
今まで読んだことがありません。
隅から隅まで何度も繰返えし読
みました。殊に私は男性マゾです
から嶽取一氏の作品は私の好みに
びつたりで何度読んでも体がぞく
ぞくします。それで今では毎日こ
の人の作品ばかり読んで楽しんで
います。そしてあの体験記のように
私もあのようにして色々拷問を受
けてみたいと思いました。どうか
MSバンドを一刻も早く発表して
下さる様お願いします。

十五六の愛くるしい美少年が全
裸で色々なポーズをとつてゐるの
を想像するだけでも昂奮します。
お店にくるお客が私や朋輩に求め
るものはやはり全裸の私達の肉体
であります。朋輩とは皆それぞれ
関係がありますが、でも私はお客
と一緒に美少年の朋輩と愛しあ
う時が一番幸福です。昔のお小姓や
蔭間達の性愛生活はどんなんだつ
たでしょう。若し好ければ私の同
性愛日記の抜粋を参考迄にお送り
します。十三の頃から今迄の日記
です。(十七才 信行)

〜中共引揚者の手記〜



前島芳雄

私は今回中央より引揚げて来た者です。

戦乱後の性の不満と、暴虐きわまりない戦勝者の圧政、それに加えて戦敗者の卑屈心から起る精神的な倒錯等々——元々小さい時から抱いていたアブ・ノーマルのな気持が私の経てきた数奇な運命によつて、更に一層の拍車を加えたのは事実です——帰国後此処に貴誌を読み私の偽りない告白を申し述べる気が起りました。勿論この文章をきっかけとして引続いて起る種々のマゾヒズムとサジズム、それは余りにも深刻でもあり、又、私として

は帰国後、まだ日が浅く、気持も落ちつきませんので一先ずこれにてペンを置きます。もし発表されるようでしたら種々興味ある文章をお送りしたいと思つて居ります。貴誌は日本へ帰り来て心の友無き私の唯一の友人です

(中共引揚者・前島芳雄)

「入れ」

一
どんと背中を突かれて私は小さい戸の中へよろ／＼と転り込んだ。後でガチャンと錠の

音、とう／＼喰らい込んだか、何だか夢のようなボーとした気持、私はほり込まれたその未決監を見廻した。小さい明り窓がたつた一つ、薄暗いじめ／＼した穴倉のような中に何人かの男が奥の方にうずくまっている。一種独得のすえたような臭、囚人部屋のあの何とも云えない臭気がぶーんと鼻をつく、

「おい、そんな所に突つ立つていずに座れ」奥の方で声がした。私は初めて此の二三日の急激な身分の変化から眼が覚めたように感じた。どうともなれという投げやりな気持が幾分心を落ちつかせた。暗さに馴れてきた眼に映つた監房は案外広い、四囲はざら／＼としたコンクリート造り、床は板敷だ。中には囚人が三人思ひ／＼の恰好で座っていた。

「どうした？お前こんな所は初めてか」

私が彼等の傍迄行つて坐ると、二十二、三の眼が異様に光つたアバタ面の男が、ぼそりとした声で聞く、

「ウム」

「フフ、又食えるよ、今日から飯を二人前」

その男はそんなことを云つてさも嬉しそうにニヤ／＼した。私には何のことかわからない。後になつてわかつたことだがそれは初めて此んな所へ入つた者は一週間位、飯が咽喉

を通らない為先に入っている者がそれを食べるのであつた。長く入っている者は一食井一杯の飯では腹が空いてどうにもならないのだ

二

此処は北満の牡丹江市

日本軍は昭和二十年八月十五日を最後の日として、もろくも崩れ去つた。そして満洲に戦争犠牲者として残された私達は、此の世に於けるあらゆる辛苦を身をもつて味つた。私の心の中に沸々として絶えざる満人に対しソ連に対する憤懣、それが昂じて遂に密謀してスパイや破壊行為に出ようとして捕えられたのだつた。だから罪は重い、死刑が無期かいずれにせよ私は覚悟をしなければならなかつた。

此の未決監にいる三人の男、それは皆中国人である。何れも一癖ありそうな面魂の者ばかり、それでも何かしら囚人同志の共通した心理は、国境の境なくすぐ親しくなつた。日本の囚獄のように古顔に対しての奴隸的態度を強制されないのに私はホツとした。

自然は早や十月の末、この北満は朝夕めつきり冷える。布団一枚さえ無い私、与えられた毛布一枚では夜の寒さが身に伝わる。三日目の寝る時だつた。

「おい、お前寒くないのかい？」

李と云う初めて私に声をかけた男が云つた「うん、夜は寒くてやり切れない」「じゃ俺と一緒に寝よう、そうしたら絶対に寒くないよ」

私は一瞬ためらつた。此れでもう三回目の入獄、今度は入つて来てもう二ヶ月にもなると云う。風呂にも入らず身体中垢だらけの此の男と一緒に寝ようということは私を躊躇させた。しかし私はすぐそんな考えを一瞬でも浮べる自分を叱りつけた。何を潔癖なこと云つてるんだ、お前だつて結局同じ囚人じやないか。

「よし、良いだろう、どうして寝るんだ」

その男は素裸になると着ていた服を全部下に敷いた。そして私にもそうしろと云う。私はまだどうしても抜け切らない娑婆根性、服は脱いだがシャツ袴下だけは着たまゝ、二枚の毛布の中へもぐり込む、成程温かい、今迄板敷の上でゴロ寝していたのとは全然違う。

私はグツスリ眠つた。夜中の何時頃か、私は全身にグツと異様な衝動を感じて眼を覚ました。

「痛い」

私の口から思わず洩れる声、その途端パツと私の口は大きな掌で塞がれた。力一杯私に

抱きついていてる男、私は逃れようとした。しかしふつと頭をかすめるもの、それは此処は囚獄なんだ。大きな音を立てゝはいけない、もし見つければどんな事になるか――。私は息づまるような一時を耐えて、何かしら一種云うに云われない恍惚境に入つて行くのをどうする事も出来なかつた。

三

無味乾燥な牢獄、その中で私は毎日々々夜の来るのを待つようになつた。娑婆では潔癖でさえあつた私が何故こんなに迄も眩惑されるのか、一つ／＼の衝撃は私に天国を作り出す、彼、李は昼間私に何くれとよく面倒を見てくれた。入獄以来十日余り経過した獄内生活に私も他の囚人同様、腹が空いて／＼仕方がなかつた。誰とて同じである。それなのに李は少しづつ勿論ほんの少し、茶碗に半分位だが自分の飯を食べさせてくれた。私達の仲は勿論他の二人の囚人にわからぬ筈はない、しかも全然無視しているものゝ如く黙している。いやむしろ知らないと云つたような態度――。

私はもつて生れた変態性だろうか、その頃私の頭の中にいつもモヤ／＼している謎はそれであつた。その私に又一つ歓喜の絶頂を味

うときが来た。

それは入つてから早や一ヶ月も経ち、このガラシとした八畳敷位の一号室に李と二人だけとなり、他の囚人は出て行つてしまつたある日、北満の十一月末、十二月の音がする頃にはもはや本格的の冬だ。ガチャ／＼ジャラ／＼と鍵束を鳴らし乍ら看守が入つて来た。

「李、出る！」

「えッ私ですか」

李は頓狂なそして無念そうな声を出す。

「うんそうだ、だが出してやるんじゃないんだぞ、仕事だ、早く／＼」

「へえ、へえ」

仕事と聞いて李はニコツと私に笑いかけて出て行つた。彼は釈放されることを好んでいないのだ。

やがて水の入つたバケツと雑巾を持つた李は、前の廊下、看守部屋の下板を芋虫のようにか／＼と拭いて廻つた。

「おい、もつと美しくせんか、何だそんなに水をズブ／＼にして」

看守の奴鳴る声と一緒にピシツと鞭の音、

「へ、へ、」
李は鞭で尻を叩かれても「へ、へ、」と云い乍ら拭いて廻る。私は初めその鞭の音を聞

く度に、痛さを忍ぶ李が可哀そうで仕方がなかつた、李が尻を高くして格子のはまつた前の廊下を拭く、その後から恐しい顔をした看守が鞭を持つてついて歩いてゐる。ピシツピシツと容赦なく差し上げた尻に喰ひ込む細い皮の鞭、私は次第に一種例えようのない戦慄に似たものを感じた。鞭の当る度にそれを耐えようとする李のひん歪つた顔、私は心の中でもつともつと強く打てと願つてゐる自分に恐怖を感じた。しかしどうすることも出来ない抑えられない、自分の異様な気分のためか胸の中のをだかまりがスーと溶けて行くような心地良さ、私は前の廊下を往き来する彼の苦痛にゆがんだ顔を眺め乍ら私自身が殴りたくて／＼腕のむず／＼するのを抑えきれないでいた。

その日の夜、李は

「おい、お前煙草吸わないか？」と聞く、

「えつ、煙草なんか有るのかい？」

「煙草と聞いて私は思わず身を乗り出した。獄中は絶対火氣厳禁である。まして煙草等、

「うん、有るよ、今日外で仕事が終わつた時くれたんだが、その時一寸余分にかつぱらつて来たよ、お前に吸わせてやろうと思つて」

李はそう言い乍ら内ポケットから煙草の粉

を出して掌にのせた。満人が常用する葉煙草それをまるで貴重品ののように紙の上にのせると、クリ／＼と器用に捲いて

「おい、マツチは？」

私は彼が捲き終るのを待つて尋ねた。

「そんなものないよ、こんな中で火を起すのは皆綿だ、見ていな」

李は前から用意していたのであろう、やはりポケットから綿の小さい塊を出すと、三寸位の棒の先に捲きつけ、敷板の上で廻し乍ら摩擦し始めた。原始時代そのまゝの火の造り方、私は初め彼の気の長さにあきれたがそれよりも、何と云つても火が無くては煙草は吸えない。あゝこの一月間煙草にはあきらめを持つていたのが、今日の前に見せられると矢も楯もたまらない。何とか早く火が手に入らないものか、私は薄暗い監房の中でジツト小まめに動く彼の手許を見つめる。三分、五分、変な臭いがしてくる。火薬臭いというか焦げ臭いというか、彼の手は益々速度を速める。ポツと紅いものが見えた。その時李は素早くそれを取り上げると、フーフーと二吹き三吹き、火はついた。異様な努力、私は眼前で原始時代の発火法を見せられたのだ。しかし感心ばかりして居れない。餓えたるもの

ゝ如く火を。口から咽喉へ、そして肺へ深くく吸い込んだ、煙がしみ渡つて行く、その何とも云えない味、精神を持ち去つてしまひそうだ。クラ／＼と眩暈い、続けさまに三口吸つた私は完全に麻痺されて横になつた。李は私の手からそれを抜きとると、やはりさもうまそうに一口、二口、その時だつた。

「臭い、うん臭い、誰だ煙草を吸つたのは」

割れるような声で怒鳴り乍ら足早やに近寄つてくる看守、しまつた、と思つたがもう遅い。

「李、出る」

一号室の前で止つた看守は怒鳴つた。

「へえ」

腰をかゞめて小さい扉をくぐる彼、

「グン」

と鈍い音がすると同時に入口の所でしたゝか腰を蹴られた李は見事にひっくり返つた。

「お前だろう、煙草を吸つたのは」

倒れたまゝの彼は二人の看守に両袖を持たれて引きずつて行かれた。そして看守室の方からものゝ一分も経たぬ間に聞えて来る鞭の音、ビューン／＼とそれは一秒の絶え間もなく続く、確かに一人で殴つてゐるのではない「畜生、どうだ、少しは痛いかな」



「ふん、此の野郎気持の良さそうな顔をしてやがる」

殴り方が益々激しくなつて来る。ビューンビューンと鳴る鞭の音の合間／＼に、ビシンビシンと鳴る鈍い音、それは何か太い木の棒で殴つてゐるのか、私の頭の中をふと通りすぎる担い棒、それは私が此所に入れられる時、看守部屋の戸の隙間からのぞいていたものだ。

始めの中は黙つていた李もだん／＼耐えられなくなつたのか呻き声を上げ出した。それ／＼

がすぐヒ／＼と変な咽喉を締めつけられたような音に變つた。わざと戸を開て皆に聞えるようにしているのか、手にとるように全てが聞きとれる。私は眼をつむつた。その臉の裏に手錠をかけられた李が転がつてゐる。鬼のような顔をした男が二人、一人は手に鞭をもう一人は担い棒の半分に切つたのを持つて只夢中になつて腕をふるつ

てゐる。二人の顔から腕から汗が滴り落ち、散りとぶ。それが明るい電灯にさえて真珠の玉のよう、転がつてゐる李の身体は、あゝ何んとも形容する言葉が出ない。紫、黄、黒、色とり／＼に美しいしかも物凄い縞目に絞なされてゐる。そして苦悶の表情、身体の中をゾク／＼とした心地良さがかけ廻る。私は耳に音を聞き臉に現実を眺め、暗い一号室の中であつた一人恍惚とした一刻、――どしん――

さん／＼責められ正体もなくなつた李は、小さい扉から中へ転がし込まれた。

「おい、日本人、李を隅へ引きずつて行つて寝かしとけ」

看守は只一言そう云うと鍵をかけてすたすたと行つてしまつた。

私は李の傍に走り寄つた、精も根も尽き果てた彼、只かすかに奇妙なウー／＼と云う呻り声、その上両手から身体上半身グル／＼に細い縄で縛られている。古雑巾を水にぬらし、叩きつけたような姿、私はその姿を暫くの間廊下から差し込む薄暗い灯の中で、じつと喰い入るように眺めていた、懐愴美と云うか何と云うか、私の心の中にはほんのチョツピリも、哀れだと云う気が起つて来ない。不思議な私の心の動き、ふと我にかえつた私は急いで彼の身体を抱きかゝえ、室の一番隅の光の全然届かない所へ連れて来た。彼は一言も口をきかない。恐らくその元氣さえないのだろう。半分死んでいるのだろうか、グツタリ私の腕の中で伸びている。

私は何時ものようにパンツ一ツになつて服を全部下に敷いた。李は脱がすことは出来ない。縛られたまゝの彼を抱いて横になり上から毛布を二枚、そして私は自分の思う通りになる李をしつかりと抱いて何時しか夢路に、

私は変な夢を見て眼を覚ました。傾いた半月が奇妙な光線を投げかけている。格子と格子の間から縦に一条のほの明るさ、四囲はシーンとして何の物音もしない。私はソツと毛布を捲くつて月の明りの中に李の姿を曝け出した。所々破けた服の上から肉に喰い込んである縄、服の破れ目から見える肌は黒いあざのような鞭のあと、李は眠っているのか？身動きもしない、いや眼を覚していてもこれじや動けないだろう……。

私はじつと眺めている中にムラ／＼と心の中に獵奇心が湧いて来た。今こうして身動きすら出来ない彼に、私が毎日味つたあの事をこんど私が彼にしたならば、あゝ、私は変態性狂人となつたのか、臆ろげな月の明りの中で私はふつと思ひ付いた時から居ても立つても居られない、抑えられない精神状態になつてしまつた。半狂乱の私は李を荷物のように俯伏せに転がした。

ウー、ウー、李は呻る。しかし彼とて大きな声は立てない。鞭と棒で殴られ、その上縛られた彼、その上私は未だ彼を苦しめようと云うのだ。私はもうどうすることも出来ない残忍な歓喜の頂点に達した。李は益々苦しむ、殴られた所が痛いのか、又は肉に喰い

込む縄が痛いのか、彼の呻き声はだん／＼高くなつて行く、遂に私は傍にあるシャツを一枚とつて彼の口へ無理矢理押し込んだ。

夜が明けた。苦しみの歓喜の一夜、私は李の顔をそつと覗き込んだ。ニツと彼の眼が笑っている。あゝ彼も苦痛を喜んでゐるのか、私は何も云わず縛られている彼の身体を再び強く／＼抱きしめた。

彼も数え年二十二才、そして私も。日本人と中国人、民族に違いこそあれ、宿命的に結ばれた二人、彼が五ヶ月後一号室より出て行く迄（勿論釈放されたのか銃殺されたのか、私は知る由も無い）お互いに夜毎に繰り返す獵奇行為、手製の縄で縛り、身動きをとれなくしてから身体全体を擦り、抓り、踏み、そして――。

私が未決のまゝ此の一号室に半歳余を送つたある日、ドタ／＼と足音がして約二十人ばかりの囚人が投げ込まれた。一号室にも三名新囚が来た。私の妖しい心はその片隅で凱歌をあげた。そして罪惡重なる私の心は抑えに抑えきれず又その新囚の中から、対象となるべき人間を物色し始めたのであつた。

女 腹 切 八 景

女 情 抄

亀 岡 絃 七 郎

腹を切ることを教えて可愛がり

こんな川柳が未だ作られてはいなかったが武士の家に生れた者は、少年期に入るとまず切腹の作法を教えられねばならなかった。ひとたび事有つて自ら切腹を決すべき時、乱れた死に様をせぬようにと願うのが、親たる者の愛情であつた時代である。

大三郎も元服を三年あとに控えて、始めて切腹の作法を学ばねばならなかった。

三方に載せて嫂が差出した白扇の、要を握ると双肌を脱いで、いよく左の脇腹に差し当てた。何故か、くわつと体が火熱り妙に氣怯れがした。勿論恐ろしいのではない。

「大三郎、手が震えて居るではないか、見苦しい」

父が厳しい眼で見た。然し言われる迄も無く、彼は自分でも齒がゆいほど手の震えが氣になつた。嫂も此の醜態を見ているだ、と思うと一層体が熱し、じり／＼と引廻す形を擬え、なお手が震うのであつた。

「武士に仕損じは無いことだが、小吟もう一度世話をしやつてくれ」

辛うじて咽喉を断つ真似をして伏した大三郎の耳に不興氣な父の言葉が届いた。

「大さま、始めての事ゆえ、心を落付けなさ

いまし」

嫂は再度、三方を差出した。

然し、双肌を脱ぎ扇を脇腹に当てようとすると、又しても手が震うのである。臍の上を横にし、ごきながら、是が真刀であつてくれたら、と咄嗟に大三郎は思い詰め、死にたい程の恥辱感に打ちのめされていた。

何方かと云えば、美丈夫で文武二道の嗜みでも武芸に鍊達している、兄の福太郎とは正反對の、文弱型で容姿も女性的な大三郎である。父の叱責以上に、自己嫌惡と、嫂の輕蔑とが苦しかった。

「もう見とうないわ。福太郎は追腹と決つた今日、あとが其方では斎田家も末か、よく独りで考えておけ。——小吟」

嫂に片付けを命じて、父が荒々しく隣室へ去つて行く物音を聞きながら、大三郎は首を垂れていた。

玄關で声がした。福太郎が城内から退出して来た様子であつた。兄を迎えに出て嫂と顔を合すのが情なさに、大三郎は息を潜めて坐り尽くしていた。

主君守国の容態急變が伝えられたのは、それから間もなかった。

「大三郎、福太郎に申して参れ」

父が襖越しに命じた。彼がバネのように立上ると、兄夫婦の居間になつてゐる離れの方へ、廊下伝いに歩いて行つた。

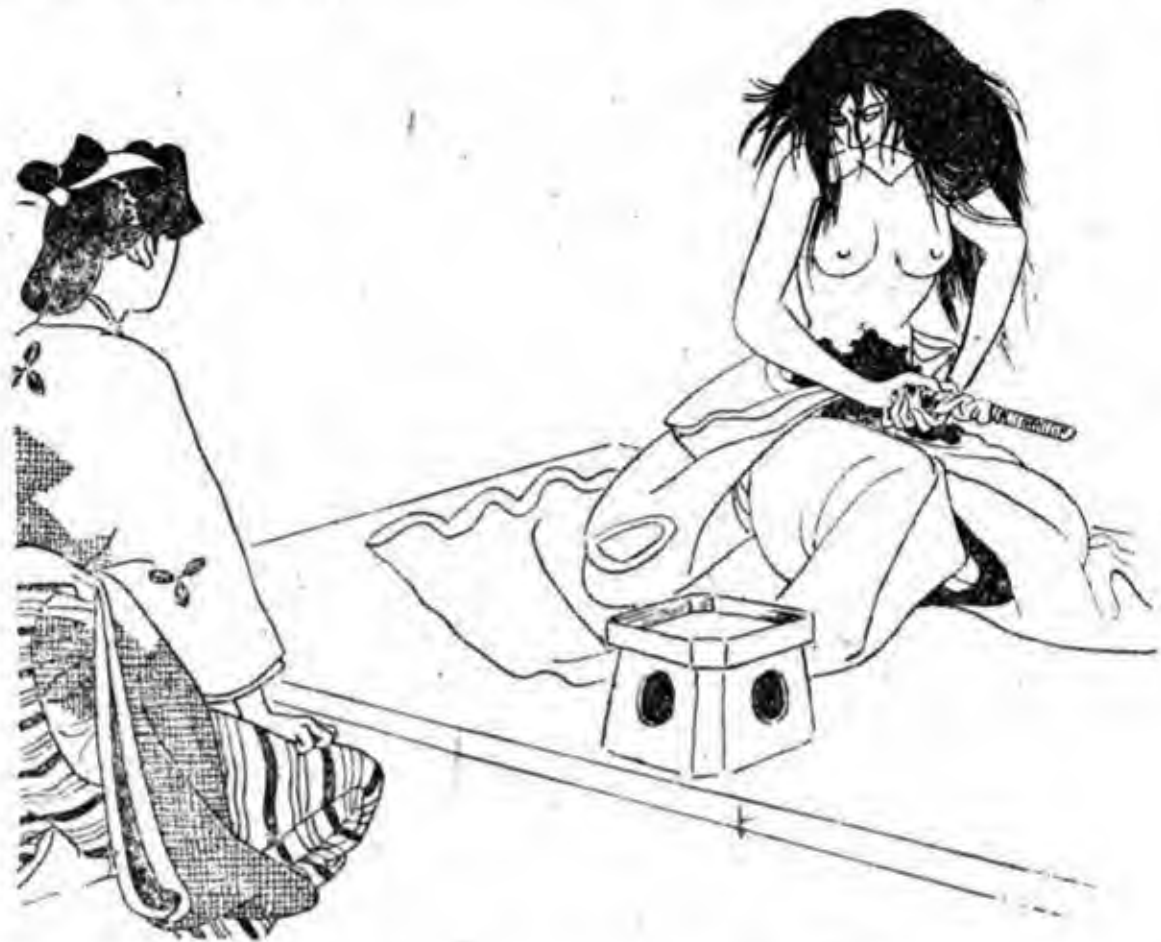
「何と申す、もう一度申していい」

激しい口調で

兄の声が明り障子を通して廊下迄ひびいた。大三郎はハツと立止つた。たださえ一と足でも遅く、と願つた歩みである。自然、立聞きする形となつたのは止むを得なかつた。

「はい妾は儂ない女の身、貴方様御最期の上は、斎田の家を離つて、また縁を求めまする」

少年ながら大三郎でさえ、嫂の言葉に耳を疑つた。守国に万一のことがあれば、恩顧深



い兄の福太郎は当然追腹を切らねばならぬ。と云つて、嫂が主家の為死んで行く兄と縁を絶とうとするのは何としても理合では無い。そこまで考えた時、兄の沈黙が大三郎には恐ろしかった。兄夫婦の仲の好さは、婚姻の由来も薄々聞いてはいたしさりげない日常からも、充分理解出来ていた。

兄は嫂を深く愛している。それだけに嫂の不可解な心変りに憤怒の余り嫂を斬るような不祥事も予想されるのだ。若しもの時には跳び入る覚悟で、大三郎は爪立つ思ひであつた。「左様か、いや、それも宜しかろう、女心を頼めとは、武士の心得には無い、女のはかな

さ、よく相分つた。」

静かな、然し泌み透るような言い方である沈痛さに、大三郎は兄の心中を察した。むしろ今、二人の間に入つて行くべきだ、そして兄に、いよいよ覚悟の時が来たことを知らすべきだ、と信じた。

「兄上」

彼は、わざと明るい調子で呼びかけるのに骨折つた。

「大三郎か、何用だ」

「お城からお知らせでございます、早く御出仕をとのことです」

「うむ直ぐ戻る。いよいよ別れじや、小吟、幸せにな。」

流石に男、顔色こそ少し蒼ざめていたが口調は確かであつた。

「御立派に遊ばしませ」

端麗な顔を伏せて、小吟は手を仕えた。

その艶やかに白い頸筋を見つめながら、大三郎は、平常敬慕していた嫂の、美しく気高い女性像が崩れて行くのを感じていた。女は嘔吐きなのだ、あれほど仲の好かつた兄夫婦でさえ、一生の大事となれば斯うなのだ、と兄の淋しい心中を推し測るのであつた。

福太郎は用意の白装束を仲間を持たせ、二

度と帰れぬ道を城内へ向つて行つた

部屋へ帰つた大三郎は、いよく斎田家を継がねばならぬ責務を思ふ一方、先刻もれ聞いた嫂の心變りが氣になつた。むしろ、嫂が兄の跡を追いはしまいか、と案じていたほどだつたからである。

福太郎が元服したのは十六才であつた。守国の寵が深かつたため、前髪立のまゝで日を過したからである。その頃、藩中に隠れない美女と噂の高かつたのが小吟で、十四の春を迎えたばかりながら、縁談を持ち込む人も少くなかつた。

主君より許しが出て夜伽の勤めを離れた福太郎へも、此の殿御こそと思ひ込む女も親もあつて、是亦縁談に悩まされる身とはなつた然るに二人とも一向持込まれる話に耳を籍そうともしない。と云うのも道理小吟は未だ見もせぬまゝに、一途な恋慕を燃やしていたのである。

いつの世にも仲立ちを買つて出る者は必ず有る習いで、二人の願いの叶うたのは、何れからともなく思ひ初めて一年余りのことであつた。互に見もせで焦れ合つたほどの仲であるから、契りのほどの深さは云うまでもないこゝに守国の死病となり、やがて永訣ともな

れば直ちに追腹と、福太郎の生命のほどの定まるのが、所詮満ち次第に欠けて行く浮世の習いとも見えた。

その頃、福太郎は瀕死の守国の唇を、綿に浸ませた水で湿していた。食物が咽喉を通らなくなつて既に久しく、こけ落ちた頬はどす黒く凹んでいる。瘦せしなびた咽喉仏が微かに動いた。

「福千代、そちは、わしのために、……すまぬ」

幼名で彼を呼び、眼に無限の愛情を堪えていた。

「何を仰せられまする、勿体ない、永年の御恩顧」

胸が塞がり、声が出なかつた。

殿は、わしの追腹を惜しんでいなさる、そう思うと涙が湧いた。あれほど愛し合つた仲の小吟でさえ、わしが腹を切ると極つたら、後夫を求めると抜け／＼云い居つた。女はかなさ、ふん、見て居れ、男と男の愛情は命を賭けた誓い、わしは殿のために立派に死んで見せるぞ、福太郎は後じさつて、守国の干からびた手を両掌で挟み持つたまゝ、涙を袴に落した。

一瞬頬をゆるめたように見えた守国の咽喉

がまた鳴り、福太郎の向う側に坐つていた御典医が、慌しく脈を持つた。

「おかくれじや」

語尾が震え、誰も咳き一つしなかつた。

福太郎は其の夜から遂に家へ帰らず、三日目の朝、主家の菩提寺で追腹の列に加つた。

追腹は名譽の切腹なれば、成可く苦痛の少いよう、腹へ刃先を当てた時、首を打つのが風習となつていた。然し福太郎は設けの席に就くなり、

「殿、御臨終までの御悩を思うにつけても拙者思うまゝに腹切るをお許し下されい。」

と申し入れた。検使の注視の前で、彼は泰然と腹を割き、合図して首を打たれた。

形見には、最後に用いた鎧通しが、目付の手で斎田家へ届けられた。

「お見事であつた。誰しも覚悟の方々、流石に殿のおめがねに叶うて、追腹差免された中にも、福太郎殿の御最期には、よき子息、よき殿御を持たれた、とお喜び申上げる他はござらぬ。」

母と嫂に告げる言葉を、大三郎も聞いていた。

「御免下さりませ。」

小吟は手早く懷紙を口にすると、鎧通しの

刃を改めた。こぼれ一つない焼刃に、うつすら残る曇りは、福太郎の血に染まつた名残りである。

「有難うござりました。」

うつとりと刃に見とれていた小吟は、丁寧に手を支いて、礼を言つた。

目付が帰つたのを見送り、母が奥へ行つた時、小吟は大三郎を呼び止めた。

「大さま、お話申上げたいことがござりまする。半刻の後に、離れまでお運び願いまする。」

何ごとか判らぬながら、未だ何処かに少女めいた感じも残っている嫂の、真剣な瞳に氣圧されて、大三郎は「はい」と答えた。

居間に帰ると、昨夜、仲間達が噂話をしていたのが、又しても思い出された。

「ほんによ、あれだけの奥方様を残して死なねばならぬとはなあ、年寄つたら殿様だつて死ぬが道理だ。」

「全くだ、忠義というものは辛いこつた。心も残ることだろうさ。」

「世間が打棄つてはおくめえし、何うなることだか」

「こちとらの女房なら早速にも男を引き入れようが、お武家様はそうもならず、残つた方

も切なからうよ。」

「未だ十六と云うになあ、」

湯殿に物忘れして引返した、通りすがりに耳に入つたのであつた。

然し仲間風情の女房なら兎も角、武士の妻それも美しく優しい嫂が、兄に判つきり再縁の志を告げたのを、大三郎は聞いたのである。嫂を他家へ嫁がす位なら、自分がもう少し年上だつたら、と大三郎は考え、あわてゝ打消した。ばかな、子供だ未だ、自分は、と反省した。年こそ幾つも違わないが、嫂は大入だ、と思つた。数日前、切腹の作法を教つた時の醜態を思出すと、体中に冷汗が出るのだ。嫂上は軽蔑なさつてに違いない、そう思うと、嫂の用事が何にもせよ、離れへ足が向き難かつた。

いゝ加減時間が経つた。行くか行くまいか一寸思案した。然し、ゆつくり立上ると、彼は庭へ出た。紫陽花が陽盛りに、ひっそりと咲いていた。兄は此の花を、今年は見ること無かつた、ふと思つた。

離れの明り硝子の前に立つた。

「どうぞ、大さま」

さつと開いて入つた時、思わず

「嫂上、何ゆえに」

彼が叫ぶと同時に

「大さま」

低い声で小吟が強く啗めた。

「大さまにだけ申上げたいことがござりました。父上、母上に知れぬよう」

平静な声音であり、顔色も常に異ならなかつた。大三郎は指さゝれた位置に坐つた。

いつの間にか、兄夫婦の居間であつた八畳の中央、二枚の畳が水色の布で巻かれていたその中心に小吟は端座し、膝の前には布を柄頭に巻き付けた鎧通しが、鋭い光を放つていた。

「福太郎さまがお出かけの時妾、心にも無いことを申しました。もとより今日のこと、福太郎さまをお慕い申上げた日よりの覚悟でござりまする。初めて此方へと妾の父に、さるお仁よりお話が有りました時、父は、福太郎どのの只今第一の御出頭人、婿に過ぎ者と存するなれど、殿万一の際は追腹は必定、若後家にしては小吟が哀れとは、親心でござる武士に有るまじき心扱いとお嘆き下され、当人が承引しても、親として行けとは申せませぬ。〃と、斯様申して一旦断りさなれました。さればとて妾は、かね〃福太郎さまお噂を承り、殿御を撰ぶは此のお一方と、娘

心に思い詰めて居りました。此の度御主君守国様御病氣と相成られ、福太郎どの追腹は辛からう、なまじ嫁など持たれず互に歎きはあまるまいに、と、端たない人の口、いえ妾も生きては居らぬ、武士の娘にためし少い妾の縁は、生きては全う出来ぬものを、と即座に決心仕りました。親に逆うてまで慕うお方の許へ参つた身が、その頼むお方と別れて何としましょう。願いはたゞ一つ同じ道を行くばかり。

大三郎は、膝頭を固く握りしめて石のようになつていた。

「なれど晴の御最期に妾如き女にでも、お心が残つてはと、心にもない愛想づかし、さぞ大さまもお憎しみに存じます。父上も母上も御存知ない、たゞ大さまにだけ知れたことたゞ今、女だてらにと思召されようと、恋しいお方と同じ刃で同じく腹を切つて果てます。それに付けても、妾の本心、お耳に入れたら、且つは女の不調法、若し腹を切り損じましたら、介添え願ひ上げます。」

大三郎は、嫂の兄に対する愛慕の深さを感じた。一つには、一足先に死んだ兄に代つて自分に見届けさせたかつたのだ、と思つた。そして、大三郎が何よりも苦しかつたのは

えきすひびしよにすとの告白

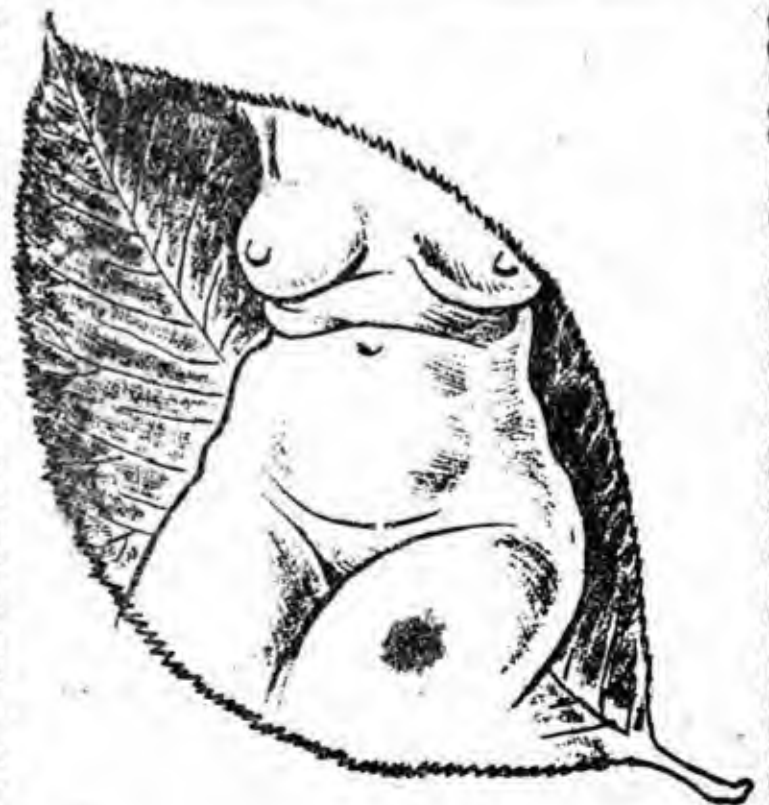
痴者の

悲願

河 眞 田 子 路

私は夜更けの街をさまよつて、若い女を求めている世間から見れば痴漢と目される行動をしている男です。然し私は相手に危害を加えるとか、又は何かを要求するといふような事は絶対にありません。女の尻を追うという言葉がありますが、私は女に尻を見せたい哀れな性癖の持主なのです。どうか私の悲願を聞いてやつて下さい。暗い公園や、人通りの淋しい裏街などを通る女性には、通常万一の危険を予知する警戒心を抱いているものですから、そんな時に不意に物かげから飛び出したり、その上奇妙なポーズで、あらぬ箇所をおく面もなくさら

け出して見せたりしたのでは相手をたゞ恐怖のため動願させるばかりですし、大声で悲鳴でもあげられたら、それこそ大変な結果になることは、わかりきっています。こちらの気持としては、少しも相手を驚かしたいという下心はなく、むしろ、人の秘すべき箇所を異性の眼前にさらして、充分にその凝視を浴びながら、侮蔑、嘲笑、好奇、憐れみと云つたような、心理的な流れを、その女性の瞳の中に、言動の中に、読み取ることによつて、自らを凌辱することの快感に浸ろうとするマゾヒズムの悲願に外ならないのです。



小吟が、女でも腹は切れるものを」と自分に諷諷しているのが判つたことであつた。

小吟は静かに、固く緊めた帯を押し下げ、ようにして肌を押開いた。薄蒼い艶を持つて、いるような肌の光りであつた。なだらかに両肩を抜いて、刀を把ると、もう一度仄かに曇りを止めた刃先に見入つた。

大三郎は、敬慕する嫂が今、眼の前で死のうとするのを、止めることもならぬ切なさ、じり／＼と冷汗の噴くのを感じた。初めて見る女の肌、それも美しい嫂の肌が、眩しく眼に映つていた。

小吟は、隣が覗けるほどに左掌で、ゆつくり腹を撫で下した。右手が、震えもせず左の脇腹に刃先を当てゝいた。

「嫂上」

大三郎が思わず其の手許を止めようと、声をかけた時、流石に眼を閉じた小吟は右腕に力を込めていた。巻き残された三寸足らずの切先は、余すところなく彼女の腹に刺し入れられていた。額に苦痛を慄える縦じわが見えた。

「大、大さま、手、手を見て」

弾む息を抑えながら、微かに息を吐くと、反り身になりながら小吟は、眼をかつと開い

私はまるで、野良犬のように巷を彷徨しては何回となく、失敗をくり返しました。

失敗を予期して、機会を故意に見のがしもしたものです。痴漢の極印を押されて、その筋の拘禁を受けるような結果になつては身の破滅だ、という自制もありました。このような習癖から、早く抜け出さなければならぬという、人並みの理性も、持つていないわけではありません。にもかゝらず私を駆り立てる血のたぎりには、抵抗することができず、又しても巷に立つのでした。

そのうちに私は、夜の世界に、たゞ一人の女を目標としていたのでは、この慾望に満足を与える機会がないことを知りましと云つて、白昼の街中では一層困難な条件が伴うかも知れません。然し女性の警戒心は、夜の道を行くようには嚴重ではありませんし、機会は絶対にないとは云えませんでした。

私は、町はずれの、人家の途切れた一本道とか、畠の畦路、工場や木場の人気の絶えた折を覗つて場所を取るのが普通です。目ざす女性以外の人を通るときとか、附近の高みから、不用意に見とがめられないた

めに、適当な身体を隠す物体が必要で、自分の位置からは、かなり遠くまで、見通しが利かなくてはなりません。

期待に亢奮し、万一の危惧におののく心を押しつけるようにして、初心の盗人さながら私は、根気よく、永い時刻をそこで費やすわけでした。

千載一遇の好機というものは、そうざらにあるものではなく、不思議と人通りが多過ぎたり、三十分も、それ以上も、犬の子一匹通らぬ場合すらあります。ひよつこりと道路の先端に、派手な女性の服装を認めたとときなど、思わず胸が早鐘を打つて、呼吸もつまり、その場に立ちすくむ程の亢奮を覚えるものですが、あいにくなもので、そのすぐ後から、鍬をかついだお百姓などが、二三間の距離を保つたまま、蹊いて来たりして、はげしい落胆に見舞われるのです。

あきらめて帰途につく日が多いのですが、そんな時の、充たされない空虚な気持は、一日中私の心をいらした不安定なものにしてしまうのです。

然し、勿論幸運に恵まれる日がありまし。近づいて来る若い女性の足音が聞える

て引きしまつた臍の上の辺りをきり／＼と断ち切つて行く。

滑らかな肌に鮮やかな色で血が盛り上るにつれて、真白になつた額に、玉のように汗が浮かんでいた。後れ毛が散つた。

大三郎は、是だ、と思つた。何が是なのか自分でもよく分らなかつた。とにかく切腹の作法を習つた時、手が震えたのは、苦痛を予想しての恐怖では無かつたのだ。異様な昂奮で体が震えたのであつた。

やゝあどけなさの残つた口許を凜然と引きしめて、刃を執つた小吟も、今は苦痛に慄え切れぬものゝようであつた。

「う、うむ」

呻いて右脇で刃を抜き取り、片手を支えて大きく息を吐いた。元結が切れ髪が乱れた。

肩から乳房へ、更に鳩尾へと波を打つた。血が切口から噴き出し、左の頸に当てようとする刃を持つ手が、既に彼女の意志通りにはならないようであつた。

大三郎は、手を添えるべきだと感じ、然し動けなかつた。動かずに見つめていたかつた彼は意識してはいなかつたが、未だ女に成り切らない女体が、血にまみれて自ら苦悶するさまに、魂を奪われるような切ない悲愴美

までに私は夢中になつて準備をととのえまです。手先も、身体も、ぶるぶると震えるほど亢奮してしまふのですが、それでも私は素早く、前後を見廻して、他に人通りのないことを、誤りなく見届け、そして、ズボンをずり下ろすと、物かげからそつと抜け出して、道路の側から一目で見える位置に、しやがむわけです。丁度人通りのないのを幸い、急に催した男が、そこで用を足しているのだ、といった恰好に見えたでしょう。こういう姿で待ち受けておれば、万が一の場合にも、逃げ口上になるであろうと考えたからで、なお、その上に、私の露出癖は、ほとんど自分の臀部に集中されていると云つても良いことから、目的を達するためにも、最上の方法であつたわけです。私は、あらかじめ上衣を着ない軽装で出かけるのが常であり、シャツ一枚に、ズボン下をはかず、勿論パンツも脱いで行くという有様でしたから、バンドを弛めて、ズボンを膝の所まで、ずり下げればそれでよいので、シャツの裾がお尻を隠蔽しないよう、背中の方にたくし上げると、道路に背を向けて、しやがみこむのでした。

そういう私の姿は三、四間も手前まで来

た目的の女性の瞳に、当然はいつて来るわけですが、私の恰好を見て、すぐ、その意味をさとることができたためか、一瞬、歩度をゆるめますが、又安心して――幾分気の毒そうな表情を眼元に浮べると、意識的に顔を正面に据えたまま、通りすぎようとなります。

その頃には、もう私は完全に、男としていや人間としての自覚や、外聞も忘れ果てゐるのです。息づまるような亢奮に、舌の根をからからに乾かせながら、犬のように四つ匍いとなり、折から私のすぐ後まで近づいたその女性の方に向つて、むき出した私の尻を高々とさしむけるのでした。

気配を感じた瞬間に、相手は勿論私の方へもう一度視線を投げて来ます。彼女の瞳に映じた私の姿は、まことに醜怪を極めたものであるに相違ありません。私は両脚を思い切りひろげ、露出の効果を最大限に発揮するため、顔の位置をぐつと地面に近づけるのです。彼女は、第一に私のお尻を見る筈です。私の緊張し切つた神経は、痛烈な程彼女の視線を裸の皮膚に意識しつつ、尚も、どうにかしてその視線をとらえつづけるかと、必死になつて考えるのです。

を見ていた。

小吟は、喘ぎながら、ゆつくり刃を左の頸に押し当て、がつくりと俯伏した。

音を立て、新しい血が迸り、彼女の突伏した頸の下から溢れた。

小吟が前以つて焼きしめていた薫りが今更のように、大三郎の眼に沁み込んだ。

涙が誘われるように溢れ、彼は動かなかった。たつた今、腹を一文字に掻き切つた瞬間

の嫂の、身を反らし氣味に苦痛と戦つていた姿が、此の上もなく美しい残像となつて、彼の臉に灼き付いていたのである。

(註) 先に女性の切腹に際し帯の処置如何? という疑問を讀者が寄せられたが、此の作品の典拠「武家義理物語」の時代には、(江戸初期) 巾三寸程の帯を、低く細腰の辺りで締めたものらしい。附記しておく。

編集部 家原文子様

KK通信第十二号を見ました所、奇譚クラブに大変興味をお持ちになつて編集部入りをされた貴女が讀者との文通を希望していただける由拝見しましたのでお手紙を書きました。私は本年二十六才の事務員です、いろ／＼語り合えたら楽しいと思います。(榎 新平)

○御答え○ 御住所が書いてありませんでしたので誌上でお答えいたします。お所お知らせ下さい、詳しいお返事差し上げます。

(編集部 家原文子)

より以上の醜態が彼女の印象に深く刻まれていくことこそ、私の希望なのです。その時になつて、流石に相手の女性は、あらわに警戒の色を見せ始めますが、私の奇妙な行動が、一体何のものであるかを見極めようとする要心深い凝視が、しばらくはつづいています。必然的に歩みがのろくなり私は自分の念願の充たされている瞬間を、無限の陶醉感をもつて味わいつくしているのです。

私の態度が、何等對者に危害を及ぼすおそれのないものであるということは判る筈です。

然し、その行為が示す私の悲願を、どの程度に、彼女の知識が理解したかは別として、あからさまに故意と知れる無恥厚顔な私の姿態に堪え得るわけはありません。彼女の善意は、あとかたもなく消え失せて、困惑とも怒りともつかぬ複雑な表情を、羞恥の色に染めて、忽ち足早に立去つてしまします。

すべてはそれで終りです。時間にして、どれ程の経過を持つたでしょう。たあいもないことと思う人もあるでしょうし、嘔うべき醜行を蔑すむ人もあるでしょう。

心身の緊張が、くたくたにほぐれて、虚脱していく意識の中で、疲れた神経だけがなほ執拗に私のマゾヒズムを掻き立ててくるのです。

私は妄想の虜となつてしまします。

何故、彼女は怒りを私の身体の上に、直接示してくれないでしょうか。露出の目的は、一応達成されながら、なお一歩、私の念願の実現する日は、いつでありましょう露出する目的は、敢えて羞恥の部分を目にさらすことによる自己凌辱であると、前にも申しましたが、それは私の立場からいふわりのない感情を告白したものと云えるのですが、同時に、又、対象として選ばれた。当の女性の身になつて見れば、これ又醜惡の感情を強いられるこの上もない侮辱行為であるに違いありません。

彼女の怒りが、復讐への決意を促し、私を懲罰するための、苛責なき行為が必要なのです。無力化した私の意思は、抵抗の方法を知らず、おそいかかる彼女の豊満な膝下に、苦もなく五体を敷き伏せられてしまします。裸の尻は容赦なく平手の雨を浴びて血色にふくれ上り、ふみにじられて泥土にまみれることでしよう。のしりの声は私の神経を麻痺させてしましますし、苛烈な折檻は私の人間性を喪失させることでしよう。

私は奴隷となつて哀れみを乞い、飼い馴らされた家畜のように柔順な服従を要求されるのです。彼女は私の所有者となつて、一方的に私に君臨し、永遠の懲罰を宣告するでしよう。

淫

(みだらび)

火

(第十回)



松井 籟子
栗原 伸・画

「リーン」

と、再びベルが鳴った。

雄作は縁側から庭へおりると、ぐるつと庭を廻つて玄関の見えるあたりへ来て立止つた。車寄せの前に、こんもりと植えこみが丸くなつていて玄関に立つ人の姿が見えなかつた。

ふと、何かしらん、邦彦の言葉に心を乱されて、小百合夫人をたずねてくる男というものを、見ておこうとした自分が恥しくなつた。会うなら正々堂々と会えばよい。会つて、用件をきけばよい、向うが表玄関から堂々と小百合夫人をたずねて来ているのに、自分の方がこそそとおびえているのがおかしかつた。それに、たゞベルの音だけで庭へ廻つて来てみたが、今、玄関におとずれている人が貴船一郎という男かどうかもわからないではないか。

雄作が再び縁側から部屋に戻ろうとするのと、女中が彼を探しに来ようとしたのと一緒だった。

「あつ、旦那様、只今奥様をたずねていらした方と、南部様が応接間でお待ちでございます」

そう女中は告げた。

ではやつぱり貴船一郎という男だったのかと、雄作は思った。

応接間のドアをあける手がふるえるような気がした。その男と小百合夫人と、どんな関係があるかもわからないのに、夫の六感とでもいうか、不思議な感が、何か異常な胸さわぎをさせるのだった。

「お待ちせしました」

雄作が部屋に入ると、男はだまつて椅子から立つて目礼した。そして、

「奥様にお目にかゝりにあがつたのですが、お留守だそうで、又、うかがいます。よろしくおつたえ下さい」

と言った。

「まあ、おかけ下さい」

と、雄作はそれを制して、男が腰をおろすのを待つて

「誠に失礼ですが、小百合とはどういうお知り合いで……？」

と、たずねた。

「私もきいたんだけど、言わないんですよ、この人。ねえ、貴船さん、万更私とは知らない仲ではなし、言つたつていいじゃないの」

邦彦が横から女のような言葉つきで言つた。

男はやつぱり貴船一郎だった。

そして、今、はじめて、此の家の主人の口から「小百合」というその名を聞いたのだ。

貴船はたゞ、村山から「つる子」によく似た奥さんが芦屋にいると聞いただけだった。門の前まで村山に案内させて、たずねて来たのは、もう一と月程前だった。たゞ会いたかつたのだ。つる子といった人に会いたかつたのだ。似ている人でもいいと思つた。瓜二つの様に似ているというその人が、もしかしたらつる子の血縁の人であるかもしれないと思つた。貴船一郎自身が、広い家で、坊ちゃん坊ちゃんと乳母や女中にかしづかれて育つた男だ。それが今、新世帯をめぐらに貧しい暮らしをたてている。つる子という人の姉が従妹が、その芦屋の広大な邸にいる必然性も考えられた。しかし、その人自身がその家の女主人であるとはまでは、はつきり想像もしなかつたのだ。

それが、貴船一郎という名刺を通じて、会いたいと申出ると、留守だった。一度はそのまゝ帰えつた。二度、三度と、留守が重なる。貴船は本当に留守だとは思えなくなつてしまつたのだ。だんだんに貴船一郎は、その家の女主人が、つる子と名乗つた人だと信じられるようになって来た。貴船一郎という名を覚えていて、会うことをさけているとしか考えられなくなつていた。

二度が三度になり、三度が四度になり、留守だと言われれば言われる程、貴船一郎の足は芦屋に向うのだつた。

そして今日がもう五回目の訪問だった。

やつぱり留守だという、しかしそう告げる女中の後に彼は思いがけない顔を見たのだ。

南部邦彦——。その名さえはつきりと思い出す。中学から美校へ進んだ貴船は、南部が進んだ学校は知らず、雄作の名も知らなかつた。しかし中学時分の南部邦彦は美しい少年のくせに妙に陰險な告

げ口をして、成績の良かった貴船一郎に反撥した。その邦彦と異いがけない再会をしたのは二三年前のことだった。

一一

その頃貴船は、友達のアトリエを借りてよく画をかいていた。切支丹の迫害をテーマに画こうとしていた。村山をモデルに使ったのもその頃だった。普通のモデルは縛るというと尻ごみしたし、モデル女は大抵太っていて、時代色に欠けていた。痩せて細っている必要はなかったが、虐げられた肉体の衰えが欲しかった。痩せていて、乳と腰の見事な女は日本人には稀なのかもしれない。乳のいゝ女は胸が太く、足が短かいのが常だった。

貴船は女をあきらめて男を画こうとしたしかし、それが又女以上に困難だった。彼はそれを男娼の中から探した。

「殺されさえないなかつたら、どんなに苛められてもかまいません」
そう言ってくれる男がやつとみつかった。名は男名前があつたのだらうが君ちやん々で通っていた。

貴船は天草四郎の様な、前髪的美青年が苦しむ姿を画きたかつた裸よりも囚衣に縄帯の方がいい。

「うんときつく縛つて下さい」

淫火前号迄の梗概

上流家庭の人妻として、すべてに満たされている小百合夫人の体の奥に、時々めらめらと燃える火がある。誰かに苛められてみたいと思う欲望だった。それにそのかされるように、ふらふらと姿を変えて新世界という大阪の下町の盛り場を歩いてみる。そこで村山富男というマゾヒストと知り合つて、東京から渡つて来た不良少女でつる子というのだと偽つた。ところが村山の情婦の松枝の嫉妬から、みじめな目にあわされるのを、救つてくれたのが、貴船一郎という画家くづれの青年だった。二人はお互いに惹き合うものを感じて、貴船とその内妻順子との生活が、小百合夫人が夢にえがいていた悦虐の世界であるのを知り、自分までその世界に溺れていきそうなのをおそれて、夫の雄作を旅に誘う。雄作は妻との二人きりの旅によつて、学友の南部邦彦との男同志の情交をたち切ろうとするしかし邦彦は旅先まで追つて来て、小百合夫人に雄作との関係を告げてしまう。雄作は夫

人がそれを知つたことに対して羞恥と困惑に身をさいなまれ、夫人の手で肉体的に苛めてもらうことを望む。小百合夫人は自分の体の奥底で求めていたこととは反対に、余儀なく夫を虐待してしまふ。そして、自分自身を見失う思いで再び新世界をおとずれて、貴船一郎に会つてみようとしたが、途中、村山に会い、村山が貴船に会わしてくれろという言葉に従つて、貴船の家へ行くと、すでに貴船はその家に帰えらなくなつていて、順子や松枝の為に、小百合夫人は玩具の様に、苛めぬかれなければならなかつた。一方、小百合夫人の夫の雄作は旅先からおくられて帰宅して、夫がまだ帰宅してないのを知ると、邦彦がたずねて来て、夫人の失踪に何か関係があるように貴船一郎の名刺を見せる。夫妻の留守に幾度か貴船がたずねて来たというのだ。そして、何年にも話合つたことはないが、自分の中学時代の同級生に、貴船一郎という男があつたと告げた。折しも玄關でリーンという呼鈴の音がした。

君ちやんは手を自分から後へ廻すと言つた。一巻き、二巻き、胸から二の腕を廻して締めつける縄に

「ううっ」

と、息をのんだが、

「のど、のどにも廻して」

と、言う。

後手に縛つた手を上へ引つ張りあげるようにして、首に廻した縄と結び合わすと、上半身はもう動かしようもない。

「吊りさげるよ」

と、貴船がいうと

「ええ」

と、小さく答えて、男は目に異様な光をたたえて、貴船の顔を見た。

アトリエの一部は中二階になつていて、習作や画布が雑然とおかれていた。

貴船は太いロープで、その中二階の手すりを通して、男の体を吊り下げた。

「ううっ！」

と、思わず男が呻つたので

「痛いかな？」

貴船は聞いた。

「痛い！でも、かまわない……」

男はとぎれとぎれに言つた。上半身が音をたててきしむような気がした。

「まだ序の口だよ、今から痛いなんて言つていたら仕様がなないじゃないか」

貴船は冷笑するように言つた。そして、吊り下げられた男の姿を、じろじろといろいろな角度から見廻つた。男はさらし者の様に貴船の視線の中で、死んだようにじつとしていた。

やがて貴船はみかん箱を持つてくると、さかさにして、男の足の下へおいた。そしてその上にローソクをたてると、火をともした

一本のろうそくの火は、足の裏を焦す程熱くはなかつたが、男は思わず足を縮めた。

「そう、そのポーズだ」

貴船は言つた。

「そうして膝をまげているんだよ。もがいたらローソクの数を増すからね」

貴船は下絵を画き出した。

普通にたゞポーズをとつていても、人間の体というものは、なか／＼同じ形を保つてゐることは難しい。まして宙吊りにされて、膝をまげていると言われても、無理だつた。足が自然に下つて来て、ローソクの焰とすれすれになつてしまふ。爪先がチリチリと焼けたような気がして、思わず足を縮めると、僅かそれだけの動きが吊り下げられた縄のもとに何倍かになつてかえつてくるように、締めつけられた腕が痛かつた。

「動いた罰だよ」

貴船はそういうと、ローソクをもう一本ふやした。

足の裏がじりじりと焦げてくる。

「ついでにもう二三本たてた方が絵が面白くなる」

貴船は言うと、一本、二本と、みかん箱の上いっばいにローソクを立てめぐらして、それに火をつけた。

男は海老の様に足をまげた。体の重みが、だん／＼に手首と腕にかゝつてくるのに、足を無理にまげているのは苦しかった。そして曲げたまゝにじつとしていようとすると、顔からも、体からも、油汗がふきこぼれるように浮いてくるのだつた。

「ううっ！ ううっ！」

と、はく息が荒く呻き声になった。

「懲りたか？」

貴船は笑いながら聞いた。

それに返事も出来ない。懲りたとは思わないが、苦しいのだ。

「もつとひどい目に合わされてもいいから、一度だけほどいて……」

男はやつと言った。声を出すのさえ苦しくなっていた。

貴船はろうそくを吹き消すと、吊していた縄をゆるめた。男は崩れるように膝をついて、床に転じた。

「ああ！」

思わず吐息が大きく出た。

「仕様がなから、今日はそのポーズだけデッサンをとつておこう」

そうして貴船はいつたん縛った縄をなかなかほどこうとはしなかったのだ。

やがて縄がほどかれた時、男の腕には皮下で充血した痕が赤い縞の様に幾条も残っていた。

男は縛られるより以上の行為を貴船に求めたが、彼はたゞ絵にする為の責め以外に、男の誘いに応じなかった。それを多少不満に思つたらしいが、やはり縛られることだけでも惹かれるものがあつたのか、モデルにされることを催促するのだつた。

しかし、或る日

「私のいい人がうるさくて仕様がなから、縛られるだけではなくて何かあるのだろうって……。ねえ、先生、説明してくれない？」

そう頼まれて、その「いい人」というのに会つてみると、それが南部邦彦だつたのだ。

中学時代の反感を再び新たににして、貴船は南部の性癖をうとみ、邦彦は邦彦で、自分の性癖を貴船に知られたというひけ目を「あいっはサジストだ」と嘲笑することでごまかした。

だから、新世界でふと顔を合わせることがあつても、そしらぬ風に言葉もかわさなかつたのだ。

今、小百合夫人の家の応接間で、再び南部邦彦と話し合わなければならなくなろうとは、貴船一郎の予想もしていなかった。

三

「小百合に何か御用がおりなら、代りに承りましょうか」

雄作がおだやかに言った。

「小百合さんは本当にお留守なんですね」

貴船は「小百合さん」という言葉を言いづらそうに言った。はじめて聞いた名をはじめて口にするのは言いにくいものだつた。

「あんた、奥さんの居どころを知つていて、さぐりに来ているんじゃないの？」

邦彦が言うのを

「南部君」

雄作が制した。

家人にも内密にしている小百合夫人の出奔を、どこの誰ともわからないこの男に、知られたくはなかつたのだ。

しかし、貴船ははつと聞きとがめた。

それつきり三人の間に無気味な沈黙がながれた。腹のさぐり合いをしているような沈黙だつた。

貴船は邦彦の性癖を知つていたから、邦彦が雄作に対して、なれ

なれしく振るまつている態度の中に、二人が単なる友人ではないという色が、にじみ出ているように思つた。小百合夫人が家に帰えらない原因は多分そこにあるのだらうとは容易に想像出来るのだ。しかしでは何故小百合夫人がつる子という名を使つて、新世界で村山富男と遊んでいたかということになるとどうも判然としなかつた。

ただわかつたことは、小百合夫人の留守は居留守ではないということだ。とすると、本当に小百合夫人とつる子が同一人であるということに疑念が生じてくるのだつた。貴船一郎と知つて、会うのをさけていると思えばこそ、つる子が此の家の女主人と同一人だと思ふことも出来る。しかし、貴船を知るも知らないも、その人は此の家にはいないのだ。貴船の名刺も見えていないのだ。

「実は……」

と、貴船は思案を口に出した。何とかして、小百合夫人とつる子が同じ人かどうかたしかめたかつたのだ。そして、この機会をのぞいて再び機会はなさそうだった。いないとわかつていて、たずねてくることも出来なくなる。

「実は僕は絵をかいている者ですが、今度ある地方新聞で連載小説のさし絵を頼れたのです。その女主人公の顔がどうしても画けないのです。僕が苦労しているのを知つて、先輩のある画家がこちらの奥さんに会うことをすすめてくれたのです。〆切が迫っているの



何度もお伺いしたのですが、いつもお留守で……。それについて、無駄なお願いで恐縮ですが、奥さんのお写真でも拝見出来ないでしょうか」

言いながら、貴船一郎はじとつと汗ばんできた。嘘というものにつきにくいものだった。

しかし雄作は、何を思つたか心よく承知してくれた。

「そんなことでお役に立つならわけのないことです、一寸お待ち下さい」

そう言つて、部屋を出て行つた。

「本当？」

雄作が出て行くと、邦彦はすぐ貴船にきいた。貴船は答えなかつた。

「まあ、写真では縛るわけにもいかないから安全だけど、もし奥さんがいたらあぶない所だつた」

邦彦はなおも、からかうように言つた。

「でも女つて、私は好きじゃないけど、縛つた姿は一寸いいものね。この奥さんなんかきれいだから、縛りあげるとなかなか色気があるわ」

「冗談もいいかげんにしてくれ」

貴船は鋭く言つた。

「冗談？ フフ、まあ奥さんに会つたら聞いてごらんさい」

邦彦の言葉に貴船はふと疑惑の雲がもくもくと湧いてきた。

もしかしたら、男同志の情痴の上の嫉妬から、邦彦が小百合夫人をどこかへ幽閉しているのではないだろうか。

しかし、その疑いは、雄作が小百合夫人のアルバムを持つて部屋へ戻つて来たので中絶された。アルバムを一枚めくると

「あつ！」

と、思わず声を出すところだつた。

村山富男はリよく似たと言つていたが、似ているだけで違つた。つる子と小百合夫人は同一人なのだ。貴船はもうそれを疑わなかつた。

「そうだつたのか」

彼は深い溜息をした。どこの誰ともわからずに、一と目見て激しく惹かれた。そして、たゞ漠然と、新世界という土地に似合しくない人だと思つた。自分の郷愁をかき立たせられるような感じをうけたのは、貴船が昔、住んでいた水と同じ水に生きる人だと思つたからだ。そうして、今、貴船の予感が当つて、その人は此の広大な家に住む貴夫人だつたのだ。とも角も探しあてた喜びと落胆が同時に彼をおそつた。どこの誰とも知らずに、たゞ慕つていた人の、住居も名もはつきりしたのに、その人はすでに此処にはいないのだ。どこにいるというのだろう。

「まだ家の者も知らないのです、小百合の行方がわからないことをお耳に入れたくはなかつたのですが、南部君が口をすべらしたので、僕としてはそれを言いつくろうよりは、お力を貸して頂いた方がいゝと思うのです。実は僕と一緒に伊豆から箱根を旅行した帰えり道ひとりでききへ帰えつたまま、此処へ戻つて来ないのです。警察沙汰にもしたくないので、何とか探し出したいと思つています。そんな時にあなたがみえたというのも、何か御縁があるのかもしれない。どんなにでも御礼は致します。どこかの街で小百合を見かけたら、此処へつれて帰つていただけないでしょうか」

雄作はぼつり／＼と訴えるように貴船に言つた。それは貴船に言い、邦彦に聞かせているようにとれた。

「僕で出来ることでしたら……」

貴船はいうと

「このお写真を一枚いたゞかせて下さいませんか」と、申し出た。

しかし雄作は言つた。

「あなたを信じないようで恐縮ですが、新聞種などにされることをおそれますので、それは御かんべん下さい」

貴船は無理にとは言えなかつた。写真がなくとも、その面影は臉の裏にやきついていた。

——小百合さん、あなたはいつたい何処にいますのす？——
貴船は目をとじて、小百合夫人の面影にそうささやいた。

——小百合さん——

それは「つる子」という名よりも、たしかにその人に似合しかつた。「つる子」と聞いた時、何にもひびくものがなかつたことが、はじめて合点がいつた。

貴船一郎は雄作にこわれるまゝに、現在の寓居を書き記して渡した。それは順子のいるあの離れではなかつた。順子から逃れ、今度こそ本当に絵に精進するつもりで借りている部屋だつた。順子のもとに再び帰えろうとは思つていながつた。そして、その順子のもとにこそ、貴船の探し求めている人がいようとは、神ならぬ身の想像も出来ぬことだつたのだ。

——小百合さん——

いとまを告げて外に出ると、貴船一郎は再び空気に向つて呼びかけた。その同じ空気をどこかで小百合夫人が吸っているのだ。自分の呼びかける戸が必死だつたら、彼女の耳に届きはしないか。西か東か、南か北か、どこへ行つたら小百合夫人に会えるのか、それだけでなく天の啓示のように知らせてくれるものはないだろうか。

貴船一郎は道の真中に立つて、たゞ

——小百合さん——

と思いをこめて、口の中でその名を呼んでみていた。

四

「ああ——！」

小百合夫人はふと、誰かに呼ばれたように顔をおこした。激しい折檻に氣を失つていたのか、綿の様に疲れはてた体が、縛られたまゝで眠りに誘つたのか、氣がついてみると、崩れるように柱の前にうづくまつて、後手に縛られた縄が、獣でもつなぐように、柱に結ばれていた。

「よく眠つていたね、いびきをかいていたよ」

松枝が言つた。

犬の様にながれて、いびきをかいて眠れるだろうか。人間が動物の様に扱れると、動物のようになるのだろうか。

小百合夫人はその浅間しさが泣きたい程悲しかつた。しかし、夫の場合、快い眠りなら、決していびきを伴わない。スースと軽い寝息をたてて眠るだろう。いびきをかいたというのは、どれ程肉体がいためられ、疲労しきつていたかを証立立てているのだ。

「さあ、便所へつれていつてやろう」

松枝はいうと、柱から縄をといた。後手のまゝである。小百合夫人はうなだれて、だまつて廊下の隅の便所まで歩いて行く。

「めんどろだから、そのまゝやつておいでよ」

松枝は云う。

後手に縛られたまゝ、どうして用がたせるだろう。

「逃げやしませんから、ほどこいて下さい」

小百合夫人は言つた。

「こんなに縛つておかなくても、私、もう逃げる元気ありません」
 櫛の齒も入れない髪は乱れ放だい乱れていたし、首飾のよく似合
 ったギリシャの女神の彫刻のような首には、赤く縞になつて皮下出
 血のあとが残つている。手も足も出る夏の服装で、虐げられた痕は
 かくしようもない。

「それじゃあほどこいてあげよう。そのかわりあとでそれだけ縛るか
 らね」

松枝はいうと、やつと縄をほどいてくれた。

部屋へ戻ると、珍らしく賑やかな食卓が用意されていた。

「さあ、これはあんたの御馳走なんだから、遠慮なくおあがり」

松枝がいう。

順子が冷たいビールを買つて戻つて来た。

村山の姿はない。

食物というと、今の今まで苛められていた獣が、がつくとむさ

ぼり食うように、小百合夫人はコップのビールをひと
 息でのんだ。慾もとくもなかった。並べられた魚や肉
 に手は出なかつたが、ビールはらくにのどを通つた。

「あんたはなか／＼いける口なんだね、あとで無理や
 りのまして苛めてやろうと思つたのに、あてがはずれ
 た」

松枝は男の様に笑つた。

そこへ村山が帰つて来た。

「やあ、もうはじめているのか。俺はいいものと取か
 えて来た」



村山は写真機を皆の前に出した。

「これでひとつ、面白いやつをうつそうじゃないか」
 そういう村山の言葉に、小百合夫人ははつと気がついて、立ち上
 った。村山がいう「面白いやつ」というのはこの場合自分の責めら
 れている写真以外には考えられなかつた。

「それだけは……」

小百合夫人は、はだしのまゝ縁側から逃げようとした。自分の浅
 ましい姿を写真にとられるよりは、まだ今の姿が人目にふれても恥
 は一時ですむと思つたのだ。

しかし、相手は三人いる。縛られていなくても、逃げ出すことは
 不可能だつた。

「少し甘い顔すれば……えゝ、畜生」

松枝は口ぎたなく罵つて、小百合夫人をつかまえて、畳の上へ押
 さえつけた。

すぐに縄がかけられた。

「誰か来て！」

思わず叫ぶ口を

松枝はぎゆうつと

抓つた。

「さあ言えるんな

ら言つてごらん」

松枝の太い指に

頬と唇のはしをね

じられると、声は

外へは出ず、息を

のんで、その痛さをこらえるより道がなかえた。

「やつぱり猿ぐつわをしなければ駄目ね」

そばから順子が言つた。

小百合夫人は齒をくいしばつて、させまいとした。

「おとなしく猿ぐつわをさせるか、させないか」

松枝は指に力を入れた。頬が引きちぎられそうな気がする。

「助けて！」

もう一度必死に

叫ぼうとしたが、

叫ぶ為にゆるんだ

齒のすきに、ハンケチが押しこまれた。そして、その上から、しつかり手拭で猿ぐつわをはめられては、声は出ても、助けを呼ぶ程の声にはならなかつた。



まして、それを予期しているように、必要以上にラジオが大きくかけられていたのだ。

庭をへだてて、倉に住む人にも、焼跡をこして隣家にも、小百合夫人の悲鳴は届かなかつた。

「あんたが金主なんだから、大切にしていあげようと思うのに、へたにさわぐからいけないのよ」

棒のように転された小百合夫人を見ながら、松枝もまだ息を切らして言つた。

「あんたのイヤリングはとてもいい値に売れたから、今日は御馳走してあげようと思つたんじゃないの、村山はあんたの時計を売りに行つたのよ。カメラとはいもの買つて来たわ」

「そうさ、俺だつて頭いいんだぞ」

村山は言つた。

「いぼるもんじやなくつてよ。あんたの助平根性はわかつているんだから……」

あんたは此の人に惚れているものだから、それでせめて写真でもとつておこうつてわけだろう。

私のは違うんだから。これを商売にしようつてのさ。わかるか

い？」

松枝はつゞけた。

「この人、お乳が大きくて、足が長くて、ヌードがとてもきれいだろ。だからこの人を縛った写真を売るんだよ。当分いゝ仕事になるじゃないか」

聞いていて小百合夫人は何とかして逃げなければと思った。衆人の目に自分の裸の写真がじろじろ眺められることは、うとましかつた、それなのに

「じゃあ、私のも撮つてね」

順子は言うのだ。

「縛られるかい？」

松枝が聞くと

「うん」

という。

「俺も……」

村山も言つた。

「おやおや志願者が増えちやつた。まあ御はんをすましてからにしようよ」

松枝はというと、

「あんたはビールがすきだつたね。一杯あげよう」

縛られた小百合夫人の顔へ、コップのビールをビシヤツとあけたほろ苦い液が鼻の穴から逆に口へ入つた。小百合夫人はむせて、咳をしようとしたが、口の中のハンケチがそれを押えてしまう。

「う、う、うっ！」

と身をよじつて悶えるばかりだつた。

松枝はそれを見ると松枝の体の中の焰がかき立てられるらしい。

「一寸、手を貸して」

村山に言つて、棒の様な小百合夫人の足をもたせ、自分は頭を持つて、食卓の所まで運んでくると小百合夫人の体を食卓のふちへ引っ張り出した。

「さあ、こうしてもう少しビールを御馳走してあげよう」

わざと小百合夫人の鼻の穴に流れこむように、夫人の顔にビールをあけた。そして、食卓の下で身悶えする夫人を面白そうに見ながら、食事をつゞけるのだつた。

五

「さあ、裸になつてもらおう」

食事が終ると、松枝は後片付を順子にまかせて、小百合夫人を素裸にしようとした。もとよりスリツプ一枚しか着せられていなかつた。そのスリツプも下ばきもとつてしまおうというのだ。

小百合夫人はそうさせまいともがいた。

「どうしておとなしくしないのだろうね。あんたが痛いめをみるのは、これからだよ」

松枝はいつて、鞭をとり出して来た。

「ビシッ！」

と肩から背に熱湯をあびせられたように細い皮の鞭が走つた。

「ビシッ！」

白い絹のスリツプの上から、丸い尻の上に鞭が鳴る。

「おとなしくするか、しないか」

言いながら、松枝は手を休めない。

背中から腰へかけて、一面に火傷したように痛いのか、熱いのかそれとも冷たいのか、小百合夫人はたゞ呻いた。

「おとなしくするね」

松枝に念をおされて、思わずこつくりとうなずいてしまった。

松枝はスリツプの上から縛つた縄をいつたんほどいて、スリツプのたすきをはずして、下へさげた。形のいい乳があらわになつた。

小百合夫人は思わずかくそうとしたが、手は村山に羽がいじめの様に後へまわされていた。

再び縄がかけられた。縄の間から奇妙にゆがんだ乳を、引つ張り出すように、縄と縄との間からとび出させられ、大きい乳はよけいに大きくふくれた。下ばきをぬがされようとした時、もう一度小百合夫人は抵抗した。けれど、二人の力にはかなわなかつた。

「おとなしくすると言つても、なかなかしないからね、写真をとるには、よつぽどしつかりくりつけないと、動いて駄目になつてしまふよ」

松枝は言う、食卓を横に立てた。足が四本外へ向いている。小百合夫人の手は後手に縛つてあるから、そのまゝ卓の前に座らせると、両足を無理に開かして、卓の下の方のあしに別々に縛りつけた。そして、卓の上の方のあしの片一方に結んだ縄を、小百合夫人の首をひと巻きして、もう片一方の足に結んだのだ。

戸板へ釘づけされたよりも、もつと惨めな恰好で、小百合夫人は食卓に縛りつけられてしまつたのだ。

写真機が向けられ、明るい電燈が、その裸の体を照らしても、夫人は身動きも出来なかつた。たゞ目をつむることだけは出来る。

しかし松枝は言つた。

「そんなにされてもまだおとなしく撮らせなかつたら、そのまゝの恰好で一晩中苛めてやるよ。いいかい」

ジーツと長いタイムをかけて写真がとられている間、小百合夫人はとても目をあけてはいられなかつた。

「あれ程言つたのに……」

松枝は本気で腹を立てたのか

「よし、いくらでも苛める方法はあるんだよ」

と言うと、押入れから小さなカバンを出して来た。開けると、医者者の手術の道具の様なものが一杯入っている。その中から太い注射針をとり出すと、小百合夫人の太腿へブスツとさした。注射針は針だけではなくて、注射器へつける金属の部分があるから、縫針の様に皮膚の中へ入つて行つてはしまわぬ。医者はよくそうして患者の体に針を指したまゝ、注射器の薬を入れ直すことがある。

松枝はそれを応用したのだ。右の腿にも左の腿にも針をさした。縄の間からゆがんでとび出している乳の上に、ブスツとされた時、小百合夫人は思わず悲鳴をあげた。猿ぐつわから洩れる程大きい悲鳴だつた。松枝はそれにかまわず、もう片一方の乳にもブスツとさした。

「ウウツ！」

のどから血が出るかと思うような叫びだつたが、ハンケチに押さえられて、口の中にかみこらされた。小百合夫人は肩を大きく波打たせて、苦痛をこらえた。肩が波打つと、胸も揺れ、乳房の上で注射針がブルンブルンと動いた。

「そのまゝ、じつとしてゐるんだよ」

松枝は再びカメラを向けた。

目をつむつていても、苦痛をこらえる表情は眉にまで表われて、目を閉じていることに不自然さはなかった。

注射針は抜いてくれたが、写真はなか／＼終らなかつた。

痛さの方がまだましだと思ふような、恥しいポーズもとらされた何をされようと、手も足も縛られていては、どうしようもなかつた三人がかわりがわりに看視している以上、逃げ出すことも出来ない。

貴船一郎さえ来てくれたら……。小百合夫人は心に念じた。夫の

【読者通信】

(投稿歓迎)

KK通信見本及び画帖時代物責絵巻入手致しました。本当に立派なものです。全部どれを見ても色彩及び緊縛方法、緊縛度は申し分ありませんでした。唯慾を言えば説明文と構図に於いてももう少し突込んで書いて頂けたらと思ひました。例えば八百屋お七の処刑の場合等はあの様に抱えられたらもう少し太股のところ迄着衣の裾がまぐれないものでしょうか、十郎左エ門と腰元に於いてもあれだけ手荒く手籠めにされたらもう少し跳く筈です。然しなんといつても自分のよいコレクションが一つ増えました。次は何を出されるかと今から期待して居ります。

(横浜 中生)

九月号の緊縛美のオンパレードは全く感心いたしました。とかくこういう物は発表したがらないのですが御誌の良心的なやり方には文句なしに好意を持たせられます。今後と

雄作が此の家に来るはずもない。誰か救つてくれるとしたら、それは貴船一郎より他にはないのだ。村山富男は小百合夫人が虐げられることを、あまり嬉しくは思っていないらしいが、しかし、ここにこうしてれば、毎日でも会つていられるということが嬉しいらしい。そして、悪いのは松枝なのだと、罪を松枝にきせて、自分から小百合夫人を逃がしてやろうとはしてくれないのだ。

こうして小百合夫人の美しい裸身は、縄や責道具をまといつて、何枚か写真に残されていつたのだつた。

(つづく)

もこういつた企画をどし／＼と進められるように希望します。私の虫のよい願いかも知れませんが緊縛女体の写真も着色の口絵として掲載せられたらどんなにいいでしょう。出来るようでしたらこんな望みも一つかなえてやつて下さい。

(福岡 森松生)

最近、断然面白いと思つたのは「クリスチーメの受難」と「甘美なるアリスの降伏」だつた。何れも合意でなくサディストツクな行為である点に与味を持つた。それと共に片矢薫氏の「廓の灯影」もよかつた。その他の読物も他誌に見られない特殊なセンスを持つた記事内外を問わず盛り上げていけるのがいい、口絵及写真も責めの加虐と被虐から流れ出るリズムとメロディが美しく調和しているのので保存しておいても楽しい雑誌であるのは嬉しい。

(高崎 M生)

九月号の羽村京子さんの「京子の生活と意見から」古川裕子さんの「長期刑」どちらも息づまる思いで読みました。マゾにしてもサドにしても近代人の意識の底から生れたものでなければなりません。羽村さんのものには冷たい知性の閃きがありその空想にしても並々ならぬものがあります。「長期刑」は三回四回と繰り返して読み、自分のサディズム的気持を外に表すことの出来ない時の慰めとして価値を見出して居ります。

(和歌山 O生)

真面目で落着いた編集ぶりは御誌独特のものだと思ひます。口絵写真では村田那美子さんの哀切と恍惚の表情は責めモデルとしては大層素質のある人だと思ひました。一つ村田さんを日本髪、和服姿で縛り上げて口絵にしたらどうでしょう。勿論カヅラで結構です。そういった狙いは他の方々にもきつと希望していられると思ひます。

(東京 瀬川某)

其頃を語る (五)

責め場の舞台装置法

伊 藤 晴 雨

私が女の責め場を主とした芝居を初めたのは、今から凡そ三十年も昔で、愛妻を失った淋しさの余り、何かで慰安を求めたい心持で一杯になつていた矢先、俗にいう十銭芝居と云つて入場料金十銭で見せる寄席の芝居の組織を思い立つて、一座を組織して責め専門の劇団を始めた。それは大正十四年の夏で、その時は馬鹿正直に俳優の給料を支払つたり弁当屋から弁当をとつて喰つたりしたので、大失敗に終り、昭和八年の夏、再びそうした劇団を作り、自ら脚本も書き背景も描き衣裳小道具の製作と買入れもすれば、電屋の交渉にも飛び廻り、絵看板も描けば興行先の交渉

もやるという三面六臂の働きぶりをして、当時の金で数千円の欠損をした。それにも懲りずに其後、日支事変突発当時、ある美しい女形を発見したので、之を座長にして半年斗り小劇団を作つて、東京市内の寄席を打ち廻つて、毎晩責め場の芝居ばかりを演つて独りで喜んでいた事があつた。

そうした苦しい経験もあるので、最近四度目に小劇団を組織して友人の新築した文京区東片町下在の中村座という間口五間奥行三間定員百五十人の小劇場を根城にして、「責めの劇団」を組織した。第一回の試みとして、その第一回を六月四日、千葉県市川市の鈴木

演芸場で開き、三十余名の会員を前にして「雪責めの女」を上演し、引続いて七月十一日第二回を前記中村座に於て実演、番町血屋敷青山鉄山邸に上場し会員組織を以て興行したお菊の鰐り殺しには血紅を思い切つて使い責め場も十分に時間に関わらず、ゆつたりと芝居をした。

扱つた記事は自己宣伝に類するが、普通の芝居ではとても見ようとして見られない思い切つた残酷さと、其の美しさを観賞する専門の劇団は自慢ではないが、三十余年前から私が実行しているので、其時の放浪記とも云えるべきか。

其時、市内を転々して毎興行十日を一期として移動する、劇団の話を書いて見たら或は現代もそうした方面の事を実際にやられる方々の御参考にもと思つて、逐号「奇夕」の名編集長其田京二氏の御了解を得て、「素人の組織する責めの劇団」或は「責めの劇団ではどうして作るか」という御質問に応じたいと思つてゐる。こうした記事は、或は其の頃を語るといふ意味からは稍脱線的になるが、鑑の生えた昔咄ばかりでも明治の昔々譚、桃太郎やカチ／＼山では子供でも承知しないのに現代の若い方には「八十になろうが九十になろうが……」等と叱られるのも気が利かないと思うので、多年愚老の経験から得た「責めの舞台装置の製作方法」を少し書くことに致します。但しこれは専門の大劇場のそれではなく、ホンの小劇団で行う大衆的な、もう一つ言葉をかえて云えば素人芝居の装置方法を記す事に致します。

「女の責め場」の芝居では、何と云つても「女を縛る立木」が劇の重要使命を帯びて居りますので先ず「女を縛る立木」から話を進めることに致します。

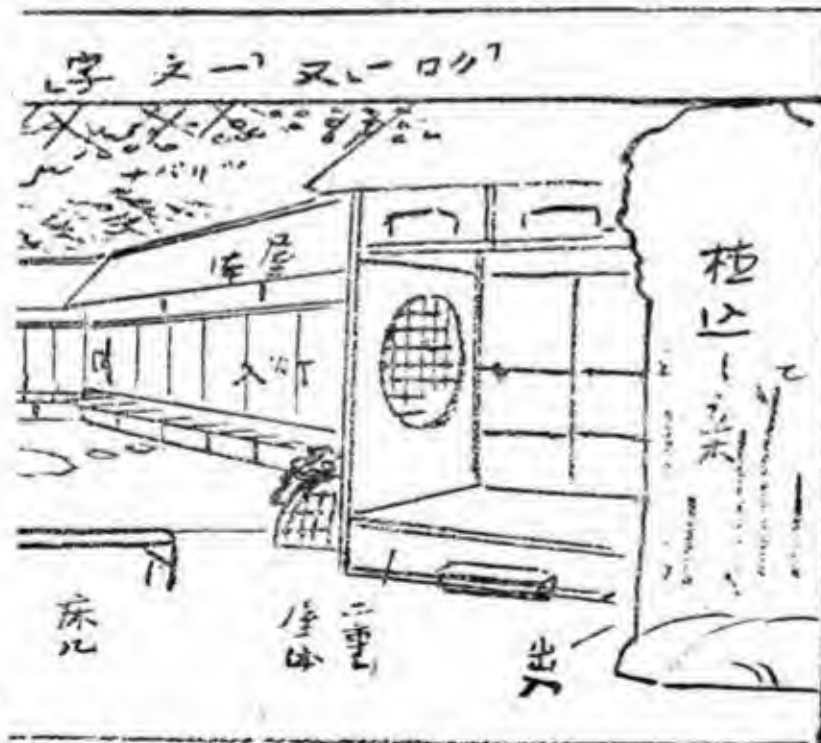
女を縛る立木は普通の場合桜が良いと思う前にも一寸云つた如く、高嶋田振袖の女が桜

の木に縛られた形は如何なるモード礼讀者といえども、反対意見を出すものは有るまいと思われる（尤も日本製の油の匂いが嫌だと云う人は自ら別問題である）或は又、現代劇にしても女を縛るのは立木が一番合理的でもあり形もいゝので、私は先ず立木の製作方法から述べる事にする。

芝居の大道具には、普通平目（ヒラメ）と丸物（マルモノ）の二つの区別がある。平目と云うのは、「切り出し」といつて平面の板に泥絵の具（此事は後に説明する）を以て、

立体感を起させるようにかき起しをするもの丸物に二種あつて半丸物と丸物の二種あり、丸物と云うのは例えば太功記十段目に光秀の乗る杉の木のように四方から見ても丸く出来てゐるものゝことを云い、半丸物というものは正面だけ丸物で裏面半分を節約した物をいう。

現代の装置法は大抵



普通に用いらるゝ責の装置

丸物を使わずに平目の切り出しを使つてゐるから素人芝居の場合には、費用の点から云つても「切り出し」の方が経済的でもあり、取扱いにも便利である先ずベニヤの板を廻し鋸などで（ミシンで引けば猶よし適当に切り、これに日本紙を張る。板に直接絵の具を塗ると光線を吸い込んで美しさを減殺される。室内劇の場合などに殊に目立つからそうした時には是非紙を一度板の面に張つてから絵の具を塗る方が色もよく出るし、描きよくもあるから此法をお薦めしたい。扱の幹を描くには、普通面胡粉（一番安い胡粉で一名台胡粉とも云う）に松烟黒を少し混合させて鼠色をつくり、一面に塗り

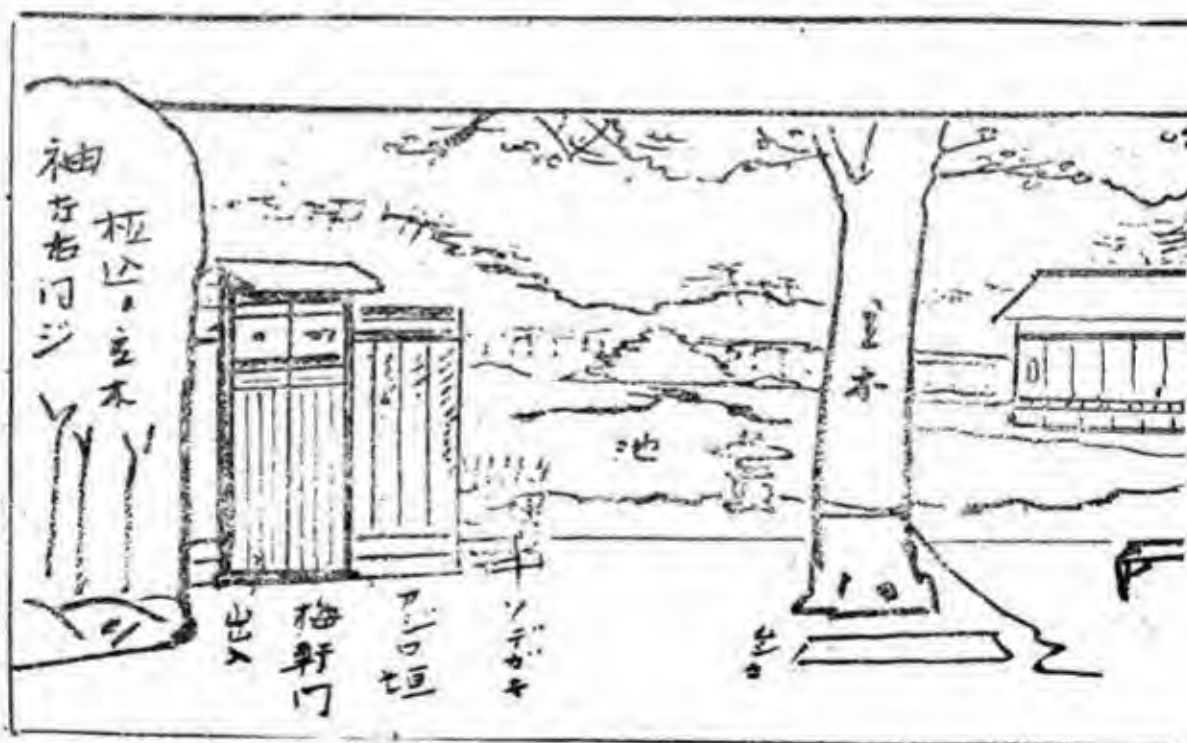
乾き切らぬ内に更に稍濃い鼠色を以つて桜の樹皮を描き、最後にライトをつける。これが乾き上つたならば造花の桜（枝付き）を適当に打ち付けるのであるが、その下枝はなるべ

くあまり高くない方が、見た眼が良い。次に桜の木を立てるので、劇場ならば立木の穴があいているがそれの無い所では鋸を用いるのだが、鋸の打つことの出来ない場所、例えば料亭の床敷とか家庭の一室などでは、畳へ鋸が打つことが出来ないのであるから、此場合には「板心木」というものを用いるがいゝ、板心木というのは図に示す如く、少し厚味の板の上に件の立木を置いて板と立木との連絡に鋸を打つて止めるので、板を露出させない為には地ガスを利用するが良い。「地ガス」というのは地面の色をした布で、専門語では「地ガスリ」又は「地ガスマ」とも云つてゐる。桜の前に松の木に女を吊り上げる場合などは特に「切り出し」が便利であつて丸物を使うのは不必要である。女を吊り上げる立木は軽く作り、その立木の切り出しの蔭に腕木を作つた添木を立てゝ、此の添木に見込みで滑車を上から下して、責められる女の体を上へ下げするようにすれば、見物席から真に木の梢に吊下げられたように見えるものである。雪責めの場合には立木には雪と見えるように胡粉を塗り、バラを振りかける「バラ」といふのは刷毛に胡粉を十分に含ませて、手を以て叩くと胡粉は微粒となつて雪のようにバラ

く吹き付けるのである。これは雪を表現するに非常に至便であるから、大道具製作者は何時も塀や垣根に雪景の場合には、此の方法を用いるのである。

立木の杉の枝は実物を用いる方が良い、積つた雪は室内劇等の場合ならば脱脂綿を冠せておくがよい。雪責めの場面に用いる雪は専門的には「紙元結を作つた裁ち房」が一番いゝとしてあるが素人芝居の場合ならば白でさえあれば何紙でも良からう。三角形に細かく切つて荒目の籠に入

れて、舞台上に吊し籠に縄を付けて振るようにして、籠は黒の一文字で降しておく事が必要である。寄席の芝居や場替劇場の雪は、新聞紙を切つて使うが、天皇陛下の横顔等が雪の中に現われるのは感心しない。舞台面には

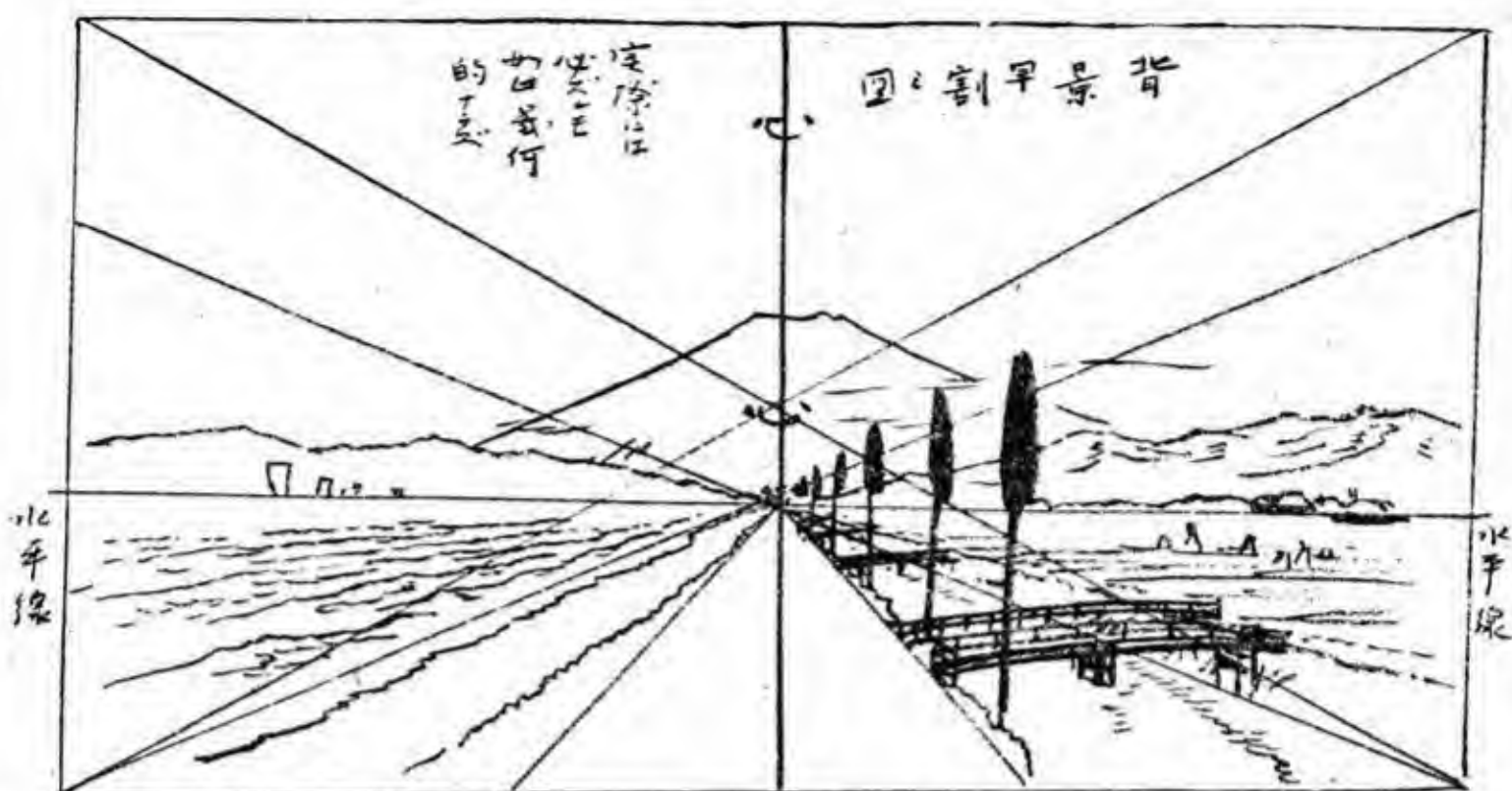


雪布という白布を敷きつめるのが昔からの習慣で、器械文明が進んでもまだ日本では本当の雪を舞台に積らせるまでには進歩していない。

映写機を応用して雪を背景に映すのは専門家の仕事であるから茲には説かない。明治時代に本當の雪を降らせると宣伝して、舞台の上で氷をかいて団扇で之を簀子から降らせた事もあつたが、効果はゼロであつた。

女を縛る縄は旧劇ではウコン縄といつて黄色の木綿を相交せた縄を用いるのが定式にな

つてゐる。明烏の浦里でも、皿屋敷のお菊でも、金閣寺の雪姫でも皆此の鬚金縄で縛られてゐるのは舞台の色彩という事を主眼とした旧劇の伝統で、芝居の舞台は必ずしもリアルでなくとも良いと思われる。女を責める道程



としては、普通の場合割り竹が多く使われることは周知の通りであるが、割り竹は普通の青竹を割つたものを用うる。舞台を叩く音が女を叩く音に聞える時更に面白味(?)があるから今以つて此の方法が採られている。

扱、これ迄は責めの必要な芝居に、最初に最小限度の道具で之に次いで其の場の背景を表現すべき背景であるが、これは別に背景製作法の部に説明する事にしたいと思う。

女の責めの背景は、大抵の場合庭が便利であろう。時に或る例外として室内の場合もあるが、庭前の方が立木を使う事が都合がいゝと思う。

女の責め場の舞台を陰惨にする場合、反対に美化する場合と二種あるが、後者の場合の方が芸術的になるかのように考える。見た目本位ばかりが芸術では無いなどという議論は抜にして、美化された女の責め場の舞台を考えて見たいと思う。

責め場の背景として特種なものは勿論ないけれども、血屋敷は奥庭遠見(若しくは遠見といった背景という名称は明治三十六年以後だと私は記憶している)浦里は黒塚

の遠見紅血缺血は板塀の中遠見とそれ〴〵の使命をもっている。それは責められる女の服装に反対な色素をもつたものと、或は又全形全色の調子を保つた舞台装置とに依つて構成されているが、室内劇の場合にはそうした完全な構成は許されないものと見て、出来るだけ簡素な効果的なものを選ばなければならぬが、さればと云つて極めて古風な装置法の「後ろ一面の浅黄幕」一点張りでも不可ないだろうし又、現代の装置でもない要は中庸を尊んで或る程度迄の装置と表現は必要である。曾て戦時中、東京都長官(?)の立札に「贅沢は敵だ」というのがあつた。

或時、都のお役人と一座して飲み喰いした時、此の立札の話をして贅沢は誠に結構だ、これを禁止したら働く者は無くなつて了うだろう「贅沢は敵だ、などと云うけれど、どうか敵にめぐり会いたい」と書いて渡してやつたら都のお役人は顔を儲くしていた事があつた。私事を申し上げて済まないが、舞台装置は贅沢でなければならぬ。乞食芸居をしているのでなければカンソ〜と鹿児島の人間が奇病に患つたようなことを云っているのは演劇美術の常道に外れているので芝居をする以上は或る程度迄の贅沢は必要である誰やら

からお叱言を喰うかも知れぬが野蕃人が野天芝居をするのでない以上舞台装置は贅沢であり必要以下に落ちてはならないと考える。

奥庭の遠見は灯入りの中遠見で、正面に泉水、上手に折廻しの座敷向う一面のあじろ垣下手に梅軒門の出入というのが約束のようである。植え込みの紅葉が桜に代るか、桜の立木が柳に代るかという程度の変化であるから或程度の約束は守るべきで狭い舞台を広く見せる工夫は古人が美味く工夫をしていたと思うので、女の責め場の背景は特殊の脚本を除けば先ず桜の咲いた庭の菊花壇の庭が相当によりよき効果を挙げるものと考えて今日迄実際に従つて来たのである。

茲には議論抜きに実際問題として、責めの舞台面を二三書いておく事にする。読者或は之を以つて責め舞台面の全貌を尽したりと言ひ賜ふ事勿れ只僅かにない一部の表現と一般衆知の舞台面のコンポジションを示し参考とするに止まるもので、之を基礎として百変万化の妙を極め給えと云つておくものである。

背景製作の第一歩は、全部の構図が基礎になるものでつまり全体のプランである。むづかしい方法を選挙して極めて判り易く云えば背景の高さの三分の一の辺りを水平線として、

三分の一以上を空とするのが大体の比例であるが、稀に四分六の高さ迄水平線をもつて行く事もある。要は見込みである。背景は其の観点を劇場の平土間（一等席）に置いてあるので必ずしも洋間の投視画法に拠るの必要は無く、殊に責踊の装置などに至つては、水平線を背景の外におく場合もあるから女の責め場の装置は各自の好みに従うが良いと思うのである。

茲には主として女の責め場の芝居を試演的に各自の室内劇として演ずる私演用の舞台装置、云い換れば素人の手細工でなし得る範囲を限定して説明するつもりであるから、決して専門家の劇術では無いことをお断りしておく。

先ず最初に、背景その他大道具の材料に就いて云うことにする。演劇の約束として大道具と小道具との区別は専門家と雖も、その区別は非常にむづかしいものであるが、大略登場俳優の手に触れる物は小道具で、手に触れぬ物は大道具と思えば大した間違はない。一例を云えば御殿の場にある御立は大道具から出すのだが、花井お梅の序幕でお梅の破るものや、原田甲斐の大詰で立廻りに破る竜の御立は小道具であるやゝ専門的になるが、忠臣

蔵九段目、山科閑居の場で力弥の用うる竹の弓は大道具でありそうなのだが小道具に属するという風に妙に七六つかしい劇道の旧習があつて面喰うことがあるが、専門の小道具を使用する場合の参考迄に記しておくのである。扱本線に立戻つて背景及び舞台装置の咄に移ることにする。元来背景用のドロツプの材料は木綿を木に張つた所謂張り物が一番いいのであるが、それは余りにも高価であり、非実用的であるので私はイタリーやソ連の田舎廻りの俳優達が使用している背景用の紙即ちハトロンの一番厚いものを特別に紙屋に注文して使用することになっている。これは絵の具のノリが良く、缺点としては破れ易いことゝ画面に皺の多く出ることであるが、経済的には頗る都合がいいので私の劇団責めの劇場には之れを使用することになっているから、暫く此のハトロンの使用して製作する背景製作法を説くことにする。（続く）

編集に対する御意見

本誌の編集方針、内容等についての御意見は御遠慮なく御申出下さい。

各担当者より速かに御返事差し上げます。

（編集部）

あるマゾヒストの手帖から (五)

沼 正 三



第三十三 ネズミ入りのクツ

前項に抽象的に述べたことの実例をあげておこう。今迄私が「想像的読書法」を適用した事例はある意味では皆微視的マゾヒズムといえるのであるが次のなどは特に虫眼鏡を必要とする程度に微視的であると思うので、読者の中、マゾヒストを以て任ぜられる諸君は、自分のマゾヒズム感覚がレファインされているかどうかを、次の一文からマゾヒスティックな感覚を得たかどうかで判断してみられるとよい。昭和二十八年四月十四日附朝日新聞朝刊海外トビック欄にあつたもの。

今年のパリ・モードの一つにハイヒールのカカトを空洞にした透明のプラスチックで作りその中にハツカネズミを入れるというのが流行している。もつとも多少変つたご婦人方だけにだけ行われているらしいが、これは六年前デンマークのある伯爵夫人がパリ

の舞踏会でガラスのカカトにネズミを入れて出席したのが始まりだという。デンマークの動物愛護協会は同夫人に対し裁判に持出すといきまいてゐるが、ご本人は「とても可愛いネズミで舞踏会では大評判でしたわ。ネズミ一匹のためそんな大騒ぎすることないと思いますわ」とのこと。(AP)

マゾヒスト諸君、いかがです。この話から何か胸に迫るものを感じられたらうか。

この文章を鑑賞するに当つては、ひとは先ずハツカネズミに転身せねばならない。ウイルヘルム・ハウフの童話集を読んだことのある人は「鼻」と呼ばれた鼻の大きな醜い倭人が、もとは可愛い少年であり、醜女に誘拐されてその宮殿内でハツカネズミに変えられ、倭人「鼻」の姿にされるまでの長い期間を、他のハツカネズミ達と共に醜女の身の廻りを世話したり、好みの料理を作つたりする仕事にいそしんだことを思い出すだろう。だが醜女の宮殿でない以上、ハツカネズミが入られるのは網籠の中と決つてゐる。

さて愛玩動物店の店先で、ハツカネズミのヌマ君は車を廻しつつ

生を楽しみ、良い買手を待つていた。そこへ美しく着飾った貴婦人が車から降りて来た。ヌマ君は知らないが、この店で何万フランもする高価なコリーやベルシヤ猫を買ってくれる上得意だ。店のおやじは揉手して迎えた。

「ハツカネズミが二匹欲しいの」

「はい、畏まりました。網籠はどんなのがよろしゅうございましょう？」

「ううん、それがね、容れ物はもつて来てあるのよ。」

目顔の合図で、女中が後から舞踏会用のハイヒールをそつと出す。おやじは解せぬ顔だ。女中は仕掛のねじをまわして、カカト丈を取り外した。

「こん中へ一匹宛入れて欲しいのよ」

「へえ、靴のカカトで……」

「ガラスで作つてあるでしょ。これを穿いてダンスするのよ。呼吸する孔はあけてあるわ」

かくてヌマ君は今迄の相応に広々した網籠から、忽ち小さなガラスの容器に入れられることになった。だがマゾヒストネズミのヌマ君はその束縛を愛した。何故ならハツカネズミのためにこんな窮屈な容器を考案したのは美しい伯爵夫人のオシヤレ心だったからだ。彼女が人をアツトいわせるためにはヌマ君の犠牲が必要なのだ。どうせ目的としてでもなく、手段として生きる飼ネズミの生である。なるべく有意義な方がよいではないか。そして貴婦人の靴の一部になるのはヌマ君にとつて有意義ではないだろうか。

やがて舞踏会が始まり、彼女は二匹のハツカネズミを入れた靴を穿いて出場した。そしてヌマ君は幸福だった。美しい貴婦人の

足の真下を定位置にするとは！単に好色なハツカネズミだったら一番好ましい居場所として彼女の両股の奥深くを希望したかも知れない。しかしマゾヒストのヌマ君はそれよりも貴婦人に踏みつけられたかつた。ただ踏まれれば潰されてしまう我が身を今迄嘆いていたのだ。何とこのガラスのカカトは踏み潰されずに貴婦人の足下に身を置く唯一の場所ではないだろうか。

リズムミカルなクツの旋回にヌマ君の目は次第に廻つて来たが、本来自由に活動しえた自分の身体が全く主体性を喪失して、彼女の靴の一部と化してしまい、彼女の足の動きがそのまゝ自分の身体の動きとなつてふりまわされる完全な従属に、この上ない快感を味わつていた。

「お美しいですね」とパートナーの若い士官は踊りながら媚びるように伯爵夫人の耳にささやいた。「あなたのお靴のカカトに入られたネズミ君を羨ましいと思いますよ」

「あなたもネズミにおなり遊ばせ」彼女はにつこりして答えた。

「そうしたら、いつでもこの中に入れて差上げますわ」

「ふだんはお居間で可愛がつて戴けるのでしような」

「あら、困りましたね。うちじやベルシヤ猫がいますのよ、だから……」

「おうちで飼つてらつしやるんじやないんですか？」

「えー」

「じや、そのネズミは？」

「ここへ来る途中の店で入れさせましたの」

「おやおや」

「これからもうちでネズミを飼う気はありませんわ。靴の方は入

用の時に店先で入れさせれば間に合いますもの。今日のは帰つたら猫ちゃんにおみやげですわ」

「猫に？ 可哀そうですね。あなたのためにお役に立つたものを」

「用が済んだら要りませんわ。たかがネズミじやありませんか。騒ぐことないでしょ。それよか猫に飼らせた方が面白いわ。半殺しにしておもちやにするのがそりや上手なのよ。うちの猫ちゃん」

「ネズミになつてあなたのお靴の中に入れて戴くのは願ひ下げにしましょう、ベルシヤ猫のおもちやにされちやたまらない」

「あら……………」

二人は目を見合せてほゝえみ、更に踊り続けた。その力カトの中では又マ君が、やがて伯爵夫人の手ずから彼女の愛猫に与えられるまでの束の間のいのちとも知らずに、只今の幸福に恍惚としていた。

……………

まあこんなところが、私が前記の記事から感得するところである。動物愛護協会が靴の力カトに入れられたハツカネズミに同情したのに対して、彼女は「ネズミ一匹のためそんな大騒ぎ……………」と答えたこの精神がなければ、そもそも、こういう奇抜な着想はできるものではない。その彼女が貴族の女性であることも、やはり、と思われて嬉しい。更にそれがパリ・モードになるときいて益々嬉しい「少々変つたご婦人方」というのは、要するに、右の伯爵夫人の様な精神を持つた、マゾヒスト好みのする婦人と解して差支えないと思うが、とにかくそういう女性が相当の数に達してモード界の一角

に無視し得ぬ存在として現れるに至つてゐることは、さすがにパリであり「第二の性」だの（ボーヴォワール）、「男女職業顛倒論」だの（テスカ）のはびこるフランス女性の面目がうかがえるように思う。

パリ・モードは世界的モードである。今年は日本でもこのネズミ入りのハイヒールが見られるかも知れない。



第三十四 「犬頭の男」

ジャン・デュトウールの「犬の頭」と題する小説を「新潮の」の二十七年八月号に河盛好蔵氏が訳している。生れながらにして「垂れた長い耳と、大きく裂けた口と、白と黄のふさふさした毛をもつたスパニール犬の頭」を持つた男の話である。体の他の部分は少しも普通と変つてない、才能も尋常である。ただその犬の頭の故に甚だ教奇な運命を辿らねばならない。

翻訳されているのは作品の前半であるが、非常に面白い、マゾヒストにとつては特に考えさせられる所の多い小説である。容易に搜して読めるものであるからこれ以上解説することは止め、例によりサワリの所文を抜萃しておこう。主人公エドモンは両親からも追ひ出され、ある下宿に泊つてゐる、どの職業からも断られるが、やつと銀行員の職にありつく。同僚にマリアンヌという二十才の可愛いパリ娘がいる。以下はその娘との交渉である。

あるとき彼が汗を流して帳尻を合せていると、マリアンヌが、

そつと近づいて、彼の気のつかないうちに、バラ色のリボンを彼の頸に巻きつけた。この馴れ馴れしさがエドモンを有頂天にした。またマリアンヌは彼女の窓口から彼にしかめ面をして見せた。すると彼は鼻面に皺をよせたり、または耳の先を歯で噛んでみせたりしてそれに答えるであつた。つまり二人の間に子供っぽい愛情のやりとりが交わされることになつたわけで、そのためにエドモンはマリアンヌこそこの世の中で彼を理解してくれるただ一人の女性であると思ひこむようになったのである。

朝、銀行にやつてくると、彼女は「誰か砂糖の欲しい人はない？」と云つて、ハンドバックから砂糖のかたまりを出して、エドモンの机の上に置く。エドモンは砂糖には眼がなかつた——これは犬の特徴である——この毎日の心づかいが嬉しくてたまらなかつた。一月後にはマリアンヌは、時に応じて、エドモンの鼻面を愛撫するようになった。こんな風に手で触られると彼はわくわくした。彼女が彼の毛の上に手を置くと、馬鹿のようになって眼を閉じて鼻で息をしていた。彼は幸福であつた。どうしてそうであつて悪いだらう。若い美しい娘が彼を愛してくれている。犬の頭をしているからといつて若い美しい娘に抵抗することができたらうか。彼の学校時代の友人たちのように、マリアンヌもふざけて彼を「わんわん太郎」とか「ポチ」とかいつて呼んだ。しかし彼女の口から出ると、それが全く別の言葉にきこえるのであつた。

——どう、御機嫌はいかが、あたしの可愛いポチさん。

正午のベルが鳴つたとき、彼女から「今日はどこのレストランへポチは骨を貰いにゆくのか」と聞かれても、彼は腹を立てること

ができなかつた。彼女は彼に舐めて貰うために収入印紙を持つて来ていたのであつた。

——ずいぶんあなたの歯は大きいわね！
すると彼は得意になつて答えた。

——あなたをうまくかじるためですよ。

しかしエドモンにとつて一番嬉しいことは彼の美しいひとがエドモンのことを「マリアンヌの飼犬」と呼んでくれることであつた。恋というものはこの種の愚にもつかぬことで作られているのである。

ある晩、マリアンヌはエドモンの誘いに応じてくれた。しかしこんな同伴者と一緒に歩いているのを人に見られると恥かしいので、彼女は映画館の入口で落ち合うことにした。……中で彼女は彼女の手を握つた。彼女は握られるまゝになつていたが、氣の利かない彼は一時間もその手を握りしめていただけで、それ以上のことは思い切つてすることができなかつた、……エドモンは機会をつかむことができなかったのだ。彼はうぶであつた。マリアンヌは不意に自分が恥かしくなつた。彼女はエドモンの手を荒々しくふりほどいていつた。

——出ましようよ。もうたくさん。あたし帰るわ。

外に出ると、エドモンは彼女の腰に手を廻そうとした。彼女はそれをすりぬけて、冷たい眼で彼をにらみつけて、吐き出すように云つた。

——犬小屋へお帰り、クロ！（前）脚を下げて！

不断の優しさのみじんも見られない残酷な調子で云われたこの言葉はエドモンには罵倒の声であることがよく分つた。彼はだま

つて彼女のあとに従った。

翌日の朝、マリアンヌはエドモンに一言も口を利かなかつた。

正午になつて、彼が甲斐絹の袖カヴァーをはずしていると、彼女は彼のそばへやつてきて、書類を整理したり、外套を引つけたりしている同僚に向つて叫んだ。

——みなさんいらつしやい、犬を仕込むところを見せてあげるから。

それからエドモンの方をふり向いていつた。

——ねえ、クロ、今日はまだ砂糖を買つてないだろ。

マリアンヌは冷笑を浮べていた。恋した娘がこんなにも侮蔑的な行為に出るのを見てエドモンは口が利けなかつた。

——そら！ とマリアンヌはハンドバツクから砂糖のかけらを取出して言葉をつづけた。ちんちん！ おねだり！ おあずけ！

彼女はエドモンの鼻面に上にそのかけらを、うまく釣り合いのとれるように置いた。しかし彼は頭を垂れたので、砂糖は下に落ちた。

——ふん、口の利ける犬にしてはお前へマだね、とマリアンヌはいつた。そいじや死んだ真似をしてみるか。できるだろ、それ位の芸なら、いや、そうじやないつてば。本当は、お前いやなんだろ、ちんころめ。ああ、そうか、分つた。お前は跳びたいんだね。よしよし、だれかクロに輪をやつて下さいな。輪抜けをやらせるわ。面白いわよ、皆さん！

マリアンヌの中にはひとかけらの愛情も残つていなかった。彼女は手に負えない敵になつていた、エドモンには思いもよらない

ことであつた。同僚たちも困つたが、眼の前でマリアンヌを叱りつけていじめる気はなかつたし、それかといつて、あまり大声で笑つてはエドモンに可哀想であつた。そのためにどつちつかずの態度を取つて、氣まりが悪そうににやにやしたり、頭をふつて心の中の非難を見せたりしていた。

アリマンヌは不意に調子を変えて喋り出した。

——みなさん御存じ？ クロちゃん昨日の晩あたしを映画につれてつてくれたのよ。

エドモンの耳はわれにもあらず、頭蓋の上にびつたりとくつついてしまつた。恰も主人が鞭を振り上げたときにスパニール犬がするように。マリアンヌは言葉をつづけた。

——それからどうしたと思つて？ クロはあたしにキスしようとしたのよ。嘘なもんですか。犬つてそんなものよ。さかりがついてるのよ。そろそろ雌犬を見つけてやる時分だと思わない？

でもない、あぶなくて仕方がなくなるわよ。犬というものはどれでもおなじに、自分の女主人に惚れるんですつて。迷惑なのはあたしよ。あたしは犬がきらいなんですもの。女主人は自分のベツトに、犬は犬小屋に、というのがあたしの方針よ。あたし間違つてるかしら？

訳者の附記によると、この作品の後半で、エドモンは結局次第に本当の犬に似てゆき、犬小屋に本当に住むようになるのだそうである。「犬の頭」には一九五一年度のクールトリーヌ文学賞が与えられているという。

数多くのマゾヒズム小説がくりかえし／＼人を犬にして来た。然

し私の読んだ限りにおいて、生れながら犬の頭をした人間という条件を設定して、この仮定の下に事件を展開せしめた作品はこの「犬の頭」がはじめてである。作者自体は必ずしもこの種の効果を意識的に計算してはいないにかかわらず、この小説がマゾヒストに大きな感覚を与えるのはその仮定のためであつて、一度この架空的な条件を受けとつてしまえば、マリアンヌのエドモンに対する犬に対するような言葉違いも全く迫真的になつてく

る私達も皆の前で自分の愛人から犬として恥かしめられたいとは望むけれども、犬の頭をしていない限り、それは茶番になつてしまふであらう。犬の頭をしているというフアンタスティックな条件の故に、この描写は甚だリアルである。

そして又それが全身が犬であつたのでは私達の共感を呼ばない。人間であつてしかも犬として扱われるからこそマゾヒスティックなのである。エドモンは頭丈が犬の外観を具えている。然し他の点は人間であり人間として行動している。私達はエドモンを人間として扱うことができる。しかも、マリアンヌは彼を全くの犬として取扱う。そこに私達はマゾヒスティックなものを感ずる。要するにマゾヒストの理想とする「人にして犬の状態」の一つの形態として、この小説は今迄にないものを提供したとい

えるであらう。あえて一読をすすめる所以である。(未完)

【愛読者諸氏へ】 本誌五月号の「マゾヒストの会」の末尾に「マゾヒストの手帖」を「マゾヒズム講座」として紹介いたしました。筆者より「マゾヒズム資料」又は「マゾヒズム随筆」と「訂正の御申出がありましたのでこゝに御断りしておきます。

○九月号誤植訂正と補遺

(第二十八、汝男の許に行くか……)で、グレーア、マイセル、ヘスは、グレーテ、マイゼル・ヘス Grete Meisel-Hes 嬢の誤り。

(第三十、外国語の「むち」) 木村亀二教授の論文名「身の体刑云々」は「身体刑、特に笞刑」の誤り。「刑事政策の基礎理論」という著書に収載されている。なお本項では一節全部脱落した箇所があるため、意味が通じなくなつてゐる。九五頁上段五行目の次に、次の一段を補われない。

この「鞭」に対して、英rod、独Rute、仏verge、羅viga等はしなやかな木の枝を切取つて作つたむちで、「楚」にあたる。現在では「笞」と訳するのがよい。これに「鞭」の字をあてゐるのを誤りとい

い切ることは酷かも知れない(間違える人が多くて、既成事実になりかかつているから)が、whipとは全く違ふのだから誤解を生じ易い点で感心しないということはいえよう。嫩枝を何本も束にして用いることが多い(vergeでは疑いがあるが)。尤も特に茨の枝を束ねて作られたものには独Dornengeißel(荊棘の笞)の語がある。英switch、独gerete、羅terula、等は厳密にはどうか知らぬが実際上は、rod、Rute等と同義に用いられている。この木の枝のむちは革鞭ほど痛くないので、子供の躰や軽い懲罰に用い「笞を惜んで子を損う」とか、Zuchtrute(懲戒笞)とかいう用法があるが折檻用と限つたわけがなく、Reitgerete(乗馬笞)などという語もある。(以上)

The Sweet Surrender of Alice.

甘美なるアリスの降伏

(第三回)

珍書紹介

寒川 緑・訳

第四章 懺り責め

「あゝ！あゝ！あゝ！」

征服の歓びに浮かされた私の眼は鏡に映るアリスの裸体を追っていました。飛びつく様な視線は、畏縮してブル／＼震える形像を這いずり苛みました。紅潮した顔面を除いては、総て白く光り輝いていました。ですが、私は此の勝利の瞬間に於いても、今、こうして、こよなくも露出された処女の匂う様な裸体美を心ゆく迄鑑賞するには、尚、何か意に充たないものを感じるのでした。更に、シユ



いうのです。

アリスは、私に真前に腰を下されて、顔や胸を真赤にしてモジ／＼身動きしました。所謂、死の苦痛は、去つたのです。衣服は既に取り去られ、身につけているものはもう無いのです。ですが、彼女にも、未だ無数の侮辱、屈辱が用意されて居ることが瞭然と予感され、又私の身の毛もよだつ様な眼が、今も自分の肌の隅々を捕えているという事も知っているのです。両手首にかゝるピンと張つたロー

ミーズ、肌着はまだ其の儘彼女の足元にあるのです。私は背後に廻りますと膝をついて、両足を一緒に持ち上げて外しました。他の衣類の上に投げかけますと、眩掛椅子を彼女の前に運んで腰を下しました。これからアリスの裸体に組織立つた精密検査を行おうと

プ。此の二筋の無生物に依つて自由を奪われ棒立ちを余儀なくされている彼女には、口惜しくも肉体を隠す術とてなく、羞恥の苦悶の裡に、恐るべき剥衣の責苦を耐え、今、特にその肉体は、餓狼の眼に近々と点検され触診されようとしているのです。

私は、彼女の清楚で、愛くるしい容姿に常変らない最大の讚美を捧げてきたものです。

そして、彼女との間に不和の亀裂が入らぬ以前の幸福だつた日々、それが、園遊会、午後のお茶の一時であれ、又劇場、舞踏会に於いてあれ、其処に展げられるアリスの挙措動作を、誇らしく満足感を以て心に刻みつけられていたものです。そして、彼女が私を見捨て、心の深くに、癒し難い痛手を受けてからというものは、彼女の形影は、昼となく夜となく、私の情念を弥益しにあふり立て、浴室での彼女はあゝ、どんなに……など、あらゆる妄想に耽る自分を見出す事再三の始末でした。

或る一夜、彼女は、晩餐会に、胸を下の方まで開いたイヴニング・ドレスを着用して出席した事がありました。そんな時、私のいる傍のトラム上台に前のめりに倚りかゝつて、無意識に乳房を殆んどあからさまに見せ

ているために、私は危く自制心を失いそうになつた事もありました。けれど、今、此の様に私の前に心ならずも啓示している実体程の見事さを描き出す事は出来なかつたのでした。

アリスは全くの美女であり、その肉線は堪らない程の艶麗味を湛えていました。如何な彫像、如何なるモデルも此の絶美の女性と比較されるものはないのです。形の良い頭は、美しく象られた額や胸の上に、そこからは——強いて申せば太肉の——固い上向きの生意気そうで人の心をときめかせる喻えようもなく美しい一對の乳房が盛り上つていました。両腕はすんなりと丸く、掌は小さく形よく、全体に調和がとれていました。優美な腰は適度な大きさを持ち、下へ外へとうねつて素晴らしい臀部の曲線に溶けこんでいました。腿は丸々と肉付きよく、下に行くにつれて細まり、すつきりした腓、踝、小さな足に終つています。脚全体は、極めて取るに足らぬ事ですが、彼女としては稍々短い様でしたが、而し此の瑕瑾こそは却つて云うに云われぬ姿態の魅力を増す要素ともなつていました。お腹は優しい起伏を見せてなだらかな膨隆を示し、そこに深い臍窩が落ちこんでいました。

これが、私の前に立つアリスの全貌でした。おぞましくも、私の貪る様な視線を身に感じ、抑圧した感情に打ち震え、羞恥に心は疼き痛み、顔を真紅に染め代えて、我が身の美しさを知り過ぎる程知り、又、それが私に働きかけずにはおかぬ事も知っているアリスなのでした。啞者の様に一語も語らず、私は繰り返し／＼素晴らしいアリスの裸像を満喫するのでした。

けれど、アリスが、その素肌を手探られる屈辱を為すことなく甘受しようとは考えられませんでした。彼女は依然として、一つにして全的の圧倒的な事実、即ち素裸であるという事、曾て汚れ染まぬ肉体が慾情に燃える目の餌食となつていくこと、肉体の隅々に至るまで掩うことも手で防ぐ由もないという、気の遠くなる様な自覚に全神経を奪われていた様でした。時折に其の俯目は、忠実な鏡中の姿にチラと走るのでしたが、私に献上する光景をまぎ／＼と思ひ浮べては狼狽して目を外らせ、羞恥に怯えた頬に一層の紅を溶かすのでした。

私は非常な自制の末、今すぐアリスの甘美な肉体に手を触れ弄ぶ誘惑を押し鎮めました。手始めにアリスの裸身を凡ゆる角度から

目に収めようと考え、立ち上つて、彼女の横に並びました。楽しげな私の目は、其の側面に注がれました。胸のアーチ、誇らかに突き出た乳房、見事な腹の曲線、素敵なお尻の隆起——彼女の背後に廻りました。そして、一二分の間はそのふくよかなお尻の描く内曲線、震え戦く肉塊や形の良い足に無言の讃辞を捧げました。私は居乍らにして、美しい彼女の全身を余す所なく展望することが出来たのです。その背部は一望の中に在り、その前部は鏡中に反映しているのです。やがて巡視を終えた私は、近々と彼女に寄り添つて立ち動悸搏つ乳房をつくづく眺めるのでした。此の世ならず滑らかにふつくりした豊満さ、膚は象牙かと思わせ、チンマリとした処女の乳首は、愛らしくツンと外を向いていました。アリスは、こうした綿密な検分に、顔を赤らめ、ソワ／＼身動きさせるのでした。やがて、私の眼が丸い臍の窪を覗きこんで、それが次第に……移行し始めますと、身悶えは一層のこと激しさを加えて来ました。次に彼女の前に跪いた私は、此の絶好の位置から喰い入る様な眼を調査に集中しました。こうした間も、アリスは躍起と両腿を出来るだけ擦り合せて、同時にお腹を引き、私の意図を挫

折させ、眼を屈かせまいと空しい努力を続けるのでした。実際、それは或る程度私の眼を防ぐに成功したのです。ですが、私はやがて彼女を仰向けに、両足を大きく拡げた恰好に縛りつける下心がありましたので、それに対する大きな期待は、彼女の身のこなし方を左程遺憾とも感じませんし、尚更私の喜びを大きなものにするのでした。

「嫌！ あゝ、よして！」

私の眼が針のように彼女の肌に突き刺りますと、アリスは直接それを皮膚の上と感じてもする様に悲鳴を上げました。甲斐のない哀願でした。私は刻々近づく喜びの席を仔細に眺め、心を躍らせたのです。

私はやつとの事で身を起しました。そして一言の口も聞かずに鏡の後ろに入りました。手早く着衣を脱ぎ捨てますと、靴下に靴だけになつて突然アリスの真前に立ちはだかりました。

「あ！」

予期せぬ裸体の出現に動揺して思わず叫んだ彼女の顔は、見る／＼バラの様に真赤になつて慌て、目を外らせました。私は彼女の顔を無遠慮に見詰めました。此の光景は、淑女の慎しさが囁く訓戒を排してまでも彼女の心を眩惑させた様でありました。

「僕を良く見たくないかね？ アリス」

「すぐと私は意地悪く申しました。」

「僕は女性には親愛この上ない好箇の見本を持つていると思うんだ」

彼女は苦しうに身を震わせました。私は暫く間を置いて再び続けました。

「君の、全くの無関心から察する所、君は普段からうんざりする程裸の男を見ているんだ、それで、此の絶好の眺めにももう不感性になつているんだと想像せざるを得んね」

彼女は真紅になりました。けれど目は横に外らせたまゝでした。

「僕のこれが君の………かどうかも計つて見たくないかね」

私は付け加えました。出来るなら、彼女が必死と我が身の保護を託している沈黙の垣を打ち破ろうとして。

私は成功しました。アリスは棒立ちの状態を余儀なくしているローブを狂おしい様に引き張り、哀れに叫び出しました。

「嫌、嫌………あゝ……嫌よ！」

頭を後ろに投げ出し、けれど眼は恐ろしい光景を斥けるものゝ様に閉じたまゝ哀願するものでした。

「あゝ……あなた、ほんとに……」

泣き咽びまし

た。彼女には、
將に受けようと
している抵抗す
べからざる……

……恐怖を、全く
言葉に出して表
現する事が出事
ないのです。私
は、彼女に近寄
つてブルブル震
え怯える身体を
引寄せました。

私達は、鏡に向
い合つて、二人

乍らそこに、映し出されていました。

「嫌！ あゝ、触らないで！」

彼女は腰に廻つた腕の感触に悲鳴を上げま
した。………仰天した彼女は、金切声

を張り上げると、それまで閉じていた強情な
眼をパツチリ見開いて、悩ましい風情でグネ

／＼と身を捻じらせました。



「やめて！ あゝ、やめて頂戴
！」

息を喘ませて

叫ぶのでした。

「そんなら、チ

ヤンと眼を動か

して、鏡に映つ

てる姿を良く見

るんだ」

私は語調に幾

分の厳しさを含

ませて申しまし

た。

「ゆつくり、充

分、頭の天辺か

ら爪先まで僕を

見て御覧。見た

ら質問に答え給え。壁に懸つてゐるあの鞭や、

叩いてもらいたい様に剥き出してゐる自分の

お尻のことは忘れたのかね。云われた通りし

なければ、鞭をお尻に振り廻すのに躊躇し

ないという事を承知して貰い度いね。さあ、

良く見るんだ！」

アリスはブルツと身震いしたが、やがて

波々目を上げますとオド／＼と鏡中の私の裸

像に眼をやりました。顔の色が紅くなり青く

なりました。私は彼女を熱心に見詰めまし

た。羞恥と恐怖の激しい戦慄が彼女の全身を

荒々しく駆け廻り、私は残酷な満足感を心

ゆくまで味う事が出来ました。

「二人は、夫婦見たいだね、え？ アリス」

私はニヤ／＼囁きました。頬がサツと赤く

なりました。けれど口は閉じたまゝでした。

「さあ、僕の質問に答えるんだ。だが、その

前に君に就いて知つておきたい事がある。君

の年は幾つかな？」

「二十五」

と、彼女は蚊の泣く様な声で答えました。

「それでは女盛りというわけか。結構だ！

所で、君は処女？」

アリスは痛ましく真紅になりましたが、やが

て、再び囁きました。

「えゝ」

あゝ、私の欲び！私は遅くはなかつたので

す。私は喜びに胸をふるわせながら問答を続

けました。

「完全な処女？」

私は聞きました。

「純粋な意味での処女かい？ 今迄その可愛

い魅惑的な身体を撫で廻わした手は、一本もなかつたね。僕以外の眼に見られた事はなかつたかな」

私が仄めかした意味に、アリスは真赤になつて頭を振りました。一寸信じかねると云う風に私はアリスを見やりました。

「僕の質問はね、男は勿論、女の眼や手も含んでいるんだよ、アリス」

私は続けました。

「君はあの通り、とても綺麗な少女や婦人連を友達に沢山持つている。そして、何時も連中と一緒にいる。君と彼女等は、お互いに自分の美を比較し合つた事はなかつた、と考えるのが妥当だろうか……。」

けれど、彼女は苦しそうな叫びを上げて避りました。

「ないわ、ないわ。そんな事しないわ、私。」

あゝ！　なんて非道いこと仰言るの、シャツク」

「可愛いお嬢さん、僕はただ、これから君に何を教えたらいゝか、予備知識に君の経験を承知しておきたかつたのさ。結構だ。さあ、授業を始めようか」

私は一層強く再び、お臍をさぐり始めました。

「シャツク、止めて！」

彼女は金切声を張り上げました。

「あゝ、触らないで！　堪らない……ほんとに、堪らないわ！」

「そんなに堪らないなら考えるのでしょうか」
答えますとお臍から手を引込め、後ろに廻つて鏡の中に彼女の裸体を一望出来る位置を取りますと、私の与えた優しいお慈悲の効果に注目致しました。

やがて、私の両の触手は彼女の両側の腋の下に行き、それが、素肌との接着に戦慄がビリと身内に走るのを、残忍な喜悦に満たされてまさぐり始めました。暫時の愛撫の後、両手は、静かにけれど穿鑿的にその豊麗な臀部に移つて、肉附のいゝお尻の山を散策し、その両頬をうつとりと心ゆく迄握り締めました。アリスは、身体を弓なりに反り返らせて、私の手を逃れようと空しい努力をするのでしたが、手は柔く円い腿を下へと移り、最後に腰に戻つて腰部を満遍なく巡回した後、腋窩に達しました。此処で手を休めました。そして、どんな効果があるかと、この鋭敏な箇所をコソ／＼標つて見ました。

「や、止めて！」

彼女は癲癇性の発作に襲われた様に、ギツ

と身体を捻転させて絶叫しました。

「あゝ！　止めて！　私、とても標られるの嫌、どうしても我慢出来ないんです！」

私はすぐ手を止めました。ですがその時、或る趣向が、アリスの繰り展げる淫らにも美しい一連の絵巻物となつて頭を横切り、私の血は火と燃えました。若し、アリスを両足を……括りつけたら——ピンと細い羽根の先端を、アリスの最も鋭敏な箇所自在に適用了ら——充分余裕を持たせた縄は、標られるアリスの縄目の姿態を続きに挽かせのた打ち廻らせる——。

私は即座に此の饗宴を、アリスに試みる興味ある実験と併せ玩味しようと誓いました。哀れな乙女は、次に襲われるは我が身の何処か知る由もなく、顫き立ちすくむのでした。私は何時まで彼女に気を揉ませてはおきませんでした。ふくよかなお腹を二度三度撫で廻しますと、動揺して彼女は、思わずアツと絶叫しました。無意識の悲鳴が今一度、アリスの口を衝きました。それは、処女の汚れなき肌が悪魔の手の餌食となつた事を告げるものでした。

「嫌！　嫌！　シャツク！……、いけないわ……、いけない……」

同時に死物狂いに手を振り切ろうとしました。けれど、ガツチリ構えた手を解くことは出来ません。悲鳴には耳も籍さず、……

……進みます。今となつては、アリスは単に身体を痙攣的に後ろに引き、狂おしく身を擦じらせ、羞恥と苦悩のつき混つた悲鳴を上げるだけでした。身体のパランスをとるためには、両足を使つて立つていなければなりませんので身体全体は全くの無防備状態となつて、逸り立つ私の指はその好むところを隈なく這い廻り、気の向くまゝに撫で、押し搾り、そして、喰いつく程に鏡の中の彼女を見守るのでした。アリスの身体が激しく震えました。苦悩に頭が後ろに落ち、同時に悲鳴が湧き上りました。

「ジャツク！止めて！……後生です、止めて！……やめて！……やめて！……」

彼女の懊悩は、殆んど制禦出来ない程になつてきました。

「あゝ……ゆるして！」

頭が、ガツクリ胸に落ちかゝりました。限界を越えて刺戟することの危惧から、私は静かに手を引きますと、巻きつけた腕を解いて彼女が平静に戻る迄その傍を離れました。けれど、漸くの事で一人にされてアリスの顔

にはホツとした安堵の色が伺われるのでした。が、身体の震えは、激しく続きますので、直ちに眩掛椅子——あの似而非眩掛椅子です——を彼女の後ろに押しやり、滑車の繩を弛めて椅子に落ち着かせ、休息を与えて常態に戻るのを待つことにしました。

◎断然！類誌を圧した本誌の歴史を誇る威容◎

私は知っていました。彼女の苦しみはほんの一次的のものに過ぎず、それは直ぐ消え去つてしまい、後には再び私に縛り上げられ、別の拷問を受けるに快適な条件を備えたアリスの身体が残るのだという事を。(続く)

告 豫 十一月号 次 号

(巻頭口絵)

五色刷天然色写真(縛られた美女)
拷問部屋……………都築峰子・画
棒と柱を用いた縛り方……………滝 電子・画
写真、溪流に縛られて……………塚本鉄三撮映
風俗画集、あぶのうまる・ぐるうぶ
緊縛美のオンパレード(五)
滝麗子画集(蛇男の幻想)
フオト・セクシヨン(被縛男子の写真)
(切腹女性の写真)(美少年ヌード写真)

長篇サディズム小説

感情教育……………吾妻 新

悦虐の旅役者……………青山三枝吉

美姫情史(女腹切八景)……………龍岡絃七郎

現代文芸に現れた責め……………村田 誠一

女を縛った経験を語る読者座談会

責め場の舞台装置法……………伊藤 晴雨

木蘭吉五郎の半生……………緑 猛比古

や記
まの手
あぶ

縄に憑かれて……………時山加代子
白虐鬼の独白……………河真田子路
倒錯艶書……………三富 浩生
白へのノスタルジャ……………河村 哲夫

女の足の魅力……………金丸 壯吉

蜘蛛と蝶々……………飛田 良二

まぞひすと・さじすと……………富岡 陽夫

虐待の記録(二)……………前島 芳雄

ある被虐性愛者の手記……………天泥 盛栄

責め作家と誤られて……………松井香代子

呪……………辻村 隆

両棲動物(三)……………岡 真史郎

マゾヒストの手帖から……………沼 正三

甘美なるアリスの降伏(四)……………寒川緑・沢

らぶ・すれいぶ(第十一回)……………鬼山 絢策

淫……………火(第十一回)……………松井 籟子

残虐なる女性達(絵入独文)……………森本愛造訳

原稿募集

- 一、本誌の編集内容に適當した興味あるあらゆる種類の作品を募ります。
- 一、すべて未発表の作品に限ります。
- 一、作品の形式、長短は問いません。
- 一、誌上匿名は御自由ですし筆者の個人的秘密は厳守いたします。
- 一、応募原稿は原則として御返戻申し上げませんが、なるべく早く採否或は批評を御返事する筈です。
- 一、発表作品には掲載後、作品に応じて相当の謝礼を差し上げます。
- 一、締切日は特に定めません。
- 一、責絵、写真等についてもドシ／＼御応募下さるようお待ち致します。
- 一、読者の方々の体験記、告白記についても毎号多くのスペースを削いておられますから、奮つて御遠慮なく御寄せ下さるようお願いいたします。

(奇譚クラブ編集部)

特別会員募集

本誌並にKK通信直接購読者を以つて組織しております特別会員は漸増して三千名に近くなりました。その連絡誌として発展して参りましたKK通信もこゝに第十三号を迎え益々その充実を期待されて居ります。会則並に申込用紙は郵券二十円を添えて御申込下さい。皆様の御入会をお待ち致しております。

◎本誌並にK通の旧号在庫につきましては◎

左記の通り在庫いたして居りますから御買ひ洩れの方々はすぐ御申込み下さい。本誌昨年九月号僅少在庫、昨年十月号より本年九月号まで若干在庫、昨年度の分は一部送共九十九円、本年度の分は一部送共百円にて急送申し上げます。KK通信は第五号僅少在庫、第六号より第十三号まで若干在庫、一部送共二十円、六回分百円にてお送り致します。

先ず最寄り書店へ 御予約下さい

熱狂的な本誌フアンの激増によつて各地で本誌の入手難を伝えられておりますが、毎号最寄り書店へ御予約下さい。毎号確実に御入手される一方法であります。

◎御願ひ◎

編集部発行所に対する御照会には必ず返信料同封の上お願い致します。尚理由の如何に拘らず直接の御訪問は固く御断り申し上げます故悪しからず御諒承の程御願ひ致します。

☒代理部より☒

迅速確実をモットーにして誠実なる事務処理は万天下の絶大なる信用を博して居ります。何卒御安心の上多少に拘らず御用命のほどお待ち致します。御送金は振替、小為替、現金書留切手代用一割増又は現金の何れにて結構でございます。着金次第即時発送の手続をとらして頂きます。代金引替は送料が高くなりますのでお許し願ひます。

◎日本唯一の特色ある雑誌としてその文獻的価値を高く評価されて居ります本誌は是非毎号欠号のないようお揃え下さい。

◎直接購読者募集◎

三月分三冊(送料共)三百円
半年分六冊(送料共)六百円
一年分十二冊(送料共)壹千二百円

毎月売切れにて御迷惑をかけていますが、御買洩れのないよう是非直接購読の御申込下さる様お待ち致します。半年分御申込の方には責められる女の写真二枚一組一年分御申込の方には五枚一組サービス品として贈呈申し上げます。

奇譚クラブ 第七巻 第十号
毎月一回一日発行

十月号 定価 百円

昭和二十八年九月三十日印刷
昭和二十八年十月一日発行

編集人 箕田京二
印刷人 上田庄之助
発行人 吉田 稔

発行所 曙書房

大阪府堺区内菅原通四ノ三
振替口座大阪第三四九五六番

◎本誌所載の記事、挿絵、写真、其の他一切の無断上映、上演、転載、脚色等を固くお断り致します。